女子文壇

第三巻第八號



明治四十年六月一日發行（毎月一回一日）
明治卅七年十二月十九日第三種郵便物認可

泰錦堂印刷

かきつ



富岡まき子筆

女學世界 第九卷第七號 定期增刊

博文館創業二十週年紀念

六月十五日發行

現代婦人 成功立志傳

全一冊洋裝菊版
紙數二百〇八頁
正價金貳拾錢
郵稅金貳錢

●本號には福引當籤番號を發表す

◎勤儉力行して一家を治めし婦人の實話
◎富貴に處して一生を圓滿に畢りし婦人の實例
◎悍嚚なる姑舅に仕へて柔順の德を全ふせし人の一生
◎逆境より奮つて幸運に轉じたる婦人の實話
◎獨力にて事業を經營せし婦人の實話
◎婚期を誤りて發奮せし人の實例
◎倒產せし家運を回復せし女丈夫の話
◎暴戾なる良人を感化したる婦人の實話
◎宗敎に一身を捧げし婦人の實話

◎三十年窮乏の家計を經營して遂に富人となりし人
◎花柳社會より出でて良家庭を作りし人の實話
◎宮仕へせし婦人の記憶談
◎獨力にて大負債を償却せし婦人の話
◎一生を不幸に送りしも臨終に大安心せし人の實話
◎數多の子女を敎育せし主婦の實驗談
◎母兄に仕へて半生を送りし人の美談
◎醜婦にして良人に嫌はれ忍耐克己婦德を守りし人の實話

發行所 東京日本橋本町三丁目 博文館

米國獨逸製平圓盤新曲譜

新式花形喇叭附器械各種著荷

●夙に江湖の賞讃を博せる新曲譜並に最新形器械今回多數輸入致し候間陸續御注文奉願上候
●定價表歌目錄御一報次第進呈す

本店 東京市京橋區銀座壹丁目三番地（長電話新橋九七九 電話新橋四二〇四 振替口座六四二五）

支店
（東京淺草區並木町廿三、四、五番地 長電話下谷九八八
大阪南區順慶町四丁目 長電話東二四一四
福岡市博多下西町角 電話五〇一
北海道小樽區色內町廿一番地 電話三二三）



三光堂

東京日本橋通二丁目

日宗火災保險株式會社

（電話本局二一二〇）

東京日本橋通二丁目

日宗生命保險株式會社

（電話本局一〇三〇）

（甲の三）

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ



數年難治の慢性胃病を根治し消化機能を強壯健全になす靈藥

胃病根治劑

從來世に胃病藥頗る多しと雖とも皆一時の苦痛を凌ぐ制酸劑（即ち重曹、マグ子シヤ、苦味劑の如き一時おさゑム子スカシ的舊式賣藥）のみにして未だ嘗て根治的に其病の基因を斷つ良藥あるを見ず、本劑は獨乙國高名大醫ノーテル氏處方に基き本邦胃病患者に適切なる斷新有効藥を配合し百方實驗其奏効顯著なるを確認發賣せし最も進歩せる完全なる新藥にして數年難治の頑固なる**慢性胃病**にても根本より**誓つて根治**し胃腸を健全にし消化機能を強壯ならしめ食慾を催進し便通を快くし氣力を壯にし精神を爽快活潑にする空前の完全最新藥なれば從來種々雜多の胃病藥を用ひて効なく多年病苦に呻吟せる患者は一日も早く本劑を服し病根を斷絶し無病强健の大幸を得られよ輕症は壹劑重症は貳劑慢性症は參劑にて根治確證す

（藥價）壹劑四拾貳錢　貳劑八拾錢　參劑壹圓拾錢　郵劵代用貳割增し

新輸入 美容料

肉體色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黑き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色に變化**し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の白色藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は並製金壹圓貳拾錢特別製分壹圓七拾錢

以上貳藥專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**（電話下谷五四六番）

月やくきよし

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち**快通流下**する特効あり本劑參劑分を用ゆれば二三ヶ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用れば半年以上の月經閉止及び**血塊**にても必ず立處ろに流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及**惡血毒血**を一掃するを確證す但し本劑は其奏効極めて**峻烈顯著**なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢（注意）本劑の**大盛**を羨み近時續々怪しき無効なる**類似偽藥**顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



わきが 腋臭

根治確證 新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脱せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢着金即刻送藥す郵劵代用必ず二割增の事

以上貳藥專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**（電話下谷五四六番）

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

各女學校の教員間に最も評判好きは本誌也

有益無比

婦人世界

趣味滿幅

六月一日發行 二卷七號 一冊拾五錢 郵稅一錢五厘 六冊郵稅共九十錢 十二冊一圓七十五錢

◎私のヒステリー全治實驗……稻垣輝子

◎支那の結婚式……在清國 西澤好子
◎私の感心せる奧樣（跡見李子）
◎菖蒲を詠じたる古來の名歌評釋（渡邊白水）
◎子供の我儘は如何に矯むるか（藤崎常子）
◎爪を見て他人の性質を知る法（古巢枝生）

◎弦齋夫人朝飯の料理談
△朝飯は如何にすべきか
△味噌汁は如何に立てるか
△パンは如何に食すべきか
△パンの料理は如何にするか
△パンと牛乳は如何にするか
△パンと玉子は如何にするか
◎我が社の十周年紀念園遊會……みどり

婦人一代の寶 **娘時代の生活法** 村井弦齋
△女子教育は如何にすべきか
△男子の研究は何故必要なるか
△如何にして男子を研究すべきか
△自由交際は如何にすべきか
△何の方面より男子を研究すべきか
△男子の性質は如何に研究すべきか

◎小兒種痘の話……醫學博士 加藤照麿
◎恐ろしき婦人病産褥熱……醫學士 伊庭秀榮
◎私の感心せる女學生（篠田利英）
◎新流行の夏衣裳（近藤蕉雨）
◎輕便なる育兒蚊帳……産婆 西尾京子

◎少女欄◎家庭の重寶
◎婦人衞生問答◎育兒問答
◎名家結婚年齡ならびに初産年齡調べ

口繪
△侯爵山内豐景氏令夫人△學習院女學部卒業生△名家新婚寫眞△名家の令孃△婦人の薙刀試合△彩色口繪（跡見花蹊竹久夢二宮川安信）

◎我が兩親の健康長壽實驗 醫學博士 遠山椿吉

發行所 東京京橋南紺屋町二十番地 實業之日本社 郵便振替貯金口座參貳六番 賣捌全國書店

●博覽會紀念特賣廣告

沼波文學士。佐々木信綱
巖谷小波。河井醉茗
先生序文（又々好評）

女子 懸賞文集 第二輯

製本發賣

▲全一冊 讀切洋裝 五百頁 正價金三拾五錢 特賣價金廿六錢 郵送無料

本書第一輯は曩に大好評忽ち數萬部發賣の盛況を呈せしが、今又第二輯成る、滿卷賞に獎學五百金餘の重賞を懸けて募れる天下女秀才の金篇玉什明治文壇の珍品なり

出版元 東京京橋區大鋸町 電話本局六〇七番 女子文壇社（郵便振替貯金口座第一七二九番）

特約元賣捌 ○東京堂○東海堂○北隆館○至誠堂○前川文榮閣○上田屋○良明堂

菖蒲園



三宅克己先生筆

名譽總裁博恭王妃經子殿下

會長侯爵夫人鍋島榮子

大日本女學會

本會は女學通信教授に從事すること茲に拾參年此度第七回の學期を開きて新に會員を募集す◉本會講義錄を女學講義と稱し其學科并に講義囑托講師左の如し

○修身（後閑菊野）○禮法（佐方鎮子）○國文（同人）○作文（今泉定介）○漢文（菊地晩香、桂湖邨）○歷史（大森文學士）○地理（喜田文學士）○地文（脇水理學士）○數學（藤野了祐）○博物（脇水理學士）○理化（同人）○生理衛生（三宅博士）○家事（後閑菊野）○家庭教育（三輪田眞佐子）○割烹（石井泰次郎）○裁縫（渡邊辰五郎）○習字（坂正臣）○畫學（武村千佐子）○史傳（下田歌子）其他附錄數欄あり

學期終了は貳ヶ年にして一個月の紙數菊判百五十頁以上之に對する會費は僅かに一箇月貳拾五錢にて別に入會金を要せず◉講義は其文章極めて平易にて總かな附なれば高等小學を卒へざる人々にても講習することを得べし高等女學校に入學し難き事情ある女子達は此書の配布を受けて女の道を辨へられよ◉詳細なる會則希望の向はハガキにて申込あれ直に進呈すべし（尚此外に高等科もあり入學を許す）

新學期開始會員募集

東京市麴町區下二番町三七　大日本女學會（電話番町一三三〇）

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

大日本淑女學會

會員募集 規則書進呈す

御自分のお宅に居つて高等女學校の課程を講習しやうとする人は本會におはいりなさい本會は文部省令に據り正則完全なる女學講義錄を發行します講義の親切丁寧な事は固より新式の教授法によつて獨習に最も便利な方法を計ります卒業は貳箇年會費も低廉であります

第四回新學期開始

本會の講義錄

△大版三百頁優麗なる冊子
△講義平易にして興味多し
△各科講義の程度一定せり
△各科皆聯絡し組織的なり
△講師は專門女子教育家也
△科外講師は博士學士卅家
△每號科外講話を附錄とす
△純潔高雅の家庭小說あり
△會員の質問は直に解答す
△學期每に修業證書を與ふ
△講義錄は貳ケ年完結とす

◎博覽會開會中入會金全免す

本會機關雜誌 **姬百合** を發行し會員に限り進呈す

△報知新聞評 本講義錄は高等女學校の全學科を知名の專門女子教育家が講述せる者也平易懇切を主とせるものなれば何人も難解の虞なかるべく各科皆聯絡を保ちて其程度を一にせるなど講述者の苦心を見るに足る且つ有益なる科外講話の外に雜錄五十頁の附錄あり博士學士等の婦人に關する評論史傳衛生家庭等の文字を滿載し卷末更に純潔高雅の小說あり凡そ天下講義錄多しと雖も實益と趣味と併せ有する事斯くの如きは稀也

◎東京神田南甲賀町（電話本局三千四番）

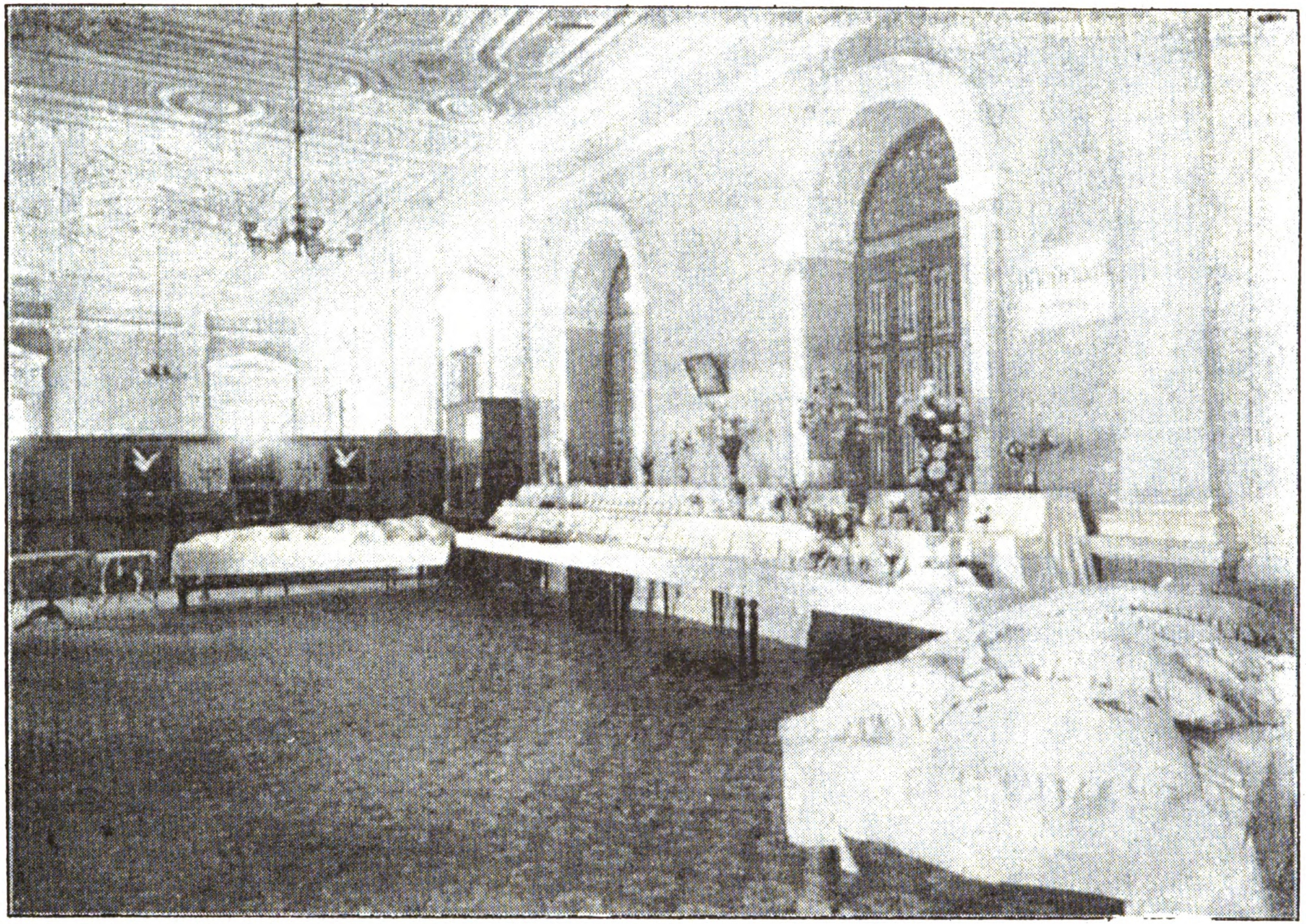
大日本淑女學會



學習院女子部三十九年卒業生　（本年撮影）



學習院女子部本年卒業生　（仝上）



暹羅皇后女學校慈善市の陳列

（中島富子女史寄）

誌友おもかげ（十一）

（續々御寫眞を送つて下さい御都合て御返し致します）



（高崎）林千代子



（下野）金田錦子



（千葉）木皿儀やす子 飯島はる子

（本所）佐久間静山女



（能登）織田原とみ子



誌友おもかげ（十二）



（備前）岡本かめ子　（大阪）高谷静尾子
（東京）小沼登美子　（東京）土屋すみれ

好機逸す可らず

◀博覽會紀念特賣▶

本居東宮侍講題詠　小杉文學博士序文
下田學習院女子部長題歌　小森松風君編著

女子文學全書 壹編

美文作法

全一册 洋装　正價四十錢　紀念特賣價廿五錢　郵送無料

中央新聞評　女子文學全書の第一編として出でしもの總論に於て美文の起原名稱種類を說明して敍事文抒情文景文に關する古今文士の文例を出し、次に文體の種類美文作法美文と韻文普通文小說との關係を述べ更に美文飜譯法、韻文の素養、讀むべき書類、各時代の美文名家文話等を詳述したり美文研究者の一讀すべき良書と云ふべし

坪井理學博士序文
山田美妙先生序文　小森松風君編

女子文學全書 二編

言文一致文範

全一册 洋装　正價四十錢　紀念特賣價廿五錢　郵送無料

論より實地明治式の新文章言文一致體の好モデルを各部門毎に掲げ傍ら起源發達種類熟練法等迄面白く說いてありますから是で充分練習試作が出來ます文範作例は皆當代名家の粹英實用雅美兼帶の言文一致體は淸新の思想を發揮すべき明治女性の必要機關又家庭文房の珍としても錦綉花園の觀ある此文範をおすゝめします

報知新聞記者　中村木公君編

實地精査

女子遊學便覽

（三十九年精査）

全一册洋装
學校長肖像入
正價金三拾錢
紀念特賣價廿錢
郵送無料

萬朝報評　都下各女學校の世評と、其校則の概要を掲ぐ、坊間幾多の遊學案内が、麗々しく改版と稱し訂正增補と號しながら數年前の舊規則を掲げたるものに比すれば調査は善く行屆けり、一尙ほ職業案内及學費の概算をも加へ、殊に無鐵砲に東京遊學を皷吹せずして、東京遊學の危險なるを說き、嘗て都下の新聞に連載せられたる女學生誘惑の手段評をも書き添へたれば上京に念ある女學生と其の父兄とには頗ぶる便なるべし。

出版元　東京京橋區大鋸町　女子文壇社　（郵便振替貯金口座第壹七二九番）

元賣捌○東京堂○北隆館○至誠堂○前川文榮閣○上田屋○東海堂○良明堂

毎號　皇太子妃殿下賜上覽

女子文壇

第三巻第八號目次

女子文壇

第三巻　第八號

（明治四十年六月一日發行）



繪を描く才

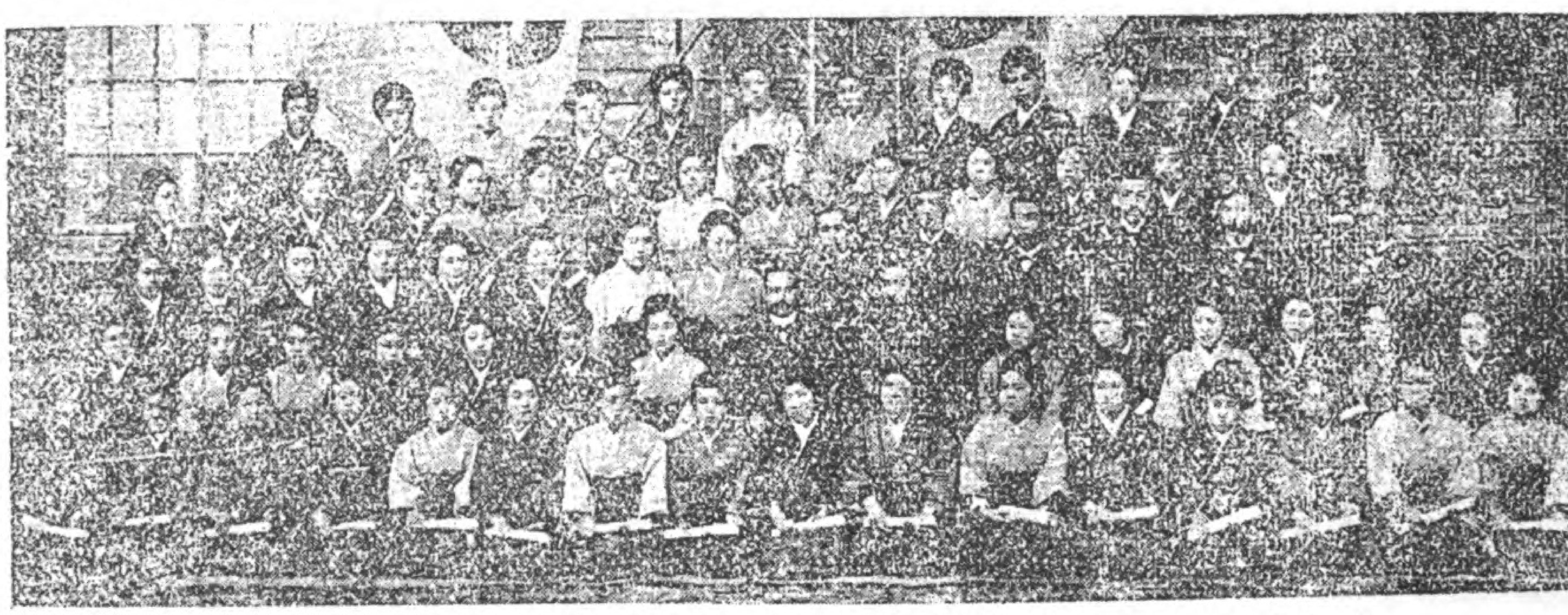
三四歳の幼兒が能く筆を持つて、馬や、電車や、人形などの眞似を描いて居るのを見ると、人間と云ふものは天賦に繪を描く才はあるらしく思はれます。此才は成長なるまで、失はないやうに、且發展させたいものです、生花、琴、茶の湯、裁縫、料理などと同じく、婦人一般の嗜好として繪畫も其一つに加へたい、近頃西洋畫の趣味が行きわたるやうになりましたから、水彩畫などを稽古する婦人も隨分多くなつたやうですけれど、未だ一般と云ふ譯には參らないやうです。折角持つて生れた天賦の才も、修養しないで置くと、大人になつても胴から足の生へた人間を描いたり、狗か狐か分らぬ獸を描いたり、五六歳の子供にさへ劣つたものを描くやうな譯で、繪の才などは全く修養次第で、或る點までは進みもし、又止つて了うものです。何も大畫家になると云ふのではなく、一寸繪ハガキでも描ける位の心得さへあれば、何んなに樂みでせうか、又何んなに其人の氣品を高めるでせうか、文字は好く書く書かぬと云ふことは、昔ほど其人の氣品に關しません、寧ろ文章を好く作つた方が豪いに違ひはありませんけれど、繪の方は上手に書けば書くだけ、見榮もありまするし、女子の美的品格を保つ上に於て、少からぬ粧飾となるものです、諸嬢の内でも繪の好きな方はどし〳〵、お習ひなさい、心得て置くだけでも宜しい。

愛のとぼそ

羽仁もと子

私は度々自分の見聞きする事實よりして、今の學生並に結婚前の若き方々の中には、戀愛を以て餘りに魔力視過ぎて居られる方が多いやうに思ひます。詩歌や小說や諺には、戀の魔力的方面ばかりが現はれてゐるからと云ふて、直ちに戀愛といふものは、人身御供を要求する荒神の、罪もなく眠つてゐる人の屋の上に、白羽の矢をたてゝゆくやうなものではあるまいと思ひます。その作用の方面によつて意志といひ感情といふ別別の名稱はついてゐるものゝ、もと〳〵一つのわが心て、云ふまでもなく戀愛もまたわが心の一部分の作用に過ぎぬのでありますゆゑ、一心の自由を戀愛のために左右せらるゝことなく、むしろわが心の中樞を以てわが戀愛を支配し得べきものであらうと信じます。盲目的の戀愛の虜となる人々は、わが心の中樞を以てわが戀愛を支配し得べしとの信仰を缺き、從て平生戀愛に對する何等の覺悟をも持て居らぬ人であります。戀の扉に鍵をかけずにゐる人です。わが愛を無用心な所に打棄てゝ置く人です。無用心に打棄てゝある愛情は、直に匹夫やたわれ女の目について、その卑しむべき手の中に捕はれて仕舞ひます。わが人格の耻となるやうな戀愛に落ちたくないと思ふ人は、わが愛の戸にかたき鍵をかけて置くことを忘れてはなりません。愛の扉の鍵といふのは何でせうか、それは前にも云つた覺悟であります、一概に覺悟とばかりては分りにくくなりますが、手近な所から云つて見ると、まづ學生時代に戀愛に深入りするのは、双方のために蹉躓の基であるといふとをよく考へてゐるならば、それも一つの覺悟でありまた鍵であります。即ち平生以上の考を持つてゐると、自ら適當な用心をするやうになりますので、うつかり輕卒な戀愛に落る機會がそれだけ少くなります。またしんに全心を捧げて長く熱愛することの出來るやうな男女は、世間に極めて少數なものであ

るといふことを、常に忘れずに居ります
と、美しき外貌がチラとわが心鏡にうつ
つた位で、直にその影の中にある心は、美
くしいものであるやうに思つて仕舞ふや
うなことはないでありませう。戀愛は樂
しいものだらうといふやうな想像を逞く
する代りに、戀愛は男女一代の幸不幸
及び榮辱を定める鍵になるのだといふこ
とを深く考へて居りましたならば、浮き
たる相手にわが戀を奪ひ去られる氣遣は
餘程〱少くなります。その他種々大切
な覺悟がなほ多くありますが、それらは
すべて聰明なる讀者の自ら發見せらるゝ
所に任せ、さてそれらの覺悟を以てめい
めいの戀愛に堅く鍵を下して置きます。
—そしてその錠の下りてゐる扉を、外から
度々訪うものがありましても、俄にあけ
ないといふ覺悟がまた終りに大切であり



山形縣立酒田高等女學校第八回卒業生（明治四十年）

ます。かく備ひ堅固にしてゐる扉を一度
叩いて其儘影をかくして仕舞ふ見舞ひ人
もありませう。また二三度叩いた後に他
に移つて行くものもありませう。或は熱
心に叩いてゐるにも關らず、極めて人格
卑き見舞人で、わが胸奥に招ずる事の、自
分のためには云ふまでも、向ふのために
も却て不幸であるといふやうなものもあ
りませう。兎にも角にも堅き備へをして
置いて、種々なる見舞人をやりすごし、遂
に最も熱心にして愛敬すべき訪問者を見
た時にも、一方に於ては數多たび愼密な
る思慮を盡して、理性感情共にその訪問
者をわが胸奥にうけ入れずに置くことの
出來ないことを感じた時に、初めて招じ
入れべきものであらうと思ひます。
くれ〲もまづ試みにこの扉を叩いて見
よう、明けるか明けないかと物數奇半ば

のおとなひにも、あはてゝ戸をあけるといふやうな、ある甲斐もなき戸締りでは、矢張前の締りなしに打棄て置かれた愛情と同じやうに、容易につまらぬものゝ捕になつて、悔いても及ばぬことになります。

次に前のやうに輕卒物數奇な訪問者をうけ入れるすらもよくありません。況んや自ら輕卒なる訪問者となり、あちら此方の愛の戸を叩き廻るのは、猶更に不幸であり、猶更に見さげはてたものであります。堅固に閉つた門を出て、此方より他人を訪問するといふ前には、長き間の思慮分別と、云ふまでもなく深き渝らぬ愛情とがなければなりません。而してこれは主に男子のことであります。婦人は普通の場合に於てはどこまでもその愛情の鍵を堅くして、相許すべき訪問者を得た時に、その清かにして芳ばしき愛情を充分に捧げ得るやうにすることが、最もその性情に適したる心掛けでありませう。互のために不幸なる戀愛に、輕卒に陷る人の多いのを見る度に、いつでもその人々のわが戀愛を自ら左右せんとする勇氣、否むしろ左右し得るものであるといふ信仰を缺き、戀は曲者などゝいふ諺等におどされて、愛の魔力を過信したるためであるといふことを感じますので、記したき思ひの多岐なる中より、強て一筋の道をとりましたので、お分りにくき所も定めて多いでありませうが、讀者の御參考のたしともなりましたならば、幸ひで御座います。

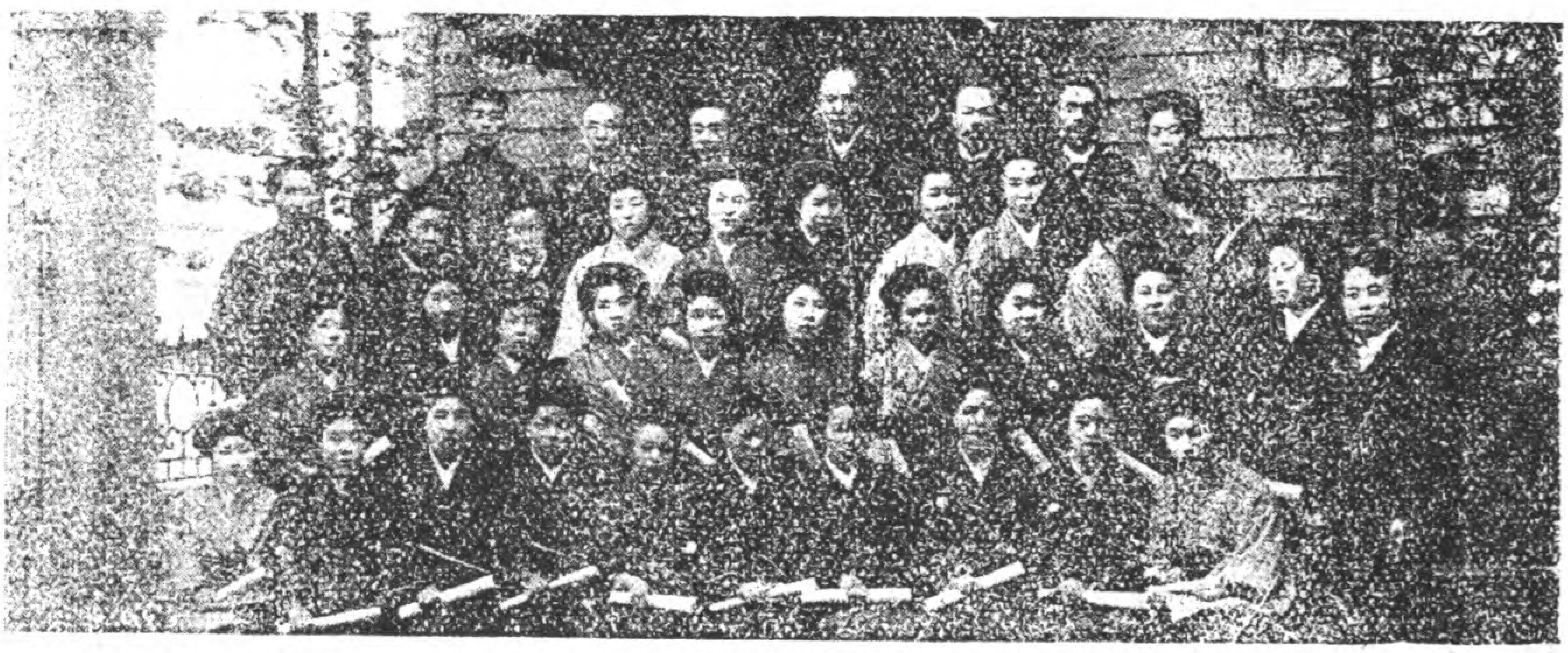
女學生の文章

文學士　下田次郎

今日の女子の氣風は、一般に浮華であつて、徒に美い衣服を着、旨い物を食べて、遊んで暮さうといふやうな、浮き／＼した心のものが多く、貧しい家庭に入つて、よく夫に事へ、家事を修め、子女を教育して、一苦勞して見やうと云ふやうな、健實な思想を持てゐるものは甚だ少ないと思ふ。丁度文章もそれと同じく、一般に浮々した外形の華やかなものが多い、鳥が謠ふとか、花が咲くとか、蝶が舞ふとか、一見、絢爛目を

奪ふやうな華美なものは作れやうが、其内容は誠に乏しいものである。何故にもつと人情かと義理かと云ふ、讀んで涙の零るやうな質實なものを、眞面目に書くことが出來ぬであらうか、文章を書くのに、何も殊更に華やかな言葉を使ふ必要は少しもない、唯、有の儘を飾らず僞らず、有の儘に書けば宜しいので、こと〴〵しく六ヶ敷い字を使つたり、華やかに書いたりした所で、何の益にもならぬのである。

今日でもまだ、漢文を作る人があり、漢詩を作る人がある、又、書物の序文抔を漢文で書く人もあるが、これは丁度、今日の西洋人が羅甸語の書物を讀み、羅甸語で詩を作ると同じで、誠に無益なことである、今日は何も漢文でなくとも、漢詩に依らずとも、思ふて



東洋女藝學校卒業生　（明治四十年）

とは充分云ひ表はされる時代である。或は六ヶ敷い讀み惡い漢文でなければ、立派でないやうに思つて居るのかも知れないが、それは愚なことである。ダンテは伊太利の大詩人であつたが、彼の頃の西洋人は皆羅甸語でなくては、立派なものは書けないやうに思つて居た、然るに、ダンテの『神曲』は悉く伊太利の俗語で書かれて、さうして彼のやうに立派なものである。今時の文章で解り易く書けることを、漢文で六ヶ敷く書くは、實に時代遲れの話である。　韓國等でも此弊が尤も多い、韓國に行くと、日本でいへば郡長や縣知事位の者の、頌德碑が到る處に建てられてゐて、何れの碑文を讀んで見ても、形容詞澤山の文章で、皆其人を堯舜の如くに賞めあげてある、其樣に聖人や

賢人が澤山あつたならば、韓國は何も今日の如き衰運に向はない筈であるのに、事實は全然之に反して居るといふのは、彼等の頌德碑は、郡長や縣知事其人の事蹟を傳ふる爲めではなくて、殆ど彼等の文章が何れ位まで書けるかと云ふことを試みる爲めであつて、所謂人の爲めに文章を作るでは無く、文章の爲めに文章を作るのである、此樣な實質の無い文章は、幾ら華やかで、見たところが立派であらうとも、何の役にも立たぬのである。

又、漢文には何うも六ケ敷い形容詞が、澤山に使はれてあつて、一寸人の讀むのを聽いただけては、解り惡いものが幾らもある。一例を擧げれば、水の流るゝのを形容するに、よく潺々とか淙々とか云ふ語を使ふ、如何にもきゝ前はよく、立派なやうてはあるが、是等の熟語は唯聽いただけては、何ういふ意味であるか、誰にも解るといふ譯にはいかぬ、それより寧ろ俗語ではあるが、チヨロ〱とかサラ〱とか書いたならば、直ぐに水の流れと云ふことが、誰にもよく了解される、而已ならず、其流れのある場所までが、明かに想像することが出來て、潺々とか淙々とか云ふ、六ケ敷い熟語よりも、この極めて通俗なチヨロ〱サラ〱の方が、何程解り易くて宜いか知れぬ。今日の人が普通に使用して居る俗語を使つたからとて、何も立派なものが出來ない道理はないから、極めて優しい文字を使つて、自分の思ふ所を充分に達するやうにしたら宜いてあらう。

福澤翁等も此の流義て、翁の文章は出來得るだけ平易に簡潔にして、誰が見てもよく意味が解かるやうに書いたものである、今日福澤翁の著書は隨分澤山あつて、汎く世の中に行渡つて、各階級の人に讀まれて居るが、彼文が若し平易に解り易く書いてなかつたならば、決して今日のやうに、多くの人々に讀まれることは無かつたであらう。福澤翁の師であつた緒方洪庵と云ふ人も、亦、此の事に就いては、非常にさばけた考へを持て居たと云ふことは、福翁自傳の序にも書いてあるが、洪庵などは、何處までも解り易く書くと云ふ方針て、

自分の作つたものを、障子の蔭で讀んで見て、それを自分の娘や家族のものに聞かせて見て、解らないと云ふところは、何處までも、幾度でも訂正したと云ふことである。

然るに、今時の女學生抔の文章は、單に華やかなばかりでなく、文章を華美にする爲めに、文章の根柢となる可き事實まで捏造する弊がある。何か書かうとする場合に、先づ記事文範の如きものを引出して見て、それを摸擬る結果、初めが斯うであるから、終結も斯う爲ねばなるまいとか云ふやうな、つまらぬ考へから、自分の實際に思つて居ないことまで書いて、遂には自分の文章でなく、人の文章を書いて了ふやうなことが、往々あり勝ちのことである、是等は徒らに美しいもの、華やかなものを書かうと思ふから出來るのであつて、最も注意せねばな



青山女學院卒業生　（明治四十年）

らぬことである。

又、文章を作る材料の上についても、よく注意して觀察を鋭利にし、物の奥底までも洞察くやうに、平生心がけを怠らなかつたならば、材料となるべきものは、幾らも眼前に轉がつて居るであらう。英吉利のジョンソンが嘗て、「よく人の樣子に氣をつけて見て居ると、道で遇ふ人毎に其傳記を聞きたくなる」と云つたことがあるが、實に其通りで、何人でも各々それ相應の歷史は有つて居るのであるから、單に人のみでなく、萬事に鋭い眼を以て材料を見附けるやうにせねばならぬ。

一つの方法としては、用事で外出する時でも、又は散歩する場合でも、必ず手帖を用意して居て、途中で觀察したこと、見聞したことを一々筆記して置いて、何かの時の材料とするのも最も好い方法で

ある。自分は此頃博覽會へ行つて、蔬菜館に入り、見事に出來て居る蔬菜を、彼れや此れやと見ながら、田舎出の百姓達の、後に尾いて、彼等の種々な批評の言葉を聞いたが、一語一言、眞に迫つて、眞情を流露した言葉があつて、成る程此の場合には斯う云へば好いなと、首肯かれた點が少くなかつたのであつた。

何事によらず。眞情を有のまゝにいつたならば、それて宜しいので、有名な英國の將軍クロムウエルが、甞て自分の肖像を書くことを一畫工に命じた、すると畫工は其頃非常に權力のあつた將軍のことであるから、非常に憶したと見えて「それは身に取つて誠に光榮なことでは御座いますが、何うも私には出來かねましやう」と恐れ入つた、すると將軍は「何もさう遠慮するには及ばぬ、只有のまゝに畫けばよいでは無いか」と云はれたといふことがあるが、有のまゝを有のまゝに書くことが、何處までも肝要である。

然し玆に一つ、注意して置かなければならぬのは、幾ら有の儘を書くのが宜いと云つても、さうかと云つて、

たゞ平凡なことを平凡に並べたゞけでは徒に冗長に流れてだら〳〵して取留めが無くて、見られたものてはない、其處には大に加減があるので、何處かに多少酣の利いたところが無くてはならぬ、如何に解り易く書くとは云へ、突込むところは充分に突込み、理義を究めるところは、何處までも究めて、相應に締くゝりもあり、主義も明瞭り通つて、整然として居るやうに書かねばならぬのである。(文責在記者)

春雨

松風女史

春雨のふる日久しく音づれざる師の君のみもとに趣かんと我家をいでたちぬやがて二町計りも歩みたらむと思しき頃いかなるはづみなりけん左の下駄のは二枚甲も共に損じぬさりとて小石につまづき又はくじきたりとも覺えず又下駄も新らしきものなるに不思ぎの事もあるものよ世人のかゝる事ある時には必ずよからぬ事のあるものなりといふをつね〳〵きゝし事あれば何と

なくてゝろにかゝり國許に恙なきや親類に誰ぞ病に罹り居るものは非らざるか兩三日前女中の烏のいともあはれになく聲をきゝてあないまはしの聲哉彼の烏のかゝる聲にてなく時には必ず人の死するものと聞きつるに國許の母やいかならんなど言ひつることと共思ひ合すれば世の人の迷信と笑はんもいとゞ氣にかゝりてやまざれば家に歸り直て文机に向ひ筆取出し墨すり流しつゝいかにしたゝめむと考へ居りしに侍女の御手紙參りぬと差出すを見れば父上よりなり折も折なれば恙あるにかと先胸さはぎして急に洗手取る手遲とよみ行くに十日程前より眼病に罹り目下病院に通ひ靜養しつゝありさりながら心配いたす程の事にも非ざればとの報なり父上は平常よりあまり強からざる御身いかにおはすらむ附添ふ人はあるならむも定めし何かと御不自由の事など多からん病にはあれよしこれあしといふことはあらざれど取わけ眼の病はきのふさぐものと聞くいかに過しておはすらんさるにても案ずるほどにあらずと仰せらるれば近き中に全快し給ふならん先程下駄の損ぜしはかゝる事の前兆なりしかと思ひつゝ直に御見舞狀參らせぬ其後いかにおはすると心に懸りながら五六日過しつるにとある夕まぐれ少しのいとまありしを幸女學講義取出してよみ居りしに女中の國許より母上參られしとの報におどろき出てむかへ御かほを見ればたゞならず色靑ざめ何となく御心を煩し給ひつゝある樣子に父上のもしや御病の重りしには非らざるかと先胸なんつぶれて言の葉もとみにはいでず茫然とし居りしに母上のあい拶なしたまふにおどろき答禮なしぬ十日ばかり前なりし父上より眼病にて病院に通ひ靜養しつゝあれど案ずる程の事はなしとの御手紙參り侍りしがもしや其御病の重りしには侍らずやいかにと伺へばざなり國許へも十日程前參りし手紙もてなたと同じ樣なる文なりし故程なく全快し給ふべしと思ひ居りしに昨夜參りしを見れば其後病勢の日增しに重りて今は病院に入りたりとの報なり此方は必ず近き中に全快せしとの御知らせあるならむと思ひ居りしにねみゝに水と人のいふが如く皆あなとばかり打ちおどろきたり明日手術をせらるゝとの事なればとるものも取りあへず丹後へ參る次第なりとのみことばに先きだつものは泪のみかゝる事のあるともしらず吾等の心配せん事を思して案ずる事なしなど仰せらるゝみ言ばを信じて程なく全快したまはんとのみ思ひたりしおろかさよさりながら今更なげきたりとてすべもなし只此上は一日も早

く全癒したまはん事をこそいのるなれ其夜母上と何かと談らひ時の移るも知らざりしが時器の十時を報ずるに心づき明日午前の七時發車にて丹後へ參り給ふことなれば眠られずともしばしふしどに入りませとすゝめ參らせおのれも四方かたづけふしどに入ぬされどなかなかに眠りもやらず心にかゝるは父上の事今頃はいかにかおはする眼痛みて苦しみ給ひつゝあるにかはた御熱はなきか眼は最大切なるにもしや不治の病となりはせざるかなど獨り心をいためいよ〳〵目はさえぬ母上も同じみこゝろにや時々せきの聞ゆなるあゝ如何にせんいかほど心を煩したりとて治する時の來らざれば治せざるものとはしりながら猶も心にかゝるなりとかくする中に東の方白みそめければ汽車に送れたまひてはとふしどを出てゝ朝の用意なしぬ程なく命じ置きつる車夫も來りぬさらば御道中恙なくまゐりたまへ先方へ御着の上は何よりも先に御容躰を委細しらせたまへと願ひつゝ見送り參らせぬあゝさるにても待たるゝは父上の御様子一日も早く承りたくなん折りしも春雨のしと〳〵とふるなり病院におはする父上やいかに此の雨に一としほわびしく思すらんあなうたての此雨や。

乳母おくま

磯萍水

乳母おくま、これを文字の上より解釋すれば、動かぬ役者は勘五郎、萎びた腕に出刄をかざして、二番目中の憎まれ者、もしそれ虚空を摑んで七轉八倒、血紅に塗れてのたうち廻れば、見物の老若一時に滿足して痛快を叫ぶべきも、實は然らず、本物は片市式にて、義もあり、涙もあり、而して勇もあり、天下泰平の今日には惜しき女豪傑、さても女は見かけによらぬものなり。

群馬縣は安中在、百姓左治衛門の息女、お熊姫、身の丈五尺七寸、重量十九貫八百目、日の食八合、健箸魔の如く、器をかゆると流星に似たり、色はヘナ土を欺き、顔は眞四角、宛たる澁團扇に目鼻なり、僕が家年に一度の疊がへの他、床板がへなるものをなすは、彼が躰力のしからしむる由縁なり、それ雷鳴地震は天地の不思議、家鳴震動は家庭の不思議なりと雖、僕が家にあつては些も不思議となすに足らず、まことに威權

あり、雄姿堂々たり、天下重みのある人物としては、常陸山は男の事なり、女としてお熊の右に出るもの、恐らくは無けん。

群馬の地由來珍物を産す、新田義貞、呑龍上人、高山彦九郎、天野八郎、國定忠次、高橋お傳、更らに昔い處では文福茶釜あり、世人多くこれまでは屈指すれども、未だ僕が乳母おくまに及ばざるを怨みとす。

彼が半世は薄命なりき、七才にして母に別れ、家は貧うして、父は所謂水呑百姓、故に彼が最初來りし時は、所謂水肥りなるもの、漸くにして今日の飯肥り、酒肥りたるを得たるなり、閑話休題、鬼十八にて婿を貰ふや、婿甚だのらくら者、鋤にも鍬にもかゝらばこそ、春夏秋冬、油ばかり賣つて遊びまわる、仕末におへぬ野郎なり、然りと雖、おくま深く亭主に惚れたり、眼を瞑つてこれを忍び、自ら田に植ゑ、畑を打ち、斯くて三年、斯くて五年、忍び難きを堪へ、堪へ難きを忍びぬ、四隣合壁半ば同情を以てし、半ばお目出度きを以てす、彼遂にそ



明治女學校卒業生　（明治四十年）

の攻撃や嘲りに堪ふべからずして、泣いて馬稷を斬るの思ひ、別れともなき別れんとしたる、其時此時、宿六が酒より好きなる、一天地六の賽の目は、御用の風に脆くも破れて、昨の冷酒、今はもつそうとなりぬ、おくまの嘆き知るべきなり、祈る神さま、佛さま、早く無罪で家の野郎の、この世の風に當りまするやうにと、口說き立てたる甲斐もなや、赤い着物に竹の子帽子、その儘終にお目出度なれり。

お熊に一子あり、權八と呼ぶ、何等風流なる名ぞ、母に似ぬ小綺麗な背兄なり、名詮自稱なりせば、大前髪、鶸色の五つ紋、丸に井の字が何としたにて、眼ばれ連を斬りまくるべきも、實は然らず、頗る實着、今は兵隊さん上りのお百姓なり。

權八其時、鼻たらしなり、女の手一つなりとも、田舎にてはあり、口も十六町、手も十六町のおくまなり、小悴の一匹二

匹。育て上げるに苦勞は無けれど、鄉黨彼を嘲笑ふて、ざまを見ろと後指さす、五月蠅は世間の口なり、遮莫、至る處に青山あるを、天道さまと米の飯はと、思ひ立つ處あつて、即ち民間に下つてお乳母さんとなる。

田夫おくま、一朝にしてお乳の人お熊の局となるや、奉ふること十四年、十四年一日の如く僕を脅し、泣かして育つ、怨てそあれ、少しも有難くなし、而も二十年の後、今に至りて、慕しさ戀しさ謂ふべからざるものあり、ましてや亡き人となりし今日此頃や、まぼろしの俤に憧れて、胸の迫るも幾度なりしぞ、夜半の寢覺に夜具の襟ぬらすは、彼を想ひ出の夢よりさめし時なり。

何の因緣かある、權八熟々嘆して曰ふ『おふくろは、因果とお前さんの事ばかり心配して、何にでも彼にでももち出すだ、どうも私よりか可愛いと見えるぞ』斯く思ふは、權八のみにはあらず、父然り、母然り、僕大に然りと思ふ。

烈しき熱にかゝりし時なり、彼は三七日食を斷ちて、人知れず水をあびたり、祈る佛は不動さま、那方の御利益か知らず、御病氣御全快と相なるや、今もなほ眼にあり、その時の乳母やの痩せたる顏。

小學に通ひ初めし日なり、先生の前におじぎ十二三度して、私の大事な坊ちやんだ、たのんましたぞよ、先生樣、どうか立派な者にして下せいまし、果ては涙をあほぎ見し僕の顏に下したりき。

木枯寒き冬の夜なぞは、何時も思ひ出すは、彼が得意の肌おんぶなり、あゝ乳母やは肥つたのに限る、何となれば暖かければなり。

僕今にても利口なれど、子供の時は眼から鼻なり、されば鼻糞だらけなりしやも知るべからず、或る年の試驗に、賞品戴くや、熊が育てたのだもの、此位な事は當然だ。

小學にては僕に綽名あり、曰く熊の子、お熊の局、お辨當のお使ひや、俄雨の傘なぞの折に、熊の子だ、熊の子だを、四角八面にあびせかけしより、即ち何日とはなしに、熊の子、熊の子。

坊ちやまや、早く大きくなつて、出世して下せいましよ、出世してなア、乳母アに、お酒をたんと〳〵呑まして下せえましよ、アイよ、大丈夫だよ、今に豪くなつて澤山呑ませて上げるよ、局破顏、くわら〳〵と打笑つて、頰づりして曰ふ、可愛いゝだなア、乳母ア樂しみにして居ますべい。

局は無筆なり、僕が書いたる手紙を見て、それても能くこれだけ書くやうになつたゞ、僕は天下無敵の惡筆なり。

尚恐れ入つたる事あり、遙々彼の家に遊びし時、一束の手紙をとり出して、さア讀んで下せえまし、何と書いてあるだか、これ僕が乳母アに與へたる手紙なり。その時なり、お寺をはじめ、村役場まで、僕を引づり廻して、これが私の育てたのだ。

而も今は亡し、僕が十年の壽をさいても、生かしたきは母と乳母アやのみなり、憎くき程戀しき乳母アやよ、地獄か、極樂か、今いづこにある、僕も心づけて酒を送りしが、乳母アやが僕に啜らせし乳の量には及ぶべくもあらじ、尚思ふ、僕の爲めに泣きし涙の量は、さらに乳にもまさりしならんと。

鬼人おくま、もう少し孝行すればよかりしも、今となつては、石に蒲團も着せられぬなり。

意を休ぜよお熊、坊やは品行方正にして、酒も食べず、夜遊びもせず、されば、いづれ、豪いものになるべしと思ふ。

妙義山下、彼のでこぼこ山の下に、乳母やの墓はあり、路遠し、手向の酒灑がん術もなし、來れ乳母や、僕は今汝が爲めに、佛壇に對して一杯を酌まむとすなり、來れ、乳母や、來りて醉はずや、醉ふて而して汝が得意の、盆踊の唄を唄はずや、髣髴として。（五月四日）

作れるやうになるまで（つゞき）

梅澤あや子

▲感ぜよ

考へると云ふ事は、理智の作用でございますが、別に人間には、感情と云ふ美くしく、優しいものを持つてゐます、此感情を養ふと云ふ事は、考へることよりもなほ大切てす、凡ての文學は皆感情の産物であると云つても可い位なのてす。

感情を養ふとは何う云ふ事かと申しますと、先ア物事に感じても、凡人より深く、鋭く、優しく、美しく感ずる習慣をつけるのでございます、人間は皆感覺を持つて居ますから、眼て見るもの、耳て聞くもの、身に觸れるもの、口て味ふもの、之を精神に感じないものはございますまい、感じたゞけては別に不思議はありませんのてすが、更に感じた處を味ふて見るのてござ

います、畢竟は深く感じると云ふ事になるのでございます。

此感じると云ふ事も、智識の働きと、良心の働きが加はつて、甫めて、正しい感情が表はれるので、智識の作用が乏しいと、感じる事は感じても、正當とは申されません、只感情の動くまゝに左右すると、神様でない限り、人間には野蠻性が殘つてありますから、醜い、惡い、汚れたことでも敢て行ふやうになるのでございます、此の感情の盲動を制止する爲に、人は敎育されて居りますので、例へ文學であつても、少しも理智の判斷を加くなかつたならば、彼の野蠻人が歌ふ俚歌と同じこととて、幼稚な譯の分らぬものになつて了ひます。敎育もあり、智識もある人が、深く感動して歌ひ得た聲が、眞個の大文學でございます。

譬へて申しますと『行く春』の感じです、此れは素より時間と云ふ觀念から來た感動でございますが、第一智識の乏しいものなら、『行く春』と云ふ感じからして分りません、只うつかりして居る間に花が落ちて、木が青くなり、氣候が暖くなつたと云ふ位に過ぎませんけれど、多少時候の變移に心を止めて居るものなら、如何にも春が暮れて行くと云ふ姿が、眼に浮び、耳に聞えるであらうと思ひます、花が落ると云ふ事だけても、悲しく感ずる人、傷ましく感ずる人、潔く感ずる人、さま〴〵でございませう。何故悲しく傷しく感ずるのであらうかと、一步深く立入つて、行く春の趣を想ひ浮べて見るのです、斯うなると感じる力と、想ふ力乃ち想像力も加はつて來るのでございます、春と云ふ眼に見えぬ大きな力があつて、一つ一つ花を落して行き、一つ一つ葉を開いて行く、と想ひますと今度は其眼に見えぬ春の力を神様のやうなものに姿を表はして見たら何うであらう、女であらうか、男であらうか、女なら、佐保姬と云ふ昔の歌にも入れてある霞の神様に似て居るであらうか、佐保姬を持つて來て行く春の姿を擬しても可い、種々な想像は、種々な感じに、交つて出て來るでございませう、未だ是だけでは足りない、行く春を人生に譬へたら何うであらう、誰やらの句に長持に春かくれゆく更衣とあつた、全く行く春は女で云へばもう娘時代の過去ろうとする時であらう、花やかな、美くしい、うつゝ心の無い、夢のやうな青春の時は去つて、眞實な、じみな、世の中の有様や、人の心の轉變も分り、自ら省みて、落着た心を養ふやうになる、恰度それは行く春の心持では御座

いますまいか、斯う感じて來ると、行く春が人生にも深い意味を持つて參ります、感じやうては天然の時と事も、皆此の人生と關聯して參りまして、一つの花の落るにも、一つの星のきらめくにも、人間の精神が映るのでございます、いつも斯う人間の活きて居る意味、働いて居る意味、苦勞して居る意味、滿足して居る意味、不安心の意味、心が動きづめに動く意味、死が在ると云ふ意味、明るい意味、暗い意味などを、自分ながら考へて居りますと、それが風の響にも、日の光にも、表はれて來るやうで、天然の一事一物皆人間の言ふと思ふ意味がついてあるのでございます、此意味と云ふのは、決して理窟でつけるのではなく、感情で感じるのでございます。

それていつも斯う云ふ風に、感じを養ふて居りますと、段々感情が高められてゆくのでございます、書物を讀んで、昔の人の感情を知り、人に就いて新しい感じを聞くなども、獨りて思ふよりは宜しく、是非是等



青山女子手藝學校卒業生（明治四十年）

の手引がなくては、なりません、手引があつて後は御自分達の力次第で、好く感じ方を言表はし得たのが、好い作と云ふ事になるのでございます。

▲作れ

引つゞいて作る事を申上たいと思ひます、以上で作れるやうになるまでの用意を概畧申上ましたから、是からは作れば好いのでございます、けれども此作ると云ふ事も、然う輕忽にしては不可のでございます、右言ふ通り、順序を踏んで、頭惱の中で、作文又は詩歌の趣向を組立て、斯う云ふ事を言つて見たい、斯う云ふ感じを歌うて見たいと極めて置いて、扨て筆を執るのでございますが、筆を執つても容易に思ふ事が書けるものではありません。筆を執る迄に、頭惱では練れるだけは、練つて置かないと物が言へません、文章と云ふものは筆のさきで、上手下手が分れるものだと思ふた時代は、

もう過ぎ去りました、是からは筆のさきよりも、根本の、頭惱の好い惡いが、直ちに文章の可否になるのでございますから、筆さきを動かす迄に、餘程頭惱を好くして置かないと、不可と存じます。頭惱を好くして、それから筆を取るやうになりましても、成るだけ、愼んで書くのです、眞面目に書くのです、作る場合の心得は隨分澤山あるやうでございますが、第一はそれに全力を擧げて、作る場合には一切、外の念を雜へないこと、其作中の人になりて了はなければなりません、精力をあつめるのです、第二は人眞似は嚴しく廢すること、筆を持て書き出すと、必ず新古の書物から讀んだ文句が浮んで來ますけれど、其處で待て〳〵、自分はもつと上手に言はねばならぬ、上手に言へなくても、變つた言ひ方をしなければならぬ、ハテ何うしたら好からうと、筆を休めてもよろしいから、何處までも自分の創意で書かうと努めるのでございます、是れに勝つた人が、初めて文章家詩人になれるので、初心の間は何うしても、人眞似がしてみたい、一行二行、十行二十行と全く他人の文章を拜借して了ふやうな事になるのでございますが、初めから克己心を持つて、何うしても他人の眞似はしないと、決心を固めてかゝらねば、豪い文學者にはなれません。第三は推敲すること、推敲とは先づ直すことです、書いた時は、ア、好く出來たと思ひましても、翌朝になりて見ますと、何處か必ず缺點があります、其時には氣附いたまゝに直すのがよろしい、最も餘り直し過ぎると却つて天眞を損ひます、大抵は初めに書いた事が少々疵はあつても、眞を表はしたもので、幾度も直すと文章に疵はなくなつても、天眞を損ふやうな事が往々ございます。それですから餘り迷ひ過ぎて、天眞を破壞しないやうに、成らう事なら先輩に見て貰うて、不可ところは氣付けてもらひ、直した方が宜しからうと存じます。

作ることに就いては先づ此位にして置きませう、以上お話しした通りで、文章詩歌も上手にならうとするには、並大抵な事ではありませんけれど、苟くも女子文壇が讀める位の程度の方なら、私は文章詩歌は出來ると思ひます、只進歩は時間に俟つ外はございませんけれど、右に申した順序を踏んで行かうと思へばさうむづかしい事ではございません、好きてさへあれば、苦なしに知らず識らず其順序は踏んで行かれるものでございます、恐れずに早く作れるやうにおなりなさい。

【をはり】

東京だより

▲森鷗外氏曰く獨逸では方言ばかりで詩を作る人があります、日本でも詩は成るべく新しい語で作らねばなりません、我々も豪いやうに思つて居ては間違ひです、豪い人は是から出るのです、後になつて見れば我々は何でもないでせう▲島崎藤村氏曰く私が初め詩を作つて小説に移つて來たのを何う云ふ理由かと聞かれる人もありますが、別に言ふやうな理由は無いのです、只自分の行かうと思ふ路を歩いて居るうちに、何時の間にか此處へ來たので、別に何うと云ふ理由は説明できません▲國木田獨歩氏曰く「獨歩集」の諸作を初めて出した頃は世間では何とも言はなかつた、何かの機會で褒め出すと皆盛んに褒める、實は何とも言はれない間の方が自信もあり作り好かつた、何とか言出すと世間では勝手に褒めたり貶したりして不可、自分の態度には變りはないのだから少しは長い眼を以て見て貰ひたいものだ▲平木白星氏曰く、私は餘り雜誌へ出すのを好きません、二月か三月書かないで居ると、直ぐ後れたとか、埋れたとか言はれますからね▲横瀬夜雨氏曰く、何ともない、何ともない、手を放してください▲此頃雜誌の休刊するものや廢刊するものが多い、俳句雜誌はすたらない▲五月十四日東京に雹降る、雷鳴も凄じかつた、後は爽かな新緑の天地となつた▲俳句を作るものは散文に移り、和歌を作るものは新躰詩に移る、此間に何の約束があるか未だ深く究めないけれど、事實は正に此通り▲民謠は古きを繰返すのみ、新しい好い作は何時出るのであらう▲女學生ばかりを眼の敵とした世間では、漸く海老茶式部の名を言はなくなつたと共に、冷嘲の聲も聞えなくなつた、それで女學生は愈よ多くなつた▲東京の女の子には洋服が可愛らしく、地方の女の子には立矢の字に扱帶が似合ふ、子供にも新派と舊派とある▲印刷術の進歩は文字の威嚴を損じた、口で言へないやうな事でも、手紙では平氣に書く、殊に女に多い▲新聞の文學通信には誤謬が多い、チヨイ聞を傳へるからであらう▲此處前後一二年は正に文界全躰の一轉機である▲新躰詩と新派和歌の研究を主とし、初心者にも親切に手引する目的で詩草社と云ふ社が起つた、六月から雜誌『詩人』を發刊する、社友には種々便宜を與へるさうで、誰でも入社は出來る、社則は青山原宿詩草社へ申込めば送るとのこと▲此度閨秀文學會を起し與謝野夫人を初め諸文學士が女子の爲に文學を講ずると

懸賞當選圖畫 (其八)

山中古洞先生選











(1) 女かみゆひ(二等) 愛知縣豐橋市中八町戊六九 白井津奈子

(2) 渡舟(三等) 府下八王子停車場前 乙幡もん子

(3) 曉(四等) 大坂 紫泡

(4) お仕事(五等) 麻布區宮村町一 松崎歌子

(5) 日永(五等) 周防國徳山橋本町棟居内 能谷よし子

敍事文

文學士沼波瓊音先生選評

三等

○或る夜

遠江　白露

臺所の用をすまして座敷へはいつてくると丁度時計が六時を報じた、未だ點燈には早いが暮れやすき雨の日のうつとうしさに、花洋燈を細めに點け、臺の上にのせて机の前にすわつた。

風が靜まつたので窓の障子を開けると、すきかへされた裏の田圃から物悲しげな蛙の聲がひゞく、櫻の花ははらり〳〵と絶えず雨の爲に、庭の面へ美しい小紋を散らしてゐる、ずつと開けた山畑の緑濃き麥生、その畔を彩る菜の花の色もあせなん許り、打ち煙る雨に町へ通ふ半丁の道には傘の影一つ見えはせぬ。

今宵は母上がお留守なので家の内は物音だになく、話好きの弟も英語の豫習だとかいつてさつき二階へ登つたきり下りて來さうもせぬので、詮方なく古い女子文壇を取り出して、口繪の寫眞をくりひろげて見たが、唯もうしみ〳〵と物淋しさのやるせなく、お湯にでも行てこようと思出して手拭と石鹼とを持つて家を出た。

田を打て歸る百姓が簑笠のまゝひた濕れに濕れてくるのに逢つたのみ、半丁の小徑をいそぐでもなく行けば、もう町へ出たのである。物賣る店でも障子を深くしめきつてある家が多いが、阿波屋といふ下駄屋のみはいつものやうに、燈火の影明く職人はしきりに下駄の齒へ鉋をかけてゐる。

其隣りはお醫者さんの黒板塀、門の大柳雨にけむつて瓦斯燈の火影が風の吹く毎に夢の樣にまたゝく、門口に黒い影がたゞずんで居るので近寄ると、奥の方から床しい琴の音がもれてくる、多分この人はそれを立聞きしてゐるのであらう。

小さな橋一つ渡ればすぐとつつきが湯屋である、五色の色がらすの所から美しい湯氣がすうと立のぼつてゐる。くゞり格子へ手を掛け樣とすると、引違ひに中から開けて出てきた

のは二十四五の束髪にした奥様風、「おや失禮」と私に會釋して傘をさしかけ急いで橋の方へ行て了ふ。「いらつしやい、邪魔なお天氣さまで」と、いつものお内儀さんの愛嬌を聞き乍ら、はらつと蛇目傘の露をきつて上ると、生あたゝかき湯氣の中にヴァイオレットや嬌かしい白粉の香がつとせまつてくるのであつた。

（評）何となく春愁を催さしむる夕暮の最よく現はれたり、細かくして優し味のあるは確かに女性の筆なり。

四等　○指輪

愛知縣寶飯郡一宮二四番戸　近田みつ子

今朝も妾は、例の如く師の君がり行かんと、松並樹をたゞ、一人にて急ぐなりけり、凍てたる大路も松の葉末も、きら／＼と光りて、はき出す息は、今し山の端に入らむとする有明月のそれと共に白くあはし、未だ朝早くして、人通り少なきものから、さびしくもなくて、急ぎ行く下駄の音からころと響いて、いと高し、歩み行く前五六歩に、霜の路にも一きは目立つて、美しきあやしの光ぞ、吾が眼を射ぬる、氷の片の旭のために光るなるか、松の露の光りなるかと、想ひつゝ、そをひろひ上げて、妾は、はつと驚きぬ、そは美しく見えしはずよ、實に、るびー入の金指輪にてありき、妾はそつと拭ひて、しばし暖き手にのせしまゝ、愛らしの品なるよ、と、ながめてありしが、かゝる所に落ちてある物としては、あまりにふさはしからぬ品なるに、落しゝ主はいかなる人にかあらむ、かく優さしの品の主なれば、定めし色白き若き女ならむと思はれて其俤も偲ばれぬ、されどいかなれば、かゝる所に落ちてはあるならむ、身にあまる嬉しさもてる手弱女の、たゞそわ／＼と嬉しくて、ぬけ落ちたるも知らずして行きたるならむか？されどされど、知らざる間に、ぬけ落つる如き物にはあらざるよ、と、妾は、種々の空想にふけりつゝ長き並樹を行くなりしが、なにとはなしに、ま白の頬に黒髪亂し、柳の眉を逆立てつゝ雪はづかしき優しの指より、をしげもなく、つとぬいて、えつと、大地に投げつけつ、睫長き一種凄惋の光りある眼にて、御空の星をば屹と睨め、藹然と立つたる、一個の女性が、眼に浮び、妾は、ぞつと、身顫しぬ。かゝる想の中に、いつしか、並樹は過ぎて、行手なる派出所の前に至りたれば、なほも空想にふけりつゝ届出でゝ、師の君がり急ぎぬ。

（評）作者の豊富なる想像によつて自ら失戀のあはれを偲ばしむ、わざとらしき所のなきは殊に嬉し。

五等　○夕立

和歌山縣那賀郡川原村字野上　前田かをる子

雨こそいつもをかしけれ、されどいと長々と降りつゞきたらむよりは、夏の夕立のまたゝくひまに、降りもし晴れもしたらむぞ、いみじう嬉しき心地ぞする。まちわびし一むら雨の降り行きし晴間々々に、早やきらきらと星かげ見えて、山の端に匂ひ出でし月影清く洗ひ出せし兎の影走り行く雲に躍れる等、妙しき工の業かと仰がれつ、青葉のつゆの一つ二つに黄金の玉となりつゝ吹きくる風に散り行く樣、或は梢に湛へてうちゆらぐ樣千金の春の宵にも彌まして目出度し、さるは庭の池水量まして鯉鮒の時を得面なる、暮れ行くまゝに露の草叢明う光るは、之れも螢のかわける羽やしめしけん、呼吸につれてしばしは暗くしばしは明し、乙女子のうちは片手に走り出づれば、泉水に飛び込む蛙の音さへ今日はかはりて聞えぬ。


田舎の朝　盛岡　白露子

殊に勝れて嬉しう覺ゆるは絕えて久しき山家の雨にこそ、照りつゞきし夏の日の一日々々に增り行けば、きのふさへ堪へ難かりつるに、今日の暑さは如何せましなど、眉うちひそむるも哀れに、田の面には水枯れぬらむ青草の影さへ止めず、あはれ天には一滴の涙おはさずやと田子が日每の祈りも今はあだとなりゆくうたてさ、岩根にもるゝ清水かれ果てゝ、山川の流れかすかに、さては青葉の蔭さへ漸く細りゆく樣、今は只太き長き息のみ聞えて、蒼民草が双の目には涙の滴あふれぬ、かゝる折から絕えて久しき黑雲の、嘲り姿に南の彼方に面さし出せば、風さへ吹き起りつ、果ては、空一面墨ながしたらむ樣なるぞ嬉しとも嬉し、雷の音いとおどろ〳〵しきに、風いよ〳〵吹きて雨はら〳〵と落つれば、蛙は嬉しき聲のかぎりをつくし、彼方の庭には仲睦まじう群れ居たる雞の、こゝと呼びつゝ雛從へて走りかへるを、雨にたゝかれてばつと立つ砂けぶりの尻尾にふれて、チヨ〳〵となくひなの聲愛らし今歸りし農夫の笑顏、ひきかづきし表にもれて、端近う腰うち下して煙草くゆらす樣の長閑さ、板屋を傳ふ滴の音烈しく、田の面には早や浪をたゝへて、小波のうち寄するも嬉しく、裏の谷川水增りて瀨の音さへにいと高し、俄かの雨に野よりかへる若者、鍬かたぐ手

も躍りて降る雨の下くゞる樣、雫滴る身にさへも猶ほ笑面はつゝまれて、顧る牛のもうと叫ぶも勇まし、ものあがなひに出でし乙女子の途にて雨にやあひけむ、滴の袂うち飜して笑めるは、謠ふ小歌のそれならでもぬれて嬉しき心地やすらむ。年まだ若き女房のあわてふためける樣、洗ひし衣や忘れけむ、やがて果てぬれば内に入りていと聲高に笑ふなど、萬づに治まる御代のしるし見えて目出度しや、やがて晴間になりぬれば彼方の途を旅人の急ぐ樣、此方の森に色增す風情、夕日漸く西の山邊にうすづけば蜩の聲又一しきり、やがて山の端より天の浮橋かけ渡せる夕の虹も消え果てゝ雨後の月白く白銀の矢射たらむ如き光放ちて、鎭守の森の老木の枝にかゝるも涼しく、蚊遣火の煙拂うてうたゝねの枕そば立つれば、あはれ今夜の雨を祝ふらむ鎭守の社にうちならす大鼓、風につれて撥音高し。

(評) 巧といはんは未だしけれど、筆は暢びたり、末段畫龍點睛の法。

秀逸

○花ふゞき　浪花　北川花菫子

菫たんぽゝなど咲き出でたるに、名も知らぬ小草も打まじりて、匂ひあへるもをかしく、飛びかふ蝶の羽袖かろやかに、袖より立つ雲雀の聲も、云ひしらずのどけし、春の野のあはれに催されて、憧がれ歩きけるにふとある川邊に出でぬ、少きいろくづの、我が影に驚きあわてゝ、底の玉藻につと身をかくすもをかし。をりふし流れよる花の二片三ひら、川かみの盛の程も思はれて、そゞろ床しう打ち眺められければ、

水かみは花咲きぬらしさゝ川の
うちよする波も香に匂ひつゝ

いざ探りてましと、堤に沿ひて辿り行程に、やがて色ある雲の棚引ける見ゆ。近より見ればいく本となく植ゑわたしたる櫻の梢の、花の香りや立添ふらん、そこはかとなくうち霞みたるが、下行く水に影映せるいひしらずをかし。

流れ行く水の底にも春はありて
堤の櫻いまさかりなり

など誦しつゝ、尙深く分入れば、見渡すかぎりおしなべて花ならぬなく、木々のけはひ、水のさまなど書にもかゝまほしや。

菅の根の永き春日をいかにして
暮しやせまし花し咲かずば

鶯の花がくれに來鳴きければ、

春の野はいなれざりけり花かげに
なく鶯のこゑもきこえて

など打すさみつゝある程に、いつしか日も暮れはてゝ入相の鐘の音心なう木の間に響き渡りぬ今はとて歸ら

んとするに、待つとしもなき月影の、かすめる空に匂ひいてたる、いみじう艶なり。折しも吹き來る風の一しきり、彼處のは散ると見るまに、こゝのも時ならぬふゞきして、さむからぬ白雪の花びらふりかゝる衣手にほひふかし。

（評）典雅、和歌亦誦すべし。

○彌生日記　伊勢　三輪葉津惠

一

うら／＼と、かげろふもゆる若草の野べに、小兎の夢圓かなり。花曇りなる空に、今朝とくより啼き出でし揚雲雀の、午近うして、聲も姿もなし。疲れつるにやあらず、雛はぐゝまんためなるべし。

二

床しき哉。村境を南にはする、いさゝ小川のせゝらぎに、山櫻の花びら、三片四片、うち流れたる。仰げば限りなき蒼空に、鳶の輪大きく回れる。上流に、夢のごと、と切れがちなる鶯のうたの、此の上なうあはれなる。

三

野末に、藁家二つ見ゆ。桃の花今さかりなり。明日の彼岸會に、草餅すらん、ゑましげに蓬摘む乙女あり。白地の手拭、赤色の襷、ほの見ゆる湯文字の、そよ風にひるがへれる。春の日、いと長閑なり。

四

菜の花や、麥や、とり／＼にめでたき春の野を、貫ける街道に、參宮の菅笠、見え隱れて打ちつゞきぬ。唄ふ聲も聞えぬ。丘上の木立に抽んでし、眞念寺の甍、きら／＼と光る。鈴鹿山の麓、うすくひる霞棚引きて見ゆ。

五

鐘の音につれて、夕べの空に、星浮び初めつ。耳あたらしき蛙の音の、裏田に細うして。山も霞みぬ。野も霞みぬ。木立も、村も。あゝ、やがて、耻らひ顔なる朧月の、やさしき光は、草靑き野面に滿つなるべし。

（評）和煦たる春光楮表に溢る。

○花流し　靜岡縣　乙　女　子

蓮華蒲公英壺菫、池の周圍をあちこちと、妹と二人集めた花はいつか小籠に山のやう「姉さんもう摘むのよして毬拵へませう」流石疲れたらしいのに儂も點頭て暖い日光にいらなくなつたメリンス友禪の羽織をぬいて、柔い堤の若草の上に布いて二人毬造りに掛つた、ちようどそこは耕春寺の裏手で、今晝のおつとめと見えて、嗄がれた住持の聲と、本でも讀む樣なあどけない小坊主の聲とが手にとるやうに聞える、二人は夫々聞き入りながら　せつせと束ねて縛つて丸めて居た、

すると讀經の聲が程なく止んで、何人か裏口から出て來たので、振返ると今の聲の主であらう、十歳許のいたいけな小坊主が、手に八重一重幾朶の山椿を持て汀に立つた、何をするのかと見て居ると、忽ち白の一枝をつと池に投げ込んだ、花は油のやうな水面を滑つて徐ろに下の方へ流れて行く「小坊さん何するの」と僕は優しく問うて見た、すると悲しげな色を白い頰に浮べたが「姉さんに進ぜるの」と低く云て俯向いた、僕は其答をきくと悲慘な小坊主の身の上を思ひ浮べてせきくる涙に續く言葉もなかつたのである。

哀れなる小坊主は半月前に只一人の姉を失つたのである、きく處によれば彼らは此村に流れてきた旅畫師の子で、安宿の二階に腦貧血で斃れた父に取殘され、途方に暮れて居たのを、付人の世話で小坊主は此寺へ、姉は容貌が美くしいので、望まれたを幸ひ、三里程隔てた燒津の某とか云ふ料理家へ、養女に遣はしたのである、斯て二人の身になれば憂も辛いもあつたらうが、兎も角もよそめには無事な月日を送つて、姉は今年十四、糸や躍の道を仕込まれて、半玉に出たとやら、派手な藤色友禪の着物に紅白市松の繻珍の帶をしめて、いつか弟にあひにきたのを僕も見た事があつた、其姉が不幸はどこ迄二人に纒ふのであらう客に招がれて引網の舟遊びに不慮の水死を遂げたので、其當時新聞にも出て、知るも知らぬも傷ましがつたが、却つて抱へ主や養ひ親は罵しつて居るとやら、何たる薄命な生れであらう、其姉にも逝かれて、廣い世界に唯一人になつた小坊主の心の中、どんなに淋しく悲しく思ふであらう、でせめてもの心やりに、こゝから花を流して唯一人慰めてもない姉の亡魂に供へやうとの志、哀れともいぢらしとも云ひようがない、併しこゝで流せば三里の野邊を流れ流れて海へ出ると、どうして知つたらう、誰かに聞いたのか、夫とも以心傳心に、そこに繋がる血すぢのわざ、おのづから胸にわいたのであるか何にしても可哀想なと袂に顏を埋めて居ると、うゝんうゝんと小坊主の力をこめた聲、つと見ると今しも投げ入れた紅の八重椿が汀から一間許の棒杭につかへたのを長い竿でつゝいてゐるので「どれ僕が」とかけ寄て一突すると、花はする／＼と滑て浮きつ沈みつ流れてゆく「玉ちやん僕らも可哀想な小坊さんの姉さんに此お花進ぜませうぢやないか」、咡くと、妹も素直に默頭た、そこて殘つた紅白絞りの一枝に、ふたりが心盡しの花束をとり添へて、さんぶと許りなげ入れた、花はとろりとした水面に波の輪を畫いて少時漂うたが、軈てさゝ川へ注ぐ出口の處へゆくと、走る樣に滑り出た白と紫と黄と絞りと一團になつて、優しく咡く水に

つれられて、遠く〳〵〳〵、水のうねりにつれて、紅が見えたり紫が見えたりして居たが、軈て夫も點となつて果は見えなくなつた、「あゝもう見えない」二人は伸上つて花の行くてに憧憬れた、無邪氣な妹も誘はれて打沈んで眺めて居る。

あゝあの花、三人が心盡しの手向の花、どうかぶじに流れて海へ出てくれゝば宜いが、廣い大きい河へ合はさる前にながれを阻む塵芥に遮られて、心ならずも止まりはすまいか、心ない里のわらべ等に拾はれて無殘に花瓣を散らされはすまいか、どうかどうか無事に流れて行つて、みたりが心を届けて呉れよと僕は心の底に深く〳〵祈つた。

（評）筆致は例によつて流暢なれど、態とらしきところありて、同情を惹くに足らず、文を作るに矯飾の忌むべきことを此の作者にいましめおく。

○漁村の春

出雲　世良富美子

磯馴松の間に、見え隠れに、十戸にも足らぬ海士が藁屋が點在して、菜の花や緋桃の花が盛りである。のんびりと聞える、鷄の聲の外、物靜かで、折々何處からとなく長閑な欸乃が聞える。

糸車　臨　中季花子



北は一面杳渺たる日本海で、銀砂の濱へ白波が、寄せては返し寄せては返し、同じ事を繰りかへして居る。彼方の岩間には娘や子供が五六人、籠を提げて貝を拾つて居る、折々手を休めては、沖行く舟を眺める。艀天島沖の二艘のかゝり舟に、舟子が赤い渾や着物を干して居る、沖の方には松前行の千石船が春風を眞帆に孕んで走つて行く。隱岐の島は、水や空なる水平線に、霞の衣を裝うて、紫に見える。眞綿を切つて飛ばしたやうな白い雲が、ふは〳〵と島根半島の方へ漂うて行く。

濱邊には頰冠の舟大工が煙草の烟を輪に吹きながら、休憩して居る。傍の莚には若布が澤山干されて、それを白髮の婆さんと、十七八の娘とが、何かひそ〳〵話しつゝ手入をして居る。娘は日に燒けまいと言つた風に、手拭を深く冠つて、をりをり鬢の後れ毛を、うるさゝうにかき上げる。

何處からか鳥が一羽飛んできて、磯邊の網干杭に止つて、四邊を見廻はして居たが、何思つてか、ガアと一聲ないて何處へか飛んで行つてしまつた。杭から杭へと長く干された、大網に陽炎が燃えて、藻の屑や小魚

が乾きついてゐる。汐風がそよ〳〵と髪の後れ毛を嬲つて、なまぬるい潮の香が漂うて來る。

牛の聲がのんびりと聞えて、海士が苫屋から、晝餉の煙が静かに立ちのぼる。磯馴松の蔭から牛を曳いた爺さんが來たが、牛を松につないで置いて、自分は暖かい砂の上に座をしめて、辨當を食ひ出した。貝殼や雲母が春日に反射してキラ〳〵と光る。

舟小屋の前で、網を繕ふに餘念なかつた、爺さんが、眠むくなつたと見え、汐風に洒されて赤くなつた顔から、白い歯をむき出して、大きい欠伸をした、何處かで舟を新造しる槌の音が眠むさうに聞えて、鉋屑が春風に吹かれて飛んでくる。

縁に萠え出た、若草の上に十羽餘りの、家鴨の雛子が鶏に連れられて遊んで居て、日當りの小屋の屋根には猫が鼾をかいて眠つて、小屋の裏の白桃の花が、若布を干した筵の上へはら〳〵と散つた。

（評）文字は美しけれど、觀察描寫ともに今一段の工風を要す。

○三年ぶり　　熊本　花あやめ

言つて上げたのより一列車早く着いたのだから、迎が來て居る筈はなし、大急ぎで俥に乘つたが、まう心は我家に着いて居る、つとめて落ち着かうと思つても、どうしてもじつとして居られない、俥の上で動いて許り居る、あゝ自裂たいまう少し早く走つてくれゝばいゝと、時は七月二十日丁度暑い眞中車夫は、汗が瀧布なして居る、額から流れ落ちるを、ふきながら一生懸命、あゝ可哀さうに、とおもへば少しは心が静になつた。

三年ぶりの歸省、あゝ御兩親は妹はと静に想像し始める、まう少し行くと土橋……道子さんと泣いて別れた……其處からが妾の村、おゝ嬉しい、まう土橋の處に來た、おや土橋ぢやない、石橋、あら大きな往還が、出來た、もしか道が違つたのではないかしら、竹藪が見えた叔母樣の御家も、ぢや違はぬ〳〵さうさういつか妹から言つて來た事があつたつけ、石橋の事も往還の事も、おゝ彼方に見える白壁造りが道子さんの御宅、あの山の中腹に一際目立つて見えるのが、懐しい母校、磯田先生はお變りはないかしら、新しい家を買て引越たつていふ姥やの家はどこだらう、家に歸る道だつていつてよこしたが、もしか彼方に見える草ぶきかもしれぬ。

あゝ藪が見えた、倉が見えた、おゝ嬉しい妹が出て居やあしないかしら、餘り遠くて見えぬ、姉さんはこゝに居るよ、お父樣お母樣只今と、あはや聲が口から出やうとするのをやつと嚙みしめた。

何時の間にか新しい草ぶきの側に來た、糊張して居るのは姥やぢやないかしら、おゝ姥やだ姥やだ。

「姥やあ」遂々我慢しきれないで聲を出した、「おゝ孃樣」「姥や」互に涙、あゝそは嬉しい涙、孃樣々々つて俥の跡からおつかけて來る、車夫は氣が着かないで、やはり汗をふき〳〵走つて居る。最早ぢき我家、どうしてこの嬉しさをこらへられやう母樣只今つて聲の限り叫んだ、聞えたのか家よりかけ出る妹、おゝ大きくなつた事「姉さま――」「はーいおみいちやーん」續いて母樣父樣、召仕ひの者迄も、ああ嬉しくて〳〵。

（評）三年ぶりの歸省に心のみ急がるゝ樣、覩るやうなり、しどろなる書きぶりなか〳〵に感興を深からしむ。

○日記の一節　横濱　葉栄子

晝過ぎて、母ア樣がお呼びになつたので、お居間へ這入りますと、珍らしく父ウ樣も大兄ィ樣も居られて、皆笑顔をして居らつしやる。妾は氣おくれがして、唐紙の側へ徐かに座り、『母ア樣何の御用て？。』とオヅオヅやつと言ひますと、母アさまは默て居られ、父ウさまは『君。お前に一寸相談があるのだが：：：。』と言はれる。妾は一層おぢ氣がついて何ともお答へを申さずに居ると、母ア樣が、『君や。相談と言ふのは他でもないが、お前の身についての事。お前も何時迄小供ぢやア居られません。やがては人の妻にならなければなりますまい。で、父ウ樣や母ア樣や、大兄ィ樣抔も、色々心配して居りましたのですが。ね：：：。』と妾に嫁に行けと言ふ事です。妾は急に上氣せたやうになつて、お答する事が出來ません。先きのお方と言ふのは：：：妾羞いのですが：：：大兄ィ樣のお友達て、今法科大學に在らつしやるとか。妾は聞いて何だか、斯樣胸に妙な塊か何かゞあるやうな氣がして、一時も早くお居間を拔けやうと、考へさせて下さいを口實に、吾が部屋へ退きました。窓の障子を開けて見ますと、向ふの家の椽へ日があたつて、其處へ可愛らしい女兒が四五人、お手玉をやつて居ります、あゝ妾もゝう一度あんな身になつて見たい：：：。竹坊は、赤い革の首環つけたポチと駈け廻て遊んで居ります。あゝ無邪氣の小供よ：：：何故私は斯麼に年を取たのでせう？と何時もに似ず斯麼事計り思ひ出されます。

○雨の夜　信濃　花園守

遠く暗の寂寞をくゞつて響く遠寺の初夜告ぐる鐘の音に、讀みさしの詩集とぢて眠るべく枕についた、が、相憎宵から降り出した細雨は、今、一しきり強く、烈しい淺間颪しさへ加はつて、すぐ枕べの雨戸を遠慮無くたゝくので、目はいよ〳〵冴え〳〵て如何してもまぶたが合はぬ、淡暗い部屋の中は、ともすれば消え樣とする燈火がはた〳〵とはためく度に暗色ゆれて、影か幻か朧ろ氣に見ゆるあたりの物一として淋しさを誘ふ種ならぬは無い、空氣はしつとりと濕て重く、氣

は妙に滅入つて只何とも云はう樣ない寂しさが犇々と胸にせまつて來る。

いつも騷ぎ廻る天井の鼠さへ今夜に限つて音も立てなければ泣き聲も聞こえぬ。

雨は餘程小ぶりになつた樣だが更けた故か、雨の傘打つ聲も、高齒の足音も絶えて、大路の物靜かな事は人里とも思はれぬ程で、耳に入るものとては只しと／＼と物寂びた床しい春雨の音づればかり。

と、此大古の靜けさを破ぶつて按摩の笛の音が横町から生墻越しに、餘韻は長く／＼細く／＼雨にまぎれて消えた。

おゝいつもの孤兒、可憐な小供按摩でがなあらう、耳を澄して聞けば、亡き父母を偲びてか緩く顫へては泣く如く、ありし昔を思ひ出てゝか、長く引いては無常の世をかこちて歎くが如く、おゝ、其明無き眼から日毎夜毎降る雫は今宵の雨よりも猶繁く袖しぼらする事であらう、もう笛の音も聞き取れぬ、あゝ、今頃何處の暗をさ迷つて居るだらう。

雨はまだやまぬ。

○短か夜　相模　野島里子

月がよいので、妾と妹とお隣りの春ちやんと三人、夕涼みながら、片井谷川の畔に螢狩した、其の歸るさ、丁度通りかゝつたのは、村でお人よしの、五作爺さんの家の前。何か話をして居るらしい。

倒れかゝつた垣根に、蔓を一杯からませた夕顔の上を蚊遣火の煙がすうつとなてゝ、道へ流れ出して居る。そして、其のま白な花が、そよそよと、涼しい風が訪づれる度毎に、靑い葉とみだれあつて、見えたり隱れたりする。それを高い空から十四日頃のお月さまが、つやつやしい淸い面に、餘念なく眺めていらつしやる樣。と、春ちやんは唱歌をやめた。

『それから何うなつたの・・・・？』

孫の聲らしい。

『さうかうしてゐるうちに、東が白らけて、遠くで雞の聲がしたからお化けは逃げてしまつたんだ。』

『こはくはなかつたの？』

あくびまじりに又問ひかへす。

『爺はきついだから、ちつともこはくはなかつただ。』

と云うて、あとは大きく笑つたが、又、突然、

『さあ、最う寢るだよ。お月さまも軒にかくれてしまやしつた。』

ふと三人は心づいて、空を仰ぐと、天心高くかゝつて居た涼月は、最う傾きかけて、今しも斷雲の一抹に影を隱くしたところ。三人は云ひあはした樣に、ほゝゝと笑つて又あるき出した。どこからか笛の音がはつきりと聞えて來る。

○樂しき我家　札幌　大須賀ひさ子

彼方の野原には蒲公英黄色にしきつめ、此方の田圃にはすみれ紫に敷きつめ、隣の垣根には水仙時しらず等笑顏に咲き、門前には小川流れて帶に似たり、窓に倚り

門に立てば、高く聳ゆる藻岩山、長くつゞける平野も皆一眸に收まりて、無限の風光を眺得る、これわが家にあらずや。
春は梅櫻、菫相映じて一幅の活畵をなし、鶯、雲雀、相歌うて自然の音樂を聞く、夏は庭樹蔭深く茂り、綠翠滴る間に蟬鳴き、螢飛ぶ、秋は紅葉の夕日に燃え立つあり、冬は降る雪に、枯木の花咲くあり、四時の佳興の絶えざるは、これわが家にあらずや。
父母は我等を慈しみ給ひ、冬は暖くし、夏は凉しき衣を賜ひ、面白き書物、愉快なる談話もて、我れに敎へ給ふ、兄弟姉妹は我と睦じく、共に窓下に讀書し、共に庭前に遊戯するは、これ我家にあらずや面白き叔父上、やさしき叔母上と、活潑なる我が從兄弟と折節訪ひ來たれば、我一家は皆團欒して賑はしく語り合ひ笑ひ興じて、夜の更くるを知らず、或は我等相携へて野に遊び山に登り花を折り果實を拾ひて日の暮るるを知らず、愉快歡樂、極まりなきを覺ゆるは、是れ我家にあらずや。
あゝ樂しき哉わが家、嬉しき哉わが家、我は此世に樂しく嬉しきもの、我家に勝るものあらじと覺ゆるなりこれ實に、我の出生し成長せる所にして、眞に我が身を安んじ、心を安んずる所なるのみならず、我父母、我兄弟姉妹の皆眞に身を安んじ、心を安んずる所なりあゝ!!!樂しき哉、我家、嬉しきかな、我家。



洗濯　周防　赤松つれ子

○春の野遊び　深川　久保田たつ子

ふと西の空打見やれば夕陽うす霞みて宵の明星おぼろにかゞやき渡りぬ、あはれ何日のまにながき〳〵春の日は暮れはてにけん、いざたまへ菫つみに花見にと友のきみのそゝのかしたまへば、うちつれて我家を出でしは、紫の雲櫻の山を未だはなれぬ曙なりしをあはれながき〳〵春の日は何日のまに暮れはてにけん、思へば春の姫神しばし我等を其溫きふところに抱き給ひしにはあらざるか、我は今日一日ぞ憂きもなくなやみもなくさながら菜の花にねむる胡蝶の如くたゞ何となく暮しける、さるにてもすみれの床を打はなれ雲井はるかにとび行く雲雀の行方まもるまに春の日の暮れはてんとは短かりし春の一日よと、まぼろしを追ふが如くたのしかりし今日の野遊びくりかへす程に、友の君、日暮れんに、とく〳〵とのたまへば、我にかへりて家路にいそぎぬ。

○まゝごと　しら藻

「ねえ、是花がお刺身よ。」

蕾はかたき花ながら、頰にも口にも血の氣立つて、前髮とつた黑髮や、リボン大きく蝶に似て、年齡も姿も同じやうなる女の子三人。

坪庭の櫻が四本太いのと細いのと、机の脚の樣になつた所へ、花むしろを構へて、美ちやんがお客さま、芳ちやんがお內儀さん、文ちやんがお姉さんと云ふ役割で座つた、そこでお內儀さんは菜の花を取上げて、念を押すやうに斯う云つた。

一通揃つた小形の勝手道具の中には、ブリキ製の手桶に水を湛へられたのもある、花は凋んで皿に乘つたが春の日光は暖かく、袷の肌は汗ばんで、手は白く襷は赤く、お內儀さんは、片手狙に花を抑へて、右手は庖丁を構へたが、瞳は花を見入つて、刄渡り三寸キラリ輝くと、小器用にざく〳〵とお刺身が出來る――此間にお姉さんは、人形の着物を拭巾に見立て、白木の湯本細工と思はれる盃を、する〳〵と一拭ひ、序に燒物の皿も一なで、取そろへて出した所――とお內儀さんは滿足げに、晴々と。

「是花がお刺身よ。」と盛る。

お姉さんはお給仕の役、優しく座つて、眞面目に。

「お待遠さま、何卒召上つて下さいまし。」

同時に手を離れた膳はまるい。とお內儀さんが。

「文ちやん、お待遠さまつて云ふのぢやないのよ、お粗末なものですがつて、云ふのよ。」

「あら是がお刺身なの。」と客は伸上つて聞く。

「お客さまが那麼事云つちや駄目よ。」

「ほゝゝゝ。」三人ひとしく艶やかに笑つた。

其笑は無邪氣で、其聲は澄んで高かつた。

○春の紀の川　和歌山縣　繁子

緋桃の花散りかゝる、堤上の小屋を出てし菅笠の渡し守は、今し多くの客を乘せて對岸に、向はんとす。乘合には老翁あり書生あり少女あり小兒あり。書生は舷を叩いて聲高らかに歌ひ、小兒は手を打ちて「舟が出た」と喜ぶ。

枯蘆漸に芽を吹いて小波をつかむ邊り、白鷺の小首傾けて小舟を守り顏なる、いと愛らしきに、苔むせる巖に釣人のあぐらかけるも長閑なり。

堤に上りて眺むれば遠浦茫々として、翠松霞に和し、兩岸の若草綠に萠えて菜の花十里悠々黃金の波を漂し其の間を飾るげんげ草の艶、櫻の夕日に鮮かなる姿、松杉の綠、優しき柳の絲、藁屋の趣、さては流麗なる雲雀の歌、里の少女の櫻かざして、若菜摘むらむ唱歌の聲、霞にさゆる馬子の鄙唄、げにこれ春姫のたはぶれの小鼓か?。うす紫に流るゝ水は調もゆるく、巖にせゝらぎ石にさゝやき、曲り〳〵て眠れる如く靜にゆるく。ギイッ、ギイッ……、靜なる春の大氣を破りて櫓聲幽にきこてゆ。

見返れば十反の白帆吹くとしもなき風を孕み、野調可笑しき唄を乘せて、今し川上の森を離るゝなりけり。……櫓と倶なら深山の奥……船は近づけり、唄は愈高まれり、顏色黑びかりする屈强の若者が、鐵の如き腕に全身の力をこめし、押し引き早き櫓の冴に、若鮎の夢や醒めむ、船頭白く波をたたせ、川面長く二條の線を描く――

* * * * *

沈まんとする夕日は、まばゆき迄に我が佇める朱塗の辨財天の橋を照射して、淸く澄み渡りたる水面に、美はしき金色を漂はせしが、やがて黄ばみたる空は桔梗色に變り、桔梗色は淡灰色となり、更に薄墨色と變り行く間もなく、闇の影はいづこともなく襲ひ來りて、野を包み、頰を掠め、果ては川も家も人も全く暗黑の裡に葬られぬ。

○病床

横濱　山口直子

昨日の夕ぐれ駒鳥の胸より赤い夕映の空を望んだので明日はきつと好天氣よと、床の中にも嬉しく思うて居たが、案に違はず今日は眞白な陶器に湛へた水へ少許の藍色インキを流した樣な五月晴の空、綿をちぎつて投げたやうな白雲が、ふわ〳〵と大空の彼方に浮いて生暖い氣が胸苦しい程室を罩めた、午近い事とて人訪はぬ室の靜さ、何處から飛んで來たのか一疋の蠅が私の顏の上にとまつた、ムズ〳〵して心地の惡さ、それても手を出して拂ふ勇氣もなく床の中へもぐつた、暫くして何處へ行つたらうと顏を上げると枕許の水飴の瓶の上へ宿つてしきりに何か考へては足をもじ〳〵やつて居る、自分は猶氣に掛るので「シッ」とありつたけの聲を出したが聞えないのかそれとも手を出さないのを知つてか平氣で瓶のまはりを彼方此方飛んで居る、「もう知らない」と口の中で腹立しく云うて外面の方へと眼を轉じた眩い程キラ〳〵する硝子窓を通して彼方の山の端に動く白雲を茫然と眺めて居ると、其がだんだん故郷の空の方へ流れて行くので、何とも云はれぬ懷しい思が胸に滿ちて、自分は葉隱れに見えずなる迄其行方を瞶めて居たのである、やがて何處からともなく呑氣な麥笛が聞えて來た、それが何となく弟が吹いて居るやうに思はれたので、思はず頭を擡げて耳を澄ました、すると懷かしい念が愈增して淚は止度なく頰を傳ふのである、暫らくして氣が付くと、種々なる想に混乱した腦は非常に疲勞を覺え、目は眩んで來て遂には夢の境にでも誘はれて行くやうに四邊の光景は次第に視覺を離れて行くのである。

栗は漸く花落ちて
泥に虫づく杏の實
夏は來れり吾家も
青葉若葉に包まれて

（玉蟲より）

新體詩

河井酔茗先生選評

二等

○水彩畫室

小石川區西江戸川町廿一　白石照子

水彩畫室、卓上の青磁の瓶に
水色の花咲きぬ。
（繪の面はさやかに並べ
すがすがし、香ひぞみつる。）
みどりぐむ灯影にわれは、つと思ふ
故郷の小野のみ胸に
みづみづと盛られたる青き木の實を
見るごときよろこび心——
そは皐月、みどりの聲に
初蛙きゝと鳴く音に
きゝほれぬ。

目さむるやうな、爽かさ、（酔茗）

三等

○病吟

徳島市助任橋南詰坂田方　浅田知枝子

まだ宵ながら闇くらく、
われに迫りて沈默あり。
そのさびしらの市を、
かねの木精はかすめくる。
呪はれし夜の罪の子が、
眠りをさますす梵音ならで——。

あゝ束の間の命とて、
われも寂音にかねききぬ。
誦經口籠るねび僧に、
あたかも陰府のみちびきを、
生ける世にしてうくるごと。
病みなやみたる五體には、
脉の動悸を覺えきて、
總身とくるをうたがへば、
ああ破れ戸をもれひびく、
かねの遠音を聞かざれと、
蔽ひ耳してをののきぬ。
このかなしびの閨にして——
かくて悲しき此宵は、
またなき沈思に更けゆきぬ。

われを看護りてとのゐせる、
つねによく言ふ口がるの、
人も今宵は噤みゐて——。

夜はなほやみをおくりきて、
しじまはさらに强かりき。
あああぐみにし病床に、
人はありやと見まわせば、
面やつれにしもの三たり。
半ばほ白き顔ばせに、
われを看護るがあるを見ぬ。

淋しい、くらい、かなしい、冥界に引入られるやうな感じがします、君も亦詩才の一人、ゆめ侮るべからざる手腕があります、此詩後半は削りました、長いのも結構ですが、投書規定を無視されても外の方に差支えますから、此れからは二回に分つて下さるか、それとも此れ位ゐな長さならよろしい（酔茗）

四等

○夕轟き

日本橋區蠣殼町三丁目十二番地坂本方　大村澄子

暮の姿はほの黒き、
「物憂」は羽搏するどかに、
灯ぞ點る市の姿態、
瘠せさらぼひし惡念の、
ああ肩たれてあふさくさ、
「輪廻」のごとく徂きめぐる
人のかたちは夢ならじ、
げに急はしなき世の戲象
かくてかくれの詩の家にも、
滿ちのぼり來や「吾儕には」
からきに堪えぬ水泥なり、
世の巨潮のひたひたに
往かまし新譜うたひつゝ、
陽は麗らかに藝術の、
そこしも花は敷妙に、
瓔珞冠る天乙女、

雨にしめりて戸に流れ
想に淪む胸にいる
常闇洞のおくぶかに、
益なや見るに眩し

行く春　京都　豐井きく子



春常若の香に匂ひ
ほしひまゝなる界あらば
色音はどよむ日に夜に
湖に泛かばゝ蘭の楫

つとをのゝきにすくまりつ、軌る風車のとどろ音に
はた惚に凭り眼のあたり、凝視にたへず面ぶせぬ。

市の夕のどよみのさまは實に巧みに表はされましたが、理想の詩の國は好く表はれなかつたのみならず、此一篇には、もつと眼前の動搖を巨細に表はし、理想の常若の國は一二句に止めた方がよかつたのです、併し上手です（醉茗）

五等

○望海樓

上毛　うめ子

大殿の幔ゆれて金晃の十色華やに
羽をのして象を搖る
望樓を鎖す薄靄軟やにゆるぎ
玉の環は素透りて代赭の壁による
大床に熟睡せし若潮や素肌ぬく達者の如
榮える氣にうね〳〵と好き步き始めぬ
銀砂に丹貝數へて藻汐草巖に纏ふ
海姫のかつけ物濡ぐ好き男の子
大神催す饗宴に招ぜらるゝか金車翼のし
彩雲は馳せ交ふ
金の箔弦に散ぜらる一線に果より限に
それも暫時一海の慈母に坐す望樓主

乳色の硝子窓通し五百燭の赤きを照らす。

才華燦爛、文字の美は眼を射るやうです、又之れ容易に得難い一人です(酔茗)

秀逸

○遠き光　長野縣　小林芳子

一面の若草若葉、
ゆら〳〵と春の氣充ちて、
折しもあれ彼方の杉に、
光そは、黃金の鷹か、
發として、我五體は、
もゆる如野草の上に、
左顧すれば片手に弓あり
むらさき閃めきありて、
笑みぬ吾、時こそ來たれと、
今放つ、的は光と、
紅の烟を引きぬ、
走けよりし大杉の本、
横さまに我はたふれぬ、
十重八重かすみにとぢて、
いと遠く光るを見たり。

憧れの野邊に出れば
我胸は奇しくもえぬ
いと遠き光を見たり
はた、眞珠の胡蝶なりしか
聖神の手にかゝると見し
白衣して立ち居たりぬ
右視すれば右手に矢あり
人の世の弓矢にあらず
滿身に力をこめて
矢はそらに、高くひゞきて
我胸は奇しく躍りて
もうろうと眼かすみて
ふと氣付き邊りを見れば
光なほ彼方の杉に

説明に傾いた點もありますが、隨分骨を折つて出來た作と思ひます、着想もありさうで、其實は未だ斯う云ふ風に歌つたのは殆んど見ませんでした(酔茗)

○春愁(形身の鏡を抱て)　長野縣　山田くに子

音低ふ、そゝぐ小雨に、
愁より寂しく暮るゝ、
亡き母の面影戀ひて、
鏡の不變の光に、
闇影は跫音ぬすみて
泣く眉の愁憂を埋め、
夕風は冷く靡りぬ。
孤悲さは胸に迫りつ、
薄曇る中をのぞけば、
はた我が亡母戀る幻影か、
母に肖し――我に肖し――

頸垂れて散りくる花の
春の日を物狂ほしふ、
今は早や形身と成りし、
過ぎし日の樂しさ追憶ふ。
ひそ〳〵と、涙脆き子が
低首し額の悶を
たへかねて抱きし鏡の
母君が魂の通か
朧ろかにいと朧かに、
薄き影かすかに浮ぶ――。

暗愁あり、鏡の底の母の影は、殊に幽玄の感を起さしめる(酔茗)

○悔悟　岩代　根本笑子

見果てぬ夢の後逐ふて
毒草踏みて彳めば
君が情に背きたる

辿り付きたる奇しき森
胸に知覺の愁みあり
我れに力の弱くして

寂寞の裡の沈靜しらや
迷へる我れを攻むる哉
君住みませる空はるに
金星一ッ燦きて
森の彼方を照らせども
自然に背きし我なれば
逃れ出てんに途狹く
森の香高く身に迫り
影なきものゝ我が耳に
敗殘の運命低語に似たり

時代の苦痛、個人の煩悶、詩人獨り森に悔ゆ、善くうたひ得ました(評者)

○深夜　　佐世保　初瀬みつゑ子

夢にし入りぬ‥‥、
蠶を京屋の末の子と
裏の長屋の子供等に
角石とりていたいけの
幹枝られし柳のみ
寂しき大道にたゞずみて
並ぶ老店は戶じまりも、
いときびしげに閒かなる、
夢にし入りぬ‥‥。

我はあゝ終に弱き子‥‥、
凍てしが如き大道を、
敗殘の子がため息か、
心細げにあへぐなる、
電燈の光身に浴びて、
戀失ひしさびしらに、
うつむき勝ちにさまよへる、
我はあゝ終に弱き子――。

初め、戀失ひしさびしらとは思ひませんでした(評者)

○お湯殿　　秋田縣　花子

白梅かほる湯殿には。
淸水の神の織りましゝ、
湯氣の衣の暖かう、
母と弟をつゝみたり。
母の乳よりやはらかき、
玉のやうなる肌には、
愛の光のかがやきて、
幼き肉の美しき。
神の子よりも愛らしく、
春の花より美くしき、
玉の體は抱かれて、
底三尺の溫さ、
慈愛の海に入りにけり――。

おん書添に依れば初めての作ださうですが、それにしては、大變に好く出來ました、此調子で進んで行けば充分詩は作れるやうになります(評者)

○二つの光　　茨城縣　嫁菜女史

金色の裳裾けて、
月を趁ふ日の王は、
天馳せに呼吸熱く、
さらゝかに星見して、
日を慕ふ月姫は、
瑠璃の座に面ほてる、
戀なるや――大空に、
光明の二つあり、
一はもえ一は照り、
豐熱と愛欲と、
わかれたり晝や夜、
朝雲の、東西、
夕空の西ひがし、
相戀ひつ相ひ逐つ。

思い切つて戀を大きく歌ひました、大抵は失敗するものですが、此作は存外好く言表はし、詩語も引しまつて、わざとらしくないのは感心です(評者)

○靈鳥　　越後　名なし小花

あゝ深紅、珊瑚の
沙洲をば翔りて

疲れては神聖う　靈鳥よ、いぬるか。
あゝ今や黎明　またなれが伸羽を
虹のごと擴げつゝ　夏花を誇れよ。——
金泥の聖池に、　睡蓮はくゆりて、
塔影もゆらぎぬ。　（光明の垢離土や。）
古塔に棲みにし　をとめごのあやかし
籠りぬる睡蓮、　こは生命、——眩ゆき。
大輪のはなびら。　いま露のまろべは、
あゝ愛は美しと　觸かに聲あり。
歸依の手の觸れてか、　濁亂も忘れて、
深紅なる妙華に、　ほてりぬる靈鳥。
あゝ、聖體、こは秘蹟。　いま又愛の花の香、
そにゑひていねむか。　いざ「我」や、——靈鳥。

跲跟の痕あるやうですが、最近の詩人の惡化は茲にまで及んだものでせう、摸倣時代の次に來る創意時代に於て此詩才をお試しなさい（評者）

○野を行く光

佐世保　きぬ女

氣は濃く薄ふ鈍色に、　凍てたる鐘の音を包む
夕べを搖らぐ野の草に　なきがらのみの花は見む
香ひは地にうつりけむ、　色はみ空にかゝるらむ
闇に息づく萬象みなの、　冥府につゞける輪を繰りて
扉の前に喘ぐとき。
さし交む枝葉、梢を洩り、　淡ふ搖れ來る一穗の
光は落つる山の石、　精に凝れる七彩や
雲は流るゝむらさきに、　塔の灯はまたゝかむ
黑き賓落つる野の涯の、　草よみどりに蘇へり
淵や騷ぐ隱り沼に、　白羽の征矢も鳴り行かず
今朝啼き立てる雛鳩の、　栖巣の光を祝げるかな
ミイラを藏む尖塔の、　南に小さき涯を出て
豐榮のぼる天つ日よ、　行きなむきはみ野に山に
天ゆく雲を使して、　北なる國は闇を追ひ

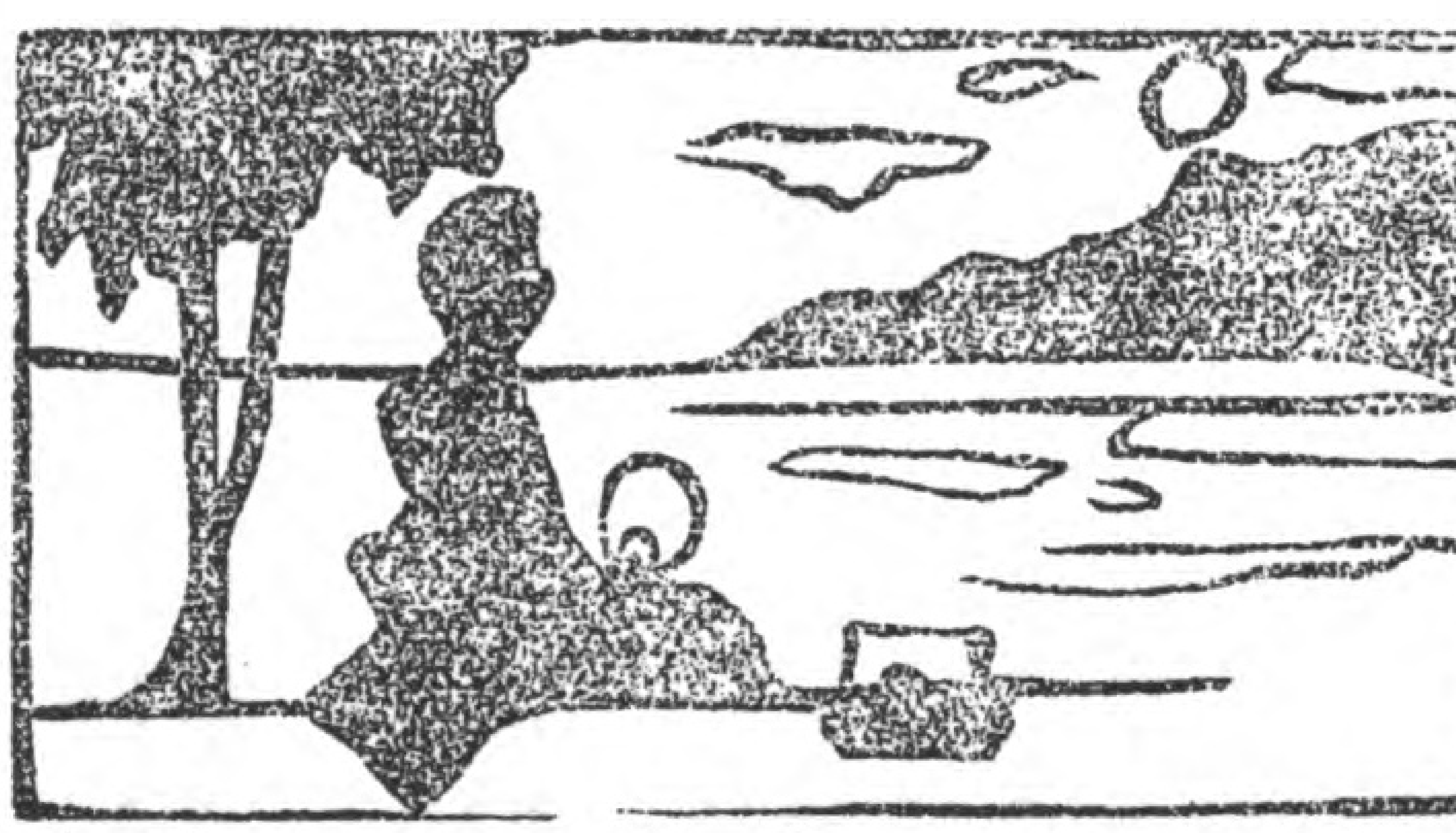
くろずみ立てる氷の巖に、火爪をとげる海豹は
濡毛に金砂うちふるひ
み空を翔くる身の榮えに、南の丘の使して
黄雲に入りし鵰は、黄金の羽してかへるなり。

想像は豐かです（醉茗）

○終焉　土佐　石川一菫女

干乾らびし室のけはひ、
またたける灯横顔にうけて
半面の陰ぞ黑ろにじむ、
その陰影に怪のもの丶
ひそみいぬ——人の命に絡みて、
鐵の冥府の扉の
開け閉てをすなる。

疑懼にしもつかれたる
心臓に蠢入りて
温き血ぞすひ盡くされぬ、何ものか見たる——おびえて
まざ〳〵と身をゆりて止まず、眼の内の色素變つろひ
もの形映らざるげに——。



夏の夕　陸前　かれ子

絶望と少さく叫ぶ、穢汚なる形躰唯に横たふ
魂は今腐肉去りしや、冥府なる門の隙により
うかゞひし内ぞ、未だ見ざる樂土か
面白のうたの韻や。

暗黒面の詩として未だ人眞似の域を脱しません、確に苦心も、想像もありますけれど（醉茗）

○あゝ夢の過去　石見　牧岡惠子

あこがれの
うす霞み
春の日の
たそがれぬ。
殘んの光——
心ゆく、
歡樂の
手に摘みし、
あはれ萎え、
海の追憶——
優眸や、
緋のふりに、
胸にしめ、
返る帆や、
あゝ夢の過去——

美し魂かも、
佳き香くゆらぶ、
海、むらさきに、
波にうすづく
美しあこがれ、
苑生をし行きて、
花の色香や、
のころは痛き
温きみ手、
染みし移り香、
泣けど甲斐なき、
潮のさしひき。

過去の歡樂を慕ふ苦痛も亦美くしい苦痛の一つでせう（醉茗）

○逝春

下野　鈴木雪子

草ながうして春の野の　花は綠におほはれぬ
空曇りて蒸し暑く　皐月の眞晝野を遠く
戀し野の人想ひては　惱める胸に手をあてゝ
憧憬れおほき十八の　血潮は胸に溢れたり

春ゆく日なりものうきに　惱める胸に手をあてゝ――
戀しき人よわりなくも　想ひよすると知らざらん

やさしと聞きし君なれば　胸の情火　肉を
燒きなば靈ともなりて　戀は深き常夏の
星影落つる宮にして　永久君を待たんかな

別に新しいと云ふてはないが、何となく香のある作です（醉茗）

○常陸の空

東京　里子

常陸の野邊に育つてふ　はどかみ草の名は知りぬ
君がやさしき詩集にとて　詩のおん神や咲かせたる

とはするつての知らざるに　春うたゝれの夕窓に
右手に持ちてふけよとぞ　夢にさびしく思ひ見ぬ

遠ゆく雲の足早やに　都は花の盛りなれど
常陸の空ぞ思はるれ　詩にはやさしき友あれば

愛ある母に育まれ　笑みて野をばゆきませな
み神に幸の若草の　其樂しさを讚奕して

面かげ知らぬ師の人よ。

又、一人を加ふ（醉茗）

○病中吟

櫻子

名もえぞわかぬいたつきの、　重き枕に伏してより、
はやひと月は立ちにけり。

われもし死なばわがために、　なげかむ人は誰々と、
指折る迄によわりしか。

胸の辰上に組める手に、　死れりと知らで口つけて、
わが名をよぶは妹か。

たま去りゆきしなきがらの、　冷たき顔に頬をよせて。
なくはやさしき母ならむ。

死出の旅路の晴ごろも、　結ばぬ糸に縫終へて、
涙かくるや姉ならむ。

あゝえたへじよ、
ぬるゝ枕のつめたさに、　痛おさへてれがへれば、
くらきにうかぶ人の面影。

實際はまア此んなものでせうが、今少し詩人らしい觀察がほしい（醉茗）

○母校

周防　小藤子

大河に夕汐みちて　宵風は重き大氣を
ゆすりつゝ流し去りつ。　今しみ時。卯の花匂ふ。

笠松の皮は剝かれて　さゝやけき學校ぞたつる。
幼き頃をかよひし　さゝやけき學校ぞ立つる。
相見ては顏赧めし　白壁にしどろ彫られし
相傘のいたづら者も　今こそは跡をとゞめれ。
よりそひて物語み合ひし　腰かけて歌うたひてし
ゆがみたる黒木の柱。　擂り耗りし小杉の敷居。
ひたぶろに追想は騷て　當時の狀態こそうつれ
わが瞳──心、宛ら、　若やぎて少きに似たり。
破れ壁に身をひた寄せて　小窓より中うかがへば
あやしげに物音きこゆ　室内より、樹より、はた、はた。

母校は好い詩材てす(醉茗)

○春怨

小石川　馬場はる子

胡蝶

やさしの歌に瑤琴の　奇しくも顫う絃の音よ
み歌の聲にあくがれて　花染艷のみ褄より。
ぬけや出てけむ小さきもの　双の彩羽の鬢はしう
舞ふよ胡蝶よわが春の　野をやよそはす神使。

夢

夢惜しき夜の月に近う　落る椿の音に立ちて
曉近き春風に　閨の燈の小搖動ぎて。
覺めて餘りに亂髮　媚恥む若き血のゆらぎ
遠き便言を待ち詫びて　醒ぎたりし昨宵の夢。

女性の素質はありますが、未だ少し舊套を脱しかねる(醉茗)

○春姬、夏姬

名古屋　思の子

姿やさしき佐保姬が、　薰ずる息に芽をふきて
春の美き樹に育くまれ、　今よ永久なるわが領と
色香あらそひ百々花は　羽衣愛しき舞ひひめや
蕊が奏づる音をよびて、　煩ゆる子をばいつくしむ
いみじかりける振舞を、　見惜しとてやおほけなき
夕べ疾ある夏ひめは、　從者なる神に勅して
『無禮しき春の妖艷よ、　下界を永知し呪へよ』と
み堅嚴しきみ不興や、　仰せ長こみ日のかみは
火車亮れ野に叫ぶごと、　みるみるたぎる幾筋の
紅蓮の征矢は草を突き、　焔とろゝと地を染めて
ひしひしとこそ寄ますに、　人は渴きに息あえぎ
大方野邊は燒きやかれ、　いと寂れたる汚下の夏

春の妖艷を妬んで、夏姬火の神に野を燒かしめるとや(醉茗)

○影

信濃　花園守

別れし君の戀しさに　三年をへぬる今も猶
現に浮ぶ俤や　夢に入りては幻の
朧ろに立たす其影を　影より影と追ひ行けど
もとより影の君なれば。　かしこに此處に見えがくれ
すがりて泣かん袖も無く　待ち給はれとくづおれて
御足の下にひれ伏せば　あらなつかしき御影は、
幽かになりぬ消え失せぬ。

影をくり返して、能く纏綿の情緒を述べた(醉茗)

○花見の日

滋賀縣　辰井ふみ子

『よき代物あり如何に』と豆形しぼりの、はちまきに、
紺めくの着物、端折り、眉濃さ、粋せの、若き男、
ナメと荷ふ籠、おろしぬ。
（今日花盛り、春の空とろ目して、
『樂欲』の夢や見る。）

色よき肥肉、『あちそう』と——慈悲深げなる、女主
彌さばき傍に立ちいてゝ、嬉しげに覗き、——觸りつゝ
笑顏して、値ひたづれぬ。
（いまそよろ風、庭欄溢り散る、
——ま一しきりそよろ風。——）

『大きい』と、今し魚籠、尾をつとつかめば、——瀕騰——
赤鱗かゞやく、生鯛。——鰊もてる男、三人
何かつぶやきて、すがひぬ。
（あゝ花見ると、あえか人のひとむれ
きらびかに、のれんくゞりぬ。）

無殘、——握まれて、（——刑場か——）まな板の上に、狂ふや——
命の瀬戸際——あゝ出刄、——腸や小骨、頭と
入り亂れたり、料理場。——
（やがて、客人美はし櫻愛でつゝ、
味はひぬ、鯛のうまし肉——）

昨今、兎角の議論あるは言文一致風の詩體ですが、此の作のやうに、「言葉」其まゝを詩の中に入れることも、面白くやれば生きてくる、「よき代物あり如何に」などは確かに下手だが、「あらさう」などは確かに上手、今や詩壇の革新期、才人才を試みよ（辭茗）

○告天子の歌

小石川　山崎房子

かすみよはやく
たなびけよ
われはかすみの
はしわたり
あめなるひめを
おとづれて
はるのみうたを
うたはなん
しかしてひめの
ゑがほみん

唱歌になりさうてす（辭茗）

○龍吐川

筑前　はるの

龍ひそむてふ許斐山
何處ともなく湧きいづる
一筋清き龍吐川
兎に米を搗かせつゝ
落つる花びら浮べつゝ
平和噺く龍吐川
誰が過の絹手毬
背に泣く兒のあるべきに
海へと送る龍吐川

地名、河の名山の名などには成るべくかなをつけて下さい（辭茗）

○記者曰、「あゝ夢の過去」以下此節まで秀逸として五號活字に組むべき筈ですが、選拔の原稿が餘り澤山殘るので遂に此れだけ秀逸も六號にしました、惡しからず。

○春の欄干

下野　飯塚うた子

七寶七珍輝やいて、
玉彫る春のおばしまに、
竪こそ立てれ微笑みて、
霞の彩衣翻へしつゝ。
夜は仄白く匂ひ出て、
曉、雲の紐ゆらぐ、

蜘蛛手の如き野の川に、
靄の帷に厚くとも、
鳥は樂者とどよめきて、
さは云へ朝の野を行きし、
朱諸の木履や白き脚、

○濡れし小蝶

茨城縣　綿引早子

冷きを厭ふ性なれば、
野にさく花を惡しみて、
永却の春たつ歡樂の、
欄干にのみ只あくがるゝ。

濡れぬ小雨を興がりて、
袂を被る乙女等の、
詠た美しう栄の花は、
匂ひも今日は沈みけん、
露重たげに首垂れて、
通ふにかたき花小路、
見出し蝶の憐れにも、
あての諸翅は濡れにけり、
疾んでは玉の顔面の、
今は少しも濡さじと、
よき妹得たる思ひして、
さらば諸共花迄と、
ひびきに夢を醒さじと、

星一點の光落ちぬ。
春日あふがば靈光に、
花も散るらむ舞姫なりと。
四の袂に風受けて、
小草の露に濡れしより。

お化粧　京都　四辻まさ子



花より込る露玉に、
あゝ佳人の宛然に、
惜ら褒れし風情かな、
花の小傘をさしこめば、
獨りは去るにえ堪へじな、
小手さし延べて折る花や、
少さき胸をいためては、

花とも連れてまいらせし、
靜かに挿せばすや／＼と、

○何の罪

詩のみ神の性うけて
詩に榮えある君ぢやもの

春の小川を流れしに、
入りてぞ辛き水の運。
花の容貌にあられども、
塗りし化粧の水となり、
もと來し道を流れ行く。
あゝ幸福もなき身なる哉、

しばしなこゝの花瓶にと、
夢は何地を辿るらん。

名古屋　原田琴子

崇きが中にやさしうて
我が慕ふたに何の罪

拙い詩ぢやと殊更に
筆を加へてねもごろに
教へてたまふ彼の君を
兄とたのむに何の罪。

星も輝く花の野の
一人におしき月の夜を
兄なる君と詩誦して
そゞろあるくに何の罪。

○化粧の水を流して

越中　北本歌子

天に咲く瓏を辿りける、
露一しづく染りて、
もろくも我の汲む泓に、
黑からざりし我顔に、
今や抱かるゝ手をはなれ、
來たる時には美くしき、

瑠璃水晶と思はるゝ、
歸りは濁る水の色。
おゝ願はくは汝よ水、
水蒸氣となりて天上し、
女神の袖に宿れかし。

○山の端に立て

思ひを詩になぞらへて、
紙はひら／＼地に落ぬ、
餘に拙きをうとみてか。
元より詩には拙き身、
月よ笑そ我胸の、
春の日影にやすらふる、
「風よいなみそ吾が願ひ」
雛鶏返しの響きのみ。

○鶯の歌

春をつかさの佐保姫が
うす紫にたちこめて
日かげ長閑けく風絶えて
梅の花笠かつぎつゝ
あかれさしそふあけぼのゝ
夕づゝにほふたそがれの

○卒業

才短くて物知らず、
扉を開きて入る日より
かくて四年の長き日を、
園の守なる師の君の、

神の水にてありながら、
金縷の征矢の光線うけ、
露ともなりて降りて來て、

根岸　井上久子

君在す空にはなてども、
さりとはうたて我詩の、
たゞ憧憬の鮭の精、
躍る思ひを秘しとて、
可弱き胡蝶の袖なづる、
云へども答へは山彦の、

岡山縣　百合子

みけしの裾か八重霞
春の香高き大御空
かけろふもゆる野邊ごとに
うたふしらべは春の歌
露にうたへばつゆは落ち
花にうたへば花は散る

富山縣　瀧本秀子

くらきに迷ひし人の子の
心の花も咲かせんと
をしへの露の玉結び
培ひそゝぎれむごろに

いたはり育てしこれよりは、
出てやこれより汝が世に、

○孝女

流れの音は絶ゆるとも、
やまぬは賤やはたの音、
破れ戸の隙を通ふかぜ、
手足凍えんさむさにも、
少女靜かにかたり出ぬ、
永き眠りの日なりけり、
今宵は眠ずきぬ織りて、
供ふる燭のしろとせん、
やみ居給へるちゝ上の、
心からなるまことをば、
言ひつゝ心勵げまして、
鷄鳴く聲は冴え／＼て、

○小さき花園

すがた幼き妹が、
眺めをかしう笑はしき、
早百合薔薇の香も高う、
うす紅染ゆる四邊には、
あゝ可愛げにともすれば、
我からほこる妹が、

此樂園の扉を閉ぢ
歸れや樂しきもとの家へ

紀伊　春園歌人

あらしの聲はやむ迚も、
寂びしき冬の山ざとに。
更けぬる夜は身にしみて、
厭はずきぬ織る乙女哉。
「去年のあしたは母上が、
思ひまはせば早ひと歳。
明日母上のおん前に、
手向る花をあがなはん。
口にかなはん物を得て、
捧げまつらん明の日に。」
織り行く梭の音たかく、
夜はいつしかに更て行く。

越前　新保勝子

朝夕べのいそしみに、
花壇ぞこゝになれりける。
笑まひ豔けき牡丹花の、
小花八千垂れ地にあふる。
小さき花園の主人ぞと、
罪なき聲に興ぞわく。

短篇小説

廣津柳浪先生選評

一等

○踊り子

岩代須賀川町　服部水仙子

停車場から連ねた車が一歩々々、賑かな町に近づいて來る時は、さすがに懷かしい思はしたが、まだ六つの頑是なさ、幸は決して踊り子となり下つた自分の身を恥かしいものとは思はなかつた。見れば思ひ出す朧ろ氣な覺えを辿つては邊りキヨロ〳〵見廻すので、後の師匠に「幸ちやん何だねえ」と笑はれたが、何となく道行く人の顏々が皆見たことあるやうな氣持ちがしてならなかつた。二年前相應に暮して居た水戸屋が天理教に迷つて、家屋敷、田畑田地まで殘らず寄進してしまひ、一家は夜逃げ同樣の姿で此地を去つたのは誰しも知つてゐるであろうが、今度の祭禮に、元町の屋臺に乘るべく買はれて來た子供役者の一座のうちに、其末娘の幸が加はつて居ようとは誰しも思はないであろう。宿の内儀は名も知らぬ人も知らぬ、けれども顏だけは知つて居た。晝間お師匠に是々と身の上を聞いて、驚いた顏をしたつけがそれからは幸のことを一番能く世話して呉れる。無邪氣な、人懷かしい其性は誰にも可愛がられるのだ。夕餉にと連れて歸られた子等もまた段々と集つて來て、灯と花に裝飾られた屋臺に太皷の音賑はしく、家毎の軒にさした紙花、日の丸の提灯。軒下に並ぶ諸々の店からカンテラの煙り流れて、ゴム風船に飛ばれて慌てる者、梨一つに寄つてたかる吹屋の店、僅か一錢のお慰みの文廻しに見惚れて背の子を泣かす子守やら、如露の水に飛び退いてはまた女子の寄つて來る酸漿屋、賑はしとよりは寧ろ騷々しい町内の有樣を二階から眺めて居ると「幸ちやんさあ〳〵お仕度だよ」欄干に手をかけた儘振向くとお白粉の刷毛を持つてお師匠がお手招をする。素直に其前に座つて白粉をつけて貰ふ。鼻の先を一段と濃くしながら「今夜は笠揃へて二幕だけだから確り遣るんだよ、よ千松！」と一寸其頰をつゝいて「さあ出來た、其着物を脱いで」今夜の出し物は御殿政岡。元の字の

はいつた揃への浴衣を脱ぎ乍ら幸は千松の臺辭を口の内に繰り返して居ると「幸ちやん舞臺に出て居眠りするんぢやないか」すると皆がどつと笑ふ。憎しい聲の起元はと見れば、嫌ひの嫌ひの咲と云ふ、年は十六の一座で一番の意地惡。鬘をつけた其顔を見ると此人が八汐に扮るのだ。たとひ芝居にもせよ、此八汐に殺されるのかと思ふと何となく嫌な氣持ちが爲る。鏡と睨みくらの面々も皆衣裝の着付けにはじまつた。馬鹿囃子の音が近くなつて來たのでつと首を出して見ると隣り町の花車が此町内にはいつて來たのだ。屋臺の前には早や幕開きを待つ人の



頭が黒く近い家の二階には人の顔がぞつくりと並んで居る。ふと下を見ると通る人が皆上を見上げて居るのでさすがに首を引込てしまつた。拍子木の音の一つ〳〵に動搖めいてゐた人聲は靜になつた。「後見送つて政岡が、まさなきことも身にかゝる……」床より起る三味の音に連れて紅白だんだら染めの引幕はあけられた。幾百の人の目を身に引き受け乍ら、袴の下に手を置いて、赤く揃ふた人の顔を徐ろに見渡すのも場馴れたればこそ。此中には昔遊んだ友達も交つて居るであろうに。ふと幸は昔住んだ自分の家が今どんなになつて居るであらうと考へた。向ふの家のかげから頭ばかり見える半鐘

を五六軒越したところが幸の家であつた。店は魚を商ふて居たのであつたが、今は誰が持家となつて、誰が何を商つて居るであろうか。

義太夫は益々進んで柴御前のお入りとなり、千松は工の菓子を喰ひ散らして殘酷な八汐の刃にかゝつて舞臺の上に倒れることになつた。觀客は水を打つたやうにひつそりとなつた。寢ながらに幸は何を考へてゐるてあろう？……そなたの命は出羽奥州五十四郡の一家中所存の臍を固めさす誠に國の礎ぞやとは云ふもの丶可哀やな……張りつめて居た氣も恁うなつてはゆるんで來て幸は何となく眠氣を催して來た。……諷ふた歌に千松が七つ八つから金山へ一年待てどもまだ見へぬ二年待てどもまだ見えぬ……あた丶かい母の背中に小守歌きく昔にかへつて幸は全く舞臺の上に睡つてしまつたのである。幸といふ名を與へながら如何に貧困つて居るとはいへ恐ろしい人中に子を賣つた親を怨みもしないかはりに、師匠夫婦が僅の愛の影に世の荒浪知らぬ幸が夢は、そも何の上を辿つて居るてあろうか。

材料と云ひ、筆つきと云ひ、殆んど隙が無い、六つの子供にしては、少しませ過ぎて居る處もあるが、七ツ八ツから金山への歌を聞きながら、賣られたる千松が、うと〳〵と幼き夢を辿るあたりは蓋し歷巻の好文字、作者の文情は誰に私淑すると云ふ事もなく、自然に發展して來たもので、悠揚たる裡に詩趣が溢れて居る（選者評）

三等　○可憐の義妹

埼玉縣大里郡玉井村　中村紫香子

「只今」出迎た下女に答へて奥に行うとすると「あの故郷から美枝子樣といふ方が入しやいました」と云のて「マアどうしてゞせう」と不審しくも嬉しく伯父伯母に會釋もそこ〳〵二階の自分の居間の障子開ると美枝樣は雜誌を机の上に載て座を直してる所。「まあ美枝樣、どうして……」とあまり懷しさに何より早くこう云て膝突合せて座ると「姉樣、お懷しう御座いますわ」ともう愛らしの眼から涙が溢れる。「まあよくね！」と私は外の言葉はてない。お茶菓子は一杯盛つた儘て、お茶は冷切つて火鉢の灰は眞白に消えながれてる。美枝樣は私の隣村で年は私より三つ下て十四。繼母の手で辛く育てられた子なのだ。私は大層可憐そうてならないので毎も慰の言葉を與へる。だから美枝樣は私を姉樣々々と慕ふて學校の授業終つて一度は必と暇を盗んで私に逢に來のだ。だのに私は去る四月今入學てる學校の三年に上つたので美枝樣も私の跡追ふて一年

に入ろうと父母に願ふたのだが許されなかつた。て涙て別れてから今迄一度も便を缺した事がないのだ。私は茶道具を彼方に押退乍ら「美枝樣お一人て入つしやつたの、よく此家が知れたねー」とつく〲みると優しい眼光口許等皆あの數月前停車塲で優しく我袂にすがつて別を惜んだ時の儘であるが併し何處ともなしに淋しげな所もある。「博覽會をみに入しつたの」といへば「いゝえ私……」と言澁つて「私家を逃てきたの」「えツほんとう」私は耳の聞違かど思ふた。あれ程優しい美枝樣がどうしてまあと呆てゐると「姉樣私お別れしてからはどれ程悲しかつたてせう、もうお懷しいお顏やお言葉を聞こともみる事も出來ないかと思ふと……。加之母樣には猶甚く叱られて許り……私死て了ふと思ふ事が幾度もありましたわ」堪え切ず私の膝に突伏した。「マアそう」と私も不知々々涙が溢れるとそれが辷つて美枝樣の髮に止つた。「あの美枝樣東京に親類でもあつてきたの」背を撫乍ら聞と「私……あの何の考もなく只姉樣を便りにきましたの、然ど私此家へきてから思ひました姉樣も伯父樣許でお世話になつてるのだから迚も私を……」と後は分らない。暫くして顏をあげ「姉樣、伯父樣に願つて私を何處か奉公に出て下さいな、私姉樣と毎日逢さへすれば下女にだつて厭ませんから」ど決心の色がみえた。私は夢の樣だ。けれど夢ではない今現に私は美枝樣の手を握つてるのだ。實家に返すのも氣毒だし奉公にだすのも可憐相だ。けれど家に返方がよいかも知ぬ。家ならば辛い事は辛かろうが實の父樣もある事故高等小學だけは卒業させるだろう、すれば奉公するより身の爲になる。美枝樣は私のいふことなら何でも聞からよく諭して歸らせよう。美枝樣は厭がるだろうが私も歸すのは厭だ。けれど仕方がない名所でも見物て歸そうと決心していはんとすると「ねー姉樣、御迷惑てせうが……私家は誠に歸り度ないのですから……姉樣と毎日逢へるような家へ……」と泣腫した可愛き眼で見上られて私は不思抱〆たのでした。

無分別に家を抜け出して來た可愛の少女もあり〲と描かれ、鄕友に同情する本篇の女主人公も、善く出來て居ろ、斯う云ふ小說は少女の讀むお話として、架空談のお伽ばなしなどより、情味があつて、却つて好い（選者評）

四等

○築山蔭

東京芝區西久保巴町卅四平山方　さゆり子

青絹の樣に萠えた芝に、築山の櫻が散つて美くしく色

彩られた上に座つて、池に笹舟浮かしながら遊んで居る、二人の令孃がある。一人は此家の主人の妹の重子、愛くるしい張の有る眼、丸顔で色白くメリンス友禪に赤い裾の衣服、とき色のしごきをしめ、赤いリボンをかけて、何處となく長閑さうで無邪氣で年は九ッか十位、今一人は二ッか三ッ上位、細くきれ長な眼、通つた鼻筋、しまつた口元、ふさ／＼とした髪の毛をマガレートにして、矢絣銘仙の衣服に帶をたてやのじにしめた、可愛いと云ふより美くしい方で、二三ケ月前隣へ移轉て來た、陸軍軍人の令孃芳子である。作へては浮かせる笹舟の數を算へて居る重子を、思ひ出したやうに芳子は呼びかけた。

呼ばれて驚ろいて「ナーニ」と重子は愛らしい目を此方へ向けた。「あのねー吉井先生の事あなたどうして姉樣と仰有るの敎へて頂戴な……」重子は丸い大きな目を見張つて居たが、「舊家にいらしつたのよ。だから私姉樣と云ふの、母樣は姉樣と云つちやいけないと仰有つたけれど



普請場　埼玉縣　村上花月

も、兄樣が矢張り姉樣だつて仰有つたから……」と別段考へるでもなくすら／＼と云つた。「それじや他へ御嫁樣にいらしつたの？」と芳子は不思議さうに聞た。重子は矢張り明晰と「否家へ御嫁樣にいらしつたのよ、そして淸さん産んだのよ」と云ひ切つてまた笹舟を數へ初めた。芳子はいよ／＼不思議さうに重子の顏を見る、重子は五、六、七、八、九、十、……一心に笹舟を算へて居る。芳子はたまり兼ねてかまた呼びかけた。「あなたが御呼びになつたので私數を忘れて終つたわ……」と不平さうに重子は芳子の顏を見つめる。「ごめんなさい重子さん、だけどもねえ私あなたの仰有つたこと少しもわからないのよ、もつとあなたの知つて居る丈話して頂戴な」と芳子は氣づかはしげに重子の顏を見守つた。重子は却つて芳子のわからぬのが不思議とした樣に、まんまるな眼を見はつて話し初めた。

虹の子の美はしい書筆もて色彩られた庭、陽炎はうらうらともえ、吹く風は春の香を送つて二人を包んで居

る。「あのねえ姉樣はね、私の少さい時御嫁樣にいらしつたの、そして私の學校へ入學つた頃淸さんを御產みになつたのよ、私も可愛がつて下さつたの、私今でもだけど大好だつたのよ、だけどねえ、去年姉樣の御父樣が死んだのですつて、そしたら惡者が來て、姉樣の母樣と弟の衣服も家も取つて終つたのですつて」、愛らしい重子の顔はだん／＼淋しくなつて聲はうるんで來た、芳子は無言て聞て居る。「そしたら母樣はねえ、姉樣の家は貧乏になつたから、見つともなくて家に置かれないつて、とう／＼姉樣を返したの……、歸る時ににねえ姉樣は淸さん懷いて泣きながら「淸さんを可愛がつて下さいよ、あなたより幼さくても母樣が無いのですから」、つて仰有つたの……、私歸つちやいやだと云つたけど、とう／＼歸つて御終ひになつたの……」、二人の顔は淚に曇つて來た。暫時默まつて居た重子はまた話しをついて、「少し經てから姉樣は學校の先生におなりになつてうれしかつたわ、私家へ歸つてねえ、母樣に姉樣、先生になつてよと云つたら、姉樣と云つちやいけないつて。兄樣に云つたら、先生になつても矢張り重ちやんの姉樣よつて、其時兄樣は何だか淸さんを抱いて、キツスしては淚こぼしていらしつてよ、そしてねえ姉樣は毎日必然「兄樣は淸さんは」と聞くの、「淸さんを可愛がつてやつて頂戴よ……」、と仰有るの……」、芳子「先生は御可愛さうねえ」、と泣き出した、重子も泣き出した、天使の樣な二人は抱き合つて同情の淚にくれて居る。

春の日は落ちて、つがひ離れた白蝶の、姿淋しく、散る花かとばかり。

無邪氣な少女の口を藉りて、姉さんと呼ぶ先生の悲しい身の上を語らしめる、復雜した趣向を二人の對話に表はし得たのは近來の手柄、本號の小說中、面白く讀まれた一つです（選者評）

五等　○樹蔭

大阪　牧山久子

小川の堤に添ふて、櫻並木が有るので花見や涼み亦は螢狩と客足絶ゆる事はない、其れに昨年の春から此所に小さなぜんざひ屋が出來た、家內は年增な女中二人と糸子と云ふ娘とで商なれぬらしう、お世辭も言ぬが其が亦人の氣を迎へたのか何時とはなしに美人ぜんざひと唄はれて、一倍人出を多くした。

今四時半工場の汽笛が鳴つて邊ばつと電燈花が咲てあち、こちの夕餉の烟白う立ち昇て居る、門べに立つて眺めて居た糸子は思案らしく「私に能う似てるわ」獨

言云ふて俯いた眼からは露の玉が落ちさう。

「ありがたう」の聲に驚されて振返れば帽子面深く冠つた學生らしきが早食べ終つた處で門を出て歸るので有つた、糸子に氣が付くと一寸頰笑んで急ぎ足に彼方へ去る後を、懷しげに見送つて居たがふと見ると杜の根に紫の小包。

「あれお忘れ物」と言なり堤づたひ小一丁も走つたが早日は暗れて人影は見えず、四辻にかけた大學目藥の廣告のみ夕霧に包まれて見えて居た。

糸子はボンヤリ佇むで居たが「亦來る事も……」と思ふと其儘引返して並木堤まで來た時何とは知らず開て見たくて成らぬので、そと開くと吉野紙もて卷たもの月光にすかして能く見ると上に林糸子樣幽香と有りあな、不思議、と胸轟せながら恐る〳〵開けば筆美しく、

小生事御地在中は、度々參上致し御厄介かけ候へど今宵終列車にて、上京當分彼の地にて勉强致すつもりに御座候、付ては私寫生の歸り友人より（美人ぜんざひ）にとて勸められ、初めて參上致せし折よりとく御人品の只ならぬ事感付候へども誰問ふ由も無ければ其儘打過し居候處はからず先日住吉の歸さ、汽車中にて御前樣の乳母なりしとか云ふ人に相ひ重る御不幸萬聞取り、そゞろ同情の感止み難くて御大切なる、寫眞一枚頂戴致し此程より筆取り初め候處よう〳〵出來上り候まゝ、出立の紀念にと御送り申上候、せめて朝夕拙き筆の御笑草とも成らば、名譽の事に存じ候、父君にも一時の迷心にて有りしとか承れば御前樣の御心次第にて如何とも相成候はんなれば折角御身御大切に孝養なさるべく、亦再會の時有らむ事を祈り上候、早々。

と、見る〳〵頰のあたり、さつと血汐は上つて狂う如く卷返し〳〵……音もせぬに人や來しと驚て浪立つ胸を片手で、片手に紙片取り上れば是は如何に、花中に立てる乙女の半身像を美しく書て有るので有つた。

噫々、一昨年の私の寫眞、私の榮の終りか、樂の終りか、霎時は息をもつかず櫻木に凭れた儘熟と瞶めて不思議な彼の人、過越し方までも想に耽るので有つた。

「噫々思ふまひよ」と我に歸へつたが何となく去りし人懷しく思ふた。

仰げば半ば羞らふ月影の葉櫻もりて靜かな流れに映て紅の色淡き波紋をゑがくので有つた。

上手とは言へないが、眞實の氣がある、東京の汁粉屋、大阪のぜん

ざい屋、大阪にしては材料が東京式である、手紙など多少不自然で、滑作り過ぎた氣味もあるけれど、先づ此邊から進んで行けば見込はある、上手で發達の見込のない人と、下手でも將來伸びさうな人があるもので、之れ或は其後者たる一人であらう（選者評）

秀逸

○春雨の夜　仙臺　文子

秋野樣皆樣お寢みなすつて、と、小さな包を下においてこう言ふのである、はあ、今までみつ代樣が待つて居なすッたけど、清ちやんが泣くもんだから、姉樣には惡いけどつて今おやすみなすつたばかりよ、そう、おや十時だわね、春子樣のお宅へ上るとお話しが面白いもんだからついをそくなるのよ、姉樣まだ雨が降てましたあゝ晴れ相なお空だけどまだ降つてましたよ、そして門の側の櫻皆散つてしまひましたね、そうですかあれはね四季櫻よ、古い樹ですね、あの姉樣、明日何時の汽車で東京へお出なの、午前の九時いくらだかあるでせう、あれで往く心算なの、用があるなら今の中に話しておきなさいね、あの姉樣、なに、あなたたつて家の方ぢやあないから御心配かけてすまないけど、姉樣より外に相談する方がないからお話致しますが、私什麼なつたらいゝでせうね、勉强して早くどうにかならなければなりませんから此家へ參つてからもう二年になりますよ、いくら親類だつていつまでもお世話になつて居られませんわ、それでもみつ代樣が親切な人だからいゝようなもの丶お子樣が三人ですからとても勉强など出來ませんのよ、そうでせうね、けれども今家へ歸つたて家も貧いのに花代もきてますからかへつて不意快だらうと思ひますよ、私もね、おきわ樣さへもう少し强固した人だといゝけどあまり無責任で居るから、秋野樣と武雄が可愛相だからどうにかして勉强させ度と思ふて實は今年まで家に居たのだけど、御叔母樣やお父樣が大層御心配して下さるので、仕方なしに嫁つたけど、人の嫁となれば自分の思ふ樣にはなれませんしね、今になつては口惜くて〱なぜ彼の時承知したらうと思ふ位よ、それでもお母樣か兄樣かお一人でも生きて居なさればこうして姉妹が心配しなくともいゝものを、是も運命だから仕方がありませんよ、ほんにね、姉樣家が恁麼に貧くなるのもみんなおきわ樣があるからよ、おきわ樣さへ無ければお母樣もまだ生きて居なすつたかも知れない、あゝ口惜しい。

秋野樣、そうおきわ樣ばかり恨むもんぢやありませ

んよ、彼の人があつたつてお父樣さへ强固していらつしやるとよかつたんだから、ねい、秋野樣今も言ふた樣なわけて今は何とも出來ないから、八九月頃まで待つていらつしやい、其迄は私も參りますから、實家へも行つて御父樣とも相談してどうにかして上ますから、身躰は大切にしてね身躰が弱いと何も出來ませんからわかつたでせう、もう十一時だから早くおやすみなさいよ、又明日の朝起きられないから、はあ、姉樣什麼してこうも不公平な世の中てせうね、と、少女心に悲しさ口惜しさあまつて、果ては世までを恨むのてある。

夕方から降り出した春雨はまだ止まないで風ても吹いたのか雨戸にあたつてばら／＼と音を立てた。

もう少し自然に筋が分るやうに書けばとも思はれるが、兎に角筆路は澁つても、言ふ事は能く其人の感情を表はして居る（選者評）

○姉さん

札幌　杉山萩枝



乾度間に合ふわ

下谷　小葉子

「お父さん、お新婦さんは何ふなすつて、もう歸つて仕まつたの」、それは優しい邪氣のない聲、聲の主名は靜ちやん。

「これお新婦さんとは、何んだ馬鹿いふもんでねえ、姉さんではねえか、何處へ行くもんでねえ、俺の家の人に成つて仕まつたゞもの」、太い皺枯た聲、靜ちやんのお父さんてある。

「然うお新婦さん家の人になつて仕舞つたの」、

「然うよ汝が兄樣の新婦樣だて、汝がには姉樣に成つただ」、

「妙な」、靜ちやんは解せぬらしい。

「何が妙だらふ、些とも妙なこと無えだ」、

「だつて妙だわ、兄さんのお新婦さんが私の姉樣、可笑しいね、兄樣のお新婦さん、幸助樣のお雪さんの姉さんなんだもの」、

「だがよ、兄樣のお新婦さんになつたら、汝がにも姉さんだ」、「ほんとーに」、「ほんとーにだとも」

「ではあたしに姉樣が出來たの、お雪樣の姉さんあたしの姉さんになつたの」、「然うだ然うだ、汝がにも姉さんの出來ただ」、「然う悦しいな」、

「靜、汁が煮へたから顏洗つて來るだ」、溫雅な母親の聲で臺所の方からこう呼れたので靜ちやんは、密々と椽を下りて顏を洗ひにと前の小川の方へ駆出した。朝、米をとぎ、夕鍬を洗ふ小流で靜ちやんは顏を洗つて仕まつて、くるり踵を回して引き返さうとすると、

「靜ちやん」、とそれは優しい聲。

見れば、茶の竪縞の布子に、赤い襷、新らしい白の手拭を被つて、片手に鍬、年の頃十九か二十、未だ二十一とはなるまい、鄙には稀な色白で、眼はパッチリと黑眼がち、唇は紅く、鼻はつんとして、少し下膨の顏は、誰の眼にも怜悧で、そして柔和な質と見受られる頭髮は結立ての島田、大方朝の仕事に、背戸の畑へ出て居たものと思はれる。

お靜は丸い眼をいとゞ丸くして此女の顏を見詰めて居た、此方はにつこりとして、

「靜ちやんお一人で顏洗つたの」、

「えー」、

「まあ、お怜悧だ事ね、宅の雪ちやんなんか」、と謂つたがふと口を噤んで、更に出直して、

「雪ちやんなんかね、未だお母さんに洗つて貰ふのよ」、

「雪ちやんが」、と謂つてお靜はまじ〱としてゐて、突如に、「あの何んだつてね、貴方もう雪ちやんの姉さんぢやないんだつてね、あの兄さんのお新婦さんになつたんだから、私しの姉さんなんですつて、然う、ほんとう、あなた、眞箇に宅の人になつたの、もう雪ちやんとこへは歸らないの」、

「え」、とばかり、新婦さんは顏を赧めて、

「然うなのよ、私もう靜ちやん許の人となつて了つたのよ」、「ぢや姉さん、つて呼んでも可くつて」、

「可うござんすとも」、「そいぢや、そいぢや」、とお靜は幾度となく謂つて、何か謂難そうに見受られたが、それでも思切つて、「姉さん」、とそれは小さな聲、

「はい」、と新婦さんは殊更に優さしく云ふ。

「姉さん」、と今度は大きく謂ふ、そしてにつこりとして居ると、

「靜ちやん、一寸、お頭を梳いてあげませう」。

お靜はうなづいて傍へ寄つた、新婦さんは鋤を手放し自分の頭から櫛を拔取つてお靜の頭髮を梳き出した。

背戸の方で鶯が勢よく啼き出して、春の日は次第に高くなつた。

何の事もない一場の對話てあるけれど、人間が皆善く、場所が善く、折が善いので、此小説も春風輕く落花か拂ふの趣がある、おもしろい（選者評）

○かへり路　長野市　金魚の子

春雨が細く〳〵降つて善光寺の七時の鐘はとうの昔ひゞいてしまつた市中は淋しいやうなにぎやかな四月三日の夜。

お母樣の御用で大門町まで一走りの御使すまして東下駄輕く急いで歸る其時、電燈の光まばゆく西洋小間物に反射してはなやかな洋物店の前、角の交番から五軒目の東側。

年の頃十九か廿、一とはならない男、身には絣の筒袖に絞の三尺胸のあたりの變な垢のつき樣は「ヨダレ」等のたれた跡らしい、餘念もなくヴアイオリン西洋人形などを見つめる眼ざし怪しく、爭はれぬは口許のゆるみ、つと立つて彼方の道に走つてゆく、傘もさゝず。



田舍萬歳　麹町　淺井千鳥子

聞けば或る町の財產家の長男とか何の因果か女の中の一人きりの男の子が生れやうもあらうにあの白痴、親御達はなめても居たい可愛さてあるのに……時々市中を練つて歩く樂隊の後ついて歩いて思はぬ處をさまよつて人知れぬ苦勞を親御達にかけるとか又五ッ六ッの小供に「バカバカ」と惡口いはれ石をなげられて五尺の男子大聲あげて泣き出す時は三ッ四ッのだだッ子同樣。

ほんとうに親御達の御心は何倍であらう心が心ならば一通は學問も出來る生意氣盛り……まあ盲や啞ならば又何とか法のつけ樣もあらうにほんとうに神樣は何のためでせう。

佛樣は私共を守つて下さるのではないのでせうか丁度其の時善光寺の八時の鐘がきこへました先程の男は今頃は寢床の中に居るでせうか、まだそこいらをぶらついて居るでせうか、私は家の門口に立つてをりました。何時か雨もはれて……。

白痴を街頭に見たゞけの事て、是も小説と云ふ程の筋てはないけれど、筆は確かに小説の書ける筆（選者評）

和歌

佐々木信綱先生選評

二等

朝の鐘八重に霧ふりよき國の　ありとし思ふをちたかに鳴る

上總君津郡駒山の里　春子女史

(評) 幽玄のひゞきあり。

四等

萬物の蘇生るべき春にして　われに一人の友は逝きけり

熊本縣下益城郡隈庄町　緒方ゑと子

(評) 春の愁いとゞ深かるべし。

五等

よべ伐りし杉の大木の切口に　霧も立つべし初秋の朝

千葉縣安房郡佐久間村　幾梅女史

秀逸

◎長野縣　春蘭子

幼子の美し寝息に生れにけむ蝶二つ三つ搖籃めぐる

◎秋田縣　三浦紅羞子

桃の村小鳥さゝなき靄こめて眠るが如き春の水行く

◎橫濱　わらび子

渡場の一もと柳かげ暮れて水に夕の雲ひやゝけき

◎名古屋　原田琴子

野のをちに幔幕うたせ姫ありてうたよむらしきおぼろ夜の月

◎備前　鞭木よし子

日は薄く草は綠りの野の末をゆめみるらしの川流れゆく

◎岡山　田上濱子

花を咲せ蝶を舞はせて春の神は詩人うたへと宣らすに似たり

◎下毛　紅露子

春草の花を衾のうたゝ寝や醒むれば野邊は月影にして

◎山田よし子

はゝ上の御かたのやせに思はずも涙ぐまれてもむ手たゆたふ

◎岩代　岸野菊子

琴のねのもれくるかたに灯影さして雨のおばしま人朧なり

◎飛驒　萬小夜子

春なれやよき黒髪の香もこめて小雨ぞかすむ京の街々

◎三重縣　帆山靜子

蝶のごと繪日傘二つならび行きぬ春の日にほふ菜の花のみち

◎靜岡　白蝶女

あるじうせてとざしがちなる離れやの軒端わびしき日まはりの花

◎名古屋　高木米子

相見ては言の葉もなく泣き伏しゝ昨日をくゆる女心か
神戸　宮内登美子

○花野より湧き立ちのぼる彩雲のやがては春をのせゆくらんか
青森縣　三浦愛子

○おばしまに灯と灯とならぶ花小路を現ごゝろに見し春のよひ
上毛　關口梅子

○四の袂かさねて別れ惜みたる
宵に似し夜のさくら吹雪や
君津郡　星野初子

○小羊の柔毛そゞろにそよぐ哉
牧の野一里草の朝風
羽後　吉田美子

○春の夜梅の香きけばをさなくて
母とわびにし里の日思ふ
福井縣　吉田千代子

○青柳にそぼ降る雨もなまめきぬ
蘭燈洩るゝ宵の細殿
武藏　花舟子

○海棠の雨になよびし朝の窓鳩に餌をやる人美くしき
信濃　中島いち江

○ゆく雲に想ひは添はて今日も暮れぬ病みて雁聞く旅籠屋の窓
熊本縣　津田秋子

題　帆　日本橋　和田文子



○春姫が夢の息吹きか若草の葉ごとに迫る朝明けの靄
筑前　春野女史

○亡き妹に似たる花賣り呼び入れて母に泣かれぬ初霜の朝
銀鈴宮

○ゆく春や御佛きざむ鑿とると
石工終日もの云はぬかな
本郷　內田信子

○をさな子を車にのせて行く人は
君かあらぬか故郷の人
備中　ふみ子

○似し聲と文伏せてきく扉のけはひ
かくして春の夜は更け行きぬ
越後　家滿富貴

○道づれになりし都の畫たくみと
月の小舟に鐘聞く夜哉
東京　康子

○ふと見えし優しの人をなにとなう來るやと待ちぬ花にかくれて
常陸　川野桂子

○御手取りて花の下道さまよふとみし夢さめぬ看護する夜半
小石川　白石照子

菜の花や日傘の下に人形を並べて干せる奈良の里かな

○ 周防　千代子

堪へがたき友がそしりもほゝ笑みてそと出し見る母のうつしゑ

○ 周防　國原みどり

天人が打ほゝゑみついとし子を育む聲かま清水の音

○ 上野　松村さだ子

草刈りの鎌とぐ清水水ゆれてすむ朝の月影のみだるゝ

○ 八戸　名久井ふみ

風かよふ寢ざめの袖の花の香にかをる枕の春の夜の夢

○ 遠江　三室常子

夢の如沖の小島はたそがれて海原遠く船歌の聲

○ 磐城　刀葉子

ながき〲夢とはなりぬ君と共に見しにかはらず花は咲けども

○ 横須賀　吉本富枝

行く人の袖にもつるゝ糸柳の心やいかに亂れもぞする

○ 日向　渡邊窓楓子

文使ひの我名高うも戸に叫びぬ梅の梢に月する宵を

○ 名古屋　加藤曉子

花鳥の色音に水やあくがるゝ流れ急がぬ春のやま川

○ 讃岐　渓の舍楓子

思はじと身に誓ひつゝ今日もまたながめこそすれ君がうつしゑ

○ 山口縣　角戸ゆき子

前栽の梅にぞ宿る鶯の初音聞くかに春は來ぬらん

○ 加賀　淺野美代子

夕日影豐はた雲にてりそひて濱松蔭に白帆ほの見ゆ

○ 千葉縣　以志波心雪子

去年の春わらび手折し小松原蝶の舞ひ住む畑となりぬ

○ 千葉縣　三橋千代子

風を生む社の森の木下道ま晝さながら簫あるがごと

○ 熊本縣　緒方ゑゝ子

花見がへりふと聲かけし人の家人も美し家も美し

○ 上毛　關口薔薇子

川並につゞく一村花のむら花の藁屋に庭鳥のなく

○ 長野縣　小池靜子

鳴く鳥の聲も淋しき墓所に手向し櫻花散りみだる

○ 東京府　大江春柳

蕨なりかへさを雨にそぼぬれて嫩葉細道女少歸り來

○ 横濱　古川ふき子

瀧高く岸にせまれる楢の木の若葉さゆらぎ飛沫とばしる

○ 熊本　吉村千代子

今日も亦梅を片手に雪分けてみ墓詣の少女見しかな

○ 京橋　今泉礒千鳥

雨の日を机に向ひ筆とれば詩興そゞろに湧きも出るかな

○ 高岡　北本歌子

あたゝかき眞晝を桃の花ちりぬ眠る胡蝶の彩羽の上に

○ 遠江　宮城蝶々子

月の影あはくうつれる若草の露に髮とく野の女神はや

○ 名古屋　宮脇とし子

花の枢今か出づらむしばしの間梢に濺ぐ雨霽れてあれ

○ 長崎　峯時子

ふりくらす春のながめにそゞろにもうせにし友のしのばるゝかな

○ 徳島縣　吉田紫花

散り殘る花一輪に耳よせて春の行衛を聞きても見しよ

○ 近江　松本きく子

ゆるやかに煙たゞよう野にこもる君よ鶏飼ふ歌はなりしか

○ 明石　古月女

寄宿舍の窓もる月に友垣と語りぬ明日は歸る日にして

○ 奈良縣　吉野涙子

三絃の音はふとたえて小障子の影さゆらぎぬ川添の家

○靜岡縣　がくみ女
老ひにける乳母訪ふたびに亡き母の上を語りて二人泣くかな
○大阪　川島愛柳
家づとにせまく思へど此櫻もしや主と折らてすぎぬる
○下總　美津波志芳子
さきにほふ桃の花にも色まさる少女が顔の美しきかな
○羽後　清子
雨の夜を獨り淋しく文よみて心は通ふ姉君のもと
○佐世保　きぬ子女
夏なれや雁啼かずしろがねの楯うすぐもる若草の原
○若松市　田中光子
春の野に摘み殘されしつぼ菫胡蝶たはぶれぬるき風吹く
○土浦　房江
雨晴れて梅が香消き春の夜に月をやどせる庭たづみかな
○長野縣　山田くに子
若き尼が讀經たえにし宵のほどを物哀れげに櫻散るなり
○安房　みどり子
中々に世に出てんより田を打ちて己が作りし米食ひてあらなん
○神戸　柳川登美子
咲き滿て風も通さぬ風情かな今宵月ある朧夜櫻
○上毛　芳山和歌子
若菜つむ少女のすがたおちこちに見ゆる廣野を春の風吹く
○小石川　吉田斐子
琴の音はたとだえてよゝと泣く姫が黑髮春風のふく
○札幌　杉山萩枝
春なれや風も香に醉ふ春なれや招ずる母のわれにいまさば
○青森縣　吉田やす子
午さがり黄色まばゆき菜の花にけをされたりな薫たんぽゝ
○神奈川　川名かつ美
鬼蜘蛛が飛ぶ蟲見張る夕暮を五位鷺三羽東に行く
○橫濱　わらび子
朝夕にかちわたる谷のせゝらぎのわれにさゝやく秘事や何
○麹町　吉敷里子
さくらあまた華やぐ中をつとよりてほゝゑみにたる其稚兒戀し
○岩代　三浦たい子
挽まれば末は海なり靜かにも倦まず流れてゆけ春の水
○京都　政子
なき母と語りしゆめの今さめてまくらに淋し春さめの音
○伊豆　白菊女
われひとり白綾つけて冠きてわたらばとおもふ虹の浮橋
○上毛　金子儔子
さかりなる菜畑つゞき日は落ちて金色ゆれて春の風ふく
○神田　三浦きよ子
天地のめぐみかしこしおしなべてながめつきせぬ春の色かな
○安房　むらさき
夕まりの音靜まりて庭の面の柳長閑に春雨の降る
○石川　愛子
薰かや春の朝をうす煙綾くたなびく紅梅の宿
○長門　孤蓮女史
ちぎりてし君は來まさず只ひとり物思ふ窓に五月雨のふる
○日本橋　よし子
おのが世の命短きさだめをばかこちがほなるあさ顔の花
○讃岐　宮井かる
あれはてしあさぢがにはに少女子が瓦のかげのすみれつむみゆ
○麹町　淺井千鳥子
美しう化粧こらして姫三人春駒に乗りて銀鞭あぐる野や
○和歌山　池田まつゑ
月に雪に花はことさら吉野川香りぞふかき名にしおへれば
○飛彈　千代子
冬枯の野をさながらのわが胸よあゝ何時の日か花ひらくらむ
○熊本　雪子
古家の井戸のほとりに立つ女かげもあはれにくむ水の音

○　群馬縣　芳山常磐子
打ちなびくしだり柳の葉末より花の梢にわたる春風

○　近江　藤野志津子
み堂古き鐘のひゞきのそとゆれて湖とみだれてちる櫻かな

○　島取　上山千重子
行きくれて花にやどかる一夜さの夢に胡蝶と語りける哉

○　岐阜縣　丹羽文子
うぐひすのなく音にそれとながむれば惜しや散りゆくそのゝ白梅

○　茨城　矢口はつ子
音信のふみゝるたびにます思みとせあひ見ぬ古里の友

○　廣島　つれ子
ふさはずや君が束ねし黒髪に香り床しき薔薇の簪は

○　鳥取縣　桑本きさ子
摘みつゝも故郷の野にも咲きけんとそゞろに忍ぶつぼすみれ花

○　下野　染宮
濱菜賣呼び聲低う過ぎ行きぬまれに人ゆく春雨の街

○　上野　河内とめ子
朝の氣に心はげめど七年をさすらう夢の安からぬ身や

○　越前　新保勝子
夕鐘はまろき山こえ菜の花に月ほのめける小野をわたりぬ

○　筑後　宮原ふみ子
春雨のそぼふる宵を山寺に香たき居れば梅薫りきぬ

○　本所　田中久子
夜の汽車窓によりたる若人を釋迦に似ると思ふさびしさ

○　茨城縣　白ばら子
幸ありて都に學ぶ朝夕をひたすら戀し母君のかほ

○　豊後　河野青柳
織りなせる柳の糸のうちゆらぎ梭の音とだゆ川添ひの家

○　備後　野菊
友垣と散歩に手を取りし昔をしのぶ春の野邊かな

○　青森縣　死蝶子
はてしなきみ空眺めて限りなく亡き母上を墓ふ夕かな

○　横濱　清水千秋子
柴の戸に訪づれ給ふ君ありと立ち出てゝ見れば水雞なくなり

○　下野　鈴木露子
麗日をゆきずり匂ふ櫻人まひるの鐘ののどかにも鳴る

○　遠江　白露
椿花筒井に落ちし音のしてまひる靜けき春雨の宿

○　岩代　逸見銀子
春雨に庭の紅梅いろとけぬおざ手にすくの顔つ洗はむ

○　京都　若葉子
春の水緋桃白桃流しけり君に贈るべき我歌のせて

○　伊勢　紫女史
おもふことなげにも蝶の見ゆる哉はかなき世とはしらでやあるらん

○　津市　川村しげ子
君が家は梅の林の水つゞきほのかすみても見えにけるかな

○　岩代　根本松江
土かひてめでにし君は世にとさず長き恨の白藤咲きぬ

○　陸奥　若生すみれ
兄上が外國話に夜は更けて庭の若菜に雨細う降る

○　千葉縣　神田みち子
鐘鳴るやつゝじが丘の朝ぼらけ靄まづゆれて美き香散ずる

○　松山　園邊燕花子
春草に小羊集ふ小鸞時野の一つ家によき子生るゝ

○　伊豫　曉子
姫桃の花さく村はたそがれてかすめる空に夕月淡き

○　備後　藤田直子
うら若き望いだきて春風にふかれて出る故郷の山

○　神戸　大谷百枝子
ゆけど〳〵眺め見あかぬ瀬戸の海淡路島かげ千鳥啼くなり

○　熊本　野の花
三歳見ぬ小川の橋に佇めば夕靄寄せて昔にかへりぬ

○ 大坂　落花女史

たてしより人は幾代と變れども教のまゝを傳ふ立石

○ 千葉縣　馬場富美子

あぢきなき戀もするかな春の夜のおぼろ月夜をひとり眺めて

○ 河内郡　たま子

縫上げしよだれかけして妹がかゞみの前にすはるやさしさ

○ 若松　若葉女史

のどけきは春のならひと思ふからそゞろに嬉し夕ぐれの空

○ 近江　梅村幸枝

長閑なるすみれ咲く野に來てみれば君とし思ふ蝶の樂しき

○ 尾張　宮田愛子

野をひろく舞ひまふ蝶の彩羽にもさはらぬ ほどに春雨の降る

○ 千葉縣　内藤とし子

薩摩琵琶平家を語る五十疊丸行燈の かげほのくらき

○ 麹町　千代子

緋桃散る朱雀大路を檳榔毛の車ねり出す春の宵かな

○ 富山縣　梶川光子

夕暮を桃の堤に歌誦して 牛引く人の笠新らしき

○ 越中　中野芳栗

長閑なる春の女神の手枕に胡蝶の夢路安けかるらん

○ 鳥取　山根綾江

白蘭にいつ上簇と指折りて種はく今日のたのしくもあるか

○ 宮崎縣　小林春子

朝ざくら香は春風にみだれつゝ病むほゝ白くびんの毛そよぐ

○ 大坂　木村白菊

をしめども限れる花の命かも風ふきすさび花ふゞきする

○ 宮崎町　垂水薫子

忘れがたき友より越せし文とけば中に菫の花ぞ薫れる



かるた　群馬縣　よれ子

○ 伊勢　三輪菜津惠

月おぼろ遠き丘べのともしびに誰が手すさびぞ横笛の聲

○ 久留米　搖花

何故とさは問ひますなゆゑもなうきゝにしみ名の戀しかりしに

○ 和歌山縣　津田久子

月もなき淋しき夜半に只一人たどりつ聞くや谷の水音

○ 千葉縣　八木芳子

戀になく身を欄干にもたせつゝはかなく沈む夕日眺る

○ 伊勢　森本たつ子

四とせ前渡りし河の渡守老ひぬとも見えす櫂を採る哉

○ 彦根　坂八重子

春の宵機織る母の歌にれて 微笑む稚兒の眉目うるはしき

○ 呉市　桑原清子

頰ゑみてまれく姿のやさしさに 今日もとひ來る阿賀の桃山

○ 赤坂　梅香

つれづれに調ぶる琴の音もしめり思ひ亂るゝ春雨の窓

○ 福井　久保村ひさ子

淺みどり霞の袖をもれいてゝ花にうつろう春の夜の月

○ 日本橋　岸本ちゑ子

野も山も霞の衣ぬぎかへてみどりすゞしき夏は來にけり

○ 相摸　野島里子

歌のまどゐそとぬけまして花苑に蝶追ひますか美くしき君

○ 加賀　藤基ひろ子

消えすとも花とやは見る降らぬ間に燭をかざして今一度見む

○ 美作　坂田千賀子

梅の戸に眞心こめて祈る子を顧みまさて君去りますや

○ 和泉　津田なみ子

聲ひくき鐘のうちより暮れそめて霞にとづる遠の山里
神戸　櫻井白菊

○

夏姫が髪の簪の百合の露こぼれて洒や岩間ま清水
下野　梅月子

○

よも山の話に暮れて白桃にさやけくてらす七日月かな
相摸　細野俊江

○

白桃の花はいつしか咲きそめて牛引く翁のいたつき愈えぬ
横濱　折部色子

○

時雨する木の葉の響怪うも我が胸をつく君を思ひて
本郷　小幡きく子

○

故鄕の春の野面を偲ぶればいとし妹の桑を摘む見ゆ
大分縣　村尾みち子

○

朝な夕見し病人の顏色もなほりてうれし今日の退院
奈良縣　野崎さよ子

○

夕栄の一しきりして磯の藻の花の香高う春の日暮れぬ
岐阜縣　中島重子

○

都なる君失せたりと聞きし夕離れ小島の波荒れにけり
伊勢　垣内かつ代

○

鉢植の白き椿や鍾洞に愧らひし襟罪もつ姫の
上總　さろ子

○

さゞ波にうつれる影を友と見てあはれや水に入る蝴蝶かな
新潟縣　佐々木きと子

○

あきらめてたがやす事を樂しめば苦しかりつる昔おもほゆ
富山縣　大野みすゑ

○

あるじなき宿とは知らぬ鶯の鳴く音聞くにも涙落つるも
奈良縣　中富よしみ

○

晴れ渡るみ空に鳶の舞ふ見えて笛の音高く汽車霞み行く
福井縣　濱野順子

○

夕日さす窓押開きながむればかへるをいそぐ磯の釣舟
下總　白桃

○

春の野のうかれ胡蝶に似たるかな少女がかざすリボン白うして

○

學び家の庭になり立つ身の幸をなどそゞろにも過し給へる
大坂　姫ゆり

○

きくまゝに身のうきこともわすれけりしらべ妙なる竹笛の音に
奈良縣　島見壓代

○

訪ふ人もなき深山路の春すぎて青葉若葉にほとゝぎす鳴く
京都　しげき

○

春雨にやゝもえ出でし此の青葉秋さり來ればはや紅葉せむ
常陸　磯みい

○

松にのみ風はのこりて古里のひとはすまずもなりにけるかな
高知縣　藤西松子

○

妹ゆきて胡蝶かへらぬ春の暮只獨りゐのわれのみつらき
高知　福留あげはの蝶

○

たよりなき身は仕事場の籠の鳥なくにいとまもあらぬ浮身よ
西多摩　森田喜代子

○

庵近き蘆の古沼に雨白く曉月夜水鷄なくなり
信濃　松汀子

○

植置きし櫻は枯れて梅やせてわれも老いたり今年の春は
南多摩　師田秋郊女

○

天の原見渡すかぎりかすむなりまちにし春も盛なるらん
和歌山縣　林露子

○

ほの〳〵と明渡りゆく曙に夢よくさます春鳥の聲
下總　三橋げん子

○

朝霧や白帆三つ四つ上り行く利根の大川春のどかなり
上野　あかつき

○

行けど〳〵かぎりなきまでおも白し若草野邊の春のけしきは
神戸　足立あさ子

○

佛堂に念珠くります人若し嵯峨の御寺の春の朧夜
佐世保　田中愛子

○

昨日今日ふりつゞきたる春雨に野邊の若草萠え出でにけり
下總　ゆき子

○

小縣郡　すみれ

夕女子の若菜つむなる春の野に紫匂ふすみれ花哉
○　神戸　松室露雨女
桑の花に細ぅ雨降る黄昏を小さき野寺に梱のつきぬ
○　下野　須藤胡蝶
もゝ櫻花さき匂ふ春はきて人の心も長閑なるらん
○　鹿兒島縣　有馬みい子
漸くに夜は更け行きて賤が屋にきくもれむげのわら打の音
○　岩代　菅野和子
紅き薄白のたすきのうちまじり宇治は茶所うた面白き
○　下野　梅澤哲子
春雨にうつろふ花や尼寺の經誦す窓のうつくしの君
○　上總　高山梅子
賤がやにたつや煙のたなびきて夕さびしく春雨のふる
○　出雲　世良富榮子
我宿は桑の花つゞく川添ひの砂あたゝかき姫桃の里
○　巢鴨　關根りつ子
はら〳〵と鉢の白梅こぼれけり少女まりつく椽の纓に
○　伊賀　山村すみれ
鶯のよき聲を聞きやまどりのよきすがた見て君と思ひぬ
○　高知　鏡の月子
花の舟の胡蝶の夢よやすかれとしばしはくだく我が思ひかな
○　尾張　菅沼秋香
露ふくみ白百合咲きぬ若き子が淡き香に醉ひて衝ちらふ椽に
○　近江　又平蝶子
渡し呼ぶ聲も涼しく聞ゆなり月も隅田の夜半の川風
○　伊賀　山村りやう
親鷄が雛ひきつれて草若き小高き丘をのぼり行くかな
○　臼杵　ふじのや
けはひ終へて主の寢屋に經よめば血を吐く聲にほとゝぎすなく
○　横濱　井上久子
世をうとみ逝にし母の偲ばれて寒き夕べをひとり泣くかな

○　備前　榎木よし子
恐ろしき刺だになくば此薔薇を君がかざしになさまくほしき
○　大阪　寺部君子
玉水の音さへたえず降りくらすながめのうちにあやめ花咲く
○　下谷　松枝秀子
朝夕に東の方のなつかしくありし昔のそゞろ戀しき
○　千葉縣　八木美惠子
朝霞ひくゝたなびく庭の面に羅ながら散る山櫻哉
○　秋田　三條みさほ
三年へし我故郷に錦着て歸る今日こそ樂しかりけれ
○　秋田　木村はな
谷間出てし聲も長閑けき鶯にさそはれにけむ梅の初花
○　下總　野々宮せい子
足弱き妹つれて姉の家叩くもうれし淡月夜かな
○　近江　三井つき代
花の香をのせて吹きくる春の風心地よきかな朝あけの窓
○　神戸　森本つれ子
花は今ちりて流るゝ梅津川香にかすみつゝ春雨ぞふる
○　米澤　樋口夏月
池の上にうかぶいさり火一つきえ二つきえつゝ夜はあけにけり
○　駿河　綠子
二筋の西と東の分れ道何れの道と迷ふ旅人
○　兵庫縣　大內八重子
歌を詠む人の心はしら雲の春夏秋とかはりゆくなり
○　仙臺　文子
山櫻咲けども知れる人もなし知る人なくも潔ぎよく散れ
○　靜岡縣　岩堀卓子
病む母のみとりに秋の夜はふけて芭蕉に寒き雨をきくかな
○　失名
木の葉每草の葉每のみどり落ちて此眞清水とわきや出けめ
○　岩代　菅野かほる

樵夫の娘が双肌ぬぎて鎌洗ふ深溪の流れいと清きかな
○　鳥取縣　太田嶋子

よき人の柩送り行く朧夜を櫻散るなり物哀しげに
○　姫路　矢島つゆ子

美はしき天つみ神の私語もこもりたるらし森の綠に
○　上毛　紅桃子

撃の音に胸なる血汐花とさき散りてこぼれぬ歌あはすごと
○　神田　樋口まさ子

のどかさや絵日傘二つ蝶二つ後になりつゝ先になりつゝ
○　岩代　岸野常子

花のせて從舟うかぶ池の面に春の日永を金魚ひれふる
○　河内　香村花子

をちにます君に見せばや咲き匂ふ淀の川邊の糸櫻花
○　鹿兒島縣　貴島登美子

はら〳〵と風なき空に花散りぬかゝる夕は亡き母思ふ
○　神戸　高橋紫峰

小雨して花泣く一日温泉の宿に春も淋しと思ひける哉
○　陸前　今泉八重子

遠くとも思ひの霞たなびきて君があたりにかゝれとぞ思ふ
○　宮城縣　水村白梅子

榮え行く友の運命をうらやみつなみだにみとせ過ごしけるかな
○　信濃　藻の香

蝶となりて戀しき母に傳へてよ反古に書きたる眞心のうた
○　下谷　やす子

春風に勇いなゝきて若武者の鎧の袖に花散りかゝる
○　弘前　華枝女史

桃あかき窓に語りぬ連歌しぬ雨一日を親しき君と
○　京都　片山千代子

村夫子が得意の唐詩吟じつゝ川添道を子等と行きぬる
○　南豐　藤の家瑠璃子

咲きみちし菜の花三里霞こめてほのかにきこゆ馬子のひなうた
○　熊本　つれ子

うす月夜花咲きみちし高殿に何をうれひの姫の御顔
○　芝　さゆり子

ほのじろき卯の花道のあこがれやけむれる雨にほとゝぎす鳴く
○　大阪　片山忠子

公達が丹塗船して川下る朧月夜を鐘細う鳴る
○　大阪　直枝

ゆるやかにみどりの夢をみちびきて小松が野べを春の水めぐる
○　紀伊　森井春圃

燈火のかげ微かなる高殿の簾ゆるがず春雨の降る
○　越後　翠浜子

我かきし歌のたにざくつゝむにはあまりはてなりしほぜのふくさ
○　柏崎　勢以子

漁舟ほのかに見えて繪の如く鴎遊べる春の海原
○　信濃　古澤八重子

たそがれや菜の畑越えて川越えて烟たつ家かげ黑き森
○　小樽　岡部照子

春風にすもゝ花さく田舎道端歌小聲に牛追うて行く
○　大阪　堅田きく子

のどかなる春野も既にたそがれて靜けき空に星二つ三つ
○　京都　白衣

册書のひつぎ送りて歸る野邊始めてみにしむうつし世の風
○　秋田縣　佐々木園子

川づたひつみつゝ下る少女子の籠の若菜に春風のふく
○　埼玉縣　遠藤秋葉

櫻散る中に錦のとばり埀れ玉女めかして歌書いて居ぬ
○　小樽　澤谷都音子

何となく秋のあはれの身にしみて涙ぐまるゝ夕暮の窓
○　東京　鹽田とし子

むらさきの小さきすみれの花つみてなき兄上の墓に手向けむ
○　神田　つれ子

たらちねのまさぬわれには何かあらむ月の桂の冠被るとも
○　大阪　西端芳枝

道の邊の後れ咲きなる桃の花あるじなけれど美くしきかな
○　長野縣　瀧澤よしや

神垣の靜けきところ松杉のしみたつひまゆ梅一木咲く
○　上總　渡邊とみ子

春の野に千草八千草つみあつめはなれの窓に一日繪をならふ
○　岡山縣　韮花

賤が家の垣根にもるゝ琴のねは誰れ松風の調べなるらん
○　下總　篠原うめ子

野べに出てうつくしき花かざせどもみだれし髪のはづかしきかな
○　上野　小暮たつ子

吹く風のいと暖くなるまゝにいつかひもとく初花櫻
○　大和　栗山英

長閑にもかすむ里輪の影淡く菜の花畑胡蝶みだるゝ
○　大和　増田たまの

春たけて櫻散りしく花の道を白馬の猛將は和歌吟みて行く
○　陸奥　堀口不二子

さくら花おぼろに匂ふ窓のもとにつく〴〵となき友をしぞ思ふ
○　いく女

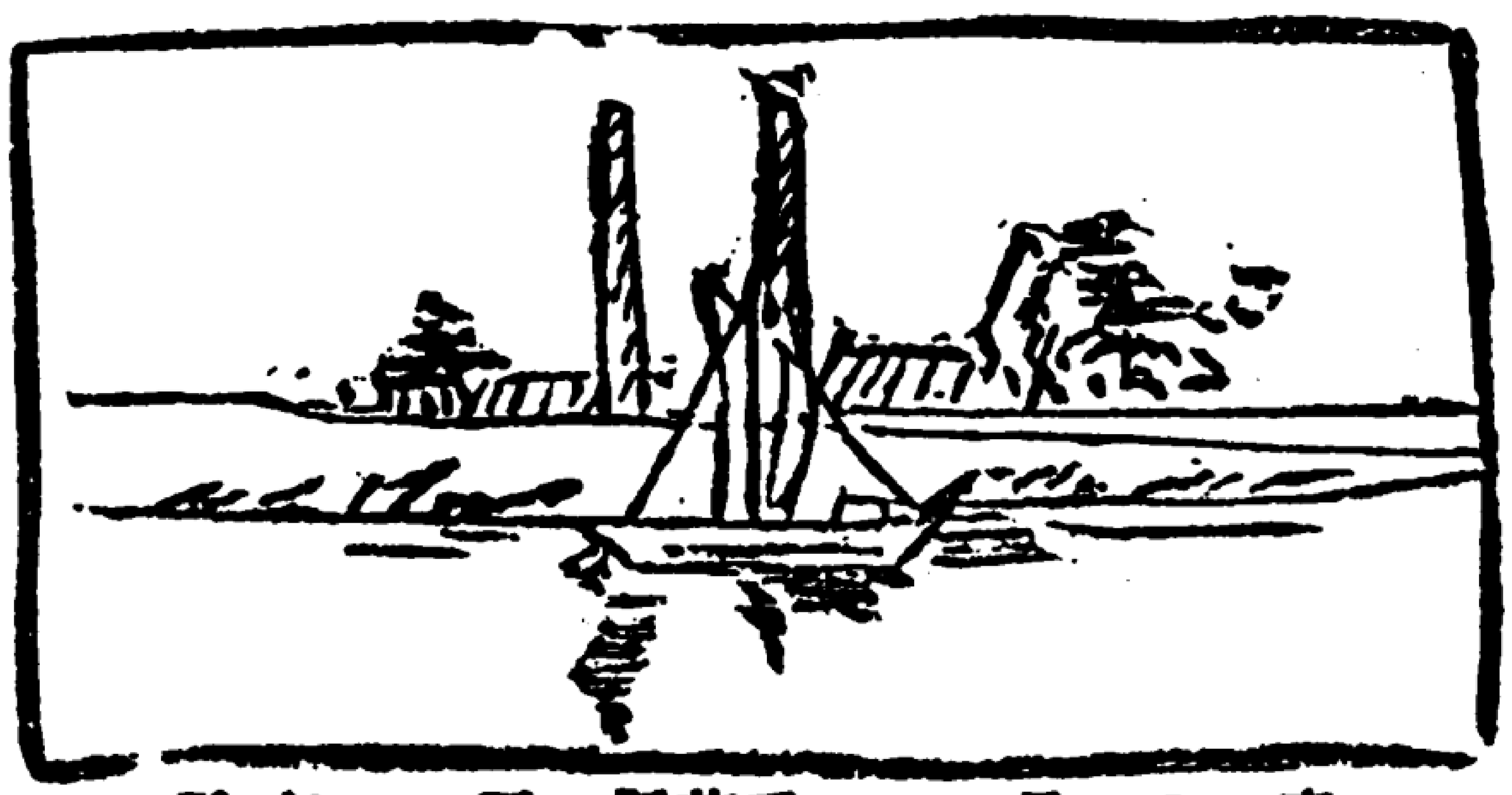
散ればこそ國の花なれ櫻花捕れ人はいかに見るらむ
○　和歌山縣　土井熊子

櫻狩はてゝかへりの輿そゞろ鐘の音ひくう鳥雲に入る
○　佐賀　德久米子

病む妹が枕にみとりなしいつゝ書ひもとけば海棠の散る
○　小石川　秋田五百子

香はしの琴にひかるゝ細き歌聞えずなりぬ春雨のして
○　信濃　ゆう子

花籠のすみれ三ッ四ッ取り添へて文かきやりぬ都の友へ
○　大阪　島田すゞ子



春の日　千葉縣　雷つれ子

雛櫻につく手休めて見かへれば二十日の月に雁なき渡る
○　京都　秋香女

其處としもわかず漂ふ花の香にしづくさびしき夜半の春雨
○　備中　林ふみ子

玉琴を彈くらん如きやされしてはるの花野を水ながれ行く
○　伊豆　尾崎白菊

里の子が遊びわすれしさむしろに紅葉こぼるゝ秋の夕暮
○　奈良縣　政子

青柳の糸くりかへし〳〵春の女神は何を織るらん
○　埼玉縣　中村勝子

畦道に眠る幼兒の夢やいかに小さき胸に胡蝶止まれり
○　成田　多田まさの子

さざれなみよするあやをばあをやぎのかげの糸して織るかとぞみる
○　神戸　豊夢女史

たちならぶ舞子の松にふく風のこゑもろともに寄するさざなみ
○　栃木縣　金田きん子

若草の中をながるゝ里川にくはあらひ居る賤の少女子
○　香川縣　山地玉子

化粧する窓をしたひて飛び通ふ蝶に賴まむ花の音信
○　小石川　明石光子

人にとはれ君はいづこと答へんにあまりかなしき我心哉
○　大連　林文子

ふる雨にいよゝ淋しさ勝り來て空をながめつうつしゑをみつ
○　大分縣　木下白菊

花浮べ流るゝ水の末見れば君すむ里を遠くあなたへ
○　越後　小幡米子

あやなくも我身にかへて春風に散る櫻こそをしまれにけれ
○　大津　小栗よしゑ子

學びやの門べに匂ふ櫻花ちりし一ひら君がみ許へ
○　長崎　山茶花

つく〴〵と思ひ過して入合の鐘を聞くにも亡妹ぞ戀しき
○　大阪　餘田春枝

なつかしき故郷の空を眺むれば夕日にはえてちぎれ雲とぶ
○　萩町　小國敏子

梅が香のすきよりもるゝやれ障子のきばに近く春はきにけん
○　大阪　湍蕗芙

香に匂ふ蝶が羽風にさゆらぎてかすみのとばりひらきそめけり
○　宮崎縣　濱砂まさよ子

道やある梅の花咲く野の奥に未だ時ならぬ鶯の鳴く
○　筑後　つゆ子

枯野おもふ我が天地もわか綠ひとつに萌えぬ春雨のして
○　飛驒　萬殘月子

蝶のせて花の香のせて君と我が思ひをのせて吹く春の風
○　山形縣　石塚よね

深山には後れて春のいたるらん去年の白雪消えんともせず
○　神奈川縣　光月女

白雲のかゝると見しはいちはやく匂ふ櫻のをちの山々
○　伊勢　本田文子

白川の水もみどりとなりにけりきしの柳のもえ出しより
○　上毛　羽鳥あや子

我は蝶わが戀ふ花にえにしあらば春のみ神よよき鑒賜へ
○　千葉縣　松が枝浪江

男の子われ御栖はものか大王の雨おほひけむまつもあらずや
○　京都府　吉田蕗芙江

君唄ふ鈴音がやうの戀の曲薔薇の唇もれてきこえぬ
○　上毛　苡水子

折々は何夢みての微笑みや蝶舞ふ野邊に眠る幼な兒
○　紀伊　糸川みち子

牡丹の人の得知らぬ香に醉ひて彩羽そろへて雌雄の蝶舞ふ
○　福島　河野よし子

佐保姫のしばし宿せしあとゝてやかをりゆかしく咲く白菫
○　遠江　野崎末女

影映す柳の糸に風ふけば彼も綾おる春の川面
○　扇城　やま川

訪い來ませ戀にもだゆる人ならば白き花あり垣れつゞきに
○　愛知縣　大河内薰子

吾妻路におはする君のなつかしき空行く月を見るにつけても
○　下野　中村つる子

花ちりてさびしき春はいやはやく鶯とびかふ世とかはれかし
○　淡路　小山田蕗芙

おもふどちうちつれだちて春の野に話もつきずつむつくしかな
○　近江　古川翠柳

鶯の初音に醒めて朝水をつかふ流れに梅花の一ひら
○　青森縣　石橋千代子

清みわたる今宵の月はかはられどたのみがたきは人のこゝろよ
○　和歌山縣　池見俊子

花瓶の水を掬びて文かけば胡蝶狂ひて我が手たゆたふ
○　香川縣　三村早子

下り行く舟よびとめて我も亦涼みに出でぬ川添ひの村
○　鹿兒島　福留たつ子

友を乘せて鏡の海を辷り行く船は次第に霞に消ゆる
○　越後　瀧澤とし子

花咲けど鳥啼けど我に母あらず春の野を一人いづこにか行かん
○　明石　清子

低う誦す君がみ歌をなつかしみ葉かげに仰ぐたそがれ時を
○　尾道　高橋薰子

亡き母のみはかべかざるわか草に何心なく水をやるかな
○　下野　猪口美枝子

春の夜のしぐるゝ空にさきだつは小田の蛙のなく音なりけり
○　印旛郡　高橋和歌子

み空かすむ小春の光受けつゝものどかに渡る白き帆の影
横須賀　柏原みな子

○

旅籠屋につかれし足をもみてやる弟ばしき灯火のかげ
下關　梅田糸子

○

逝く春を青葉若葉の木隱れにわびて泣れる黄鳥の聲
會津　國分櫻子

○

文を讀む窓の隙まに月さして小川流るゝ水音寒むき
神戸　安達絹枝

○

五月雨や池の岩根のあやめ草こき紫の波と見るまで
京都　山口愛華

○

春うらゝ雲雀舞ふなる野の道をお乳母日傘の二ッ三ッ行く
安房　たんぽゝ子

○

霜を經て匂はざりせば百草の上へはたゝじ白菊の花
埼玉　朮子

○

道すがらつみし早わらびあつらへてゆふげたのしき旅やどりかな
陸奥　柳田翠

○

鳥の巣に矢竹心の親鳥を見てよりぞ知る母の情を
和歌山縣　池見桂月

○

春駒のいさむ遠音に誘はれて我れは曩昔の戀不圖棄てぬ
下總　相川みよ

○

紫の絹紐つけし笛一ッ若葉の影に誰や忘れし
矢名

○

吹きすさむ風な恨みぞとこ春や紅葉の殘る秋あらばこそ
日本橋　中島雪子

○

つれ〳〵の宵のすさびに彈く琴の音もしづかに春雨ぞふる
本郷　近野小枝子

○

矢叫びの聲かとばかり多々良濱夕月淡し老松の聲
東京　澄子

○

きゞすなく燒野の原のはつわらびたれにまごころよせていろめく
大和　受田貴美嘉

○

今さらに何とうたはんみちとせの世々のみやびの花のさかりを
相模　今井清子

○

月あかく花朧なる大悲窟かゝる夕や人僧となりし
越後　靜江子

○

藻しほやく火は消え果てゝ荒磯の岩より岩にかもめとび交ふ
能登　砂山可觀

○

亡き妹が植ゑにし庭の梅が枝に月影うすき春の宵かな
越後　芳野枝

○

少女子の野邊にすみれやつむならんはるかに聞ゆ蝶々のうた
伊勢　松岡絹子

○

力なき灯かゝげていたづきの母にみさとし聞く春の雨
石見　人の子

○

おのづから桃の花ちる眞砂路に日かげうら〳〵春の潮よる
三重縣　小笹とく子

○

少女子が野べの芝生に尋れ來て菫つみつゝ今日もくらしつ
土浦　清子

○

櫻ちる木の下陰にテニスせしむかし偲ばるこのはかまかな
上毛　うめ子

○

都より歸りし君とわれ二人花添川に船漕ぐ日かな
三河　平野こと子

○

かぎりなく來れどもおなじ春なればあかぬ心もかはらざりけり
横濱　錦戸彩子

○

紫の春の富士なむ臈たけき舞ふおん姫に似ておはすかな
宮城　昆子

○

舞ふ蝶の彩羽うつくしき春の野にたゝずみませろよき詩よむ人
小石川　うばら子

○

百合の諸を水美くしき里川にながして君がうへ思ふかな
名古屋　菫子

○

數島の大和錦やこれならむ朝日にゝほふ山櫻花
沼津　渡邊とよを

○

五月雨の雲深くして故郷の戀しき空も見えぬ淋しさ
本郷　本橋好子

和　歌

嬉はた家ま孫まに震む夕戰死の兄をまた思ふなり
○　愛知　羽衣女史
入あひの鐘に暮れ行く桃の村夕月出てぬ花の梢に
○　京都府　穴田松江
森の灯に女神と語る春の夜を知るものはなし紫の星
○　麴町　小島よし子
武士行きてしばし人なき松原や巡禮母子急ぐ夕ぐれ
○　下野　菊地楓子
髮黑き京のなまりの新妻に新家は春の笑ぞあふるゝ
○　原驛　杉山じゆん
大宮のいろかあらそふ櫻花一夜あらしに夢となるらむ
○　三河　松子
うぐひすの聲も老いけり山里の櫻の堤人來ずなりて
○　信濃　桐原さぶ子
豊かなる御代の惠と降る雨にぬるゝも知らで早苗とるなり
○　河内　陰山禮子
いたつきの身こそつらけれ咲く花に杖ひく頃もいてがてにして
○　埼玉　美どり
見渡せばふく春風ものどかにてかすむみ空にひばり鳴くなり
○　但馬　董子
秋の野の雁の朝鳴こだまして夢の名殘を降る時雨かな
○　安房　石[illegible]白露女
のりの師も今宵の月をながめては西へ行けとは願はざるらん
○　水戸　重子
何處とも所定めずさまよひて今日もすみれさく野に暮しけり
○　神戸　船戸ゆき子
不二の嶺は淡むらさきに匂ひつゝ若葉吹く風こゝゆ生るゝ
○　大和　澁谷朔生
亡き姉の丹精こめし梅咲きて主待ち顔に鶯ぞ鳴く
○　山口縣　河本梅月
うつゝなりし去年の今宵の思はれて亡き母上の聲ぞ聞こゆる
○　靜岡縣　鈴木良子
たび衣錦かざりて歸へりなば古郷人もうれしかるらむ
○　信濃　楢本今江
春雨にゆきも自づと消え失せてのどけき春は深山も問ひぬ
○　神戸　山崎つぼみ
峰に落ちし夕日の名殘美はしく紫いろ／＼の諏訪のみづうみ
○　明石　花橋子
發し浮世はなれてとことはにおいずや月はすみ渡るらむ
○　京都　松井星水子
夢見ては物に狂ふか吾が魂のなにを夜毎の胸のそら鳴り
○　麴町　湖月
牛追ひて分けゆく野道を君にあひて耻らひつゝむすげの深笠
○　濱松　大和なでしこ
駿河なる三保田おひたつ松よりも我濱松のまつぞ戀しき
○　山田しら百合子
うきくもの雪となりつむみなればや人にもまして春のまたるゝ
○　沼津　久子
山見えて松原見えて鐘の音の一つひとつに夜は明けにけり
○　本郷　朝井綠子
母を戀ひ妹を戀ひて病める身の戸による夕不如歸聽く
○　本所　菰田野菊子
小止みなくふる春雨に手向けにし花はひらかで色やあせなむ
○　神田　富美子
たけ高き梢の花の露にこそ蝶も羽袖を濡らすとはきけ
○　佐賀　鷲島つや
入人の病人ねむりぬ電燈の光りはやせし面わてらして
○　上野　櫻井しな
摘草にかたま持ちつゝ姉妹の出て行く春ぞたのしかりける
○　神戸　花本ふく子
荒れ果てゝ住む人もなき古寺も春は來にけり鶯の聲
○　松江　白露子

み姿も御識も知らぬ君なれど誌友と思へばいとゞこひしき
下野　てつ子

○機の譜を謡ふもせはし梭の音に緋桃咲く家の十九の少女
小倉かすみ子

○足立山ひさご秋の花咲の夢やぶりても春雨ぞ降る
茨城縣　園部紫水子

○つき山の小亭の軒の風鈴や涼しうなりぬ金魚の尾振に
丹波　齋藤笑子

○朧月名殘りをしげに入りはてゝ和歌の浦波夜音高き
安房　岩崎つゆ子

○痩せぬると郷に歸りし其夕べ我家の如乳母の語りぬ
常陸　大和田清子

○卯の花の門より出て緋桃咲く村へと急ぐ繪日傘二つ
常陸　遠藤とよ子

○雲雀鳴き夕日筑波の峯に落ちて牛呼ぶ笛野を流れけり
徳島縣　野毅子

○野の里は花よ春よとにぎはへど深山はかどの聲さへもきえぬ
京都　田島かほる

○夢のごと蛇の目傘只一つ都大路の雨けぶる朝
大阪　富江

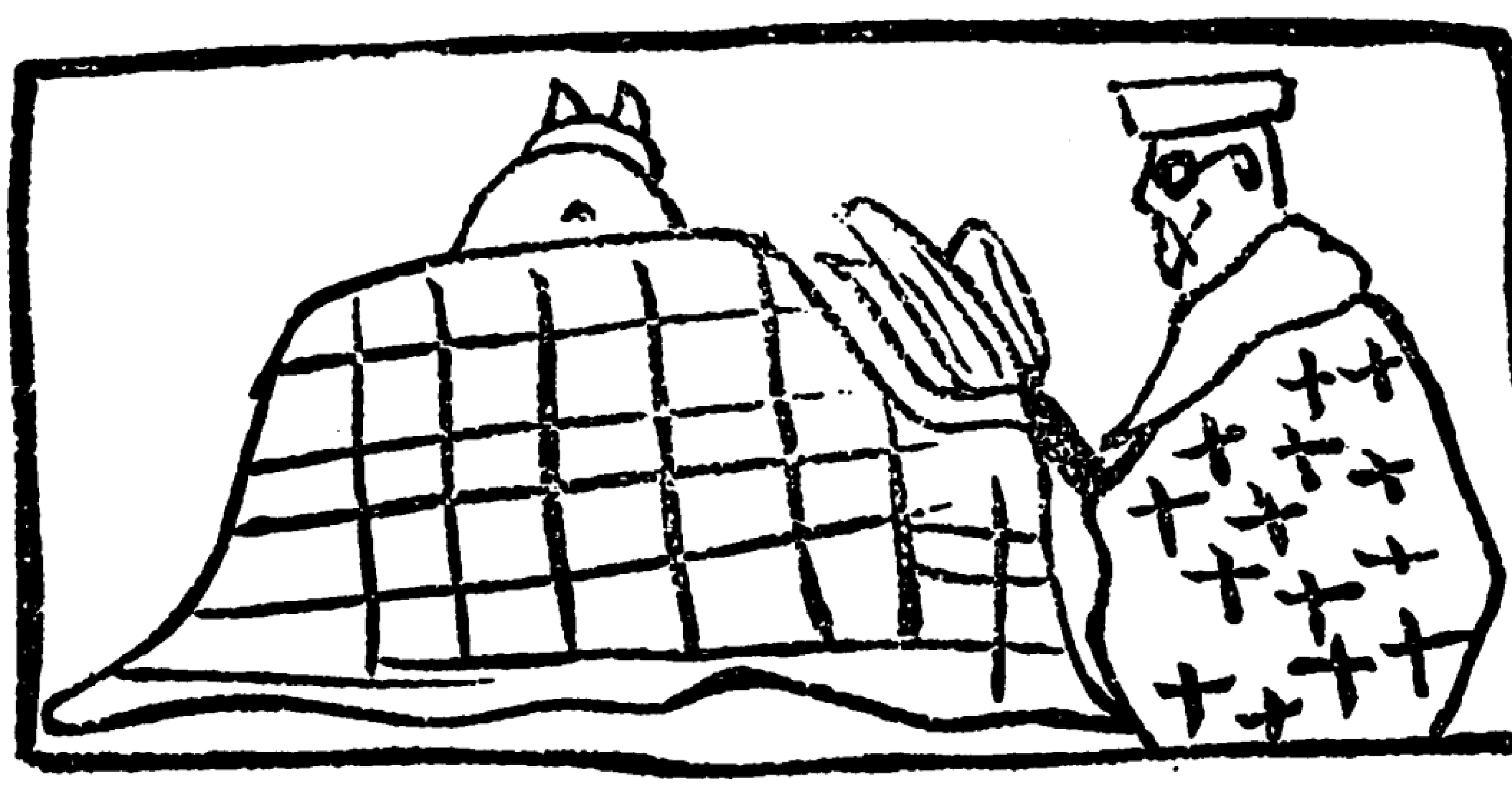
○幾年の昔はなちし燕の庭に來りて春を歸る
野崎麻須子

○亂れ布く霞うちけしして夕方の朝日かゞやく北支那の原
長野縣　下里かつ子

○大原女が市よりかへる夕野路白き頬吹く花嵐かな
石見　多賀子

○朽室にすきもる風をいとはずて君と語りし彼の日偲ばる
宮城縣　工藤榮花

○白蓮の咲く音ゆかしなき母ののらしゝ言傳聞くおもひして
茨城縣　霧の山



老人　福島縣　五明なみ子

○母の爲め去年植え置きし菊の花墓に手向けんためならさりしを
岩手縣　紅百合子

○かやすゝき亂れ〳〵て伏す中にたゞ一本の白菊の花
天鹽　相原露笑子

○笹舟のゆろう流るゝ岸の邊にわか草つみし昔こひしき
山梨縣　梶谷はる

○いやはげみおなじ學びの友よりもとく名を擧げよ雲のうへまで
金澤　山上錦子

○牛曳きて唄面白く歸るさのおぼろの月に人影長き
福井　上田とみを

○霞消えて春來としるく見えにけり匂ひゆたけき梅のはつ花
下野　綠葉女史

○むつまじき茶のみ話の夜は更けてしづけき窓に蛙なくかな
香川縣　曾根白露

○フエレンの湖水の汀一簇の葦の小陰に鴨の聲する
茨城縣　小堀みち

○美しう霞たなびく春の野に月は出でたり梅散る夕
福岡縣　松島靜子

○夕ざれば尾花浪うつ深草のうづらなく里の秋の夕暮
筑前　桑の花

○遠賀川三つ二つ行くひらた船船影遠く追分の聲
福島縣　橋爪はる

○思ひ惱み夕暮窓に立ち寄れば一羽の烏塒に歸る
日本橋　原田重子

○青葉茂る藪の尼寺寂として椽に小れこの只ましろなる
高槻町　赤松ふみ子

○櫻花咲きものこらぬ山里に春の景色の奥を見る哉

文藝遊戲

午後六時（課題）

記者曰、今度の「午後六時」にも澤山々々原稿が集りました、ありがたう、それて皆、題は午後六時てすけれど、記者は一つ〳〵其文章に更に題をつけました、即ち一文毎に題は變つて居りますけれど、通じて「午後六時」といふ題の下に、皆さんがお書きになつた文章てある事を忘れてはいけません、なほ本號に載せ得なかつた分は增刊に發表します。

一等　○燈臺

渡島國　福山町　飯田季春子

今五時十分であります、白神燈臺の霧笛が病人の唸る如に、物淋しく鳴りました、間もなく辨天岬燈臺の霧砲が天地に轟き渡りました。驚愕して外面を見れば薄暗い風呂場のやうに煙霧がかゝつてゐます。マア晝夜の分たぬ此霧中を幾百の生命を乘せて、航行する船が今の警の響を聞いたなら、如何に心強く感ずるであらう。

評　波（賞品圖書切符五十錢）

二等　○波

小石川西丸町十九山崎芳郎方　山崎房子

私は日曜毎に横濱の一外人の許へ、獨乙語研究に行くのですが、歸途午後六時頃汽車で品川の海濱を通りますす、其時窓内から渺々たる海を望み大波小波が奇麗な砂の上へ寄せては返し、よせてはかへしするのを見る毎に、何時も波の爲めに一種の暗示を與へられるので在る、あゝ獨乙語の文法は六ケ敷いけれど、此の波の樣に何時も變らず修めて居れば決して出來ない事は無いと、いつも波に感謝して居るのです感謝して居ると同時に午後六時と謂ふ時は忘られ無いのです。

教　訓（賞品圖書切符四十錢）

三等　○鳥は塒へ

上毛の里　黒ゆり

今うつたのが五時まだ少しはと針の手をはこばせてゐるとうら庭で鷄がしきりになくので一寸氣がつけばアアもういつも小屋へ入れる時分と大いそぎに縫物を片付ゑん先にあつた下駄をはいてコウコウコウとよびながら青竹になわのまきつけてあるはしごを鳥小屋へかけるとをん鳥が先に立てココココとなきながら上るとあとから二羽のめん鳥も同じように小屋へはいつたはしごを引てうら木戸をしめようとおもひ向を見るとマア美くしい今しも夕日が妙義山と荒船山の間に沈もうとするところで南北の山々は金色の光に照されてゐる向ふに見へる川岸のならぶ林の一番高い木のうへに金の扇のやうな雲がはす

にかゝつてゐる。

寫 生(賞品圖書切符三十錢)

四等

○縫ひもの

大阪府豐能郡池田町 寺部 君子

或日お座敷で私の晴着を縫ふて居りました午後五時半頃下女がお湯がわきましたと知らせに來るハイと返事のみ横見もせずもう少で仕上るとおもひ仕事を椽へ持ち出し一心に仕て居りますと妹が姉さんさう精出して何處へ着て行きなさるのと云れて見ると何處へも着て行く所は無いのですけど何だか早く仕上たいのですもの折の惡い其處へ遠來のお客樣あはてゝ片付其れお茶お菓子、お客樣に上げる御飯の仕度あゝいそがしかつた事

凩 猜(賞品圖書切符二十錢)

五等

○看護婦

京都 白 衣

くれかゝつた空をぼんやりとながめて居た私ふと氣がつけば六時十五分前いそぎ患者を見まわし檢溫をかけそして浣腸の用意にかゝつた。今頃古鄕に居たなら何をして居るであらう、あゝ六時、爐のまどゐ、兄さんの從軍談、お婆さんの昔話に時を忘れるのであらう、あゝ早く歸りたい看護婦なんかいやだ〳〵、うつとりとして居るとひゞく時計の音に驚かされ檢溫をとりに行つた、窓を通して夕ぐれの淋しい空の一方を物思はしげに眺めて居る若い病びと其目には一ぱいの淚がうかんで居つた、お其時妾の胸には無限の情のみなぎりあふれて戀しき故鄕の事も忘れ果てた。

猜 切(賞品圖書切符十錢)

秀逸

○二ツ井戸

大阪 辻 梶子

午後六時、私は此時刻には一日の務を終て歸途に付きつゝある、二ツ井戸町邊で電氣がつく魚屋の前は黒山だから サアカイナハレ〳〵ヤスイコッチャ〳〵奥さん達はお夕飯の仕度か、への字になつて行く、私は其中をおし分て歸りを急ぐのである。

○奉公の身

筑前 青葉 女史

妾御恥敷ございますが奉公の身なので午後六時頃は恰も夕御飯を御喰るので一日中一番忙しうございます家法として主人も雇人も同席で御喰のですから十七八人の給仕をするのです、それ御汁だ漬物だと少し油斷すれば向うで汁碗を、がち〳〵と鳴す、ヘッと思つて行く間に是方では鍋の底がん〳〵搔廻す、それは〳〵忙しいたら目の廻る樣で散步や音樂のと云ふ氣樂な事てはございません。

○詩

長濱 仙子

午後六時‖
事務室の時計は鳴りぬ。
ペン先ないと忙しげに
簿記帳に振ふ人々
吸取紙ひしと引き寄せ
仰ぎ見てさも懷かしげ
微笑みて相顧みぬ。

午後六時‖
一日の務は果てぬ
さらばよと金庫を閉し
くつろぎてネクタイしめつ
いざ今日は斯くて終りぬ
明日はまた早く來ませと
靴の音輕く別るゝ。

午後六時‖

一日の務を今し
幸福に果たし友は
恩寵の獲取を神に
いと厚く心に謝して
新粧が愛の住家に
街道の標路蹤りて
飛ぶがごと― 吾促しぬ。

○夕川　しら藻

長さは知られど、幅は一間計、河原になつて水は細く、流は早い、恰も其流て鍬を洗つて居るのは頬冠りをした、丈の高い男て、右手の繩にザブリ水を浸すと、ゴシ〳〵とこする。其處に橋が在つて荷車を曳て來たのが。「どうだい、最早終かな。」と聲をかける。「あゝ終だ。」と答を後にきいて。荷車はがら〳〵と渡つて行く。

○十八人前　弘前市　秋月生

いつもの私の日課だから六時がなると臺所に出る、そして肴(ニシン)をやく、油はもへて室内モーローとしてくらくなる、まもなく肴はやける、皿にぬいて十八人前こしらへる、座敷に膳をすゑて家内中女中下男など一所にたべる、終ると下女と二人て後を片づける、これは私一人の午後六時てある。

○家庭講學會　東濃　野村柔子

毎月第一日曜日の夕には一家團欒して朗讀唱歌遊戲談話等をなす例なり朗讀遊戲は何時も小供の受持にて唱歌は一同談話は主より順次下女下男に及ぶ或時は主人の談話に下男下女の滔々として評する事もあるべく稱して講學會とす會員にして會日をまたぬものぞなき。

○あかさん　大阪　林しん子

妾の姉樣が御嫁入なすつたのが去年の四月の四日て丁度午後の六時頃てした平生からやつす事の嫌ひな姉樣が、此時に限つてそれは〳〵えらい事やつして居らつしやつたので妾もう可笑くつてなりませんだわ、そして旅らつしやつてから間なしに赤子が出來たので何時ても兄さんと姉さんとが赤子を連れてどちらかゑ遊びに居らつしやるの、妾も早ふ姉さんの樣に赤子が産みたいと思ひますわ。

○待合室　加賀　中山つゆ子

狼狽顏に足を急がす者或は待疲れたるが樣に欠伸を漏らす人などに一々目を移しながら自分等二人も待合室の椅子に腰を下して居た、やがて上り列車の報告を鈴鐺に依りて傳へられプラットホームへと急いだ。「それぢや前田さん隨分御大切に御機嫌克う、あちらへ御着になつたらどうぞ御便りを‥‥」「え、今度はいつ御目に掛れるでせうね、あなたも隨分‥‥」。自分は思はず熱き涙をほろりと落した。

○地震　臺灣　むら子

今しも夕はんを終へ昨晩ついた女子文壇を見て居りましたとたん窓のがらす戸がた〳〵との音に驚きソラ地震と本を持つたまゝはだして外に飛び出しました後家にはいりふと時計を見れば恰ど六時五分の所で止つて居りました。

○新月　岩代　根本笑子

お風呂に這入た兄さん、熱いから水をと被仰る、手桶片手に井戸端へ行く、强く新らしいお月樣が、眞黒な杜の彼方にあらはれた。餘りに美い景色に心奪はれて暫し眺めて居ると、兄さんの怒鳴る聲が聞こえる、「そうそう、水汲みに來たのであつた」。お小言頂くのが辛いから、手桶をそつと風呂際へ置き放しにして、母屋へ驅け込だ。母さん笑て被入る。

○河上の梅　仙臺　高屋ちよき

今夜の御汁の實にしようと裏の小川て菜の下洗ひをして居りましたら川上から、梅の花びらが五ひら六ひら流れてきたのてかくれ梅てもあろうかと、土手づたひに行きましたらまあ、作爺やが今をさかりの梅の根本に腰かけて、反身になつて草刈鎌を砥石にあてゝ、力を入れて、鼻うたに餘念もない、夕日にかゞやく花びらは、爺やが鬢のびんをかすめて、五ひら、三ひら、奇麗な小川の流れへ散つて行きます。

○庵室　駿河　あま子

蕨と旬の菜〆をお佛器に盛つて進ぜに行くと、師の尼僧はお燈明をあげて今夕べの勤行をはじめる處、急いで庫裡に戻つて、干し物の白衣をとり入れて、さて輪袈裟をかけて珠數を手にすると、庄爺がつき出す時の鐘六つ。

○商賣　府下　清水もとじ

三度々々賑はしい乾物アチ物のあきなひ、店にはお客樣が一ぱい、兄樣や、小僧の手はまはりきられば、私迄がしつけぬ、いらつしやい、何を上げますか、ありがたう御座います、など何日も、云ひつけぬ故ないしよて時にはあとて今の御客樣にありがたふを云つたかしらなど自分ながら思ふ時がありますの。

○花菖蒲　　相模　袖が浦人

湯上りの、のぼせた顔を風にふかれようと、あけた窓の、外には花菖蒲が澤山植えてある。白い花、紫の花今をさかりと、あでやかに美しく咲いた、其花の背色には、夕榮が、空をまつ赤に染めて居る、オヽ美しいと見とれて居ると、安樂院の鐘が午後六時を、つげはじめた。

○御馳走　　本郷　千とせ

博覧會見物の爲め五十里の山里よりはるばる御上京遊ばした伯母樣と御案内役の母樣を「行つてお出で遊ばせ」と送り出して、扨昨日は折角心込めての西洋料理も油臭いとの一言にナイフとホーク持ちてすごすご引下りたる不面目さ、ヘテ今日は何ぞ御意に召す物をと思ふ時「八百屋で御座い」折よしとて數種の野菜求めて直ちに西洋前掛甲斐々々しく身仕度仕て婢(下女)を助手に、先御飯炊きから筍、慈姑、蓮根お定まりの玉子焼やらおぼろやら、味も吉野の景色に形取りて飾り立てたる散し鮨、今日こそお褒のお言葉賜はらばやと待つ間程なくお歸り遊ばしたのでいとも誇り顔に進め參らすれば、伯母樣は更なり母樣迄「手際よし」と褒め給ふ時しも正に六時を報じぬ。

○解剖の話　　河内　しら由樹女

私の方の午後六時はお夕飯で御ざいます、父樣は例の樣に料理のよしあしを云ひながら俳句三句位、母樣は批評家、兄樣は學校での實習の話、弟は得意の地理話し、私は皆の聞き役で忙しくつて、とても作意なども出來ず其上、兄樣の解剖の話しと來ては、いかにも今死人が目に見るやうで時々私は御飯も途中でやめて仕舞ます。

○詩　　土佐　潔子

午後六時——かた馬車は
最終ぞと鞭上げぬ。
老さらぼいし痩馬は
憊れたる足に
唯二人客をのせて
これも亦老いぬる
ぎよ者と片目なる
馬丁とをのせて
とぼとぼと驅け出ぬ。

車窓の隅にひそみしか
夜の色むらむらと
森の内みたして
車外までも溢れつ
青螢の灯ぞはためく。

若うしてうらぶれし
をみな子のわれ故郷の
まづしき家を忍びては
雛さへ母鷄のふところの
にこ毛したひてよるものを
など囘想のなからめや——。

ぼうぼうと吹く笛の
おかしき音に、ふと
よみがへりたる。
青螢の灯ぞはためく
午後六時過ぎぬる

○病後　　大連　高橋美代子

けふはいつもより氣分はよしもうお兄樣もお役所からお歸りになる頃だと今しも座敷て夕飯の仕度最中いつの程か戸が開いたアラ美代さん起きたの又障りはしないかへあのおたまさんから御寫眞が來たよほんにそうと開いて見れば此節流行のひさし髪に白の肩掛海老茶袴見れば見るほどなつかしいので暫し夢中であつた。

○迷ひ犬　　丹波　難波あいの

昨日の大風に吹き散らされた庭を、今し方迄お掃除に餘念の無かつた祖父樣は、妹らと共に迷子の犬に、御飯をやつて居られる。立ち上つて門へ出ると、「小さい赤犬が、よく眠つて居る譯をしいて遣りませうか。」と云つた妹の、先の言葉を思い出して、ソツと耳を近づけると小さいいびきのすやすやと、暖かそう。安心して家にはいつた。

○死　　新潟縣　山内操

二三十分前までは細い細いきえる樣な息をして居つた妹は午後六時の頃は屏風にかこまれて小さいむくろとなり前には燈の影細う線香の煙風もないのにゆるうくゆるくゆらぎました私の目は曇りました胸はふさがつて物も云ふ事ができませんでした。

○留守番　　芝　壽女

今日は親るゐに祝事があるので皆んな出掛けて私一人留守番夕飯も淋くすませてあと片づけも少しばかり朝のお米もといだし水かめにも一ぱい汲み此で臺處はおしまい、郵便大坂の千代さんから女學校バザーの繪はがき光景中の後姿の女學生が千代さんのによく似てゐる樣などゝち

つと見てゐると、ぱつと電燈がついた。

○あげ汐　　讃岐　宮井かる

妾が住む綠に埋もれし村の片角、小川は声長く暢びて川もせまくなり又或日、岸上に立ちて長閑なる風に吹かれつゝ手むに日は今や山の端にかゝりて山々は紫色を現せり思ふともなく俯下すれば川の水はさかさまに上へ流るゝに驚けば潮の滿ち來りしなり潮は次第次第に橋の上を漫さんばかりに滿ち來れり日は已に紅の球を山より轉ばしたりしが如くに落ちかけぬ。

○私の家　　能代港　伊藤直子

我宿は松原つゞき海近く富士の高嶺ならぬ男庭の山々のきばにぞ見る私の宅は旭も夕日も花やかに差住てす、中の間にはお父樣が醫所の下男等を相手にお母樣のお酌で明日の耕作のお話、四疊半では大兄樣と次の兄樣とが將棋の合戰、中學にお通の從兄の幾兄樣と俊兄樣と小兄樣とは六疊の中央に各のお机を持出してお復習におかゝりなさいます夫から弟の堅ちやん孝ちやん正ちやん妹の憬ちやん從妹の花ちやん光ちやん取つて五才の甥の慕坊迄十一が頭に七人の子供等は「僕もだよ」「妾もよ」などと奥の八疊に集りまして來年は米のお祝におお成遊ばすお祖母樣から大江山のお話や舌切雀のお話を伺ますの、そして私は叔母樣や幾姉樣と御一所に滿やのお手傳してお膳やお皿を片付ます。

○鐘聲　　淺草　大沼きさえ

とん〳〵しあらりん、とんしやあらりんと、一日、やかましかつたのみの音、鉋の音もやんで、所々の斷れ雲は赤くこげて、こんもりとした森のしげみに、悲しそうな響を起した鐘の音は、かすかにうする筑波山を送る樣に、川の面を波つて消えた。

ゆら〳〵と流るゝ雲にたそがるゝ
小村美し男筑波のもと

○嫁入　　香川　ふみ子

昨日でした姉さんが三里餘ある下野へお嫁に行くんだつて朝からさわいて私が學校から歸ると内はひつくりかへる位大さわぎお母さんは眞赤な顏して走りまわつて居つたが、あゝ忘れはしません午後六時がなるとなつかしい家をあとにして行つてしまひました。

インキ　　和歌山縣　操子

今度の文藝遊戲には午後六時と云ふ題が出たので何でも一つ作て見ようと思つて小暗き障子の側に座を占めて沈思熟慮したが一向に佳作が出ない、だん〳〵くれ行くばかり――又其翌日も、五時半頃から考へて見たが更に出さうもないから何か一つ寫生文を作らうと思つて南の障子を開けた拍子に机の上にあつたインキは覆つてポコンポコン……。

○去年の秋　　廣島縣　今西初野

嗚呼今もなほ忘れがたきは去年の秋の十月十六日の午後六時頃、嬉賢子樣とお別れ申した時の事である。あの岡の上で、きつと立派な人になつてお歸りなさいとお別れ申した其嬉賢子樣、あゝ其時が一生のお別れ。嬉賢子さんもう一度お顏を……あゝ十六日の午後六時が二度來るともお會ひ申してかたる事が出來ぬのか。あゝ忘れがたきは十六日の午後六時、あゝ午後六時。

○湯歸り　　神戸　千代子

やう〳〵御用も濟て是からは私の體夕方の忙そうな街、横町から花さんのお姉樣が、お湯屋のお歸りと見えて手拭を片手に、こちらを向いて一寸えしやくして、お内へおはいりなすつた、アヽ私も内へはいつて勉強しませう、暫くすると滊笛一聲、新橋行であろう、六時何十分と云ふ列車が出た。

○テニス　　臺北　春雨子

父上は夕食後、お庭の手入をして居られます、母上は男子をだきながら、お庭をあるいて居られます姉上は夕食の後かたづけ妾は洗濯物を取り入れて居る處、運動ずきの弟妹たちはテニスの最中、妾もお仲間入をしやうと思つて居る處です。

○イルミテーション　　神田　森千代

去る日博覽會見物に行つた。第二會場には入つたのは、丁度閉會前三十分、所々見あきて不忍池畔の廣告椅子に腰をおろし、諸方を見渡した。春の日も、漸く西にかたむきかけ、紫の雲が、上野の森の方に向つて流れる。向ふの方で、鴨に何かあたえてゐるのは、愛らしい下髮の乙女右手の東屋の、一群の女學生は女子文壇の誌友方かしらなどと思つてゐると、池中に銀色の星が一ツ二ツ「ヘテ」と思つてると觀月橋の人達がわい〳〵さわぎだした、私の側に居た海軍服の子が、やあ、ついた〳〵と云ひ乍ら、あなたへ馳せて行つた。

文學士沼波瓊音先生選評

二等　○わが境遇

長門萩十日市　孤菫女史

突然鳴つた工場の汽笛に驚いて、耕してゐた鍬を杖に腰を延ばし、仰げば日ははや西山に落ちて、千條の金絲長く〱空を彩つてゐた、折から向ふの道を走る俥の音にふと目を移すと車上の人は若き令嬢、地合は分らねど派手な矢絣のお召に、塵避けとやら、玉子色の薄きショールをかけられたるが、通りすがりに一寸我をしりめにかけて其儘彼方へ、眞白のリボンはひら〱と洗ひ髪の上を花に狂ふ胡蝶のやう、さても美し何處の令嬢であらうか、幸福な方だと、心の中でかう思つて、ふと赤い襷に白手拭をかぶり、尻端折つて草履はいた我姿を顧みて、思はず吐息を洩した。

「ユキもう歸らう、ア、いゝ日の入だ、あすも上天氣だな」

突然呼ばれた兄樣の聲に我に歸つて、「エヽ歸りませう」

側の小川に鍬を濺ぎ、いつものやうに兄樣が二つの鍬を肩に、われは二つのお辨當をさげて話しながら歸路についた、兄樣が肩の鍬から雫がぽたり〱。

「母樣只今」「オヽお歸りか」

七輪の下あふいでゐられた母樣は、團扇をすてゝ出迎へられた、兄樣と二人は其まゝ背戶の井戸端に足をすゝいで上ると、もう母樣はそこに御膳を運ばれる、共に手傳つて燈火かかげ、さて母子三人向ひ合はせて樂しい晩餐の箸をとつた、兄樣は四五杯の濁酒に陶然として醉心地の愉快げに、今秋の豐作を說かれ、母樣は絕えずうなづきながらニコ〱としてをられる、あゝ何といふ樂しい平和な境遇だらう、我家庭にはいつもこう春光滿々てゐるのである、身につけた衣は木綿の田舍縞でも、厚い情の母樣の手に織られたもの、口に西洋料理とやらの味は知らねど、背戶の畑に出來た野菜に暖い母樣の手料理、云ひ知らぬ味があるのである。さつきの令嬢は、こんな愉快や樂しさを味つてゐられるであらうか？

思うて茲に至ると、我心は淸々と愉快の内に食を終へ、後片付て來て見ると、兄樣はいつ

の間にやら、腕を枕をすや／＼と、「マアお風を召すのに」

そつと押込から夜具と枕を出して其儘其處へかりねの心易さ、我は側で母樣に讀み聞かすべく、其日の新聞を取つた、空には高く五位鷺の聲？

（評）平和なる家庭と穩厚なる作者の人柄と、よく現はれたり、矢絣のお召と田舍縞の手織木綿との對照亦面白し。

四等

○尼寺

福井縣坂井東十郷村大字油田多田方　八重子

そは誠に春愁たへ難き夕にてありき。

嵯峨の野に、病を靜に養へる、友を訪ひての歸るさ、和かき風に面吹かせつゝ、おもむろに歩を運べば、日は西山にしづみて、夢の如き暗は、次第に東山の麓より、野にかけて、蔽ひ來り、村々よりは炊煙縷々して霞の內に立ち昇る、安らけき景色に吾はいつしか小さなる村に入りぬ、泣く子脊負ひて、町より歸る母待顏なる子守二三人さてはつくしつむ里の子等が前もすぎて、左に曲れば右手の方、まばらに結びたる垣のうち、散りかゝりたる櫻の二株三株、殘の春惜み顏なるに、吾は立ち寄りぬ、そは誠に庵にてありき。

形ばかりの庭には、細き流れの低く幽かに、さながら私語の如く、寂寞の境に幽音を傳へ、內には夕の勤行らしく心にしみ渡らんばかりの、經讀む聲洩れ來る、あまりの尊さに、そと庵の戶推せば、齡かたぶきたる尼一人み佛の前に念珠つまぐりつゝありぬ。

噫々落花の風は無常なる理を示して袖に寒く、遠寺の鐘は寂滅の道を傳へて胸に深からんを、さてもこの淋しき庵に尼一人如何なる故のありてか、雨の日や風の日や、いくその懷にいくその恨みに、ありし人の面影を思ひ浮ぶにやあらん。

哀傷の情は死別より強きはあらず、追懷の念は逝きにし人を忍ぶより切なるはあらず、悼しいかな離苦の迷、悲むべきかな惆悵の嘆き、聲は以て故人を呼ぶに由なく、涙は以て逝く人を止むるに力なし、僅にみ佛のみ名に賴り聖僧の袖にすがりて、唯束の間の慰藉をば得んとするにあらん。

されどはかなきは人の心の常なるを、動きやすきは人の懷の常なるを、賢愚迷悟の別なく、快く平然として骨肉に別るゝの悲しみに堪へ得るものぞ、そこに憂あり油然たること雲の如し、そこに淚あり潸然たること雨の如し、胸に雲ありて光を認めんによしなく、荒涼たる曠原をたどる如くに、無量永劫解脫し難き心の亂を、僅に、雪山が聖の敎によりて暫しこゝに埋め、闇路の旅導き玉へと法を修し、經を誦して佛緣を全から

しめんとやする、噫々

かく思ひつゝ再び戸に近かんとせしに、尼は讀經終りて、佛前にそなへし、古き花もちきたり、我を見て、少しく驚きたる樣なりしが。

「尼君如何に淋しき夕ならずや」

「オヽ若き人、誠に心しづかなる夕にておはす、いざ給へ白湯一椀まゐらせん」

左の角に、小さなる爐ありて柴たく光は互の顏のみを照して、いとさみし。

尼は寺に生れし者にて、父は早く失せて母一人手の我儘に育ち、龍華の三會に値ふと云へども、心は徒に煩惱の奴となり、空しき浮世の色香に迷ひて、互に知りあひし人を夫とせしが、此の若僧身には法衣を着し、手には殊勝氣に、念珠つまぐれども、日夜楊柳の巷にさまよひ、淨財は更なり、足らぬがちの家具に手を付くるに至れり、此の有樣に、かくてはならじと、いさめしも、仲々に夫は行を改めんとせず、離縁の沙汰に及びしが、如何なる業因にや、惡しき夫と知りつゝも仲々に思ひすて難く、愛子の一人をも後にして、夜ひそかに家をのがれ夫とともに流浪せり。

流れ〳〵て大坂に入りしも、動かて口はすごし難く、いつか夫は惡者のむれに入り、尼は豪盗が妻になりぬ



そばや

備後 村山子

かゝる程に、夫は入獄の身となり、遂には死刑に處せられぬ。

これを聞きし尼は夢よりさめたる心地にて、後悔の念、禁じ難く、國元へと乞食しながら歸りしに、思ひきや慕しの母親は、なつかしの我が子は、既に〳〵此の世の人にはあらざりけり、あまりの悲しさに、恨しさに、髪剃りこぼちて、今の身となりはてしも、當時は後生の事など露ばかりも心にかゝらず、唯後悔の念と子を懐ふ情とに、心も亂れ亂れて氣も狂はんばかりなりしも、御佛は煩惱熾盛の私をも捨て給ふべきにあらずと聞きしよりは、心も靜まり此の地に止まりて朝夕佛祖につかへて、ありし昔の夢も仲々に有難く感ずるに至りしと。

嗚呼うれしき尼が行末かな、されどおそろしきこし方よと、ひそかになみだをぬぐひぬ。

あはれなる物語ならずや。

日はまたくくれぬ、月は出でず、春の夜はいとしめやかに、吾はえ堪へて急ぎ歸り、夜具引きかむりしが、其夜苦しき夢にうなされぬ。

（評）變化多き尼が身、小說にてもありさうなる筋なり、惜むらくは文の上滑りして、人生の奥底に觸れざることを。

秀逸

○秋袷

静岡　白蝶女

油紙をとりのけて、角の磨り切れた行李を開くと、夜着疊みになつて這入つて居る双子の袷、見るより嬉しくて綿ネルに浴衣を重ねて被いて居た寒さが急に身に染みてきたので、直さま着更へやうと取上ると、中からばつたり手紙が落ちた。

追々寒さに相向ひ候處御障りもなく嬉しく存候私事もとる年ながらいつもの持病も起らず健やかに暮し居候間御安心被下度候扨御地は山國にて寒さ早き事故是非先月中に冬の物差上度と存候得共昨今の穀高にて日々の餘裕とても無之心許は苛ち候得共逐々後れ申候定めて單衣にては寒かりし事と察上候何卒仕事もさる事ながらよく能く躰を大事に致し風邪ひかぬ樣願上候母御をとられ候も風邪がもとなればか弱く生れ候身は一入心なさる可く候又此着物去歲の儘なれば定めて身巾狹くなりし事と存じ候得共何事も心に任せず其儘送り申候此冬は之にて我慢なさる可く手隙もあらば自身御直しなさる可く候腰上は最早御とり成され候て然る可く肩揚も淺くなさる可く候霜月は母御の一周忌に相當致候事故心許りの法事にても致し度其節は御許にも四五日御暇を願ひて歸宅致させ半年振りの積る物語對面も致度今より樂しみ居候先は右迄あらあらかしこ。

紛れもない懐かしいお祖母樣の手だ、私は着更すべく帶を解いて細紐を取つて前の亂れて居るのも忘れて其處に泣伏した、藁ぶきの傾いた軒下に悄然と手内職して居る姿が浮ぶ、まあ何といふ不仕あはせなおばあ樣、獨り娘のお母樣には死なれて父樣には家出されて、廣い世界に便りとするは私許り、其私をも家計上の都合から這麼遠くへ手離して、六十路越えてのひとり暮し、どんなに心細い事であらう、新家の叔父樣がも少し情の暖かい方であれば這麼に迄おばあ樣に……、併し夫は思ふまい、返へす〴〵も口惜いは私だ、不甲斐ないは私だ、躰さへ達者であれば下女奉公でも何でもして働いておばあ樣に斯う迄苦勞は掛けまいもの、弱いばつかりに夫も出來ず漸う手の先仕事の此工場へははいつたもの丶、夫とても休みがちで人並のかせぎは六かしく、こんな冬着の心配迄お祖母樣にかけて……、夫も家の戸棚に有るのを遣してもらうなら譯はないけれど、利子のつく他所のお藏から……、ほんとに情ない、夫にしてもお祖母樣はどうして工面なさつたらう、借りてか、入れ換へてか、いや否や貸し人もあるまい、冷たいつめたい今の世に矢つ張り御かせぎなすつたんだらう、あの惡いお目で遲く迄こんをつめて――、勿躰な

い。済まない。そして御自分は未だに單衣でゐらつしやるに相違ない、御老躰に障りはすまいか、夫故に持病の起る事はあるまいか、どうか神様佛様哀れな人を守つてと、夫から夫へ考へて、手を通すのも忘れて居たが、雨交りの冷たい風が窓の隙から吹入つて、ぞつと寒氣だつて、かぜ引くなとあつたのを思ひ出して、急いで被つた、すると案に違はず短かい小さい、ゆきは襦袢の袖で、とも角もごまかせるが丈はとても——そこで小鋏を取て糸を引切つた、さらりと長さ一ぱいに下りて疊についた、あゝ私も大人に成つたの、けれ共一枚の着物を自身かせいで拵へるのは容易な事ではない、十五の今つく〴〵と知つた覺つた、大事にしませう、汚さないやうにしませう、お祖母様の情のこもつた此着物、仇やおろそかには着ますまい、そして私も一生懸命になつて働いて早くお祖母様に暖い綿入を御着せ申すやうにしませうと、國の方角に向つて誓ふやうに呟いた。

（評）　可憐の情趣。

○よしの山

讃岐　溪の舍楓子

頼先生かつて謠ひ給はく「花より明くるみよし野の春の曙見渡さばもろこし人も高麗人も、やまとごゝろになりぬべし」と。げに櫻花は花中の花にして吉野の花はまた櫻花中の櫻花とやいはまし。その山腰水涯、目の及ぶ所、花ならぬはなく、萬朶爛發して朝陽に映じ、枝々露を帶び、淸香空に薫れる盛觀を一目せば誰かやまと心を起さゞるべき。されど芳野の著名なるは、唯櫻花あるためにはあらで、歷史上に顯著なる關係あればなり。馬を峻坂に鞭ち、敵を蒼海に殲し、勢、鬼神をも挫きし源九郎も、嘗て一たび此の花に對し榮枯盛衰の常なきを歎じたりき、富貴功名を視る事塵芥の如く、單笠孤杖身を雲水に任しゝ西行法師も亦嘗て錫を此の地に駐めき、建武の世となりては龍駕巡狩して此の地に駐れること五十餘年、延元の帝が劍を按じて遺詔を垂れたまひしも此の地なり。小楠公が死を決して天子に拜別せしも此の處なり。彼處には延元陵あり、雪眉の老僧、落花深き所に南朝を說き。此處には如意輪堂あり扉面の鏃痕今尙ほ歷々として當年を追想せしむ、嗚呼花は是れ花中の名花、人は是れ忠臣中の忠臣、相須ちて芬芳を千載に擅にするも亦宜なるかな。われ今、初めて名所と人事との關係頗る大なることを悟りぬ。嗚呼和州の香世界を見るに非ずば、人生梅花を說くべからずとせば、吉野の花を見るに非ずば、人世復た櫻花を說く能はじ。

（評）　「滿身花影夢南朝」といひ、或は「落花深處說南朝」といひ、芳野と南朝とは相須ちて一入感慨を深うせしむ、此篇是等の詩によりて筆をつけたるものなるべし、筆に力あるは女性らしからず。

○春のあそび　本郷なてしこ

吾が宿は町はづれなる山の半腹を切り開きて建てたれば、北には山を負ひ、南一面打開きたる方に田畠をへだてゝ人家を見下し、更に渺々たる相摸灘を見渡さる、庭松が枝の葉越しに藍を湛へたらん如き海原を白帆あげてゆききする海士の釣舟の見え隱れするあたりは、繪にも書かまほしげなり、西の方稻村が崎より由井が濱海濱院の松原あたりまで、打渡す一帶の砂原は白き布を敷き詰めたらんが如く、青き松の潮風に吹かれて枝ぶりおもしろきが、ところ〳〵並みたてるに、菜の花の蝶を追ひつゝ、松露拾ふ海士の子まで皆吾庭の眺めなり、空晴れ波靜なる日は、伊豆の大島手に取る如く、ゆん手に續づくは三浦三崎、左手に霞むは伊豆の山々、もしそれ浦づたひして極樂寺切り通しを越え、七里が濱に出でんか、片瀬腰越よびもかはしつべく、江の島の婉なる姿は雲のあなたの富士が根に映じて、又一しほの眺めありこゝに占春丘といへるは宿の庭つづきなる山の上の芝原にて、見晴らしいとよくあづま屋などの設けもあり、梅の木あまた植ゑられたるが、花さく頃は谷間の鶯も音づれて、世はまだ冬枯ながら、こゝばかりはいとゞく春じり初めぬるもをかし、つば菜ぬく里の子も通はずいと靜かなれば、春毎に一家つどひて花の下にむしろ敷き詰め、割籠など打開き、一日狩り暮すもたのしきすさびなりけり、ことしは吾が番にあたりたれば、かねてよりそのこゝろしらひして、弦齋居士の食道樂などひもとき、おぼつかなくもあやしき煮物一品二品習ひ試みたりしも、いざとなれば心のみはやりて庖刀の意の如くならざるぞくやしき、み肴には何よけんなど小ゆるぎの磯邊に人をはしらせて取り寄せつ、さてあわびは甘煮に、鯛は照り燒こそよからめと、人々のいふに、さらばとて今一品たまご燒など取り調へ、割籠に盛り渡し、人して山に運ばしめぬ、山には己がじゝたのしげに遊びまはり、嫁菜摘みにと後の山かげに急ぎおるゝもあり、繪心ある若人はスケッチブックよ、ゑのぐよと打さわぐめり、望遠鏡を手にして海づら眺め入る老人は、呼べども答へず、やゝありて。

立わたる霞の奥にみゆるかな
なみにたゞよふ海士のつり舟

と口ずさむ、おのれいひ出でん言の葉もしらで、かたへにたゞずめば、かゝる景色をたゞに見過ごす事やある、いかに歌などよみて都の友に贈らずやといふに、今日は何くれと事しげければ、ゑよまずといふに、さないひそ、其のしげき中よりよみ出でたらむこそまことの歌なるべけれ、いざとくとあるに、いよゝ心おくれ、歌はなくて汗のみぞ湧きいづる、とかくする内

人々のあつまり來るけはひしければ、わりごなどよきほどに配り、あるじ顏して待つほどに、皆人笑みかたむけて席につき、たのしげに箸取りあぐるに、うれしくも心ときめきして、人々の口もとのみ打まもらるゝもあやしくをかし、例の老いたる人まづ味はひ試みて、今日のあるじが心づかひはよろづに至らぬ隈もなければ、何ならぬわりごの飯もいとうまき心地すといへば、皆人同じやうにいひはやし、打興ずるに今までたのしげに木つたひたりし鶯の其の聲にや驚きけむ、羽風あわたゞしくとびゆくに、梅の花びら三つ四つ散りかゝりぬ、かくてたのしき今年の春もすぎゆきぬ、またこむ年は如何なる人のいかなるすさびをかし出づらむ。

(評)　羨ましき君が宿かな。

渡し場　大坂朱子



○松下に佇みて

愛知縣　宮田愛子

妾は癒え離き病懷きてこゝ蒲郡の海岸に、早二月を過しけり。去年の夏たらちねの君と恙なくて此處に遊びし折此磯馴松の下にていと愛らしき蜑のうなゐ子に遇ひにけり、何となう懷かしう思はれて、年は幾歲と尋ぬれば、八つと答ふ、父さんはと問へば默して答へず、母さんはと問へど同じく答へず、御家は何處と尋ねれば、遙けき松陰の一つ家を指さしぬ。折柄武ちやん何してるのと言ひながら、十三許りの男の子跣足にて、貝入れし籠さげて此方へ來りぬ、妾は笑顏して此の子何處の子と尋ぬれば、家は無いの、僕處に一緒に居るの、父さんは漁に出て死んだの、母さんは氣狂ひになつて海に這入つて去年死んで仕舞つたの、と答へて、武ちやん御出と先に立てゝ御辭儀して歸り行きぬ。妾はいとも傷き運命の下に生れし子よと、家に入る迄見送りつ、翌日そこに行けば其子も來りぬ、軍歌など敎へて共に遊ぶを何よりの樂みとなし居りしが、同胞なき身の弟ならましかばと、あゝ幾度思ひしか。愈々明日は歸國と定まりし前日、又來年來るからおとなしく大きく御成りよと、頭摩を惜めば、つまらぬ顏して、えとうなづきぬ。

思はずも病得て未だ綿入も脫ぎ兼ぬるに、再び此處に起臥する身となりし折、せめてもの慰藉と彼の稚子尋ぬれ共夫れと似よりし影だになかりき。仄かに聞けば

去年の暮、都人に連れられて、今は東の都に在りとかや。

諸共に石拾ひ軍歌唄ひし松陰に佇めば、沖を眺て勇ましく、數へ遣りし「勇敢なる水兵」を、足拍子取りて唄ひし面影の眼前に髣髴と現はれて、胸狂はしう懷しきに、斯くては果てじと琴曲菊水の一節を、聲はり上て唄ひ出し折、花村樣いゝ御元氣てすねつと、御隣家の庵主樣の御聲。

（評）やさしき思出なる哉。

○春雨の夜友の許に

三重縣　帆山靜子

夢の樣なる春の香に、大方の物皆醉ひて眠りけむ、香の煙のみ緩う床の小琴を廻り〳〵て、夜は靜かに更けゆき候。散りゆく花の影淡く丸窓に畫さし、朧夜の月もいつしか消えて、ぽとり〳〵落つる玉水の音濕やかなるに、何處よりともなう沈丁花の香幽かになびき來て、室の中に漂ひつ、寂たる春の夜はいよゝ深う沈み行くにて候。さらぬだに堪へ難き愁になく身の、げに身も世もあらぬ計り淋しうて、やをら丸窓あけて眺めやり候に、霞にまがふ春雨の音だに立てず庭の泉水に波紋つくりて、そと浮草をゆれば、暗にも白き花片の、汀に打ちよせられて漂ふ樣、げに得ならぬ風情に御座候。折柄雨氣含みてさと吹く風に、行燈の灯影ゆれて落花はら〳〵と讀みさしたる書の上に亂れ狂ひ候。あゝ懷しの秋子の君よ、妾は永久に消えぬ怨を胸に包みて、明日は愈々あらぬ方に嫁ぎゆくべき、悲しき身となり果て候。何も知り給はぬ母上の衣類よ調度よと、嬉しげに立ち廻り給ふもなか〳〵に恨めしく、人しれぬ涙に咽び居り候。思ひぞ出づる一年前、堪へ難き別れに相抱きて泣きしは、げに今宵の如く春雨靜かなる淋しき夕にて候ひしよ。其折の君が御言葉今も尙耳に殘る心地して、新しき涙の限りなく湧きいて候。青春の熱き血跳る胸には、即て眞の姉とよばれむの若き望のみちみちたるを、今は何事も皆果敢なき運命に破られし悲しさを、君よ推し量らせ給へや。あはれ一年前の浪子は、今宵ちりゆく花と共に再び歸らぬ冷き死骸となり果て候を何時迄も〳〵何時迄も世に亡き姉として、忘れ給はぬ樣願ぎ奉り候。おゝ懷しの君への御音信も之ぞ此世の名殘に候よ、今は自ら世を捨てし身の、何をか悲まむと思ひ返せど有繫に弱き人の子の又も湧き出る涙に、筆とる手もふるへて泥み勝なる書の面、よしなに御判讀給はり度候。

（評）哀れなるやうなれど物足らず。

○追想

岩代　岸野常子

花やかなりし夕榮の雲もいつしか其影を收めて、夕鐘寂う川面を渡れば、黄昏の色何處よりともなく平和なる里閭をば罩めつ、そよ風徐ろに水面をなでゝ汀の小

波經ち烟の影をくだきぬ。

いつ昇りけん朧の月は夢の如く淡く松が枝に懸れり、妾は何とはなしに暫く打仰ぎぬ、斯て妾は美しき神のみ懐に抱かれけん心地して、やがて四邊の靜寂は坐ろに妾をしてよしなき過去の空想に耽らしめぬ。

思ひ起す四とせのあと、はかなき功名の念に驅られて白雲低く迷ふ懐しき故山を出でし友と我れ、榮ある譽の花を手折らではと、互にかたく誓ひたりしに、飛鳥川の淵瀬定めぬ世の樣や、飽くまで人生に冷かなる運命の神は、去年の秋、我いとしの友をして廢學の止むなきに至らしめしなりき、あはれ夢みし希望も光明も打ち捨てたる心の中よ、あゝいかばかり口惜しき極みなりけむ。

錦着ではと誓ひて出でし故山の空に、限りなき恨みを抱いて向はむとする落魄の友と、开を送るべく來りし悲膓妾は、西の空遠く流るゝ夕雲の行方を眺めつゝ、涙語、玆名無し小川の邊りに至れば、何處まで行きても名殘りは盡きせぬものをと否み給ふに詮なくて、さらばこれにて別れむ、寒さ身にしむ今日此頃、道中只管氣をつけ給ひてよ、さらば幸くあれ君！とあとは云ひ得ず、友は雇ひ來りし車に乘り給ひぬ、あゝ其眼の裡の一雫！。夕の風いとゞ冷たき頰を撫でゝ、心なき河千鳥哀れなる聲にてとぎれ〳〵瀬音の絕間に啼き渡るに、猶も佇みて打見やれば、車の響やう〳〵遠く、漆の如き林の中を灯影のちら〳〵と漂ひつゝ幽かになりゆく心細さ、折しも靑き星一つ空をきりて彼方の杜の梢に消えぬ、あゝ此時の我思ひ、我れ描かんとして描く能はず。

斯て友と別れし妾は空しく一とせを都の空に過し、今春飄然として慕はしき故園を訪へば、戀しの山は舊に依て翠を更へず、懐かしき小川の流は今猶昔の響淙々として花はまた美しう咲き亂れ、蝶舞ひ鳥謠ふさま、塵の巷に飽き果てし妾が眼には、宛ら別天地に出でし思ひありき、あはれ此美しき故園の花共に眺めむと誓ひし友は今いづくぞ、彼方なる松原つゞき風淸く砂白き處、松籟と月影とを友として永く靜に眠れるなり。

あゝわれの斯くと聞きしは師走の末つ方、官舍の淋しき夕べにてありき、わが其飛報に接せし刹那よ、いかばかり驚きと悲哀との感にうたれたりしぞ、止めもあへぬ熱き涙の冷たき頰を傳はりて、乾くまのなき衣手を絞りつゝ現なの思ひに夜を明しぬ、噫々黃鳥老いやすく落花空しく亂れむとす、悲しからずや人の世あはれ脆きは人の運命なるかな。

空啼き渡る鳥の一聲にはかなくも追想の夢さめて、遼たる九天、仰げば圓かなりし月は半ば黑雲に掩はれて、肌寒く吹きよする風に散るや梢の花吹雪、哀れはかなの花や、心なの春風や、斯くて我世の暮れ行く

めり。

（評）追懐の念は逝きし人を偲ぶより切なるはあらずと雖も、選者は抒情文を選ぶにあたりて、餘りに這の種の文の多きに惱まさるるが常なり、死別の悲みを外にするも、なほ諸嬢が採るべき材はいと多かり、心して陳套を脱せよ。此の篇亦死別の涙を叙せるものなれど、文字の整へるをもて取りつ、作者及び他の諸嬢に告ぐ、再び這の種の文を寄せて選者を苦しむる勿れ。

○山猿の小言

長野縣　山田くに子

噫々君よ、我は世にもあはれなる、頼みなき者である、あはれと思はゞ以後御交際を乞ふとか、君の文を見て感じたから交際しろとか、一體人を何だと思つて居るだらう、こんな事を云つてよこす男子の手紙は見ても吐き度なる。

一たい女と云ふ者は、心の弱い情の脆い、至つてかよわい者であるのに、其弱い女に泣き付て來る男子は一たい何で有らう、松が枝に懸る藤の花、それにまつはる草花は、兎の食べる何とか云ふ草で、吹けば飛ぶ様な草で有る、丁度こんな事を云ひかける男子は此草と同様吹けばとぶ様な者ばかりだらう。まさか日本男子にこんな者は有るまい、名も無い意氣の無い露國あたりから舞つてきた、ハイカラの幽靈だらう。こんな幽靈にかぎつて髪を分け、色を白くして香水をふりまき、しやなりくなりと、親はせつせと畑うつのに、自分は蝶の行方でも、涙をためて見て居るのだらう。

私はかつて此様に思つた、墾くさへ交際すれば、互の詩想を交換するのに男子と交際するのが何で罪だらうと…しかし今更考へれば、いかにも其時代の考へが淺はかの至りで有つたのを知つた。

そしてそんな迷ひから、早く醒めたのを深く喜ぶ否神に感謝してやまぬのである。私は山奥に住んで居る女で、今まで今日の青年が、これ程墮落して居るとは知らなかつた。こんな意氣無き者とは、諏訪の青年が意氣有る爲か、露程も知らなかつたのである。

全體信州あたりの山猿同然な私に、田園生活の趣味をとくからして氣にくはぬ。

田園生活とは、そんな樂しい生活では無い。成程樂しいと云つてよこす人たちは、樂しい物と信じて居るだらうが、働かねば食べられぬ私たちは、ゆる〳〵蝶の行方や菫の笑なんか眺めて居るすきが無い、そんなひまには一うねも多く畑をたがやさねば太陽様に笑はれる。田園生活とは、女に泣き付く弱虫たちが、考へ及ばされぬ程の苦しみをなめて始めて、秋の喜を得られる生活である

私は今から後、斷然男子の方の手紙をことわる故、わざわざ三錢損して遠い信州まで、交際を求めにこないでも、それ程悲しい事が有るなら、親身の親兄弟に話したがよいと思ふ。

（評）當世ハイカラ氣質の柔弱男子を罵倒して痛快をはきむ。

○入學

大坂　蒲壽美

這へば立て立てば歩めと只管に、おのが年のゆくをも忘れて其子の一日も早く生ひ立たむをのみ待ちわぶるは、なべての親のなさけにてそあれ。弟の良三可愛ゆき紅葉の如き手に母さまのふところ探りて乳もとめ居しもつひ昨日の樣に覺ゆれど、早やも誕生は六度めぐり來て今年七歳の今日よりは學の庭に下りたちてその敎へ草摘む可くなりぬ。

今よりは十いく年の長き〳〵其間、雨も降らむ風も吹かむ暫時とてたゆみなき浮世の荒波はその靜けき美しき學の園にも容赦なく分け入りて思ふがまゝにあれ狂ふなり、さはれ弟よ心强かれ亡き母に代りし身のこの姉は波をふせぐ堤となり風をよくる塀ともなりさては雨露しのぐ屋根ともなりて、よしやこの身はたふるとも庭の撫子生ふし立てゝ見事花も咲かせむ實も結ばせむ、只安らけくひたすらにおのが務めの學の道に心して傍目なふりそ、つまづきなせそ。

嗚呼母さま在せば如何に喜びたまふことならむ今日入學のその日心ばかりの祝にとて赤飯たき良三を正座に父さまと妾との三人よろこびの目見合して箸執りし時何とは知らず涙こぼれぬ。

○鐘の主

京都　茂樹彩



坊やが　萩町　小園敏子

我は今樓上の欄に立てり、嗚呼壯嚴なる落日の影！燃ゆるが如き夕榮も漸次灰色の雲に襲れて、六十六峰の連山皆藍ばみし紫色となる。見渡せば舊都十萬戸、暮色蒼然として是より夜のとばりは下されんとす、遙に空高く明星は輝けり、魔風一陣、裸身の櫻を搖つて後の山に入る、歌の中山淸閑寺に通づる間道のあたり、鐘の音ひく〳〵、

　　松風や音羽の瀧の淸水の
　　　掬ぶ心や涼しかるらん……

餘韻長う誦するを聞く、何となく哀の感、身邊にひし〳〵と襲ひくる、父母を取られしあはれの孤子か、夫を失ひし若き妻か？悲しげなる聲沈みし鐘の音は次第に近づきぬ。まだうら若き身に白き衣着て、右手に鐘、左手はいぢらしき幼兒に取られ、靜かに觀音の前に、ぬかづきて拜する可憐の姿、やがて拜し終りて顔上げぬ。「母ちやん日が暮れたよ」、無殘…無殘！兩目つぶれて玉なす涙の青白く痩せたる頬に傳はれり。

嗚呼不幸なる母子よ。

全く日は暮れて夢より淡き五日の月の中天に懸るを見る、樓下の石段に不幸なる幼兒は、目しひの母を、痛はりつゝ下り行く、あはれ今夜彼等は何處に宿るならん。かくて我も觀音堂の前に立寄り、彼等母子の前途に幸多かれと念じつゝ、歸途につけり。

俳句（三）　巖谷小波先生選評

三等

葵さく加茂の小家や歌合せ　千葉縣　黃雨女

（評）夜半翁の俤あり、清麗にして又閑雅。

四等

藻の花に灰ふき洗ふ和尚かな　石見　神の子

（評）一茶坊の姿忍ばる、新くして而も寂みあり。

五等

山吏に一鳥啼かず落椿　越後國中頸城郡寺野村　藤原國子

（評）樂天の句を讀むが如し、詩趣即ち俳趣。

ひる閑に牡丹を崩す午砲哉　紀伊　みれ子
鳥追ひや三日月寒き小梅町　銀鈴宮
雁鳴くや家まばらなる江の南　埼玉　西田雪子
竹椽や花と鼓の戀がたり　磐城　遠藤尾上
西洋の藥はにがし二日灸　相模　倉橋よしえ
瀬の渡船ふや春の月　深川　山下みの
蠶妻の物問はれけり京訛り　岩代　岸野常子
片里や吹井のもとの撫子花　小梅　槐水仙子
梅さきて思はぬ人にとはれけり　秋田縣　佐々木幽子
畑打ちし腹に麥飯茶漬かな　靜岡　野崎道子
城あとや雨の接木に小暗なく　下總　叢葉子
水晶の簾微動す夏ノ月　尾張　菅沼秋香
夕日さす寫經の窓や梅の散る　尾道　安保たまよ
龜甲や花のひつゝく阿彌陀池　水戸　島田小蘋子
廢院　昔しのぶや若楓　信濃　貞子女史
落胤の幟小さき恨みかな　千葉縣　浜ほし子
つながれて牛も眠りぬ桃の花　上毛　もゝ子
雛を見る二階の欄や春の風　千葉縣　入木美惠子
蠶飼する中に都の便かな　備前　槻木研子
菜の花や背の籠重き畑道　下野　染宮邦子
古井戸の昔晰しや桃の花　近江　藤しづ子
春の水曲り角だけ動きけり　岐阜縣　中島重子
山吹やあぶなさうなる丸木橋　相模　野島里子
村醫者の黃なる羽織や霜の朝　本所　田中久子
畑打の京を見て來た噺かな　千葉縣　内藤とし子
牛の背を三尺高き霞哉　印旛　馬場富美子
菜種咲く吳越の界や水ぬるし　津市　川村しげ子
笑ふ子にかして忘れし扇かな　駿河　佐野峯子
大佛は寧樂にお在すや八重櫻　横須賀　佐藤君子
左京右京風一文字や時鳥　京都　田島かほる
櫻散るや五山に登る僧若し　安房　ひめごと

てる〳〵の人形は破れて花の雨　本所　薮田野菊子
夜櫻や助六は寐てしまひけり　京都市　安田初子
人丸の社は古しつばくらめ　麹町　小島よし子
行春やはだして河を渡りつゝ　奈良　吉川いく子
桃にきてむぎまてほめる山路かな　神戸　安達絹枝
春の日や只あくがれて繪はならず　埼玉縣　中村勝子
取り出す袋の琵琶に風薫る　千葉縣　動子女史
戀塚に文焼く宵や月おぼろ　横須賀　柏原みな子
米洗ふ流れの先や桃の花　蕉雨子
山吹の垣に犬呼ぶ女かな　下總　酒井ふみ江
桃の村自轉車二つ走りけり　常陸　花子
春の水十戸の小村めぐりけり　大和　和田芳子
踊宿して只吹かれけり春の風　相撲　つくし
永き日を寐て仕舞たる鸚鵡かな　下總　川奈部孝
繪襖の孔雀舞ひそな日和かな　神戸　宮内登美子
沖遠く黒船みえぬ繪踏の日　相撲　倉橋よしえ
杉森に響く太鼓や朝霞　福島縣　菅野孝子
大門の落首に春は行にけり　〆太子
卯の花や里の夜明の靜なる　本郷　中村ふじ子
菜の畑を横ぎる對の日傘哉　下總　はな女
外風呂に水呼ぶ妻や朧月　千葉縣　松ケ枝　富士枝
山の根の馬ひく人に陽炎す　北越　出山せん子
冬の月古驛に枯れし柳かな　牛込　河村頓子
門入りて植込深き木の芽かな　愛知縣　白丹庭主

笹舟の落花をのせて小川哉　紀伊　北西みきを
猿曳や宮女興ずる局口　松阪　岡本しげ子
春の水家鴨の足を掬ひけり　下谷　加藤雪子
萬歳の鼓も來る梅の門　茨城　綿引早子
絹張の障子たゝきぬ桐一葉　土佐　大原政美子
陽炎や庭に干したる酒袋　千葉縣　はな子
梅さきて人のみさむき姿かな　美濃　竹島芳翠
餅花や村に住ひて子澤山　越後　藤子
山吹や井戸の古道咲つゞく　兵庫縣　中島八重子
花散りて三尺の鯉うごきけり　京都　かほる
春深く鏡のくもり拭ひけり　奈良　岸田たれ子
魁の梅一輪や北斗星　函館　賀津子
紫のふつとふくらむ桔梗哉　越後　山村芳枝子
數七つ霞んで暮れの鐘ゆかし　近江　志津子
四五本の糸柳なぶる欄干かな　府下　寺澤みつ枝
室町や追羽子それて黄昏るゝ　埼玉　野口花子
萍や蛛掻きはらふ舟の人　銀塔女史
ゆく春を流水の曲奏てけり　伊勢　大原しづ子
好き歌を獏に食はれて朝寢哉　神戸　とみ子
學寮に校歌の高し春の宵　熊本　石坂せつ子
小春日や日南へ運ばる屋根の猫　伊豫　鴻上寅代
藪入や順禮の子に行き逢ふ　中野町　小川鱗子
極樂の夢見る寺の畫寢哉　八重子
夕暮に枯野を僧の戻りけり　肥前　秋月靜女

書簡文

文學士沼波瓊音先生選評

三等　○お土産

鹿児島　格子

さあお土産の名をと言はれては、一寸口に出て來ないのです、それじや望はないのかとおつしやるでせう、けれど、さうじやないので、あんまりたくさんあるからですの、けれど、そんなたくさんの數をお賴みする事も、出來ないので、夜もねない位かんがへて、帶と指輪と本とにきめましたの。帶はね、ねえ樣が、三越か白木屋かで、之はいゝとお思ひなすつたのをね。それからリングはね、ルビー入でもサファイヤ入りでもないし、銀鍍でもいゝの、ただ私は今からその時、兄樣のお財布の、溫かいのを祈つてゐます。本はね、どうかハイネの詩集をね、けれど御地は安いとか、聞いて居るからですの、當地でかつてもいゝんですから、あまりお荷物が、多かつたら、よろしう御座います。先はお歸りをまつてゐます。お荷物が多かつたらとは、本ばかりの事ですよ。おまちがひなく。さよなら。

（評）縫はぬ所に兄妹の情が見えてゐる、が、斯う御土産の數が多くては、兄君も聊か閉口だらう。

四等　○郭公を聞きに

宮城縣栗原郡金成村中町高長方　御園松子

にび色の雲のひくさよ、今宵の程にもふりいでなむをいかにながめさせ給ふらむと、ゆかしう思ひまゐらせ候折りから、御なつかしき御玉章たまはり、いとゞ嬉しう巻き返し拜し上げまゐらせ候。郭公さゝにとて、須磨の御なりどころへ物せさせ給ふとて、こなたをもそゝのかし給ふみやび心の御すさみ、いと〳〵おもしろう見まゐらせ候。一の谷あたり、松の風浪の音にまがひて、ほのかに名のりいでたらむは、いかにをかしからむと思ふにも、御供は願ひてもせまほしく雨は物かは、なか〳〵にをかしさこそ添はめと存じ候へば、よろづをさしおきても、仰せの時刻に御宿をおどろかしまゐらすべくと、一言御かへりごときこえあげまゐらせ候。つねよりも一入なる亂れ書きも、よろこびの餘りの筆の狂ひと、みゆるしたまひてよ。

（評）風流のすさびなる歟。

五等

○遠地の姉に

本郷區弓町一ノ二五　朝井松子

早う入らせられ給へ姉上樣、博覽會始まらばとく行かんと宣ひしはそも誰がみ言葉にて候ひしぞや、徒らの烏影にさへ今日は明日はと短き首長うして待ち詫ぶる母と妹の有りとはおぼさぬにて候か。扨も恨めしのみ心ぞ、それとも兄上樣が許し給はぬにて候か、否左樣なつれ無き御方にては候はぬものを、日毎々々に賑ひ增す上野の模樣など具さに聞え上度は山々乍ら手紙にて樣子知りたれば最早見るに及ばぬなどゝ仰せられ候事もやと氣遣はれ候儘殊更書き殘し參らせ候、兎まれ角まれ一日も早う入らせられ給へ姉上樣、老いたる母の待ちますするに、乍末御兄上樣へ呉れ〴〵もよろしうねぎ上參らせ候。かしこ。

（評）待ち焦れたる樣子躍如たり。

秀逸

○姉樣へ

長野縣　山田くに子

姉樣!! 私眞とに嬉しう御座いましたわ……此間の御手紙!!! もう今更云出すには及ば無いけれ共、昨年の本月本日は、はかなき運命に泣いて、厭な〳〵思を包んで、死んだ心で御嫁ぎなさつた。あゝ其紀念多き日で御座いますね、思へばあの時は考が淺くつて、「父樣が死なれたからつて現金にまゝ子いじめをなさらないでも善かりそうなもの」と、お互に母樣を御恨み申しましたが、今更思へば罪深き私共でした、やつぱりお母樣は行末の事を考へて、姉樣の幸福をはかつて下さつたのだわ。此間の姉樣の御手紙「いやだ〳〵と思つて嫁だ家が、今は去りとも無くなりました、時夫が優しくしてくれるのは、實に筆に書きつくせません、御姑樣も可愛がつて下さるので、毎日々々笑つては暮して居る」……と、何て嬉しきお便でせう、私はもう天へも登り度程でした、もう姉樣、昔の事は夢と消して、一心に貞操を守り、時夫さんに事へて、圓滿な家庭を造つて頂戴!!! これが妹が何よりの御願よ!!! 姉樣御存じの菅野樣ね、姉さんが嫁らつしやつてから間も無く淺井樣と、理想通り結婚なさいました、然し御兩親樣にそむいてゞす。其當座こそよく御二人で散歩になどお見えでしたが、此頃一寸も御見えで無いので、不思議に思つて居りましたの、聞けば半年たゝぬうち、もうスヰートのスの字も無く、つひ御主人樣は菅野さんを殘して、米國とやらへ御旅立てすと、どうせ親にそむいてする事に、ろくな結果は有はしないと思ひ

ますわ。其當時こそ、親の見るより、自分の目が勝つて居る樣な氣がして、勝手な事をする人も有るけれど、やつぱり親は親だけですわ。姉樣死まで時夫樣の妻と成つて下さい。そして一日も早く赤ちやんを生て頂戴、私叔母さんに成て見度から……ホ、、、、今迄厭だつた時夫さんも姉樣の御手紙を見てから、急に好きに成りました。私これからは兄樣と呼びます。どうぞ兄樣によろしく云つて下さい。さよなら。

（評）戀愛の自由を說いて、得意顏せるハイカラの痛棒に屆いゝ手本です。

○都の姉君へ

越後　しらゆき

仰にしたがひ、昨夕更に、稱名寺の鐘のひゞき候ころ、姉さまの古き庭の、かの、花のさかりを二つ、三つ、きりとり、手向の水、香など、うちそろへて、尾花の道を、御墓へと急ぎ候。昨日まゐり候ときは、あまたの人のつきそひ候て、すこしはあはれもまぎれ候ひしが、さらぬだに今日は、遠き里におはします、姉さまのことゞも思ひいだされ候て、まだ乾きもせぬ土の上に、しらず涙をこぼし候。姉さまの御心の切なさは、つくしかね候へど、心をこめて、御回向仕り候間、何とぞ、さやう思し召し下され度候。秋の夕もやう〳〵くれ候間、本意無うは思ひ候ひしが、いつまてとて、つきせぬことゝ思ひ、そこをたちて、もとの道を辿り候。正眞院慈譽大道居士、御戒名御知らせ致し候間、明日よりは、朝夕の御回向も、なされ候ことゝ察し奉候、かしこ。

（評）逝きしは父か兄か、傷まし、悲しさをくどく言はざるが却々にあはれなり。

○寄宿舍なる弟へ

千葉縣　小永井郁子

まがきの山吹も波の汀の藤も早や咲き初めて候、御前樣には嘸々御勉學の御事と乍陰悅び居候、此方も一同無事に暮し居り候まゝ御安心なされ度候、御身等時代は兎角生意氣盛りなる歲頃なれば、餘り生意氣な事云うて上級の生徒に憎まれぬ樣、又下級の生徒には優しく憐みて、惡しき友と交り給ふな、我意に滿たずとて敎師を排斥するなどゝ校内を騷す事は何處の學校にもまゝある事、必ずこれ等の仲間には這入らぬ樣になされ度候、ずゐ分活潑に運動なすは好き事に候へ共、餘り運動に許り熱心になりて學科の方が二の次にならぬ樣ボールのチャンピオンたらんより學科の優等者たらむ事を願ひ上候、一々云はずとも疾うにおわきまへなされ候御事と存じ候へ共、いつ迄も昔のいたづらな新ちやんの心地がして、斯くはつまらぬ事をのべたて候、此の草もち御前樣お好きに候へば御送り申候間半分は同室のお友達へお配分なされ度候かしこ。

（評）苦い藥をすゝめておいて、甘い草餅をおくる姉の心づかひ、優さし。

○大連より

大連　林　文子

只今小包着御心をこめられし品々有難く頂載致し候、昨今の嚴しき寒さにも御變りなき由安心致し申候、さぞ滿洲は寒からうとて雪につけ風につけ御案じ下され候由、何の〳〵此位の寒さ若き身には少しもつらき事は御坐なく却て內地に居る時よりは身躰も丈夫に相成候、新聞紙などに書きたてる程實際は寒く御坐なく候まゝ決して御心配なきやう願上候、御地は一尺も雪降り候由、さぞや朝夕の水仕業に御手足の荒れておはすらん、妾が御側に侍りなば溫き御飯を焚きし後起し參らせ夜は早く暖かき伏床に御やすませ參らすべきものをと、涙にむせび申候、決して御無理遊さぬやう吳々も御願申上候、羽織の縞氣に入らぬか知らねどゝの御言の葉誠に勿躰なく大切に着申すべく候、勇よりの送物にも泣かされ申候、ヒヾがきれたから姉さんへも送てあげてと申候由、姉を思ひ吳るゝ心誠に嬉しく涙にむせび申候、干柿澤山御送り被下早速頂戴致し候、柿の實の重さうに出來て居る樣など目の前に見る心地し、去年勇の柿の木より落ちし事など思ひ浮べ申候、寒さ嚴しき折柄御身御大切に遊され度祈り上候、先は小包着御禮まで。

（評）何の奇もなけれど、母をおもひ、弟をおもふの情、緒表に溢れたり。

あみ　廣島縣　今西初枝



○四月便り

櫻子

○

雨の上野は又よろしく候、櫻あぶなきゑひどれの影もなくこゝ清水堂にいこへるは、島田髷つや〳〵しき美しき人と私とのみにて候ふ、あれ面白う花がちり候。

○

都の春を見捨てきのふより旅の人、けふは古里の花の雫に袖ぬらし候ふ。

花の旅今宵はこゝにねてゆかむ
　ゆくていそがぬ心やすさに

○

ゆかまほしき折柄とて、けふの御便り嬉しく拜見致し候ふ、されば櫻の土手を半里春風にふかれてまゐるべく候、はるには似ぬ雨のあしにて候かな。

○

きのふけふの春雨に花も大方ほころびて、都人のこゝろは春風に浮れ立候、御地の春げしきはいかゞあるら

む、さてさかまほしきは君がこの頃のご樣子、見まほしきはみ筆のあとや。

○

花咲てはなか〳〵にかこたるゝ此雨にて候かな、をちこちの花のたよりもちらほら、春はなんとなく心のどかにて候、きのふ芝公園辨天池畔の櫻をみにゆき候、花の雫に袖ぬれ候時、其花の下蔭を立さりがたく思されしおん物語り、さては逢はむと仰せられしをむげにいなみて、いつはりのなきよなるべき七夕のおん歌をさへ賜はりしこぞの事ども、思ひいだされて候、うすあかりのおぼろ月夜など、都の空打眺めたまひては、おもひ出澤に候ふべし。

（評）優しき花信。

○下女の周旋を賴む

鳥取市　上山千重子

春雨に數すり捨てし寸燐かな、さはれふるとしも見えねど、露に撓はむ海棠のねむたげにうなだれ、幾度か竈の下あやしくなるに、針の手も進まず候。なつかしき御許樣はじめ皆々樣には御健かに入らせられ候や、こなた只二人ぐらしの晝間は妾のみにて候へば、いたづらに故鄕の事など思ひいでられて、つれ〳〵のやるせなく候。さ候へば主人も殊の外案じ候て、下女おかずやと朝夕くりかへし候に、別に用なき身の贅澤とはおもへど、世なれぬかなしさは人のみ戀しう、つひ話相手ほしやと甘へて候。就ては誠に願ひ上げ兼ね候へど、外によるべなき我等、もし御出入の內よき者御座候はゞ、給金其他望にまかせ候へば、御えらび下され度伏して念じ上候、一寸御伺してよろづ御敎示仰がんと心得候も、何分人氣なければ小さき家も明けかね失禮いたし候先は右御依賴までかしこ。

（評）新婦の面影見えて、をかし。

○家出せし婢の宅へ

名古屋　宮脇とし子

――（前略）――

されば　當家に於ても本人不斷の働き振より、よき婢得つとうれしきことに思ひ居候ひし、然るに突然、昨夜――夕飯より風呂迄は慥に皆と一緒にて候ひし由――當家主人は旅の留守にもあり、代參旁々昨夜程近き地藏堂へ家內打連れ參詣に出掛候少しの留守の間、時が時なれば明日改めてお願ひしてはと申候ひし留守居の婢に、しばしなりとて行先も告げず、こなたまた新らしき人なればとあまり深くも質さで止みぬとの由、三十分程なりとて、そは〳〵立出で候て其儘。今日に至りて荷物さへ皆目見當らずとのことに、打見たる所內氣の樣子にもあり、はしたなの爭ひなどもとみな〳〵に色々尋ねて候ひしも何の心當り候はずとのこと。

今はゝや定めし當人には御許へ立歸り居て候なるべく、いかなる面白からぬことの有てかは知らず、當方に於ては、何の不足もなき子にて候へば、何れ色々ご談合の上、當人の胸さへ治り候以上は、いつなりとも、お連れ來し候はゞ、もとのごとこなたに何の遠慮候はねば、よく〳〵お話の上、否やのご返事下され度、當家に於ても代りの都合の候へば――（後畧）――

（評）委曲をつくせり、例の厭はしき雛形のなきは嬉し。

○貞節やぶられし友へ

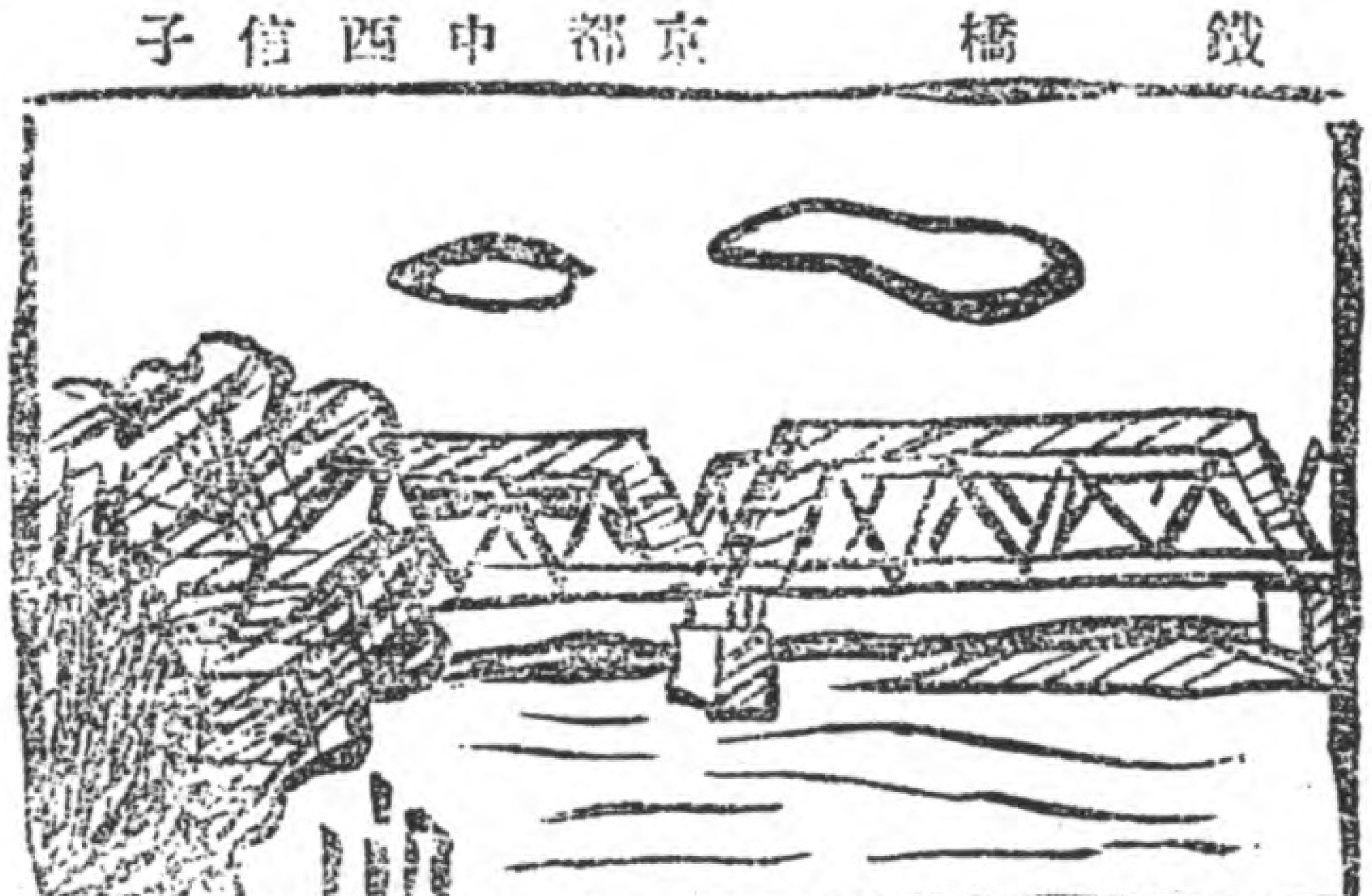
横濱　錦戸　彩子

朝毎に置く白露のそれにもまして繁きとおもほしませ。悲しきに泣き、怨めしきに流すは涙とは云へ、餘りの事に、堰あへぬ涙は世の涙とは思はれず覺え候。病得て、それ癒さむと多忙しき中の閑暇をぬすみて通ひし醫師の許なるを、通ひしは罪か仇か。病癒すのみ醫師の業なるを忘れ果てゝか、はた知らでか、塵の世にありて未だその汚に染まざる清き處女をとらへて、たゞ一時の……たゞ一時のなぐさみの犧性に屠り終んぬるぞ實に口惜しくも怨めしう候、弱き女の身の悲しさには、心は如何に潔きも、强き男の腕の力には抵抗得せず、竟にかゝる悲しき運命とは、吁、うたてやの世や。人に情の跡絶えて、罪に罪生む世の果か、さるにても御心の中や如何ならん、愁にみめよく生れませしは世の不幸に泣けとの神の宣告か。御胸の苦しさ思ひ知られて、夏雲のおごそかなる、綠のはゆる夕の色、萬象皆なべて涙の種ならざるは無之候。

さはさりながら友の君よ、こゝに君が一人の友あるをな忘れ給ひそ。過去の苦き杯は過去の不運と思ひ流して、世の人は棄てなば棄てよ、君と二人、いづちへなりと日の照る國へ去なん。世の罪の犧牲に供へられし君は、前よりも彌高く彌淸くおはすなるを。まことに聖なる神は君をも我をも喜び容れ給はなむ。悲しさにのみ閉ぢられ給ひて、大切なる御身害ひ給ふな、碎けむばかりの胸を抑制て書き込めし筆のあと悲しくも拙なけれど、親しき友のわざよと御ゆるし下されたく候。

（評）文あまり露骨に過ぎたり、かくてはなか〳〵に悲しかりける當時を追想せさせて、涙を新しうせしめん、今少しく婉曲にありたし。

鐵橋　京都　中西信子



○舟遊び

徳島縣　若槻淑子

花笑み、小鳥歌ふ長閑なる今日此頃の好時節を、空しく破窓の下に過さん事のいと本意なく思ひ居候折柄、舟遊びせばやとさる人よりすゝめられ候て、父母にも許され候間、御許樣にも別にお差支お在まし候ずば、御同遊下さるまじく候や、御尋ね申上候、日頃親しき君と連れ立ち、浪穩なる磯邊に舟浮べて、畫中の人となり、綠深き海原に眞帆片帆のゆきかふ麗はしき景色を眺めつゝ、御許樣はヴァイオリン、妾はピアノ、拙き妾の手すさびも隔てなき君と懇意なる船頭とより他には聞く人もなき、海上の船中に候間、共に睦まじく彈じて、浪のまに〳〵漂はせ、磯の松風靜によせくる浪の音、友呼び交はし鳴く濱千鳥の聲など、自然の友に調べ合はさば如何ばかり愉快ならん、殊に健康の爲にも至極よろしからんと存ぜられ候まゝ、何卒萬事おくり合せ遊ばされ、明日十時頃迄にぜひ〳〵御來車下されたく、何角用意致し御待ち申居候、餘は又いづれお目もじの上にと申し殘し候、先はあら〳〵御誘引のみ、かしこ。

（評）誘はれし人は、今宵の長きを喞つなるべし。

○靜岡なる妹へ

明石　白旗淸子

御手紙及び竹細工山葵漬、有難く落手致し候、御良人樣にも其許にも御無事の由、嬉しく存じ上候。

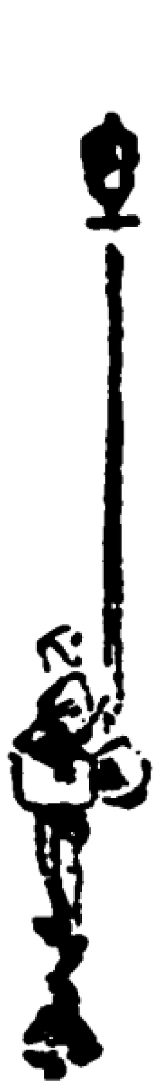
東都の御兄上にも去る二十日より演習にて、騎兵一大隊許りと共に習志野近傍へ、御發足なされ候との趣昨夕姉上よりの御書信に相見え候。こなた母上にも至極御壯健にて、「御隱居はよい子持ぢや」と何處へ行きても嬉しき御言葉に御座候。

嫁ぐ宵、母上よりも申聞されし如く、よく家政を整理して、家庭の平和を保ち行くは其許の心掛一つ、殊に軍人の家庭は儉素を重じて無駄の費なき樣、くだ〳〵しくは申さねど理想の新家庭は其許の胸にある事と存じ候。

御尋ねの甘鯛の味噌漬加減は、普通味噌百目に付酒二勺味醂三勺醬油三勺にて宜しく、而し是は一夜漬の割合にて、其日即座に用ふるには、醬油五勺になさるべく候。御良人樣大の御好物の由、出來そこねぬ樣　庖丁持つ手に指切り給ふな。

今し茶の間に乳母の訪ひ來て母樣のみ聲「芳子もまあおかげで安心だ、俊彦さんがお優しいから」と、御許のおうわさ、植込を洩れて聞え候。折角御自愛なされ度、御良人樣へは其許よりよしなに賴み上げ候。

（評）何處となく姉樣ぶりたる趣あり。



新歌謡　編輯局選評

三等

春が逝くとて若葉の影に白い胡蝶がなみだぐむ

落想を以て勝る

近江日野町字南大久保　松本きく子

四等

私しや桃咲く二俣尾育ちそゞろ戀しい鳥の聲

風韻を以て勝る

府下西多摩郡福生村　森田なか子

五等

月は朧にかすみは山に私の着物はあけぼのに

調子を以て勝る

下野　三浦香月

秀逸

○少女何處行く花籠さげて遠賀川原に花摘に

福岡縣　菜の花

○上野山から櫻が散つた散つた櫻は山下へ

麹町　吉敷里子

○備後名物たゝみのおもてひろき日本の家々に

尾道　高橋瀧子

○流れしづけき有田の川に黄金積み出す蜜柑舟

筑前　芳賀しげる

○私しや岡崎養鶏家の娘鶏に餌をやり玉子とる

三河　平野こと子

○新田五町に新畑七畝伊勢は初旅初詣り

青森縣　進藤花子

○わたしや縫物した金ためて東京博覽會みにゆかう

岡山縣　松木菫花

○籾もすれたし俵も出來た明日はお倉へ積み収め

香川縣　玉女

○姉の歌へば妹が踊る妹歌へば姉踊る

宮崎縣　濱砂まさよ子

○小野の里から立つ彼の煙り雉子の古巢は燒けたやら

磐城　刀紫子

○利根の川添菜の花一里白帆見えたり隠れたり

銀鈴富

○綠葉しげれる千歳の松に月がのぼりて鶴が啼く

秋田縣　抱美女

○可愛い鶏六時を告げる早う夕餉の支度しやう

紀伊　たんぽ

○東濃　青山朋子
蝶か白帆か沖邊を見れば霞がくれにちら／＼と

○備後　佐藤いち子
雨はふる／＼花瓣はちるに黄な蝶々はなぜのかぬ

○府下　白菊
僅になるなら此のふる雪をしまつてをきたい夏までも

○陸奥　若生なか子
川の向ふは菜の花盛り橋のこちらは緋桃さく

○本所　田中久子
裏の菜ばたの黄色い上に銀糸のやうな雨がふる

○福岡縣　宮原富美子
さても舊日記にはなにとけふも梅が香ゑひ心地

○駿河　大倉光代
松にからんで煙が黑い軍艦が出て行く駿河灣

○白井千代子
日本日の出りや滿洲は闇よ印度半年しや雨が降る

○越中　水野繁子
わしがさしたや絹張傘を新歌謡にも出そかしら

○鳥取　上山千重子
小田の蛙の音頭につれて雨唄和する枝蛙

○印旛郡　細谷梨子
一寸わたしの峯御覽まめが澤山めを出した

○上野　松村さだ子
くづれ窓から機歌もれる人の機織る母が病む

○長崎　天ケ瀬さだ子
春の女神の花見の宴は鳥が唄へば蝶が舞ふ

○福島縣　鎌田倍子
花のしとれて酒もりしたか雲雀歌へば蝶がまふ

○津山　千草
靜かに暮れ行く海邊の景色沖にや燈の花が咲く

○日向　靜子
春の深山に首かたむけてたてるわらびの一揃ひ

○玉村　横倉浪子
本も讀んだしお眉もゝんだどれさ縫ましよ花見衣

○播磨　矢島芳子
桃の名所へ近道二丁自轉車わたる背戸の橋

○遠江　絹村しにしが子
御飯食べます大磯原て見れば沖には御前崎

○淺草　とみ子
雨の晴間を嬉きた月に明日の日和を問ふ蛙

○大阪　姫百合
月の登て出た輕羅の衣は臺の陽炎の煙らし

（）春蘭子
江戸は花散る信濃は凍る凍る信濃が我が故郷

○青森縣　笹村玉江
霧は消え失せ青草萠えて朧ろに見ゆる津輕富士

○下總　三橋げん子
都の道には燈火つくがわしの田舍じや田へつける

○尾張　實沼あきか
蒼い海越し神宮拜み朝日背負ふて深呼吸

○巣鴨　關根りつ子
星が起きれば葦野寐るゝ葦起されば星ねむる

○下野　梅澤哲子
うたは雲雀よ舞踊は胡蝶小田の蛙は囃子役

○秋田縣　佐々木貞子
貝を拾ふ娘磯邊に二人沖に白帆は三つ四つ

○大阪　堅田きく子
今の小雨につひだまされて垣の朝顏黄昏に咲く

○羽前　加藤寒子
すみれたんぽゝ咲いたる庭に浮世知ない蝶がとぶ

○ 埼玉　長澤節子
風にふけ〳〵櫻よちれよちつたところを歌にしよ

○ 府下　森田喜代子
少女草摘む雲雀の野邊に菫花咲く蝴蝶塚

○ 小石川　秋田五百子
鶴と龜とを金絲で縫ふた小袖ほしたり京の春

○ 奈良縣　巾富よしみ
雲の一片花より出てゝ花にかくるゝ吉野山

○ 長崎　山口蝶子
長崎はた會さかんなものよはたて破産した人も有る

○ 上野　小川さと子
男山から虹橋かけて神の渡るよ女山

○ 駿河　しら藻
嫁て十八初丸髷や合せ鏡がはづかしい

○ 靜岡縣　がくみ女
富士のみ雪がおとゝひとけて裾の水車が今日廻る

○ 越後　瀧澤利子
山の上から吾家を見れば桃も櫻も咲いて居る

○ 下總　武田たき子
水は出ろてる流れは絶えず絶えぬ流れて面洗ふ

○ 福島　河野よし子
母の御墓に手向けし花を蝶が慕ふてまふて來る

○ 能登　砂山可祝
姉が招いだ團扇の下の妹がリボンに飛ぶ螢

○ 大阪　しら由樹女
友は海邊の波打ちぎはにわたしや一生山住ゐ

○ 神戸　森本つれ子
好きな姉さん明日から他家の人になるのと可愛妹

○ 紀伊　長井逝月子
瓦斯も電氣もない私の村は螢で灯はいらぬ

○ 能登　森田茂子
能登の名物大鰤小鰤九千位てまだ足らぬ

○ 長野縣　豐田たかの
電車自働車は東京て見たが空中飛行器はまだ見ない

○ 出雲　世良富栄子
大仙御山が雲の帶しめりや明日はどうても雨が降る

○ 小樽　香都良子
ゑぞが島根の白雪解て磯にや鰊の風が吹く

○ 紀伊　糸川みち子
潮はむらさき小松はみどり眞紅東雲初日の出

○ 信濃　中島いち子
春の柔風白帆に滿ちて夢の寶を乘せて來る

○ 北總　桃村女史
山家嬉れしや居ながら櫻夜は蛙の唄てれる

○ 鹿兒島　あやめ
鯛も取るれば三ッ葉も芽立つうまい御すしはまだ食べぬ

○ 府下　森田志滿子
お蠶當るし麥や取り上る明日は揃ふて田植唄

○ 岩代　星久子
昔は鬼すむ安達が原も今は花すむ公園地

○ 鳥取市　戸井久野
此所は田舍てまだ汽車見んが水車見せたや都人

○ 紀伊　文子
行こか戻ろか戻ろか行こか此處は追分瀨戸が原

○ 松江　長谷川信子
彌生うれしや城山の花見踊りにや名物さくら餅

○ 筑前　春野女史
筑波おろしのそよ風うけて利根の流れを帆がくだろ

○ 岩手縣　紅百合子
ちろが花だよ吹け春風よ朝にさいたら夕べちれ

評論文

文學士沼波瓊音先生選評

三等

○富仁論

上總千代田村　山田沖子

富人の職分は何ぞや、自ら勤めて華奢放逸を去り、質素適宜の生活の實例を示す第一也。已に隷屬する者の需要を慮りて適宜の供給を與ふる第二也。其他總べて餘剩の財を信用銀となし、社會の公益となるべき使用法を取る第三也。即ち富者は貧困なる同胞の世話役保管者となりて、その智識力量共に公衆の爲めに盡すべき職分在り矣。（カーネギー富の福音）

夫れ富は世界を動かすの力也。文明と共に富の力は倍々增長し來れり、富の前には絕代の偉人ナポレオンも其膝を屈せり、一のロスチャイルド家は鐵血宰相ビスマークをして其鼻息を窺はしめぬ。一の三菱社は堂々日本政府をして其向背に焦心せしめつゝ在り、富の向ふ所、殆んど天下に敵無からんとす、苟も仁者にして富まば天下を動かすこと掌を覆すよりも易し、但だ憾むらくは仁者富まざるのみ。

杜子美乃ち歌うて曰く、安治ニ廣廈千萬間ヿ、大庇ニ天下寒士ニ俱歡レ顏、風雨不レ動安如レ山、嗚呼何時眼前突兀見ニ此屋ヿ、吾廬獨破受ニ凍死ニ亦足。と、慈眼衆生を視る熱腸の仁人は、自ら凍死せんとするの寒士也。而も財嚢の重みに壓せられて煩悶するの富者は、眼底同情の涙乾きて自ら天と人とに對して功德の建つべきを知らず。嗟乎富者概して仁ならず、仁者多くは富まず、是れ豈人生無窮の一大恨事ならずや。

夫れ斯の如し、玆に於て乎我等は仁者の富まんことを望む、富者の仁ならんことを望む、仁を爲せば富まず、富を爲せば仁ならずとは決して終古不易の眞理ならず、富は力也、其の出で來るや亦力に據る、富は克己、勞作、常識、烱眼を意味す、富若し求むべくんば執鞭の士と雖も吾亦た之を爲さん、とは千古の金言、富の必しも罪惡と伴ふべき者に非ざるを知るに足らん、故に吾等は仁者の富まんことを望む、知らずや富は仁を行ふの大自在力なるを。若し夫れ富者の仁ならんことを望むに到りては、我等は全心を傾倒して告白せざるべからざるものあり。富は方便にして目的に非ず、如何に力あるも、方便は則ち方便に相違無し、富

は最後に非ず、最後に達するの段階也。知らず彼の富を求めて討死するの人は如何の了見かある。富を使用するの道も考へずして漫に富を作らんとするは、恰も目的の地を定めずして道を走るが如し、彼等は唯路傍に斃る丶の外無し、憐れむべからずや。

富を造る難きに非ず、富に處する難し。如何にして富を使用すべき乎は、如何にして富を作るべき乎の難題よりも尚ほ大なる難題也。彼等富者が此の難題に頓着せざるは、頓着するに遑あらざるが故乎。抑も解釋する能はざるが故乎。富者にして仁者ならんか、即ち富に處するに於て何の難きことかある。諺に曰く、非道者の道路は崎嶇なりと。果して然らば仁者の道路は坦々たるべし、吾等は富者が仁者となるを以て、富に由て得らるべき總べての幸福を得、富に由て得らるべき總べての力を得、且つ其の力を活用する所以の捷徑たるを信ずる也。

如何にして富を使用する乎、仁にして富む者、富んで仁なる者、要は唯其の富を私せざるにあり。其の餘れるを割きて足らざる者に與ふるは、是れ人情の極致に非ずや、人は自ら助くるのみならず、亦互に助けざるべからず、強者の重きを擔ふは、人類の地球に存ぜん限りは、渝ふべからざる上帝の鐵律也。苟も富者にして其の富を私せずんば、天下の民皆な彼の富まざらんことを恐る、此の時に於て亦た何ぞ富に對する嫉惡あらんや、富を使用するの道、此に於てか容易也、簡單也、明白也。富者、貧者の爲めに其の重きを擔ふ、貧者は唯だ富者の倍々富まんことを祈るべし、富に伴ふ總べての罪障は去つて烟の如く、富に伴ふ總べての淸福は降りて雨の如けん。富も亦た此に到れば仁を行ふ大自在力となるべし。仁者の富も富者の仁も、其歸する處は則ち一也。

ゲーテ即ち曰く、富の何物たるかを解せずんば、以て富者たる能はずと。富は仁を行ふの方便也。富を懷いて罪を招く者は富の何物たるを解せず、亦富の淸福に預る能はざる也。極言すれば、彼等は富者たる能はざる也矣。

すゝはらひ　大和　勝井まさゑ



（評）文字雄渾、議論正大、渠の國民の膏血を絞つて私嚢を肥さんとする某々富豪の如き、之を讀まば果して如何なる顏かある。

四等　○愛

札幌北四條東二丁目一番地木下方　杉山萩枝

口に蘇張の辯あり、身にカーチギーの財ありとも愛なき人はとるにたらず、我等の世界は愛の世界、愛の天地なれば。

われらは愛に生れ、愛に死なん事を希望す、父母の愛兄弟の愛、姉妹の愛、朋友の愛、夫婦の愛、これを廣く云へば人生の愛、愛あるが故にわれらは人生に其存在の意義を認むるなり。

涙とは愛の源泉なり、其泉より心靈の自由、安慰の光明希望淙々として流れ出て普く人生に讃美の曲を奏で行くなり、悲しめる人は、先づ其泉に涙を洗ひ、惱めるもの靜に其流に心を灑ぐべし。

愛する時人の心清く、愛する時人の心平和なり、心清ければ罪惡なく、心平和なれば悔恨なし。

愛なき教育は、木偶教育なり、愛なき家庭は、呼吸せる墳墓なり、愛を解せずして道義を口にする、果して何の心ぞ、愛を索めずして、利を求むる、人生の値何處にか存する、愛はわれらの權威なり、我等の信仰なり、われら教へんとする時まづ愛し、われら諭さんとする時まづ愛す、愛の天地を他にして我等は步まず、愛にたち愛に行き愛に息ふ、吁愛なる哉、愛は人生の燈也。

（評）簡にして而も要をとらへ得たり。

五等　○瓦

伊勢宇治山田市久世戸町一三　神田仲子

世に價値なきものとし云へば瓦の如しと人々にいやしめられ譬へ草には必ず、瓦をあげて第一に指を屈すれど、却々さにあらず、げに瓦ばかり行ひの正しく尊ぶべきものは、今の世に、其類ひ少なかるべし、と想はるゝなり。

其もとは粘土とて價値なきねばき土なり、されど、それより、打たれ、たゝかれ、日に晒され、火の中の苦しき思ひをもだへ忍びて、やうやく使用にたへ得らるるに至るまでの、辛苦の程、想ふにもあまりあり。されど人は、かゝる苦しみを漕ぎぬけて、守りたるこの操をば、さまで、尊しとも思はで、同情もなく、瓦々とおとしめ嘲る、誤りの甚しきものなり、試に想へ、朔風膚をつんざく冬の日には、霜雪の苦しみを受け、盛夏の日には、くろがねも、熔けんばかりの、暑さにさいなまされ、篠つく雨もいとはず、耳をつんざく雷鳴の甚しき時さへ、おち恐れず、己が本分を全うせん

事をのみ、心にかけ、陰に、日向に、家のためのみを思ひて、水も漏らさぬ、心づかひ、別に、快樂をむさぼらんともせず、我が身の辛苦を打ち忘れ、すむ月かげを眺めては、己が心のかゞみとし、折々の雨に心のちりを洗ひては、益々其の本分を全うせんとのみ心がくるぞ、いと〱床しき、今の世の婦女子の行ひのよき鏡也、然るに瓦々とおとしむる、人々の心の奥ぞ知りがたき。

秀逸

（評）われ亦瓦となつて一生を送らんかな。

○夢

青森縣　佐々木きそ子

あゝ夢なるかな夢、夢は自然が與へし無税の園遊地ではあるまいか、小兒は此處に遊びて成長し壯者は此處に來たりて勞を癒され、老若男女を問はず、貴賤貧富の區別なし而も自由で、放任で、公平ではあるまいか、換言せば煩さい現實の浮世から、離れた美しい結構な理想境である。此の別天地は非常に具合よく出來て居るので、拾貳月にも花が咲き、七月にも雪がふる、食い次第、飲み次第、聞き次第、見次第、どんな事でもわけなく出來る。軒下に眠る乞食でも菰を被つて目をつぶれば珍膳美酒の饗宴を受くることもある。どんな華族樣も夢では、冬の日も汗が出ると云ふ苦勞をなめ、暑い寒いも知らない金滿家の若旦那樣も、百姓生活を味ふ事もある。夕風薫る白ばらのもとで泣いた失戀の少女も、夢ではひしと抱き合つて、相語り、相慰むることも出來る。片田舍のものでも、東京はおろか、ロンドンやパリーも見る事がある。僅か十分や貳拾分の、睡眠時間も夢では、生れてより死ぬるまで、暮して見る時もある。或は七時間や、八時間の、長の睡眠も、一二分に止まる事もある。時には一夜に七八種の多きに及ぶ時もある。

妾は屢々經驗がある、即ち、牛、馬、豆、山、石、等を、見る時はきつと幸がある、亦果物を食ふとか、或は栗等を拾ふと夢見る時は凶事がある。尚不思議なのは夢に妾の家に、近親知人の集合するか、珍味佳膳に座して、飲食すると、きつと家内にか親類知人とかに病人生じ、他人と口論の揚句の果腕力に及んで負くれば、必ず風邪におかされる。顧つて考へて見るに、死とは此の夢の永遠にさめざるものではなからうか、即ち此の人の世は大きい夢ではあるまいか。此の夢が死と云ふ警鐘



汽車ごと　常盤　今泉幾子

て破られる時てそこに新しい實有の世が開かるゝでなからうか、佛法にも人生の事物は一切空なりとある、然らば一切空なる現世を去つて、一切實有なる天國に安住することが吾人の急務ではなからうか、それでは死は吾人の爲に福音ではあるまいか、神は人生の一大夢幻なることを暗示すべく、毎夜小さい夢を撒いて行くのではなからうか、斯る疑問は夢あつて以來人間の心に與へたる神の啓示であらう。

（評）文中夢見の吉凶を說くところ三世相じみたり。

○信仰

三河　松子

人、生を受けて、信仰なくんば、恰も人躰に骨なきが如く、戀なきが如し、見よ、どんよりとして灰色をなし、何等の趣味も興味もなき、一朶の片雲も、一度び花やかなる夕陽に照されんか、忽ち燦然として光を放ち、金色に銀色に光彩陸離、目も眩まんばかりに變ずるに非ずや、人生亦斯の如し、夜三更四邊物靜かなる時、沈思一番人生の歸趣を考見よ、唯、冥々として廣野に友なき孤島の如く、沖に梶なき小舟の如く、何等の快樂何等の情趣かあらん、されどあゝ、されど、一度信仰を得て、御佛の御光に照されんか、忽ち其所に、人生の目的生じ、其所に永遠の生命は得らるゝなり、あゝ信仰の力亦偉大ならずや。

（評）眞摯なるおもむき現はれたり。

○情想について

島根縣　伊代延俊子

理や、元是れ人の意氣を沈ましむるもの、終に風雷叱咤の大活動をなす可らず。吾人は絕對的に情想を發揮せしめんと欲す、情の動く所之人の自性なり。理の向ふ所之直に外界の抑壓を感ず、吾人は己れを尊ぶ者なり。己の頭を肥滿せしめん事を欲する者なり、而して之實に大活動の起る所以、勝利の凱歌をあぐる所以ならずや。理とは何ぞ、之吾人の前に於ける塵のみ、埃のみ。人は曰く、世は情と理との爲めに日々刻々矛盾を來しつゝありと、然り、之事實なり。然れ共是無意義なり、噫、己を知らざる者よ。道德萬能主義にかぶれたる者よ。妄に情想に專制を加ふるものよ。一切生命の活動を迫害し、侮辱するものよ。汝等は汝等自らを縛して自由意志を妨げつゝあるを知らずや。自ら矛盾を作りつゝあるを知らずや。只己の向ふ所に走らば、何の矛盾か是あらむ。何の迫害か是あらむ。歌ふ前に、勞する前に理を考ふ。而して歌はざらんと欲し愛せざらんと勉む。是矛盾の端緒なり、煩悶の動機なり、歌はんと欲せば大に歌へ、愛せんと欲せば大に愛せよ。斯くて矛盾なく、擬着なく、汝の詩趣は迸り、汝の愛は成らん。

（評）理にのみよりて行動せば人生は冷かなるものとなり了らん、而も作者の言の如く、理をなみして情にのみよらんとするも亦非なり、要は情、理の孰れにも偏せざるにあり。

短文

編輯局選評

二等　○海苔漉

南葛飾郡瑞穂村
中里源左衛門方　中里きん子

寒國の諸灘が冬籠りを成さる頃當地では海苔製造に多忙く寒中朝早くより夜更まで水仕事をするのですからなか〳〵樂ではありません、けれども妾は健康になるのと母上に今日はよく働いたと賞めらるゝのが何よりうれしいのであります。

海苔巻も、うつかり食べてはいけません。

三等　○ひなどり

大阪北區天満橋筋
西三丁目三十二　村上栅

さきつ頃私の家に愛らしい鷄のひながかへりましたが其中の一羽が少し弱つて居りましたので火鉢の引出しに入れて鰹節をたべさしましたらすぐ元氣づいてとび出して火の中へはまりまして火傷を致しました。

をかしい。

四等　○ある夕べ

東京　康子

何となく人待つ様な思で私は門の柳に身を寄た、朦朧と暮た春の夕、月は當許の櫻の枝に懸つた、何思ふともなく無言に月を見つめて居たが、心寂しくなつてふと人の名を呼んで見た、答はない、影も見えぬ、何となく心に待つた人はあゝ遂に來ぬ人であつた。

靈韵縹緲。

五等　○雲雀

神戸市再度筋三
十九番ノ四十一　山本琴子

私のつい裏の野で毎日々々雲雀がおもしろそうにさへヅッて居ます、そして其ころがあまりよいのできゝとれて、いつも晝食をわすれた位です、雲雀もやはりおもしろくて晝の餌をたべるのをわすれて居るのでせうか。

有頂天。

秀逸

○柿の若葉

鹿兒島　格子

井戸端の柿の木芽をふき出す。米かしぐ毎釣瓦上ぐる毎いかにせはしくとも見上るに二三葉づゝ集まり出てし風情、かの春蘭の

花に似たり、秋の紅葉と共にめづべしとこそ思はるれ
若菜の美。

○うす絹　上總　鏡花女史

大切に折箱へ入れて枕元に置いた蠶が朝になつて一匹足らぬ眠りも桑も飽き果てた上簇前の今更何處を徘徊ふのかと探し乍ら不圖脱ぎ捨てた襦袢を見ると襞の深みに霞を曳いて瓢の樣な丸い薄絹。
天地開闢。

○一寸八分　本郷　本橋好子

一寸八分の者は短册の巾、屛風の緣、鴨の嘴、下駄の齒の間、男の襟巾、敷居の厚さ、觀世音樣の長。
なるほど短文。

○婚禮のおけいこ　京都　しげき

卒業生計りで婚禮式がありました、各鬮引でそれ〳〵人を極めました、處が妾は嫁さんの母にあたりました嫁さんは妾より二つ年上、婿さんは羽織袴、お酌人とお辭儀をする度に庇髮が、つき合ふので笑はずには居られませんてした。
本式一度で澤山なり。

○夕鳥　岐阜　篠田とみ

晴れたる空に、薄墨色のちり雲、オレンヂ色なす西の空の美くしさに恍惚たる折しも塒に急ぐ夕烏七羽、最後のが五番になり四番のが五番に最初のがそうら今に六番にまけそうだ急げ〳〵と力を握りし頃は、霞みて渡島半島の如き雲は何處へやら。
想ひは雲に入る。

○天地の花　奈良縣　中富よしみ

星の花と燈火の花とは靜かな夜の國の天地を遺憾なく裝飾した。然し夜は漸くたけなはとなつて地上の花は悉く落花してしまうたが、天上の花は少しも其姿をかへずに爛漫と咲き亂れて居る、地上の花を嘲けるかの樣。あゝ詩人の遊ぶべきは夜の國である。
春星。

○大黒柱　越の國　海の魚

皆さん笑つてはいやよ私の地方では機を織りて着物になす時其の織物の本を家の大黒柱につけ、あなたも着ませう私も着ようといふと着物を澤山こしらへてもらひますといひますから、姉さんと私といつも其通りします。
大黒柱もなく、着物もなし。

○我が家と雛子　靜岡縣　絹村すゑ

前に菜の花黃金の臺の如く東に織屋の音高く西に名高き大興寺北に大なる學校其の間にあるのが妾の家よ。雛子が三羽飼つてあるが、雄が其の内のどれか見分をつける人がないのですす愛らしきこと私の樣です。
私の樣ですは驚きました。

○三年前　北多摩　白菊

私十五六の時には、着物を長く着るのが嫌いていつも足が二寸も出て居たのが、今ではあまり短く着るとはづかしい氣がして足が見えぬやうに、着て居ります

其時と今と、どちらがよろしいか。

○機織　群馬縣　小暮たつ子

妾は小學校をさがると、すぐ姉さんに、機を織るのを敎へてもらつたのよ始めは糸ばかり切つて、少しも織れませんでしたが、今では一日に、二すみぐらゐ織れるようになりました。

小さき織姫。

○薪　岐阜　花村浪子

私の家ねちつとも薪がいりませんのなぜですか皆樣御存知？　裏に大きな大きな松林がありましてね、日曜日にはいつでも妹と一しよにくまでを一本づゝ持つてその林の中へはいりますの、何して居ますか、晝までは新歌謡の聲が林を洩れて聞えるてせう。

星はみそらに葉は野邊に……。

○花日記　上總　柴崎美村女

洗濯　成田町　三橋げん子



六日、昨夜の雨に、雛の桃の蕾三つ四つ綻んだ。

七日、妹のしづちやんが、姉ちやんもう是が咲きましたよと、菫の花を二三本持つて來た。

八日、鈴子の君、菜花の寫生を繪葉書にして給はる。

九日、窓を押せば軒場の紅梅、風なきに四五片バラ〳〵と散りかゝる。

やがて落花日記。

○初奉公　安房　岩崎つゆ子

明日は愈々お奉行に行くのです、先のお主人はどんな御方であらう、など色色な事を思ひ浮べながらふと寢返りをすると、豆ランプの光はぼんやり、母樣の御顏を輝して、妹の雪ちやんが私の袂を確乎と抑へて居たので、思はず泣きました。

妹は夢にも放たじと。

○妾の名　遠江　野菊

私の名は十人十色に呼びますの花さんとはエンゲージしたハスバンド花子さん望月さんとは御友達姉樣とは妾の可愛い妹や弟、孃やと呼び給ふは父母の君、孃樣

とは妾が知れる人、やさしい聲で先生とは我が愛の教子。

野菊さんとは誰が呼ぶ。

◎御飯たき　　府下　白菊

去年まで下女の出代りの時は、後のくるまで、人を、たのむだのですが、今年は私も十八になりましたから母樣にそうゆふて私がする事にしました。一番初めの時は御飯が少しやわらか過ぎましたがお汁はよいかげんに出來たと、ほめられました。

お給金はいかほど。

◎妾がおもひごと　　青森縣　佐々木きそ子

蝶や蜂がたんぽゝやすみれの花に折角面白く遊んで居るのが、近頃は動物採集の名をかりて、無暗に追ふやら、押つぶすやら、遊び半分の連がある、ほんにかわゆくて、たまらない、だから妾は大きくなつたら、百坪なり、千坪なり、すみれや、たんぽゝなどを澤山植えて、大きな花壇を作つて、日本國中の蝶や蜂や集めて、此の平和な春を、樂しく暮させて見たい。

園主の博愛、禽獸に及ぶ。

◎人と色　　京都　濱部郭公

お祖父樣は茶色でお祖母樣は黑父樣は紺で母樣は鼠、姉樣は水色で私は紫、妹は桃色で弟は黄色、書生は海老茶で女中に青。

家族の染分。

◎結婚後　　陸前　松枝

在校中はテニスのチャンピオンとして袴の裾輕々と運動ぐつを穿てお手からラケットをお放しなすつた事のない高子樣は引込主義の奥樣を氣どられ組中第一の無口で御用の他は何も仰せられた事のない文子樣は交際社會の女王と稱せらるゝやうな令夫人と變られました

松枝さんは何う變るでせう。

◎朝顔　　茨城縣　ひさ子

朝早く起き出でゝ何心なく朝顔畑のそばへ行つて見ると今や蕾を開かんとするのがいくつもある其勢のよいこと今に自分が一番美しい花になるのだと言はぬばかり。

青春の意氣。

◎野の一つ家　　麴町　里子

私の乳母の家は野の一つ家であります、そうですけれど天然の美を以て、蝶や小鳥のさゝめ事もきかれます町には一里、尋ねた時の土産は、花に小鳥は清やがもつ、三毛の小猫は乳母やに賴んで、ふろしき包にしてかへりました。

風呂敷鳴く。

○蝶の捕獲　麹町　淺井千鳥子

學校で理科の先生が蝶を針にさして持つて來るやうにとの御命令、一日裏畑で蝶捕獲の任を全くしやうと目つけて居ますと、丁度まん圓く咲いて居る菜の花の中に、可愛い蝶が蜜をすつて居りますのよ、何程勇氣を出しても如何して之が針にさゝれましやう。

よし理科の說明は聞かずとも。

○宮さんの心　飛驒　あやめ子

宮さんは貫一さんを嫌ふたのじやありません、又富山さんを慕うたのでもありません、では宮さんの心は如何なの？宮さんは貫一さんの氣風、熱烈な愛情に富山さんの富と地位とを持た人を望んで居たのです。

換言すれば女の心。

○鶯の聲　岩代　岸野常子

「花咲く春の曙を早とく起て見よかしと、啼く鶯も心して人の夢をぞ醒しけるホーホケキヨ……」と聲張上て歌ふた途端に、花を隔てた向ひの櫻山で一聲朗らかな鶯の聲！道理で私の聲の反響としては餘りによすぎると思ひました。

感動したのでせう。

○お顏　中谷　近藤くら子

私は、毎日晝は、道具器械を列べて、電話の本局、浪花、新橋、幾千の人と交り、夜は、挿花鉢植を相手に、文壇の短文、和歌、文章幾萬の人と交つてゐますが、殘念ながら、皆さんのお顏を、一度も拜見したことありません。

想像に任す。

○手製のもの　周防　をみなへし子

着物が上から下まで手織、そして簪も靴下も、襦袢の襟は白のきれを買つて、それに簡單な繡をしたものさては足駄の緒まで、學校からかへつては、自分で製へるのだから、なか〳〵一寸の隙もない。

手がもと。

○私達兄弟　熊本市　つね子

兄樣は、中尉の制服で勇吉が引ひて來た馬に乘つて、私はいつもの銘仙の着物に、海老茶の袴、弟は小學校の制帽に、小倉の袴はいて。而して父なき私等兄弟は、毎朝玄關まで母樣に送られて出ますのよ。

「父なき」の三字活躍す。

○明神山　滋賀縣　辰井ふみ子

魔を使ふ夫婦が一昨年から住むで居ると言ふので、過去三年間誰れも薪を伐る事なかつた明神山は、山櫻深山つゝじ等がいつの間にか成長して、美くしう花の五

彩を傲つてをります。

山祇、自然に降伏す。

○うぐひす　三河　尾村ちよ

たまさかの日曜、今日こそ勉强と、梅匂ふ座敷の障子あけはなちて、文机とりいだせば何處から來たか、こゑうるはしき鶯の、しきりとうたふに、歌にやせん、文にやせんと、筆とりつ、大切の小半日を、とうとう、つりこまれてしまつた。

つりこまれたのが乃ち詩。

○お菊蟲　播磨　岩崎榮子

根みを呑むで姫路皿屋敷の露と消ゑしお菊の亡魂だと言傳へられたお菊蟲を裏庭で見付たので白紙に包むで佛壇の引出しに入れて置た、廿日目の今日ふと思ひ出して包を開けたら中から黑い大きなそして金の紋ある蝶がひら〳〵と舞上りました。

鏡花式。

○親類　弘前市　秋月生

私に從弟は六十八人あります、そして伯叔父母さんは十八人よ、私の祖母さんに孫は八十一人曾孫は八人、玄孫は一人もないの、そして内の御飯たきや子守はみな親類の人よ、いつでも祖母さんは親類皆で寫眞とる時大々判でなければならないつて笑ふのよ。

卒業生以上。

○思ひ出　本郷　朝井ちとせ

「兄樣お萩召上がれな」「ウン牡丹餅か」と見向も仕無いでシガーの煙輪に吹きつゝ、オヽ十年前には土筆摘むとて二人で裏の松原へ行つて母樣に頂いた大切なお團子包を失くしてべそかいたくせに！と思ひ出して我知らずホヽヽ、「何が可笑しいのだ」愈々眞面目なお顏つき。

澄し込んでも當年の團子が知つて居る。

○椿　滋賀の里　白井梅香

私の家の中庭と面の庭とに一本づゝ椿の木があります大きさも丈も同じ位であるのに中庭のは見事に一ぱい紅の花が咲きますが面のは毎春二三輪より多く咲きません何故でせうか。

神のみこゝろでせう。

○寫眞　京都　小川きよ子

このあひだから妹の芳ちやんと二人で寫眞を寫すのに如何してうつしたらいゝかと、毎日鏡の前で手をひいてみたり、くんでみたりしていたが今日とう〳〵寫したどんなに寫つてゐるか早く見たくつて〳〵よく寫つていたら女子文壇へ送ろうと思つて。

寫眞やさん、うまく頼みます。

○冷水摩擦　　石狩　繪澤元子

お父つさんが昨年の秋なんでも身躰を健康にするには冷い水で毎朝身躰をふかなければいかぬと申されましたから夫から私は毎朝肌をぬいて一日も休まずに行つてをります、其故か夫れからは一度も風邪を引いた事がありません、冷水摩擦ほど好いものはありません。

冷たからうと言ふ人、北海の女子に對して顔色なし。

○男の子　　韓國　愛子

私は今朝七時に起きて御顔を洗て居ると兄さんが來て昨夜姉さんがあかんぼを生んだから早く來て御覧と云ふてきたので女の子、男の子と聞たら何とも云はずに歸てしまつたの、私可愛い女の子であれば好いと思て急いて行て見れば、あゝくやしい男の子なのです。

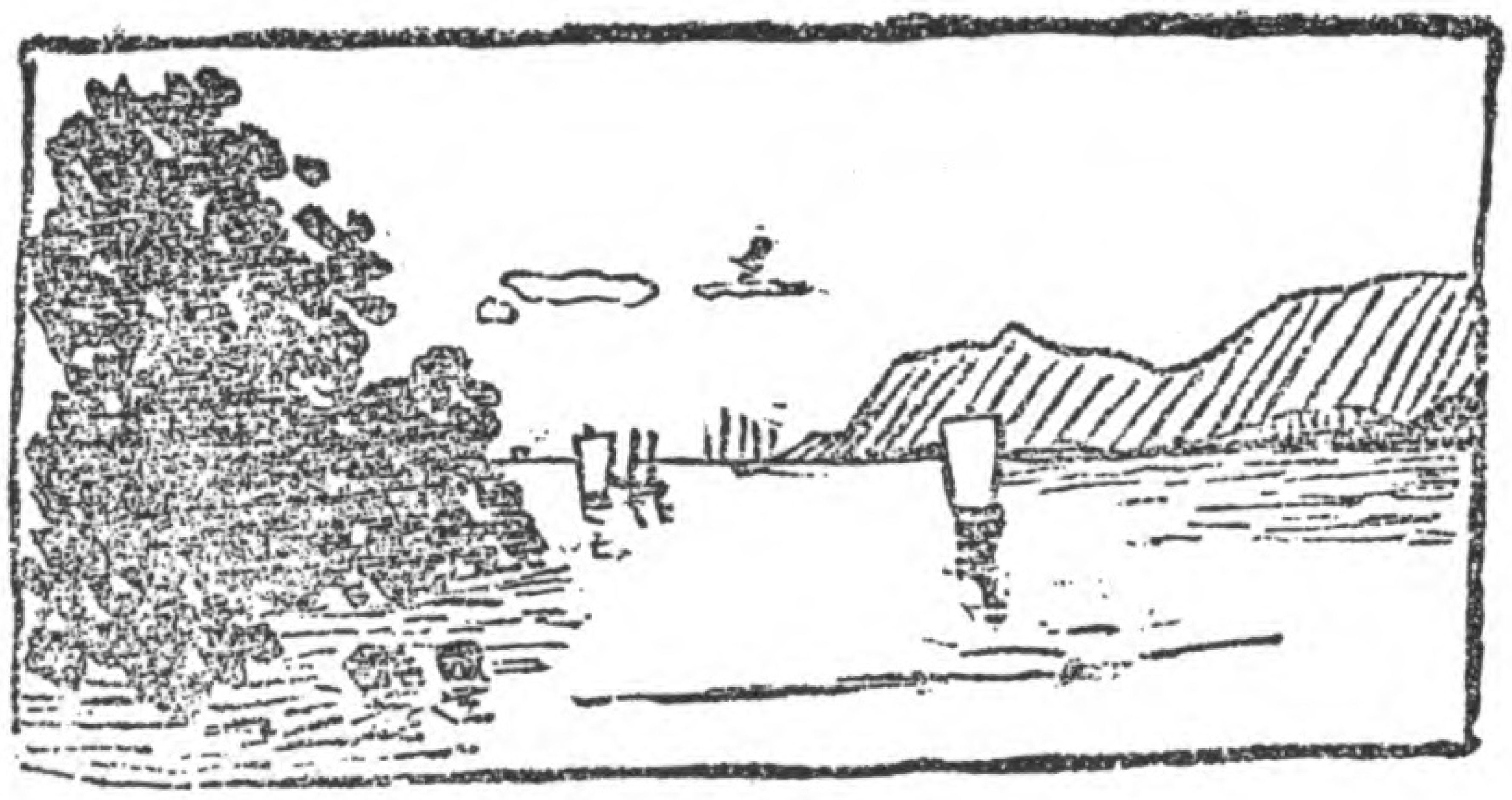
○日記の中より　　明石　白旗清子

五月二日、よく晴れきつた晩だ。昔御秘藏の白銀の瓶が地に埋れて、夜な／＼を其邊に、青い火の燃えたと云ふ、庄屋樣の坪先て、「今年の嫁菜はよう出來た……」可愛い、聲がよく揃つて、新月に星は降る樣だ。

○菫とポチ　　岐阜　靜香

お庭の芝生に毎年濃い紫の菫がほんの二株か三株咲きますが昨日のこと私は愛犬のポチと芝生で戯れて居ますとポチの下にチラと紫が見えましたからアラとポチをどけて見ますと之こそお馴染の菫さんてしたポチは私に今年の菫さんを紹介してくれたのてせう。

新宮河口　　紀伊　芳賀若葉子



○蜘蛛の巣　　島根縣　長谷川信子

私が一ヶ月ばかりも忙がしくつて好む書物もよむ隙なくつて空しく本箱の中に入れて居ましたが此頃は大そう隙になつて徒然なるまゝかの本箱の蓋を取れば「アラマー」驚きましたよ箱の前に蜘蛛の巣が一面にかゝつて居ました。

○若葉の私語　　陸奥　柳田翠

四日續いた雨は、今朝なごりなく霽れた、空には一點の雲もない、念の爲め今一度見廻しても、正に一點の雲もない、庭の飛石は見る間に乾く、小鳥は何處からか出てくる、嬉しさに築山の陰まで來て見れば、活氣に充てる木々の若葉は、幽かな聲で私語いて居つた。

○刺繍　　鹿児島　たんぽゝ

私は高等小學校を卒えてから皆女は裁縫が第一てあるから裁縫専科に入學させると仰有ッたら私は刺繍が一番好きてあるからときかないで刺繍専科に志願いたしましたら去年優等にて首尾よく卒へました其の時の私のうれしさは今にもわすれません之も皆父上師の御かげてすのれ。

○桔梗の芽　　紀伊　芳洲女史

昨年祖母が持つて來て下さつたあの桔梗大事に一番立派な鉢に植ゑて毎朝水をやつて居りました。年は暮れ春は來て慈悲深い天日樣は溫に照して下さるものてすから桔梗は喜んで少し黑ずんだ若芽を一面に出して居ます。今年はさだめてあの可愛らしい紫の花が澤山咲くてあらう。其時には自分の机の上にも活けて見ませう。

○死の念　　沼津　鈴木たかみ

齒がいたんで、寢られぬ夜半、ふと念頭に浮んだのは、人は死んだら、どうなるだらうといふ事てした。死んだらどうなる、棺に入れられ、土

にうづめられた後は、幾千萬年經ても、もう此世に出る事は出來ないのだと、思うと急に悲しい、いやな氣がして、今にも、死んで行く樣でした

○黄金草　韓國　鏡白萩子

春の女神の。天降ります途すがら。春雨して。美しき冠の滴。それが地に點じて黄金草となつたのである。

○妾の弟　廣島縣　伊藤靈子

妾の弟は學校から歸つてもいつもおたゆうさんのまねをして神様ばかり拜みますほんにあの神樣を拜むくらゐ熱心に勉强してくれたら妾どのくらゐうれしいでしよう。

○田植　茨城縣　仲田志幾子

妾も今日は日曜ですから田植のお手傳ひをしませうと、それ〳〵仕度をして田甫へ行つて植ゑましたら皆さんのは、株がちやんとそろつてきれいですけれど妾の植ゑた所はなんだかくの字の樣。

○長閑　信濃　花園守

餘りに好い日和なので不沙汰の詫びがてら友を訪づれての歸るさ、立てまわした黒板塀の側を通るとふし穴から、頬をなめづる樣な微風が流れて來て同時に床しい花の香がぷんと！思はず微笑むと塀の中でホーホケキヨ……。

○蝶を埋めて　茨城縣　嫁菜子

蝶の死骸、蝶の死骸、花に別れて枯草の根下に死んだ蝶よ、蝶よ、こゝにも一人同じ身の、死ぬに死なれずさまよひゐるを、其方の靈は何とみるぞ、こちらからはこうしてあげるのを嬉しいと思ふか、金釵の先で穴をほつてうめてやつた、つげの小櫛もそへて。

○二つ三つ　陸中　高橋葉子

梅、滿開よりは、漸く蕾を破りて二ッ三ッこそ愛らし、菫、一面に咲くよりは、野末に二ッ三ッこそ優し、百合、脫き程あるよりは、綠の中に二ッ三ッこそ尊とし。

人、口を開いて飽くまで笑ふよりは、二ッ三ッ聲ころがるは奥床し。

○母を思ふ　羽後　千葉みつ子

妾の親しい御友達は大抵皆諸學校に入學したりさもなくば机を友として一心に勉强して居りますが妾はお母樣が歸らぬあの世に旅立たれてからは每日々々家に居てお母樣に代つて仕事をしなければなりません。

○電信鳩　横町　梅澤あい子

私は朝からの讀書に倦て椽側の處に出た淡紅の櫻は今やほころび初め小蝶は樂しげにすみれと芝生に遊び池の鯉は嬉しげに馳せまわつてゐるかなたから可愛鳩が飛てきて終に私の手にとまりましたよく見たら初子樣の電信鳩。

○慈母のみ姿　紀伊　春圃愚女

樂しき冬の休みを終へて、學びの旅にいて立つ一と日門前に咲ける梅の樹の間に立ちて、妾の行くのを、幽かになるまで見送り給ふ母のみ姿、あゝ溫かきその御情、妾は思はず暗淚に咽びました。

○自轉車　小石川　明石光子

「オヤお歸りかしら」と耳を傾けましたがふと思ひ返すと、夫の君は出張してお留守でした。

自轉車のベルは其まゝ遠く行き過ぎて了ひました。

○田舍の人　神戸　弓月

私田舍の人大嫌ひ來なさつたらすぐ最う二三年したら新郎樣を貰はなければなりませんから最う學校をやめて家を治める事を研究をなさつた方が貴女の爲ですまして女は勉强をしても何にもなりませんから早く御やめなさいと言はれますから私田舍の人大々嫌ひ。

○私の日課　山田市　神田仲子

私は每朝起きますと、顏を洗つて、否、心迄も深いにして、大神宮樣を遙拜しまして、妹は簡袖私は手拭を姉さんかぶりにして座敷のお掃除、それから私は裁縫妹は學校、おひるから妹と水をくんで、お父樣方や近處の人達を入らすお湯をたきますの、之れが私の日課です。

○フナ　栃木縣　金田錦子

昨夜大雨が降りましたので川から上つたのか天から降たのか大きなフナが水たまりにくるしそうに目を白黑して居りますからたらいに入れてかいほうしてやりましたらだん〳〵勢附てきたから池にはなしてやりました。

○雀の子

出雲　世良富美子

弟が愛らしい雀の子を一羽、籠に入れて軒端に吊つて居ますと、何處からか親雀が來て、しきりに餌を持つて來てやります、子雀も親雀を戀ふて、外へ出やうと狂ひ廻るので、妾は遂に見兼ねて、弟の留守にそつと放してやりました。

○故鄕

遠江　又平蝶子

私の家内は六人ありまして母と私が二人のみが女ですから私は小さな庭に花を植ゑ又花いけや箏を樂みとして居りますと弟や兄さんに花を取られたりいぢめられますからもう一生宅には歸らないと思ひましたが休日がすみますとはや學校に行くのがいやになります。

○空想

府下　森田喜代子

生れた年に植ゑ置いた桐が一本あればお嫁に行く時の簞笥が買はれると聞た故、君ちやんが生れた年に植ゑた桐の木を見る度私は、君ちやんがお嫁に行く時立派な着物を着て簞笥の前に座る様に、今から想はれて其度嬉しい感に打たれるのであります。

○雀

埼玉　長澤せつ子

私が朝梨の木の下で深呼吸をなしふと上を見ると小雀が梨の花片を取つては散らしちり行くを見てはそばに居る雀としきりに何か語つて居ますこれはきつと親子であつて、毎日大空を自由に飛び親子共に樂しく月日を送つて居るのだろうと心に悅しく感じた。

○五年ぶり

紀伊　林ゆき子

妾は父母の膝下を離れ、東都に遊學しました其時弟や妹に停車場まで送られ別れのつらさよ、ほろりと淚をたれた、其時まだ妹は母の懷にあつたよ、今年女學校卒業して五年ぶりで歸つた、ねえさんおかへりと、手をついて妹が言つた、其の成長してあつたに、おどろいたよ。

○あゝ幼き鶯

千葉縣　三橋千代子

日頃の暖氣にてやつとのび開いた桑の芽、時ならぬ今朝の大霜でぐつたりと、あゝ可愛幼き鶯よ、あゝ不憫、外に食ふ物は無いてあらうか。

○希望

福岡　林白月子

妾の文章が一等にのつて洋傘もらつた事が夢にても見たうございます。

○おぼろ夜

鳥取市　上山千重子

乳母も歸らず、文も來ず、下男の茂平爺が夜の物調へて部屋に下りてはさすがにわびしき春雨の宵、術なきまゝ姉が形見の歌卷など取り出てゝしばしな慰さみつ、ふと妻戸押せば、玉水の音いつしか絕へて、おぼろ夜なこぼれ匂ふ櫻三ひら五片。

○蛙を助く

越中　水野鎮子

夕方庭に出ましたら大蛇が蛙を飮もうとして居る所です妾が何かよい工夫がないかと考へて居たらふと父が敎へた事を思ひ九の字を三度迺まに書いて蛙を助けてやりましたけれ共未に恩歸しに來ません。

○つみ草

播磨　矢島つゆ子

清きは岩淸水、艷なるは舞姬の口紅、神々しきは寺の釣鐘、殊勝らしきは神前の狛犬、羨ましきは春雨の相合傘、床しきは柴垣もるゝ箏の音、憎らしきは小說の高利貸、

○鸚鵡

小石川　はな子

春雨が降て櫻散る夕窓によつて庭を眺めてゐると、又亡き姉樣の事が忍ばれます。不意に花ちやん丈夫でねと、軒場の籠に姉樣の遺愛の鸚鵡又生前に敎へられた言葉を繰返して居ます、私がさとしても聞かないていつても泣かされます。

○白梅花

敦賀　香時子

今から丁度三年前、私が十三の時でした。お母樣がお惡るいので、お醫者まで……、急いて歸へる吉田樣のお社の所で、ふつつりと切れた草履の紅緖。其時に通りがゝりに助けて下すつた、あの美くしい高まげの人の御手からすべつたのが、是此白梅てございます。

○お池の金魚

仙臺　文子

私の家のお庭の小池には金魚が澤山居ります、其の側には大きくて苔だらけの櫻の樹がありますが今年も每年の樣に美くしく咲きましたが昨日の風で皆散つて小池の面を埋めてしまひました、中の金魚は空を見る事もできないてさぞ困つて居るてせう。

○機屋

越後　土田哲子

私のお隣は機屋ですが、多くの工女が朝は東が白むとはね起て、夜はす

二時迄も息もつかずに機を織て居るのですが、さはがしいの何のつてこぼして計り居りましたが、鈴へて見りや質に感心な者です、私も此頭ては新知識が出て、不平の起た時心の銘にするのです。

○新　嫁　　鳥取縣　桑本さゝ子

先度、彼來たお隣家のお嫁さんが丁度、今うちの井戸にお水を汲みに被來いましたから、私は障子の破れ目から、そつと覗いて見ました、丸い色の白い美しい顔で髮は結ひたての島田、それを先刻汲み上げなさつた桶の中の水にうつして恥かしそうに見ていらつしやいます。

○青　木　　大阪　牧山久子

私は昨年朋友の家から、従君のお墓の近處に有つたと云ふ、青木の苗を頂きましたので可愛がつて植ゑて置きましたら、今年は花が咲きました。而も美しい海老茶色に、私は今まで白色しか見た事が有りませんので不思議に思ひました。

○お見合　　長野　春　蘭　子

姉樣は常に大人數い内氣な外出などした事もなく物事が初々しい人でした。けれ共智君が被入つてお見合の時は母樣に言はれないでも立派に御挨拶をなすつた。常は活潑が過ぎてお轉婆に傾いた私が扨此場合の時はホヽヽ、其日は逃げ出して了つたわ。

○女の子　　神戸市　松室麗雨女

姉樣は御庭の櫻がよく開いた昨日花の樣な女子を御生みなすつた。ホントに可愛らしくて妾も早くあの樣になりたいと思ひましたの、姉樣も初めてなので大喜びですのよ。妾は春だから蝶子花子春子等の名がよいかと思ひます。

○春の朝　　青森縣　笹村玉江

日は未だ昇らない朝、清い香りに誘はれて庭に出ますと、間垣のそばにある、紅の椿の花が稍々ひらいて、美しい露が宿つて居ます、そうして和い風が戦ぐたんびに、ほろ〳〵と玉の雫が青葉を辷べつて、胡蝶の姿はまだ見えなかつたのです。

○初夏の夕　　淺草　と　み　子

湯上りの頬のほてりを輕き袂に包みて下り立てば青葉若葉に風少し立ちてほろ〳〵と晞び落つる露を雨かと迦る程ぞいはむ方なき。かつは軒の忍草に月の光さへほの白うさして。かゝる折にこそ時鳥の初音もがなとそゞろはしうも心急かれて。

○宿が濱　　越前　新保勝子

ひた〳〵と寄する晨の新潮は美しい汀の小貝を浸して藻の香をつゝむ眞白い花を咲かしてゐる。靄匂ふ平和なこの曲汀の曉色を讃美の不斷の詩なのであらう。優しい小貝に囁きてかくていく千とせ、明けゆく汀の日ごと、ざんぶ、ざんぶや。

○豐後富士　　大分縣　糸　柳

私の家の裏から一里程向ふに高い山があります形が名高い富にある富士に似て居りますので人が此山を名づけて豐後富士と申します。

○肥り肉　　靜岡縣　乙　女

頬なぞは脹らんで今にも落さう、腕は母樣の倍もあるの、そして着物の上からも乳房のふつくりして居るのが能く知れて私耻かしいの、夫を兄樣はお多福だから轉んでも鼻は欽かないとお調弄なさるし、父樣は柔らかくて甘さうだとお賞めになります。

○すみれ　　韓國　角田矢須惠

昨日散歩の折に、まだ蕾のを、根こぎにして來て、鉢へ植ゑといたら、まあ、可愛じやありませんか、今朝起きて見ると、奇麗に花が開いて居るのよ。

○三本の梅　　岩代　根本松江

背戸に三本ある梅の、一本は、そろ〳〵羽織が重くなつた頃笑ひ初めて他の一本は漸く綿入れが厭やになつた頃、而して殘りの一本は、全く袷衣に着換え時、初めて床しい香ひを放つのである。

○花のいろ〳〵　　遠江　三室常子

花は皆美し、紅き、白き、黄に、紫に、色はいろ〳〵有れど何れを好み何れを惡まんようはなし、薔花の可愛き、百合の女らしき、水仙の潔き梅のゆかしき、櫻の美しき、蓮の寂しきなど或は鬼薊の鬼々しき、野菊の哀れさ、牡丹の氣高き、みなそれ〳〵の運命なるべし。

○田舍のハイカラ　三河　貞子

私し村て、嫌ひな人は黒野先生(村の小學敎師)髪が半分位い白い、其の白い髪に焼鏝をあて、コスメチックをつける、目は細ひ、鼻は抵い、口が尖がつて居る、そばに行くと、變な香ひが、ぷんと、私し田舍のハイカラ大嫌ひ

○子守　長崎市　峯時子

樂な樣ても子守位氣骨の折れる物は有りません ある日守が里へ行きましたから私代つて居りましたが今かはひ盛りの正ちやん其世話のやける事と言つたら縫物して居た方が何程増しか知れませんてすから私これから暇の時は代つて守も休まして遣うと思ひました。

○夕やけ　近江　松本菊子

逝く春の、名殘を惜むが如く、いざよふ夕日の光は、こなたの流を照し瑠璃色をしてゐる、忽ちうすれて紺色となり、又眞紅の色に變じた、あだかも失意の人の子が、神の御手により前途に光明を認めて、向上に志した樣に思はれた。

○クスダマ　北海道　けさ子

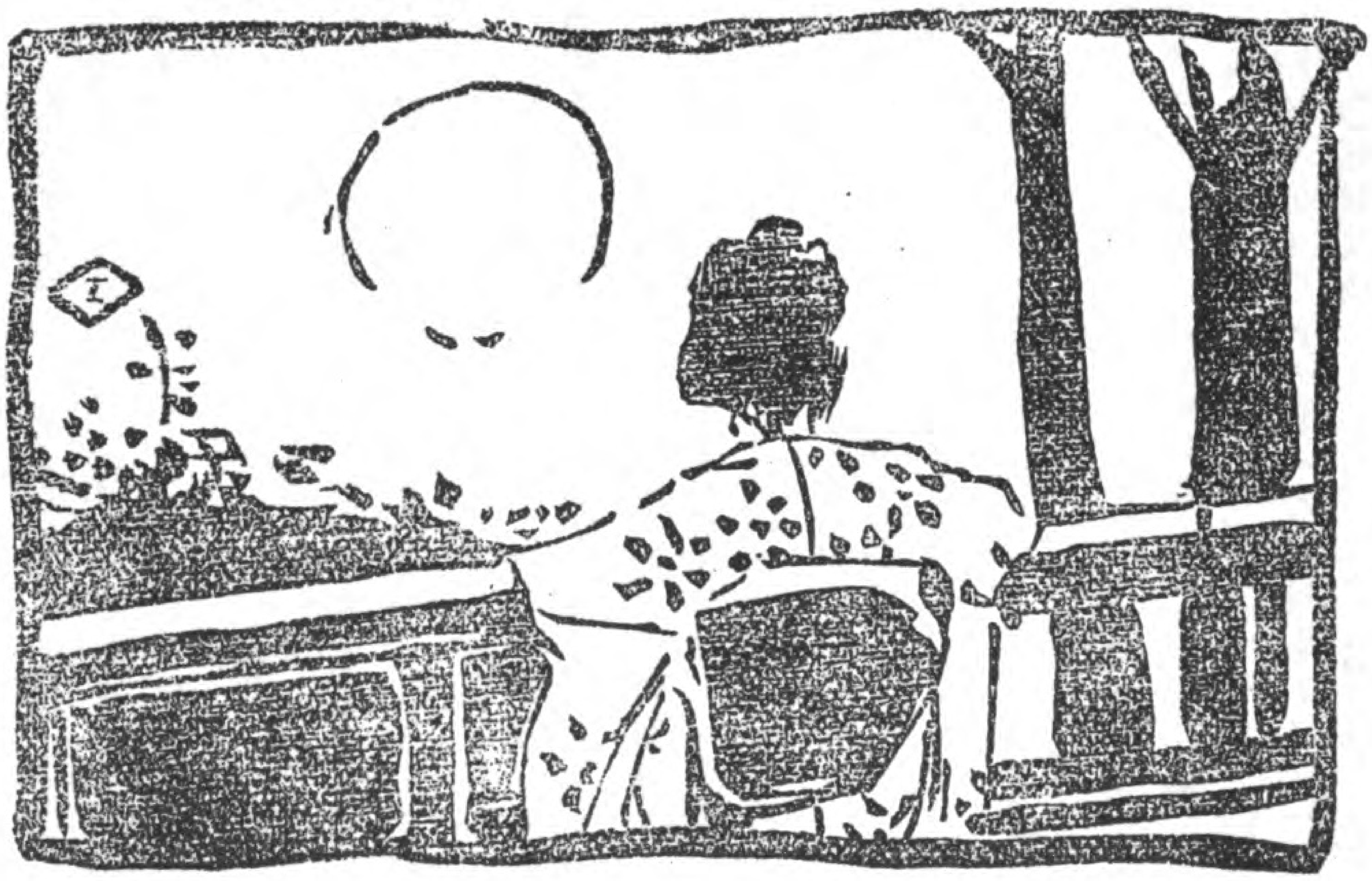
靑、赤、黄、紫などの色紙で、小さな、「クスダマ」を七八つも作つて軒下につるして置きました。

或朝障子をあけて見ますと、大きな蝶々が、ひらひらと、どんな夢をさましたてしよう。

○四五年　安房　さとり

私の宅は大人三人子供三人の六人暮してす、祖母は毎日火鉢の前、父母は農事に忙しい、妹と弟は學校に、私は宅てお裁縫、母樣はいつもさういはれます、もう四五年も經たらお前等はどんなに變るだらうと。

二階　信濃　中島いち江



○一年生　京都　ひさ子

私れ今度、初めて尋常の一年生を受持ちましたの、敎室の出入からおつつみのこしらへ方から一々注意します、あゝ私等も一度はこんな時もあつたのである、あの先生もさぞお骨が折れたことであらふと今更ながら先生の御恩を感謝してをりますのよ。

○我が戀人　名古屋　中島正子

皆樣わらつてはいやよ妾の戀人は郵便屋さんてす何故なら遠く二百里も三百里も隔つて居る親友や姉さんからの御手紙や其の他色々の物を持つて來て下さるもの妾は是れほど戀しいなつかしい人はありません然し皆樣は如何てすか。

○詩想の浮ぶ夜　扇城々下　やま川

筆を持てば一氣呵成と言でなく、唸りに唸つて作り上ると云ふのが習慣なのに、今夜に限つて詩想の浮ぶこと、筆に従ふて想の出るとは自分ながら不思議のよう。是も少しは上達したのか知らん。

○摘菜　青森縣　進藤花子

兄さんが明日お歸りと云ふので、何か御馳走もと、麗かな、長閑な日、青い苔を敷きつめたような、春の野邊に、若菜摘むて居ると、芳しい香が骨まで浸み、雪かお白粉か眞白なのが、はら〱と、袖に、袂に。

新笑話

編輯局選

四等

○縁談

相模足柄上郡川村向原　岩田小春

明日はお嫁入と云ふ日令孃母親に向ひて令孃「母樣私お醫者樣の所へなどいやですわ」母「オヤ何故今となつて」令孃「でもれ病氣だからと云ふても里へは歸してくれないでせう。」

五等

○儉約

佐世保　いちじく

母「お前兄樣に外套送りましたか」
娘「はい送りましたがボタンは重くつて郵税が高くかゝりますから取つて置きました。」
母「それはどうしましたか」
娘「はいそれはポケットに入れておきました。」

○ポンチ

越後　家淵富貴

友女「あの竹子さん此の頸茱新聞社で盛んにポンチを募集しますがあなたお出しなさいな」
竹子「糯てすか」
友女「何にお顏よ」

○言ひません

大分　糸柳

美代ちやん姉樣は御嫁に行くのでせうおほゝかくしても直わかるものをお云ひなさいれえ」
美代子「い！え姉樣が人に話してはいかんと云ふから言ひません」

○イヤ

千葉縣　松ケ枝雪子

母「お前へは羽織一枚ぬへないでソレデお嫁に行けますか」娘「イヽヤ私は年中洋服の人の所へ行きますから」

○落第の藥

越後　硯都子

小供「御父さん卵や牛乳は落第の藥となりますか」父「ナゼ」小供「デモ兄さんはいつも試驗前に成ると飮みますもの。」

○ひな

紀伊　れんげ草

春「明ちやん妾の所の雛は卵をお腹て暖ためてたられ可愛いひなを生んだのよ」明「そう妾も火鉢て暖めようかしら」

○火消壺

橫濱　井上久子

田舍の女學生初めて都の學校に入り、ストーブ見て、「マー此學校は火消壺が室の内にある。」

○いらぬ學科

德島　木戸玉緒

先生「君は生理は非常にうまいが地理や歷史はまずいから確かり勉强なさい」
男生「私はそんな學科は要りません」
先生「なぜ」
男生「私は醫者の悴てすから。」

○古切手

陸前　今泉八重子

姉「あら菊ちやん古切手を取つて何するの？」
妹「東京の叔母さんに郵便をあげるのよ」姉「おほゝゝそれなんぞつかはれるもんですか」妹「だつて叔母さんもこれをはつて寄來したもの」

○高價な物

京都　穴田松江

女敎師一生徒に向ひ「あなたは此敎室で一番高價な物は何だと思ひますか」
生徒「そりや先生の指輪だと思ひます」

○同じこと

豐橋　いち子

A「あなたは此間あの詮らぬ芝居を見て居たれ」
B「あなたどうして知つてゐれ」
A「妾も居たから」

○花子の年

宮城　百合子

甲「ちよいと花ちやんあなたの御年はお幾つなの」
花「お隣りの竹ちやんとおない年なの」甲「竹ちやんつてお幾つな方の？」花「私とおない年よ。」

○上の句

紀伊　長井漣月子

甲の友人「君の和歌は皆上の句が好く出來てゐるが、下の句は拙いれ。」
甲「左樣さ。上の句は皆人のを拜借したのだもの。」

○姉のまれ

越後　冬子

姉妹に向ひ「妙さんどうして近頃、そんなおめかしするんだれ、もう朝から晩まで鏡にばかり向つて居るんだもの、學校の本も少しは御讀み」
妹「だつて姉さんは、私を見ると、妙さん姉樣のまれして、りつぱの人になるんだつておつしやるから」

○田舍者

丹後　鹽見千代子

田舍者二人都のお湯に行き甲「君早く着物をぬがないか」乙「僕後からて結構」

○和製のビール

本鄕　朝井絲子

甲女「あなたエビスビールなら召上がるてしよう」
乙女「ヘアても私和製は頂きません」

○どうぞ、どうも

鹿兒島　格子

客人「どうもおじやま致しました、どうぞ奥樣によろしく申上て下さい。」
田舍出の下女「どうぞ失禮致しました、どうも又ゐらしつて下さい。」



文學顧問

問　記者樣私六號に出ました假名遣問題を拜讀しましたが、改正の假名遣て文章は書いて從來の假名遣は今後文章に適用しては惡いのてございますか（福井市の秋子）

答　惡いと云ふわけてはございますまい。

問　明治三十九年の花暦と云ふのをお出しになる志賀矧川先生は、若しや三河岡崎生れの志賀重昂樣にてはおはさずや伺ひます（三河矢作永田舞鶴子）

答　左樣てす。

問　記者さん四季の料理を詳に敎へて下さる雜誌はないてしようか（濱田三明チドリ）

答　麹町區有樂町有樂社から「月刊食道樂」と云ふ雜誌が發行されて居ます、外に知りません。雜誌より書物の方なら澤山重刄なものがあるてせう。

問　上田敏氏の「文藝講話」橫瀨夜雨氏の「二十八宿」は何處の發兌てすか……そして藥劑師を志望てすが獨學するに何と云ふ本を勉强すればいゝてせうか（かうべ、白きぬ子）

答　「文藝講話」「二十八宿」共に京橋區金尾文淵堂發兌、藥劑師獨學の方は存じませんけれど「藥局方」など云ふ書物を皆樣が御らんになるやうてす。

問　焼野の雉子、夜の鶴の意味を問ふ（大坂、白露）

答　子を思ふと云ふ故事があつて、凡て文章の上ては其意味に使ふて居ます、——子故に迷ふ……、——子故に泣くなど。

問　高等女學校卒業の者信用ある其以上の學力の講義錄を望む如何なるものが宜敷か。又フレンチを一語も知らずして獨修するに如何なる書あるや、代價及び發行所を問ふ（神戸市紫峰）

答　何の講義錄か分りません、佛語は「佛語初步」（四五十錢）が宜しいてせう、御地の本屋て聞いて御覧なさい。

問　賢明なる記者樣私は申すも御恥かしい無學ものてございますが新體詩及び新派を學びますに最初學なものにて殊に獨學いたしますには何が一番よろしゆうございましようか（秋月久子）

答　左樣、今しばらくお待ちになれば、便宜の書物や雜誌も出來るてせう。

問　記者さま誠にすみませんが官立の女子美術學校はありますか何卒御敎へ下さい（小樽區イナホ町織田のぶ子）

答　ありません。

諸孃と記者

○記者樣私投書した後て極りが惡くなつて獨りて顏眞赤にする事が時々御座い升而し好な事は止められませんおかげ樣て此の頃は細い字てなりと誌上に表はれる樣になりまして實に嬉しふ御座い升私は何時迄も〳〵女子文壇を愛し升（近藤登久子）（記者曰、細い字から太い字におなり下さい、進んては上等席の大きな字におなり下さい、御勉强次第てなれます、全く投書が出たのを見ると胸の血汐はくるめきます、紅くなつて怪まれたまひそ）○記者樣私昨年八月からの愛讀者てす昨年三月私は東京附近の或る高等女學校を終へて間もなく涙と共に多くの親しい友達に別れてなれぬ當地に參りましたが西を向ても東を向ても語る友とては一人もなく只本誌を終日の友として淋しい月日を送つて居ります何か投書したいと思つてました一向拙いのてなまじひ恥をかくよりと今まて控へましたがものは試しとやら此度面の皮を千枚張にして此樣な變なのを書いて見ましたが笑つてはいやてすよ（新潟市、總思）（記者曰、何うして笑ひませう、お淋しい時には讀むか書くかゞ何よりの慰藉てせう）○記者樣に御伺ひ申ます、寫眞は宅てうつしましたのても宜しう御座いますか（青木あや）（記者曰、お宅てお取りになつたのは、猶更興味があつて結構てす、何うぞお送り下さい、それから給ハガキの取扱しが多いとの御言葉、同情いたします、數の多い讀者の中には、然う云ふ不信實の人もあるのてせう、困つたものてす）○記者樣私は色々雜誌を見ましたが女子のよみ物ては本誌が一等てすわ先日ある雜誌店てきゝますと一

留愛讀者多いと申ましたのよ此後は一層本誌の發達をいのり升投書も始めて致し升（群馬縣桐生境野丸山幸子）（記者曰、何だか本誌を賞發した記事ばかり取るやうですが、外にも澤山參りますので、折角の御厚意を無にするも如何と、二つ三つ拔くわけです）○今は思うにまかせる身となり時機が來ました それに母が女子文壇が好きて私に毎度すゝめて下さいますから初めて投書致しましたよろしく御願ひ申ます諸姉上樣にも未見ながら親しき御交際を乞ふ（武藏郡須賀村ノ内西須賀村字新出二三四番山本ふみ子）（記者曰、女子文壇が家庭の讀物として最も歡迎されて居る事は、是を見ても分ります）○記者樣妾はメ切前に胃を惡ひ病牀の呻吟中やつと一篇だけ清書するにはしましたが如何せん布團の中ては思はしく書けませんそれでなくとも拙い字てすもの、ても今度だけはあれて許して戴けませうか妾も次の締切にはすつかり回復してもも少し奇麗に淨書する心算てす 記者樣も折角御自愛遊ばせ（病床にて不文女史）（記者曰、病床でお書きになつては苦しいのは御もつともです、御靜養なさい）○記者樣私は此度轉居いたしますが何か轉居届け出さればなりませんか六月分の誌上にて御返事下さい（淡路津名郡佐野村圓谷照子）（記者曰、お屆には及びません、但し直接本社から雜誌をお取りなら事務掛へお知らせ下さい）○記者樣此の投書は五月二日て私の家ては苗代をしめた日て御座います私も手傳がてら田へまゐりましたそして今年の豐年を心に祈り此の投書も誌上に上ります樣に祈りました何卒記者も御祈り下さい 又皆樣も鮎がをどる頃となりましたから御遊に御出て遊せ（下野櫻野の瀧澤秀月）（記者曰、苗代の手傳ひと、投書と同じ日の御はたらき、苗は伸ぶべし、投書は載るべし、而して鮎は盛んに踊るでせう）○大和のおさゝ生樣、雲雀山云々の間違をおしらせ下さいましてありがたう（記者）○記者さん、寫眞を送り度ひのですが返して下さるてすか、（會津旡井の里、水上寄佐子）（記者曰、返します）○神戸の鴨田政子さん、仰せのやうないたづら者があるのは困ります、何分讀者の範圍は廣うムいますし、寄稿者が若い女性と云ふので、折々は妙な手紙などが舞込むわけてございませう、かまはずに、御自重なさい（記者）○東京便りを拜する度に胸の血潮の湧くを禁じ得ません 記者さん私は東京を恐れて、山奥にひつ込んで居たくもありません、しかし悲しい事には學資が不足て今すぐに出ることが出來ないて居りますそれていつそ苦學ても仕樣と思つて居りますので、記者さん自活しながら勉强する手續はないてせうか、一時も早く上京して勉强がしたいのてどうぞごめんどうてもありませうが御知らせ下さるようねがひ上ます。（福島、きみ）（記者曰、東京便りて御遊學をすゝめるのは、遊學出來る身分てありながら、出られない方を勵ます爲て、自活までなさいとはおすゝめ致しません、自活は餘程考へものてす）○記者樣方ほんとにずるいと思いますは！なぜつて妾等の寫眞はかし出させて御自分等のは、御名前も御知らせ下さらないのね、誌友の皆樣誌友倶樂部の記者樣方の御寫眞かお名前の分らぬ中は妾等も寫眞など送らぬ事に致しませうね、（函館登江）（記者曰、マア然うおツしやらずに寫眞をお出し下さい、記者も出さう／＼とは思つて居りますが、ツイ忙しいのて失禮して居ます）○記者曰、下總、美津波奈芳子、佐渡、淺井銀子、佐賀、服部紫蘭、秋鈴、木下操、沖繩、藤井初枝、兵庫縣、森本ひさ子、陸奥、白梅子、相撲、佐藤とし子、德島縣、森口、對島、民守むすひ、京都、島田千代、近江、美津居つぎ代、大阪、なでしこ、のぎく、京都府、笹舟、大阪、美佐保、岡山縣、土居よしの、金澤、意志子、埼玉縣、勝子、和歌山、さき子、青森、笹村玉江、鷹取しげ代、出雲、榮子、高田茂野、小牧岩江、德島、白牡丹女、神戸、輝月女、兵庫縣、木村菫子、仙臺、文子、山村たれ子、くれの少女、印旛郡、相川姉妹、絹衣子、韓國、今田きく子、天神町、美壽子、兵庫、ゆき子、とみ子、南豐、藤の家女子、花輪しづ江、和歌山、千鶴子、上尾政子、いちじく、きり野子、廣島縣、石川萩子、札幌、山田鈴子、陸前、阿部よし枝、北島たれ子、越後、乙川富士野、寄代子、能登、張間花枝、はろ子、以上の諸孃からの原稿は確に拜見しましたお尋れの通りて差支ないことには別にお答へは致しません記者への御懇切なお言葉は深く感謝いたします。

圖書換讀

○私手許に才媛文集、美文之資料、編物、裁縫、孝女白菊、茶湯生花、及諸々の小説雜誌が澤山ありますが皆樣の内て伯爵夫人、不如歸、血之涙、乳姉妹、朝日櫻、小弓御所、櫻御所、野花、小猫、筆子の内何れかと御交換下さる方はありますまいか（福岡縣粕屋郡須惠村旅石印藤又左衛門樣内野川靜子）○妾のところに臥龍梅天覽の葉、美文

精選、坂島田、手工製作品圖集、不言不語、其他雜誌澤山不用てすから次の本と御交換下さい紅葉全集、金色夜叉、鷲風戀風、緣不緣、伯爵夫人、女夫波、筆のしづく、(大町桂月)、吾輩ハ猫デアル、スケッチブック（相摸國足柄上郡松田村中村定五郎方すみれ）○私は中學文壇の第七年第一集を欲しいのです。誌友諸君、どうかお持ちの御方は讓つて下さい（千葉縣印旛郡中鄕村海老川、秋山作藏）○私の只今有してる本には(戀か夢か)(男女必携美人法)(濱子)(不如歸) 其の他の小說及雜誌澤山ありますから何卒御申し下さい送つて上げます（栃木縣芳賀郡山前村字南高岡仁平方信山臺子）○私手許に左の書籍を持合せて居りますがお入用の方は小說、詩歌集、及びお伽噺集と交換を致します草わかば(有明)七つ星(白星)心中おさよ新七（白星)「以上詩集」近世美學、天人論、人種哲學梗概、日本歌學全書、拾二編、袖珍百科節用（最新刊) 袖珍吾人の記憶、和洋料理法(赤堀)日本女子百傑、俳諧獨習、裁縫秘術新書、女子手形の文、等、(東京府下八王子町八幡九、西川方秋月芙美子)○婦人世界、女學世界、少女界奥樣と織樣女寶夏子伯爵夫人其の外雜誌が澤山ありますから何卒繪葉書か菜かて御申込み下さい(讚岐大川郡白鳥村大字湊鐵田総方同妹光子)○塔影花守若き日新日本島新派和歌獨習一茶俳句集等御持合の方あらば妾の陸軍凱旋觀兵式紀念繪葉書にスタンプを押したものか露營の夢須階の浦等何れにてもお交換下さい（京都市聖護院町中河原町岸村文平方岸村季子）○諸樣の內てノルマントンの歌御存じの御方は誌上て住所と御芳名をいつて下さいそうしたら私の方よりお禮ひにまいりまするから、御禮は京名所數枚又は編物一式何れのものてもいたします（西京にてローズ）○乳姉妹の歌か湖上の美人の歌か金色夜叉の歌かお送り下さいねえ新歌（須磨の曲等）のやうな物お送り致します日本立志編入用の方はお申下さい（福岡縣粕屋郡香椎村濱男學校內田中破月）○諸孃樣私に思出の記不如歸紅葉の錦卯花月夜三十九年九月以後の女子文壇がありますが俳句入門蕭園著和歌入門又自治寮生活、啓敏孫絕島漂流記など丶交換して下さる方はありませんか但し關東邊のお方に、(備後雙三郡吉舍村福中盤方多部竹子）○成田不動尊のある所てれ別に珍らしい者無之只女子出世案內上下ありますのてすどなたても女子に關したる本と交換致したいのてす（千葉縣印旛郡成田町新妻多田方子）○陸奥の網子樣に申上ます私宅に不如歸己が罪の歌持て居故御申込次第御送り致します其他に女夫波の歌、四詩愛吟集等持合せて居ります御讓り申す事は出來ませぬが御寫しになるのわかまひませぬ（香川縣木田郡古高松字南谷山本文吉方同せい）○誰方樣ても金色夜叉、己が罪、天地有情、夏子等を御送りし方には地方の繪はがき書籍雜誌にて御禮をいたします(伊豆小室村川奈中除居方上原雲子)○私のもとに不用の雜誌が澤山ありますのよ御のぞみの御方は何かと御交換下さいませんか（秋田能代大町西村しな子）○皆樣に己が罪金色夜叉夏子濱子女夫波御もちの方はわたくしの玉むし朝ばれ女子文壇初號より女學世界婦人界中學世界食道樂洋食のけいこ松風村雨と御取りかえ下され度又己が罪女夫波御送り下されし方には寫眞にリボン又御のぞみの雜誌御送り申ます（京橋區南八町堀二ノ九青木あや）○何卒孝女白菊の歌か乳姉妹の歌不如歸の歌何れてもよろしいから御送り下さいな繪葉書か寫眞帖にてお禮を致します(韓國京城本町壹丁目一番地小川喜美子)○只今私の許に小說野の花女真寶記當世交際社會朝ばれ女子懸賞文集第一轡玉むし其他女子文壇秀才文壇中學文壇は澤山ありますから皆さまの內てこれ以外の書籍なら何ても宜しい換へて頂戴(和歌山縣海草郡西和佐村、池見敏子)○妾方に新小說怪美人不如歸空想病戀か夢か文武偉行文學などの內て御好の物を一册宛親愛なる誌友諸姉上に進呈いたしたいのてす御望の御方は遠慮なく下名へ又御申込の折り釆寫眞等を送つて下さい（和歌山縣海草郡安原村字松原木下美笑子）○妾は明治三拾年前後の「女鑑」五拾册程持て居ります御入用の方には御送り致します（神戸市脇野はま久野柾子）○誌友の諸姉さま、どうか、伯爵夫人か、金色夜叉か、其人の自白か、漱石さまの著した鶉籠、緣不緣、源氏物語の內何れにても一部御惠み下さい皆樣方も、しなり、繪葉書、などや雜誌、地方の新聞など交換致しましよう（埼玉縣北埼玉郡種足村大字中種足遠藤勝子）○皆樣の內に三十年前の小說御持の方は御送り下さい新聞雜誌等の切り取りにても宜し左の書籍其の他の相當の書籍にて返禮致します神皇正統記、東洋女訓、遠足の友、和歌捷徑、劍影、ユーゴー、バイロン、雜英和辭典、新和英辭典、英譯法、解釋法、東海道紀行等英文書籍數多及諸雜誌にて（茨城縣新治郡土浦眞鍋

町中西とう）○私ヴァイオリン手ほどき一册と他に花冠（小說集）と大八洲（歌の雜誌）二十册程御座います何か詩集か歌の雜誌と御交換下さいませ（赤阪丹後町九八齋藤茂子）○皆樣の內に「未だ見ぬ親、かたみのぼたん、思ひ出の記、無花果、若竹、夏子、のろわれたる女」以上の本御不用ならば何卒相當の代價及び、他の品にて、御ゆづり下さいまし、御ゆづり下さいます御方は誌上て御通知下さいまし。女學世界、女子文壇、婦人世界等ありますから何かと御交かんして下さいまし（鳥取市ホワイトローズ）○皆樣の內て小說不如歸琵琶歌金色夜叉伯爵夫人夏子いづれにても御もちの方はお送り下さいませぬか御禮としては妾の寫眞に雜誌不用のものを添へて差上ますから（熊本縣八代郡八代町一〇八番地井山たき子）○白羊宮、白玉姬、暮笛集、行く春、頌榮、泡鳴詩集、等何れにても御送附下さる方には小華族、むらさき、テニソンの詩、キイツの詩、初潮、何れか價に應じ二部までちかつて差上ます（近江國三雲井上つゆ子）○諸姉樣の御中に、もし須磨の曲が御あきてしたら御送り下さいませんか、御禮は必ず〳〵致します、御自分て御寫しなすつたのでも結構でございます。（兵庫東出町三丁目河田米）○皆樣の內に「日の出島の貳卷鵜鶴の卷」、「孝女白菊」、を御持の方は文藝俱樂部、女子文壇、新體詩歌自在、びわうた、女波男波、不如歸、筆子を送ります又番はおきても申込なさい（高松市濱ノ町齋藤方新谷敏子）○「金色夜叉の歌」「クロパトキン將軍の著はせる日露戰史」「中等教育作文法」「セシル、ジョン、ローズ傳」上記八錢以上の繪葉書三枚封送して下さつたお方に一册宛。「今年發行の女子文壇」「化粧かゞみ」「國旗合せ」「英和會話」上記美しい繪葉書を送つて下さつた方に一册宛即日發送、御希望の書交換濟の節は相當繪葉書を屹度御返事致升（岡山市岩田町五八河合眞佐子）○なつかしき諸姉樣方の中で小說コブシ、夏子、露營の夢の歌と謠を御持ちの方は私の所持する孝女白菊、須磨の曲、ハニューの宿はなれ小島少女界美人繪はがき鹿島香島の紀念スタンプ付きの繪はがきと御交換下さいませんか（東京市本所區向島須崎町一八二豐田乙羽子）○姉樣の中て產婆學、普通妊娠論、御不用の御方御座い升たら妾の古今和歌集、日本文學全書、言海、ムラサキ、新理想、櫻冠、心理學、この中お好みのと御交換下さいませんか（羽前西置賜郡小國町齋藤方東ちん子）○諸友の皆樣の御內て「凌霄花」「夢の華」「花守」「塔影」「日向葵」「新聲」などをお持ち合せのかたは私の「自然と人生」「玉蟲」「朝晴」「小詩國」「銀鈴」「埋れ木」「かぶらや」「女子文壇第二卷悉皆」など、御交換下さいませんか（姬路市下寺町裏三十八大友淵昨）

寫眞編物交換

○御寫眞、編物を御惠み下さい刺繡の繪葉美い玉車の交換も願ひます（熊本縣菊北郡二見村二見串山武野）○妾、栗澤山にございますの皆樣御望ならエハガキで申込で下さい、必ず差上ます（山形縣西置賜郡小國本村小國町須貝あつ子）○皆樣のお仲間に入り編み物や手藝等の御交換を願ひます（岡山縣久米郡鶴田村黑瀨きさの）○寫眞の交換して下さい先着五人には德島風景エハガキ添えて御送り致します（德島市大字出來島町長川堂）○妾は朝夕に瀧の響を友と致して居る不束者ですが寫眞や栞や編物等の御交換を願ひます返禮は即日（神戶市布引瀧梶當子）○私は或東北に住む不束ものです寫眞繪ハガキアミ物の交換を願ひ升私も今は通學して居ります（秋田縣平鹿郡橫手町字柳町十二三ッ梨健市郞內松山節子拜）○寫眞の裏に諸姉樣の御名とお年とを認めて送つてくだされた御方には妾の寫眞に編物と西洋繪葉書とを添へて御返禮致します、（越後南蒲原郡見付上町高野機業店內雪子）○寫眞を御惠み下された方には必ず〳〵妾の寫眞に編物又は栞りを添て御返禮致します、（新潟縣南蒲原郡見附町江口銀三郞方芳野枝）○寫眞の交換や繪端書の交換を御願ひします（大分縣大分郡松岡村村谷りと子）○私は編物又は繪ハガキ交換が大好き（奈良縣宇智郡五條町西町木村政吉樣方磯美津子）○誌友の諸姉樣手袋や肱突の編物を送つて下さい御禮には手製の拙ない編物を差上ますから何卒御願ひてすよ（豐後安岐小川町濱口キシノ）○姉さんの內にて寫眞編物のしほり等を交換する御仁はありませんか交換する御希望とせば袋へ入れて第四種の郵便を以て交換して下さい（磐城國亘理郡荒はま町一丁目武者ゆき子）○誌友の諸嬢樣何卒御寫眞御惠送下さい私も眞實の處容枚送ります外に繪ハガキ六枚そえて差上升のぞみに依ればアミ物も上升（秋田縣平鹿郡橫手町柳町十二三ツ梨健市郞樣方山田たけ子）○私は只今田舍の叔父樣の家に居ります者ですから鄕里の御友達の御方は大抵御嫁入りせられて只今では校友の御方が二三人ありますのみてすから御愛讀の姉樣と御寫眞

も編物に造花繪端書等の交換が致して頂きたいのです左記の書とを順次御進呈致します蔭分小舟、金色夜叉、栞、女判任官、肉彈、不如歸(兵庫縣武庫郡精道村之内濱蘆屋村二二九山村久右衛門方山村稲子)○いつわり多き世に誠の心ある皆樣の中珍らしい編物を御持の方私にひな形を取らせて頂戴御禮には女子文壇二十册其他の雜誌二十册程ありますから三日間内にキット御返し致します(備後福山東町、矢野品子)○皆さんの中で御寫眞御持の方は見苦しいかも知れませんが何卒私の寫眞と御交換して下さる方はありませんか赤栞や御手製の造花も御惠み下さい(栃木縣芳賀郡山前村字南高岡仁平方信山すみれ女)○女學生諸姉の御風姿御めぐみ下さいつたなけれど私もさし上ますから御交換下さい(靜岡縣沼津上土町八代英代子)○寫眞の交換を願ひます先着三名には繪葉書をそへて御返しいたします(下總國印旛郡内郷村高崖村千十二番地梅花女史)○誌友の皆樣どうぞ御寫眞の御交換を御願ひ申します直接姿等の寫眞に肉筆の繪葉書添へて御返事いたします(靜岡縣磐田郡岩田村白坂中堀内つま)○寫眞を下さらば私のも差上げます(香川縣仲多度郡多度津町東濱三百十二番戸香川政子)○寫眞玉章及編物の交換を願ひます諸孃の内に手風琴御不用の方はありませんかもしありますれば御ゆづり下さるか又少しの間おかし下さる事は出來ませんか(但馬國養父郡大藪村早崎芳月)○皆樣のうちで編物おもちの方は何卒御送り下さいまし、繪葉書の美しいのを以て御禮いたします御れがひよ(福岡市天神町英和女學校寄宿舍内にて佐伯ひて子)

○誌友の皆樣繪葉書どうぞ御送り下さいましなきつと御返しいたしますそれから編物も四五日御かし下さいませんか編みさへすればすぐ御返しますよそして私も御貸申しますからどうぞ御願ひ申します(長野市大門町九三前島きみ子)○今まで御交換した人の中で一度ぎりで御返事下さらなかつたりする人がありますので實に私は殘念に思ひます末長く御交り下さる方がありますなら栞編物など御送り下さいませ私も不てきながらきつと御返事は致します(能登輪島稲荷町中島時次郎方夏子)

繪葉書交換

○繪端書玉章の交換を御願ひ申します早速御返事差し上ます(秋田縣平鹿郡増田町片谷むめ子)○何卒繪葉書を御めぐみ下さい必ず返信は致します(陸奥國八戸町大字下組町、川越みさほ子、同所同姓かほる子)○繪端書編物の交換をして下さい(大阪東區南久寶寺町塵壁之前東入堅田きく子)○第三卷第壹號の本誌上に名所繪はがき交換を御願ひ申ますや各地の諸姉樣方より續々御送り下され忽時にして各地の名所は机上に活躍する事數百枚に及びました非常の利益を得ました事の偏に御情厚き諸姉樣の御陰と誠に有り難く御禮申上ます今度私都合により暫く交換を止めやうと存じますて何卒あしからず左樣御承知下さいませ若し後日また御願ひしましたならばいやまさる御交換の程御願ひ申ます(鳥取縣岩美郡河崎村入石みどり)○諸姉樣よどうぞ御見捨なく繪葉書や寫眞の御交換を願ます下さる御方には必ず上等はがきを以て御返禮申上ます(北海道小樽區錢函澤町櫻庭菜枝)○何卒繪はがき交換を願ひます(神戸市元町二丁目殿岡方繁月)○なつかしき愛姉達、繪葉書代紙百枚持つて居ますから、御手紙に、送料郵税印紙封入して、送つて下されば、御筆跡の美しい方三人に、端を添へて進上します。(丹後國加佐郡河守新町鹽見千代子)○繪葉書小說等で御申し込みなされた方々には相當な書籍を差上げます(東京市内志家四番地五日市清子)○永久に繪葉書交換を御願ひ申します(大阪府河内國八尾表町山口にて政子)○姉上樣よ交は繪はがきが好きで度度友人と交換していましたが今からは愛讀者諸孃と親密に御交際を願ひます(大坂市南區天王寺前六獄仙内河野澄子)○私は花繪はがきの御交換を願ひます皆樣が花の繪はがきを御送り下さいましたら私は其の花の名を他の繪はがきに書いて御返しいたします(牛込市ヶ谷加賀町一ノ廿五中村はなか)○皆樣お願ですから美しい繪葉書に和歌か俳句かを書いて送つて頂戴れ繪の方へ二錢切手をはつて狀袋に入れ切手の所だけ大きく消印がなされる位きつてれ(東京神田區淡路町二ノ七川岡樣方三室梅子)○スタンプ付名所繪ハガキ大隈伯邸内繪ハガキなどあり交換を乞ふ(山梨縣東八代郡祝村上屋醫院内土屋八千代)○繪ハガキ並に御寫眞の交換を望む(靜岡縣周智郡山梨町松島光子)○何とぞエハガキ御交換を願升(磐城田村郡瀬川村大字新館田村山方佐藤美子)○どうか繪ハガキや押花の御交換をお願ひ申ます。(廣島縣吳二河々畔病院内大藤敏子)○皆さん美しいゑはがき(なるだけ風景)を御惠み下さい。(下總國印旛郡富里村中澤相川あきち)○繪葉書の交換をれ、はがきは可

處上等なのを"（佐渡畑野村栗野江谷川桂月子）○妾は殿が浦の北岸に住む淺學な不束物ですが何卒繪ハガキの御交換を願ひます質の善悪は問ひませんが永久に（常陸國新治郡牛渡村兵庫崎小泉由助方にて智惠子）○愛らしの諸姉樣達よ、繪葉書の交換をして下さいな（愛知縣碧海郡矢作町橋目永田舞鶴子）○皆樣妾の願を聞て下さい妾は生來繪葉書が好みてありまして今迄も皆樣と御交換して居ましたが尙續々交換が致したいのです玉章の交換も致し度う御座います。返審は着次第。（香川縣大川郡白鳥村大字湊鶴田みつぎ子）○私は俳句が大好きてすから奇麗な繪葉書に俳句二首以下を書いて御送り下さい、私も俳句を以て御返禮申ます（伊勢國鈴鹿郡國府村大字入野三七、坂源吉方坂西野）○繪葉書の交換をおねがひ致します、又御手製の編物や寫眞を送つて下さつたお方には上等の繪葉書て是非是非御返事致します（周防國大島郡蒲野谷美津子）○私の國は羽後の片田舍てすが、此度井中の蛙遊學の爲め大海に出ました、至て不束者てすが、願はくは美しき繪はがきの御交換を以て交遊を願ひます、そして皆さんお寫眞もね。（府山南町五丁目四十五日下部方後藤よし子）○大急告よ約束の奇々妙々な獅子落橋の繪葉書皆無となりましたから、他の珍物葉書を乾度送りますよ、スタンプ付きの物が送つてくださいな（廣島縣備後國比婆郡東城本町西山清子）○誌友諸姊樣よ何卒繪葉書の交換をして頂戴よ。返禮は美麗なる神戸名所や其他て致します（神戸市山本通五丁目七〇松室麗子）○私の如き田舍の片山里に住む者なれども向後は繪葉書や玉章を以て交際なし下さい又御玉章を下さる御方には何か面白き物差上ます（岐阜縣加茂郡和知村日置桃花子）○繪はがき寫眞の交換もして下さい辭かけてきつと直ぐ御返事を差上ます（愛知縣丹羽郡松森寮修院内後藤幽香）○誌友の諸姉上樣に御願申します妾しに幼少の頃から病氣の爲に但馬の或る田舍に去年の夏まで居りましたから友達がなくて寂しくて困つて居ります故どうか永久に御交際を願ひますまた寫眞、玉章、栞、繪葉書、地方新聞などの交換を願ひます妾の寫眞と橋立みやげ（一名丹後名勝案内）一冊とを差し上げます（京都市丹後國舞鶴港字宮津口一五小西春子）

諸孃の交際

○皆樣この後も尙一層繪葉書やレターやうつし系のこうかんをおねがひいたします（京都府加佐郡西大浦村字中田七吉田語笑江子）○妾は不束なものですが、書籍又玉章繪葉書御交換願ひます（大阪西區江戸堀北通二丁目都留富美江）○私は昨年高等女學校を卒業いたしまして只今宅に居りますから何卒御手紙やエハガキの交換を願ひますよ（靜岡縣濱名郡篠原村立場鈴木さだ子）○皆さん初めて御目にかゝりますが以後は宜しく御交際を願ひます（紀伊海草郡安原村松原木下操）○私は當縣の高等女學校の三年生てす私の學友は大山八重子北島かち子松山節子の三人てして毎日共に面白く通學して居ります何卒なるべく女學校に在學の御方と交際を願ひます次に。寫眞。アミ物。繪ハガキ。の御交換を願ひ升返禮はおのぞみの通差上ます男子は御ことわり（秋田縣平鹿郡横手町柳町三ッ栗鍵市郎方大川たか子）○諸姉孃樣妾も北邊の片田舍のもの御交際の程を願上ますそして繪葉書や寫眞の交換なして下さいな（靜岡縣磐田郡岩田村寺谷永井淸子）○妾の境遇に御同情を寄せられ有難き御玉章、珍らしき繪葉書、懐かしき御寫眞まで御惠み下された御姉上樣達よ、妾は厚く感謝致します、何卒皆樣よ御健康で末長く御交際を願ひます（仙臺市八幡町榊原樣方門間まさ子）○以後は永久に御交際を願ひます（羽後國仙北郡土川村千葉みつ子）○病氣の爲め此處に來て居ます和歌の交換はたのしみてすから皆樣時々おをくり下さい（岡山縣邑久郡朝日村西片岡野崎麻須子）○何卒これからは文又は繪はがきの交換を願ひます私も此地の繪はがき又有樣など申上ます（韓國平安南道安州城内駐在所神田滿壽代）○誌友の諸姉樣方早速御交り下さいましてありがたうございました其中て男子の方及男子方の筆跡は頂き捨てにして有ますから悪しからず（四日市市上新町田中とく方堤照子）○諸孃樣の方々一時的てなく玉章繪はがき編物などの交換を永久にお願致し升（神戸市兵庫松本通三丁目三十九番邸磨松源三方市田とし子）○田舍者とて御見捨なく御交換を願ひ升（四松浦郡二里村中里二二七德久千代子）○今回本誌讀者拾貳名と申合せ誌友俱樂部そしき致しました依て親愛なる諸孃よ寫眞繪葉書栞編物書籍家庭雜誌ヒシツキ等の交換を御願申升返信には當俱樂部一同寫眞に御送與品相當の物品相そへ返禮致し升（靜岡縣駿東郡原町原七七九杉山彥七方靜波誌友俱樂部會員一同）○親兄妹もなき不遜なる妾に玉章繪端書なんど御惠み被下度妾も及ばずながらそれ相

富の御返禮致べく候（大阪北御堂筋大東商會内中村いち子）○誌友諸姉樣長々あつき御交際を忝けなく致しましたがいよ／＼來月をもつて當地を引はらひ某地をさして出立致す事になりましたからしばらく文通を中止致しますおちつき次第誌上に住居御通知致します御懸りませず御交際を（兵庫山陽官舍白百合子）○妾も本誌の愛讀者になりましたから御交際ください（下總印旛郡成田町小倉秋風子）○妾の樂としてお玉章の交換、繪葉書の交換は此上ない事です、皆さん景色のいゝとこがございましたら葉書に書いてお送り下さいませ、（滋賀縣甲賀郡柏木村大字北脇七百八十五番地、川島嶺子）○滿天下の誌友諸孃よ妾は溪嶺松聲を友として、空しく磯の小貝と埋もれて寂しく暮らして居る少女てす賢明なる誌友と交際を願ひてともに文壇につくさうと思ひます寫眞の交換も願ひます繪葉書の交換も願ひます葉書には御自作の和歌俳句をお記し下さい（伊豆川奈上丸山上原露葉子）○恐れ入り候へども誌友の仲間に御入れ下され度候然して後一層勵み投書致したくと存じ候（廣島加藤初代）○妾は山口縣の片田舍に住む淺學のふつゝか者てすが玉章や繪端書寫眞の交際をねがひます必ず返事は致します（山口縣佐波郡三田尻秋田田中牛助内にて白波子）○陸奥絹子孃さま六號誌上て仰せの寄贈は皆持合せがありますから御住所姓名御知らせなさいまし尙誌友の皆樣方寫眞圖畫交換下さいまし（麴町區飯田町五ノ廿一安達方田淵）○誌友諸孃樣お美はしい繪はがき玉章澤山御送り下され有難う先着大阪東柳子樣初め百四十二人内繪はがきの御方は百二十三名玉章十九名もれなく御返事致たした積りてすが多數の中故もれて居るかもわかりませんから其御方は早速御知らせ下さい私の寫眞は先着繪はがき封入申込みの御方七名に上げました皆樣今後も末永く御交際を願ひます（北海道有珠郡伊達村矢内菊江）○記者樣妾は發記の處に務める樣になりました愛讀者諸姉て妾と同年くらゐな方々と繪葉書又は文て交際を願ひ度いのてすから何卒誌友欄てお引合せ下さいな（京都四條寺町郵便局上田靜子）○諸姉樣よ何卒御交際を願ます御手紙を戴いて御返事を差上ないやうな事は決して致しませんからドーゾ玉章や寫眞や繪葉書交換を願上ます（北海道小樽郡錢函澤町鐵道官舍内金澤靜枝）○誌友の諸姉樣方、私は生れてから未だ雪を見たことのない南隅の一孤島に住める者て至て不束なそして色の黑い者て御坐りますがこれても矢張り本誌愛讀者の一人てすから何卒永久の御交際を願上げます、私は和歌や俳句が最も好きて御坐ります、奇麗な繪葉書に『アッサリ』書いて贈て頂けませんか、必ず御返しは致します（沖繩縣那覇區字東一六八○藤井初枝）○御懷かしき姉上樣方不幸私は貧しの家に生れ今は他家に身をよせてゐるものてす薄給の身とて何勝ふ餘裕なくたゞ／＼是の文壇を友とする而已てすどうか御情ある御方々よ御不用の書もあらば御惠投を願ひます又玉章や繪葉書の交換も（高知市本町四九今村方西村久喜）○私の名が五月の本欄へ出ましてから以來隨分御遠國の御方からの交換もあり嬉しく亦樂しさに堪へません猶今後一層情に富んだ文學好きの御方に限り御願申します（三重縣津市新町南河路三十一、杉田踪子、全芳枝）○未見の諸姉樣妾は片田舍に住む淺學の者てすが永久に御交際を願ます（岩代保原町十二丁目齋藤きよう方齋藤綾子）○誌友の諸姉上樣お見知り置き下すつて御交際して頂戴な御願ひてすから（兵庫縣揖内郡龍野町高見てる子）○記者樣一寸御伺申上ます私も御仲間入りさしていたゞきたうございます（京都田中榮子）○諸姉樣と手紙の交換を致したく存じますから今後御愛顧を願ひます繪葉書及實像の寫眞を交換致したく存じ居ります さよなら（大阪市南區天王寺生野國分町四二重枝内安部婦美子）○わたしは淋しき田舍に只々文壇や皆樣よりの便りを慰藉として居るのてす有情なる御方もあらば姫川畔の淋しき友もなきわたしに同情をよせられ玉章や寫眞を送つて下さい（信濃國北安曇郡北城村檔川露枝）○記者樣諸孃と交換が出來るべく御願がひ致します猶又下手ながら追ひ／＼投書します當地の有樣を（韓國仁川港新各國居留地水塲貳六號原川內五島ふみ子）○誌友の諸姉上さま御地の女學校か名所の繪はがきにて永久御交換を願ひます又寫眞や栞も共に御賴み申します私は不束なる者て朝夕灘の響を友として起居してますよ（神戸市布引瀧梶常子）○玉章繪葉書寫眞の交換を願ひますお望の雜誌かまた書物を送呈いたします大概の雜誌はありますからついてにお入用の册數もお知らせ下さい（和歌山縣那賀郡長田村深田山西信子）○私は英語が大好き同志の諸孃と交際をおねがひしますほんとうに（大坂南區天王寺境內六歌仙館內植田靜子）○滿國其他外國にいらつしやる御方と永く御交際して互に音通致

さうと存じます又先著五名の方に私しの寫眞差上ますから奨はしい繪葉書で申込んで下さい（神田柳町二早坂屋方奨子）○誌友の諸姉樣よ奨しき御葉書下されてありがたう御座いました以後も何卒繪ハガキや玉章を送つて下さい（秋田縣仙北郡土川村千葉奨津子）○御交りをして頂戴な繪葉書や雜誌の交換を願ひます又御寫眞もれえ（兵庫縣武庫郡精道村之内打出村一八五番木村薫子）○皆樣繪葉書渠お手紙の交換を願ます（信濃松本東在西桐原一五三ノ一得馬方にて、白菊子）○なつかしき姉樣私誌上でお目もじはじめてよ以後交つて頂だいな、ても未だ小さいのよ姉樣方唱歌おすき、私大すき、去年別れた師より敎はつたの實によいのよお好みの方にはおしえてよさようなら（本郷區根津須賀町十、土井ゆき）○どうぞ、エハガキ、玉章、寫眞、編物、造花、雜誌等送つて下さい、先着十五名には、エハガキ一組に私の寫眞、編物も付けて必ず差上ます（秋田郡平鹿郡角間川町北島きく子）○私も東北の片田舍に住む不束者ですから何卒今後より玉章の交際を願ふ成丈女學校在中の御方と御交際を下さい私も當縣の女學校の三年級ですからどうぞれ寫眞。繪ハガキ。アミ物との交換を願ふ御禮はのぞみの物にて差上げ升（秋田縣平鹿郡横手町柳町十二三ッ梨健市郞方山田たけ子）○永久的玉章の交換を願ひます又繪葉書も（富山縣海老江十八番地蹋井なつ子）○誌友の諸姉樣方繪葉書玉章寫眞等の御交換をして頂戴な（下野國鹽谷郡阿久津村大谷國友よし子）○記者樣私も誌友になれますか入れて下さい御姉樣方よろしく繪葉書の交換も（大阪府三島郡五領村字梶原長谷川君枝）○皆樣私は此度千葉高等女學校を卒業しましたけれども愚ろかもの故何の用にも立ちませんて父樣にしかられましたのよだから一生懸命勉强して本誌に美花を咲かせろつもりてす皆樣の內て高等女學校を卒業したお方々は何卒レターの御交換をして下さいませそれから誌友の皆樣あはれと御思ひの御方はプリイズ御うつし繪を御送り下さいはづかしながらも妾の直樣御送り致しますよ（千葉縣印旛郡船穗村松崎平川金次郞方山崎文子）○城東龜戶に御住居の本誌愛讀者樣達よ私は每日なす事もなく遊んて居りますちと御遊びにいらつしやいまし例の葛餅ても食べながら御話てもいたしましよう（東京府南葛飾郡龜井戶町十二番地八島內彌壽子）○記者樣のお蔭て心の合ふ友が出來ましたが東京のお方が一人もありませんが東京のお方て末永く御交り下さるお方は（靜岡市靜岡宿新道、羽根安子）○妾はれ高岡山のふもとて淺間にさへづる鶯を友とたよるべきものもなく只淋しく居るのよ繪はがきやら手紙やらの御交換の來るのを唯一の樂しみとして居るのです（栃木縣芳賀郡山前村大字南高岡七番地本田仁平方紫子）○私の樂は交換より外ないてす寫眞繪葉書交換願ます先著五名へ醜き乍ら私の寫眞送ります不如歸滌子火の柱女子文典にせ紫後編天うつ浪繪師の戀前後農業世界と全部揃へ有ます（北海道石狩國岩見澤停車場塚田方林芳子）○私は昨年女學校を卒業いたしまして只今宅に居りますからエハガキや御文通を末永く願ひますよ（遠江濱名郡篠原村立場鈴木貞子）○記者樣の御かけて誠に親しい御友達がたくさんてきました有りがたう御ざいますなほ諸姉樣方どし〳〵御交際下さいな（秋田能代大町西村品子）○私手風琴を持て居りますが近頃不用となりましたにつきましては皆さんの中にバイチリンかハモニカの不用のをお持ちの方がありませんか若しありますなら換へて下さいまし（石川縣江沼郡庄村字庄寺本初太郞方奨顏女史）○五色の糸あざやかに淚と千鳥の織模樣もつれし糸を綾つりてはわびしくゐます桐の里に生來幸薄い妾を可憐と思召し給ひて何卒諸友の皆樣永へに御交り下さい願くは詩趣味に富める文にして（上毛桐生新宿一四二神尾かつ子）○誌友の皆樣六月五日はれ、我母の一週忌なのよ、それて、母は大變文學を好て居りましたので、もし、皆樣の中て、詩、文、和歌、何ても書いて送つて下すつた方には、鐵幹、晶子、共著の毒草。晶子著のみだれ髮。晩翠著の天地有情。濤涯著のおぼろ舟。晶子著の小扇。泣菫著のゆく春。及オザツセ梗概さすらひ。あさばれ。女學世界。婦人世界。數册ありますから、御禮として御送りします、尙寫眞、編物御送りそゑ下されば如何程うれしいてしよう（播磨飾磨郡飯村田村秀子）○妾も誌友の一人てす皆さんお交際下さい、編物寫眞繪はがきの交換を願ひます（大阪東區上難波南之町武藤蝶子）○何卒文章和歌の御交換を願ひます御交際下さる方には早速しるしとして見苦しき寫眞一葉さし上ます（日本橋區蠣殼町三丁目十二番地坂本愛子）○誌友の皆樣私は今年女學校を卒業した淺學の者てすがどうぞ永久御交際をして下さい又皆樣の御寫眞や御手製の編物を送つて下さい私も寫眞や造花を必ず差上ますか

り猶ほ繪はがきも送つて下さい私からは北越名勝の繪はがきを差上ますから（新潟縣古志郡福道遠山藤吉樣方日下きよの子）

○高價な物とは御交換は出來ませんから御寫繪を御送付下さつて末永く御玉章もて御交際を願ひたいのです（廣島縣安藝郡營固屋町三丁目汎愛醫院石川萩子）

○繪葉書の交際は出來ませんが玉章かなみ葉書の交際はよろこんでうけます（熊本縣球磨郡深田村桑原つゆ子）

○親愛なる御姉樣方私は此の辟地方の女學校を卒業したものですが何卒永久に御交際して下さいませ又御玉章寫し繪の御交換も御願ひいたします（陸前國柴田郡大河原町阿部よし枝）

○妾は南紀の草深き山里の賤が女ですが以後は永久に繪葉書の交換、雜誌の交換を願ひますよ。（南紀海草郡安原村松原木下久吉方木下みさを）

○可愛々々誌友の令孃樣よ今度妾は左記の所へ轉居致しましてよ、相變らず繪葉書玉章の交換を願ます（北海道旭川一條通七ノ右七、堀賤作方一葉子）

○諸嬢の內で十四五才の方にて永久に親しく交際して下さる人はありませんか私は高等科の四年で至つて文のまづひ筆跡の拙ないものですが（大分縣北海部郡神馬木村宮野しめ子）

○私は南紀の片田舍に暮し居り升淺學な不束者で御座いますが繪葉書玉章の御交換も願ます何卒末永く御交際を（紀伊海草郡內原村松原木下寅之助方木下癸然子）

○私は第五號の交際欄に載せて頂た船堀の牧野くに子さんの妹ですからよろしくそして私永久的に交際をお望になつた諸姉へ手紙を上げても一向返事が參りません、ほんとにしどひてはありませんか、それでは記者樣が折角の御骨折がむだになりますわれ私口惜くつて（瑞穗村中里きん子）

○日向に投稿家の少ないのは誠に殘念の至りではありませんかはゞかり多き事ながら日向の諸友皆樣方の御住所御名前を下名迄御知らせ下さい又玉章交換を願ひます（日向兒湯上穗北濱砂まさよ）

○何卒永久に淸く親しき御交りを願ひます田舍者なれば又都に御目珍しき品も差上げます、どうぞ繪葉書で御願ひ申します（信濃國北安曇郡北城村嶺村美惠子）

○博學なる諸姉妹の君よ草深き里に住める妾をば御見捨てなく乘繪葉書文通の御交換を致してください（上毛利根郡池田村中發知木村保子）

○紫州の賀川花かげ樣山住みの淋しい妾の身の上をお察し下すつてやさしい御筆のあとを誠に有がたうございましたそれに何よりのカードに優しいお花迄も添えてお惠み下され誠に嬉しう拜見しました然し只戶野川のほとりのみでは御禮狀をさし上げる事も出來ませんどうぞ御住所と御本名とをお知らせ下さい（信州佐久郡小諸町依田よしゑ）

○十六七歲位の御方玉章や繪葉書の交換を永久的に御願ひ致します（群馬縣利根郡沼田中町林政子）

○玉章や繪葉書の交換を願ひます必ずお返しいたします（香川縣大川郡福榮山地春帥）

○誌友の御姉樣、妾はもとより文に拙くあり升。然し當に十五の春秋を過ぎました身、なにとぞ末永く御交り下さいな、尙又山居の樂しみとして面白い雜誌、美しい繪葉書の交換もれ御願ひてすよ（常陸國筑波郡不動板橋豐島飫子）

○私不束者ですけど十九歲以上の御方で永久に親しく御交際を御願ひ申上ます又編物を送つて下さい（島根縣出雲國松江北堀町坂田いち子）

○什麼ぞ和歌や俳句新體詩短文小說其他何でもよろしう御座いますから交換して下さい（東京府南多摩郡多摩村乞田井上方花輪しづ江）

○諸姉さま御慰もじの玉章を給はり實に有がたう存じます相變らず御導きを願ひます（大分縣東國東郡西安岐村近藤げん子）

○壇友諸孃御姉よ私は大井川北中に住む者ですが今後何卒御見捨て無く御交際を願ひます尙ほ繪葉書の交換も願ひ升（靜岡縣榛原郡家山森下藤子）

○皆樣どうぞ一時的の方はいやですけど永久眞心で親友としてお交り下さる方は繪葉書又は玉章下さいなきつとお返事申上ます（和歌山縣伊都郡妙寺村大字中飯降岡村しづ子）

○誌友の皆樣其後は御無沙汰しました、許して下さいましな、さて私しれ今頃いたつきて古里へ歸つてゐます、どうか、以前の通り御交際して下さいましな（播磨飾磨郡廣村田村秀子）

○私も誌友の一人でございますが皆樣と交際したいのです（岩手縣氣仙郡吉濱小學校伊藤宗枝子）

○妾は靜岡の片邊り賤しい者ですが皆樣同樣御見すてなく御交際を願ひます御手紙を下さる御方があれば嬉んで早速御返事致します（靜岡市安西五丁目裏許島水車方背島はる子）

○妾は五月中旬陸奥津輕より下名の所に參りましたから何卒相かわらず御交りして頂戴な（陸中西磐井郡平泉の里氷室樣方若生仲子）

○誌友の皆さん不束な妾に多大の御同情下さいまして誠に有りがとう存じ升尙此後澤山れ（上毛桐生町新宿五入野本松子）

○誌友の皆さまどうか淸い御交際を願ひますそして雜誌の交換寫眞繪葉書なども送つて頂戴妾もきつと御返事致します（千葉縣君津郡天神山相川區內川名靜江）

○誌友の姉上樣方よ私は片田舍にすむごく淺學者てすが何卒末長く御交際ねがひます（松江、米子、一、澄田あさ子）

○かしこき誌友の御姉上樣方よ妾は片田舍に住む貧の不束者てすが以後御見捨なく御交際を願いますそして又繪はがき及び寫眞の交換もネー質の善惡はとひませんから何卒〱永久的に願ひます妾只取りはしません（茨城縣新治郡牛渡村大字牛渡石川久子）

○あたしも今度から本文壇の誌友となりましたから是非御交際を願ひます亦寄居傍近の方是非お手紙や繪はがきなど戴き度いてす又、私も、又あげますからネ（寄居四十一番地江須けい子）

○誌友の姉樣方よ私も本年の三月からお仲間入りしましたから以後よろしく御交際して下さい至つて淺學の者てすから其のお积りて（神田南甲賀町八、内藤方吉田たつ子）

○慕はしい誌友の諸孃樣よ妾は水彩畫や造花編物等が一番好んて居ります故御惠み下さい其御禮には近頃輸入しました極細粒の美術なる「ミツト」玉を二百個づゝを御送り致しますそれは「リボン」頭飾エリ其他何にても付けますれば大變きれいてす色は玉虫、銀茶色白銀金てす右取交ぜてても一色ても御望みてすよ（大阪市北區紅梅町百七十五番屋敷濟水龜尾）

○諸姉樣方御親切な御文下さつて有りがたく御禮申上ます不束な私へ御手紙下さつた御方が合計二百十八名ありました御返事は差上たつもりてすが上ない方は御しらせ下さい住所氏名のわからぬ人又は男子の御方には差上なかつた人もあります（大分縣大分郡日岡村字向原牧富久子）

○妾は石見の山間に住んてゐますほんの田舍ものてすがどうかお見捨のうお交はり下さいませ（石見國邑智郡田所村石橋浪子）

○誌友の姉上樣私は今月初めて讀者の内に加はりましたから末長く御交際を願ひます又御寫眞編物繪葉書等をぞく〱御送り下され度御禮は必ずいたします（大分縣大分郡大分町字奥田河野きくゑ）

○天が下の諸姉上樣私は豐後の片田舍に住む不束者の一少女てすが何卒御交際を願ますまた繪葉書寫眞の交換や文通をして下さいきつと御返は致します（大分縣速見郡御越町四百四十六番地梶原橘子）

○私は淋しき山里に住む無學の一少女てあります誌友の皆樣御見捨なく御交際下いな洵に甚だ失禮な御願ひてありますが姉樣方の内に新小說編物ひながた御持ちの御方はおかし下さい必ず御返し致しますまた御惠下されば御禮は相當の物にて致しますまたエハガキ交換も願ひます（大分縣大野郡上緒方村德田阿南知箏）

○誌友の御姉上樣私は片田舍に住む勉强するに家計の許さぬ薄幸の者てすが何卒御見捨なく寫眞繪葉書玉章の交換を願ます屹度御返禮は致します（德島縣名東郡國府村大字南岩延村領家孫子）

○皆さまの中て女學校の一年生の十六か十七の方と御交際が願ひたいのよ永久なのは勿論てすわ私は女子職業學校の一年生のものてす世界の諸姉樣左樣なら（神田柳町二七井方加賀艶子）

○諸孃姉上樣淺學なる妾にも繪はがき玉章を御惠み下さい御返事はキツト差上ます（大阪市北區古川町七十番地川合すて）

○私はごく山深ひ田舍に暮して居る不束者てありますが十六七歲位の方と文通の交換など御願ひます但しりぼんとエハガキとおそへ御送り下さつた方にせ二名かぎり私の見にくき寫眞お送りいたします後は五六日間御まち下さい私はクリスチヤンてすから正直てすよ（千葉縣香取郡多古町居射平山まさ子拜）

○私事女子文壇の愛讀者となりましたがどうか皆樣方へ御交際を給はらん事誌上にねがつて頂戴よ（紀伊國那賀郡長田村島矢牛田琴子）

○誌友の諸孃樣私は高女四年て至つて不束者てすけれども末長く御交際下さいませ繪葉書交換も願ひます（鳥取市立川町一丁目猪口嘉子）

○妾は本年女學校一年てすが文章がよく出來ませんから皆樣と共に學びを交換しようと思うて居ますがそして繪はがきの交換を願ひます妾も神戸や須磨舞子の名所繪はがきを送つて上ます（神戸市上橋通四丁目一六二ノ二淺田靜子）

○記者樣はじめ愛讀者諸姉上樣私は一號よりの愛讀者て御座いましたけれども今日まて皆々樣に御目にかゝりませんてしたが今日御はじめて御目にかゝります何卒末長く御交際を一重に御ねがひ申ます（岡山縣小田郡大井村守屋百合子）

○わたしは先達からエハガキ交換を願ふて居ります者てすが中にはとりきりの方があります わたしはそんな事は致しませんからエハガキアミモノ寫眞の交換を願ひます（山城國綴喜郡青谷村字奈島藤本梅枝）

○なつかしき諸孃樣よ妾は先月京都よりかへりまして淋しき田舍て御友達がなくつて困りますの只編物ばかり樂しみにして居ります（シチリ）（ヒシツキ）（寫眞掛）外色々の細工物も澤山出來ましたから皆樣エハガキ玉章にて御交際下され御禮は御望みにまかせて差し上ます誠に拙い筆てすが御返事は必ず忘れません又御寫眞交換なすつて下さいましな御願ひてすわ（京都府綴喜郡青谷踊井野子）

剽竊詩文の注意

▲第六號の分　○下谷、蕉雨子。評論文三等「活動と抵抗」は明治三十五年六月發行『中學文壇』中の「沈思錄」を　○京都、松井星水。同四等「處世論」は明治三十五年二月發行『中學世界』中上村左川氏の「世に處せよ」を　○滋賀縣、田美子。書簡文五等「寫眞に添へて」は樋口一葉女史の『普通書簡文』中「友に寫眞の取替へを賴む文」の返事を　○信濃、玉蘭女史。抒情文秀逸「あはれ月」は中學世界定期增刊『英才詞苑』中森操氏作「あゝ月よ」を、剽竊。

▲第五號の分　○麻布、林茂子。小說二等「竹の葉影」は石井稻三氏編纂『當代名家小品文』中の紅星氏作「つくり花」を　○越前、新保勝子。新體詩秀逸「佐保姬」は大槻文彥氏著『美文韻範』春の部中の藤村氏作を　○岩手縣、紅月女史。敍事文秀逸「里の小川」は大阪府立淸水谷高等女學校國語教科書中より　○福島、ふく江。新歐謠秀逸「星の歎ほど」は『今世情歐集』中の「星の歎ほど」を、何れも剽竊したり。

▲正誤　本誌第六號揭載、剽竊詩文の注意者茨城縣中西歐子氏より右は何かの間違ひにて同氏よりは嘗て注意されたることなしとの申込みにつき取消しとす。

◎今回注意を與へられたる諸孃は　○ＡＢＣ女○隣の猫○日向、二少女○讃岐、鎌田みつぎ子○陸奧、野がくれ女史○佐藤幽泉　○糸若柳野子○越前、秋星子○下妻町、あやめ○澁谷、一白衣女○盛岡、太田利紀子○越中、おぼろ月○大坂、白露○弘前、秋月○薫公女史○築地、田村初子○仙臺、門間まさ子○無名氏○德島、注意子○高岡、卯の花月夜○陸前、よし子○伊勢、山崎はつ子○美濃、野村秀子

文藝遊戯　趣向談（課題）

本月の文藝遊戯新課題は「趣向談」と云ふのです、「趣向談」の趣向は左の通りですから、御覽の上、例の通り澤山投稿して下さい。

▲諸孃にいろ〳〵の趣向のお話をして頂きたいので勿論文學上の趣向談です▲文學上と申してもむつかしい事ではありません、此の「女子文壇」に投書をする詩文の趣向で澤山です▲小說美文、論文、和歌、俳句、新體詩、新歐謠、書簡文、短文、圖畫などの趣向です▲譬へば私は人の死んだのを見たからあれを詩にしたいとか又は私は婚禮の行列を見たからあれを美文にして、斯んなことを言つて見たいとか其詩なり文なりにしやうと思ふ事柄、又は感想のあらましを書いて頂きたい▲趣向はあるが未だ作つて見ないと云ふ方も澤山あるやうですからそれらを承ると皆さんがお互ひに文學上の助けにならうかと思ひまして、此企てを考へたのです▲趣向さへ言へば宜しいのですから、文章はこらいでもいゝのです在りのまゝにお書き下さい、是れはいゝ趣向だから人に話すのは惜いなどゝ言はずに、誌友諸孃の爲にいゝ趣向を澤山お洩らし下さい▲文章の長さはいつも位、矢張半紙半枚に十行位の處がよろしい、餘り長くなると困ります、題は「趣向談」てよろしい、〆切は六月二十日

懸賞品發送報知

第五號の當選諸孃には五月五日附にてそれ〴〵左の通り賞品をお送りしました。

流行絹張洋傘……菅野和子
吳服物……大村澄子
帶止半襟……近藤とく子
　　　　　　岡本爲子

小間物
○上山千重子○有賀まさ子○桃村愚女○鈴木幽香○山田沖子

文房具
○傍島芳翠○武滿美代子○朝井千とせ○堀江茂子○淺井千鳥子◎圖書切符（五十錢）○わか榮子○笑子○平田かつ子○中村勝子◎同上（三十錢）○服部水仙○三浦たい子○朝枝子○しら菊○かるかや◎同上（二十錢）○和田芳子○藤原富子○若狹はな子○知る人○小永井みれ子○濱部郭公女◎同上（十錢）○川島たつ子○大和田淸子○さゞれ石○岩谷綠子○增田小富

別種　◎造花（五十錢）相原壽美子◎同上（四十錢）井澤菊江子◎花簪（三十錢）黑田利子◎圖書切符（二十錢）岡部つぎ子◎同上（十錢）木原すい子

▲發送未濟　○三河、中島磯子○島根縣、みどり女○愛知縣、欽哉、の三孃は原稿と同じ筆蹟にて至急住所姓名御報知下さい。

新出版

▲「黄金窟」　筋のおもしろい小説で、海濱を舞臺としてさまざまの人間が表はれて來ます、作者は德田秋聲君、いつも淋しい小説を作る人ですけれど、此作に限つて賑やかでゝあり花やかでもあります（定價四十五錢牛込區市ケ谷田町二ノ一三吾妻書房發兌）

▲「富美子夫人」　さきに發賣禁止になつたものゝ後篇ですが、之でも筋は能く分つて居ます、生田葵山君は短篇を上手に書く人ですが、是は長篇でも清新の趣味深い作です（實價八十錢京橋區銀座三丁目佐久良書房）

▲「煩悶記」　藤村操の著とありますが、果して實際か何うかは編者の序文にもある通りです、文章は素人には書けないほど達者です、小本全一册（定價三十五錢京橋區木挽町四丁目六、也奈義書房發兌）

▲「現代青年論」　伊藤銀月君が男女學生に對して現代思想の痛弊を指示し、論議したもので、文章は例の通り快適、すらすらとして讀み易い（京橋區五郎兵衛町二十二京華堂藏版）

記者通信

卒業生寫眞　學習院女子部卒業生は卷頭寫眞版に其他東洋女藝學校、青山女學院、青山女子手藝學校、明治女學校、酒田高等女學校等の卒業生寫眞版は本文の中に挿入しつゝあります、前々號以來これで都下主なる女學校の卒業生は殆んど紹介いたしました。

増刊『花ゆり』　本誌増刊『花ゆり』は五月十五日に發行いたしました、内容、體裁、定價凡て普通號と同じ事です普通號の愛讀者は是を御承知の上、愛讀して下さい。

七月號　本誌七月號には島崎藤村先生の談話、及び夏期旅行に就いて小島烏水先生其他諸家のお話が出ます。

雜報

▲學習院女子部卒業生　本誌の寫眞版に掲げたる學習院女子部（元の華族女學校）卒業生は昨年と今年の分で共に新しく撮影したるものです、昨年の卒業生中、中央に白の洋裝を召されたるは北白川宮武子女王殿下に在す、其他の卒業生姓名は左に掲ぐる通りです

明治三十九年四月卒業生（イロハ順）

武子女王殿下

石川菊　今泉廣　長谷川孝　新山樂子　岡山萬千子　甘露寺義子　玉利照子　閑田千代子　内藤珠子　上原楨子　黑木愛子　山田あき

伊東末子　橋元爲子　羽野恒子　本宿恒子　小笠原梅　横尾照子　田村康子　津田わか　難波里久子　漆間九梅　山澤治　柳澤悦子

色川楓子　花房總久子　橋本雅子　東郷德子　梶取治子　丹治久　副島鑑子　中上川みち　村上靜子　久留島園子　山本文子　松島あい

松平敬子　小坂菊枝　淺沼てる　齋藤あや　水野進子　關光子　杉山照子

松平愛子　古賀房子　佐々木麟子　北小路親子　三田鞠　鈴木登美

藤村匯　阿波ちよ　榊寶　三宅二三子　本尾朋子　鈴木幸

明治四十年四月卒業生（イロハ順）

伊藤潔　原多喜　本多艶子　得能百合子　岡村幸子　大久保尙子　加納國子　河上文子　武富荻路　土田戯子　澤井蕗子　安川初ま　松尾たん　寺尾せ子　佐竹久芳子　溝口美子　三原新綾子　毛利歌子　元田花子　杉村壽賀子　別科修了生　牧野雪子

井原梁　坂丈子　堀江ロシ子　大久保朝子　大谷鶴子　渡邊久江　川田靜子　神田種子　田中泰子　鍋島俊子　瓜生敦子　松平昭子　兒玉なか子　秋月花　佐々木トミ子　壬生梅子　滋野君子　森村玉子　鈴木鹽

盧入穗　橋口京子　ベルト、フック　沖脩子　奥滿子　波千代子　何須磨子　武田滿子　田村政子　村田富士子　野村綾子　前田尙子　駒澤竹子　佐竹雄子　佐々木花枝　三好三洲子　廣幡朝子　森靜子　鈴木艶子

▲六月と草花　六月は草花が美しく咲く時です、野生時代から移つて、園藝時代に入る時です、朝顔の莚や、秋草の莖が延びるのも此時です、夏草は草花があつて初めて美しいのです、

"She chose to be very angry because I—I offended her," said the cat.

"How, may I ask?" gently inquired Fido.

"O, nothing worth telling—a mere mistake of mine," answered the cat. "The fact is," continued the cat, "while springing at a mouse, I knocked down a dish, and, I smelt it, and it was rather nice, and—"

"You finished it," hinted Fido.

"Well, I should have done so, if that cross cook had not come in. As it was, I left the head."

"The head of what?" asked Fido.

"How inquisitive you are! said the cat.

"I should like to know," said the dog.

"Well, then, it was the head of a fish that was meant for dinner."

"Then, said Fido," say what you please; but since I have heard both sides of the story, I only wonder that the cook did not hang you.

(Selected)

「怒りたかつたのさ，何故ては，私がアノ，私がアノ，彼女の氣元を害ふたのて」，と猫の返事。

「如何して？聞かして頂戴」と溫和に犬は願ひました。

「別に咄す價値もない事て——一寸私の間違てね，實の處を云へば，」と猫は咄を進める，「鼠に飛びかゝつた處，御皿を顚倒したが，嗅いて見ると仲々好いのて其て——」

「食べて仕舞つたのね」と犬はあてつけた。

「其はね，若し意地惡の御三が出て來なかつたら，そうしたゞらうが，合惡てしたから，頭丈殘してきた」。

「何の頭てすか」。

「貴兄もヒッコイ御方ね」。

「したつて，知り度いのですもの」。

「其なら云ふが，其は御膳のに使ふ御魚の頭さ」。

「そうすれば，貴女は好きな事を何とでも御仰いだが，咄の裏表をきくと私は下女が貴女を絞殺しないのが不思議になつて來た」と ファイドー は申しました。

"Matter enough," said the cat. "Our cook is very fond of talking of hanging me; I wish some one would hang her."

"Why, what is the matter?" repeated Fido.

"Has she not beaten me, and called me a theaf and threatened to kill me?"

"Pray, what has brought it about?"

"O, nothing at all; it is her temper. I wonder the mistress did not send her away long ago."

"Well, you see," replied the dog, "she is very useful in the house."

"Not a drop of milk have I had to-day, and such a pain in my side," said the cat.

"But what is the cause?" asked the dog.

"Have I not told you?" said the cat pettishly. "It's her temper. Everything she breaks she lays to me—everything that is stolen she lays to me. Really I cannot bear it."

Fido fully sympathized with the cat, and he asked, "But was there no particular cause for her being cross, this morning?"

「如何した處ですかさ．御三どんは私を絞殺すて云ひたがるの，誰か彼を反對に絞死して與ればよい」と猫の返事。

「一體如何したの」と又繰返しました。

「あの人間は私を打ち叩き，泥棒呼ばりをし，私を殺すて，嚇すじやありませんか」。

「如何して其麼事になつたのてすか」。

「何てもないの，彼女の癇積てす，マー眞個に何故奥様はあれに早くから御暇を御遣りにならないのだらう」。

「其はサ，彼女は此御家に役に立つからさ」
と犬は返事しました。

「今日は一滴の牛乳も口に入れないの，其に横腹が大變痛んて」と猫が申しました。

「何の原因てしよう」とは，犬の問。

「最う御咄し仕たてはないの」と猫はじれ，「彼女の癇積てすよ何一つ自分が破しても，私にかぶせる，失なつた物は皆私に罪をきせるので，本當に私も勘忍しきれなくなつた」。

ファイドーは猫に充分の同情を寄せ，尙問ふて，「併し，今朝は彼女が怒る格別の理由がなかつて？」

For in the starry night
And the glad morning light,
I come quietly
creeping everywhere.

Here I come creeping,
creeping every where;
More welcome than the flowers
In Summer's pleasant hours;
The gentle cow is glad,
And the merry bird not sad,
To see me creeping,
creeping every where.
(Sarah Roberts.)

星てる夜半や
朝日にぞ
静かに我は
育つなれ。

所擇ばて
來る我の
受る歡迎
いとあつし
樂しき夏の
花よりも。
牛は喜び
鳥は舞ふ,
四方に生立つ
我ために。

Origin of Vegetables.

The onion originated in Egypt.

The potato is a native of Peru.
Celery came from Germany.
Cabbage grew wild in Siberia.
Parsley was first known in Sardinia.
The Cucumber came from the East Indies.
The radish is a native of China and Japan.
(Selected)

野菜の出所

葱はエヂプトに於て生ぜしを初めとす。

芋はピルーの土産なり。
和蘭三葉は獨乙より來る。
玉菜は西比利亞に野生す。
和蘭芹はサーデニヤに於て最初知らる。
胡瓜は南洋諸島より來る。

大根は支那, 日本の土産なり。

Two Sides of a Story.

"What is the matter?" said Fido to the tabby cat as she moping at the kitchen door.

話の裏表

「如何したの」とフアイドは台所の戸の側に呆然として居た駁猫に尋ねました。

英文（六）

津田梅子閲　河井道子述

The Voice of the Grass.

Here I come creeping,
creeping every where;
By the dusty roadside,
On the sunny hill-side,
Close by the noisy brook,
In every shady nook,
I come creeping,
creeping every where.

Here I come creeping,
creeping every where;
In the noisy city street
My pleasant face
you'll meet,
Cheering the sick at heart
Toiling his busy part—
Silently creeping,
creeping everywhere.

Here I come creeping,
creeping every where;
You cannot see me coming,
Nor hear my low voice
humming;

草の聲

所擇ばで
茂る我,
塵立つ野路や
照る山邊,
人目通はぬ
木影まで,
四方に徐々(シヾ)
進むなり。

所擇ばで
茂る我の,
賑ふ市街(チマタ)に
笑顔以て,
痛める心を
慰めつ,
苦しき業を
助けつゝ
默して來るを
君見ずや.

所擇ばで
茂る身の,
來るを見止とて　いと低き
歌ふ聲音を　誰かしる.

投書家並に愛讀諸君は此社告を見落す勿れ

投書募集課目

第參卷より改定

選評大家（文學士沼波瓊音先生、廣津柳浪先生、河井醉茗先生、佐々木信綱先生、巖谷小波先生、山中古洞先生）

甲種
◎敍事文 ◎抒情文 ◎評論文（各半紙廿四字三十行以內）
◎短篇小説（半紙總かな付廿四字六十行內） ◎新體詩（半紙かな付十句以內）

乙種
◎書翰文（半紙廿四字詰）郵便用文 ◎和歌（半紙一首） ◎俳句 ◎新歌謠（全上）
◎短文（半紙かな付廿四字五行） ◎新笑話（半紙半分十六字詰） ◎圖書（一寸の二寸風俗景色）（但日本紙の薄きもの）

別種
◎文藝遊戲（半紙十六字詰）
◎誌友倶樂部（半紙二十一字詰に認めらるべし）

「此賞品は甲乙種以外のものを呈す」

▲都て各項とも課題は隨意▼

↓（毎月十五日投稿〆切）↑

奬學懸賞品

（品目改正す）

甲種

第一等	貴金屬品類	價格金拾圓
第二等	呉服物類	價格金參圓
第三等	小間物類	價格金八拾錢
第四等	便利の圖書切符	金五拾錢
第五等	同	金三拾錢

乙種

第一等	絹張洋傘	價格金五圓
第二等	帶止、半襟類	價格金壹圓
第三等	文房具類	價格金五拾錢
第四等	便利の圖書切符	金貳拾錢
第五等	同	金拾錢

○賞品は發表翌月五日に故障なき當選者へ懸賞品贈呈すべし、右當選者は贈品に差支へざる樣前以て住所氏名を明細に通知ありたし

▲嚴守すべき投書規定必一讀を要す

○投書は各欄とも決して政治的時事論に渉るべからず○投書は題の下に必ず住所姓名を記し假名は平假名を用ゐ明瞭なるを要す○各種の投書は別に認むべし○封筒は『原稿在中』の文字を記し中には他の用事の文句を記すべからず○投書に圏點は一切施すを禁ず○投書は他人の作物を剽竊するを禁ず之を犯したる當選文は無効たるべし○投書は一切返附せず○投書は不足、未納税は一切受取らざるべし

定價

女子文壇（毎月一回（一日發行）定期増刊年四回二月、五月、八月、十一月の十五日發行）

	前金	郵税共
一冊（大判百頁）	前金拾錢	前金拾壹錢
八冊（半年分増刊共）	前金七拾六錢	同 前金八拾四錢
十二冊（一年分増刊除く）	前金壹圓八錢	同 前金壹圓廿錢
十六冊（一年分増刊共）	前金壹圓四拾四錢	同 前金壹圓六十錢

郵券代用は必ず壹割増

輕便の送金法

女子文壇社の郵便振替貯金口座は壹七貳九番です

○爲換料、通信料、書留料其他一文も入らず安全の送金法

此の「拂込用紙」は何處の郵便局でも申出あれば何度でも無代で呉れます

明治四十年五月廿九日印刷
明治四十年六月一日發行

此無廉價 金拾錢

不許轉載

編輯兼發行者 東京市京橋區大鋸町十一番地 野口竹次郎
印刷者 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地 石川金太郎
印刷所 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地 株式會社秀英舍

發行所 東京市京橋區大鋸町十、十二番地 電話［本局六〇七番］ 女子文壇社

特約賣捌元○東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、良明堂

明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可



醫學博士
瀬川昌耆先生賞詞

幾多賣藥中内外に名聲を轟したる中將湯の婦人諸病に偉効ある事は産科婦人科專門醫學博士諸氏の證明に徴して明なり余も本劑に關して多數の子宮病「ヒステリー」月經不順等諸症者に服用せしめし結果着着良好の成績を得たることを實驗せり故に余は「中將湯」は婦人藥として最良の者たるべきを確信す

中將湯

見よ

主治功能

子宮病	血の道	逆上頭痛	腰足冷込
下腹痛み	胸先差込	白血長血	こしけ
婦人神經	氣ふさぎ	癇高ぶり	夜眠られず
産前産後	古血の滯	難産流産	しびれ水腫
月經不順	月經滯り	月經痛み	血ぶとり

此外

凡て子宮血の道産前産後月經不順より起りし諸症に用ゆれば血のめぐりを調へ帶下を止め欝を開き自ら心氣を爽快ならしむ



定價	
一日分十錢	二週間一圓十錢
四日分卅五錢	三週間一圓六十錢
一週間六十錢	五週間二圓五十錢

本舖へ御注文の方は病人の御容體詳しく御申越あれ

注意　持藥として御服用の御方は五週間分御求め被下候得者至極御徳用に候

中將湯本家　東京日本橋通四丁目　振替貯金口座壹六八〇　津村順天堂本店
中將湯本家　大阪堺筋大寶寺町南　振替貯金口座参貳六貳　津村順天堂支店

（東京秀英舍印刷）